

---

# バカと天才？と召喚獣

バージル兄さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと天才？と召喚獣

### 【Nコード】

N2584K

### 【作者名】

バージル兄さん

### 【あらすじ】

普通の大学受験生が、神に殺されてバカテスの世界に転生して好き勝手する物語

基本的には週末更新です。

## 第1話 神の所為で殺されて

「明日は、大学受験そろそろ寝るか。」  
そう呟き時計を見ると午後11時と指している。丁度いい時間なのでそのままベットに入り目覚ましをセットし、眠りについた。

さて、ここで自己紹介をしようと思う。何故かって？

現実逃避ですから突っ込まないで下さい。(泣)  
名前は、東野 和樹で、身長153cm 体重62kgの少し小さいのが不満のどこにでもいる高校生3年生だ。

何が言いたいかって？

俺は、ただ自分の部屋で寝てただけだということをはっきり言いたい。

状況を説明すると、なんか神っぽい人が、話かけてきている。  
返して、俺の平穩 俺の受験

と、そろそろ現実逃避も飽きたから話でも聞いてみるか。ずっと  
ごちゃごちゃ言われるのもウザいし

「で、あんた誰？」  
こちらが、聞く体勢になったのが、嬉しいのか顔を綻ばせる見た目  
40過ぎのおっさん

聞く気が失せるが、ここは我慢だ

「やっと現実を認める気になったな、良いことじゃ。」

「俺はお主の考えているとおり神じゃ」とのたまうおっさん

ここは我慢だ。会話を続けなくては

「神様が何の用です。俺は大学受験で急がしいので返してください。」  
「大丈夫じゃ。お主はもう死んでおるからの。それに、お主に用があるからな。」

こちらも笑顔で返す神 滅びてしまえ 待て、今こいつは、何と言った？俺が死んだ？冗談だといいな 冗談だと言ってくれ  
取りあえず、神の胸倉を掴み上げ首を絞める

「俺が死んだって何で？」  
さつきより、良い笑顔で聞いてみる。多分ひきつっているだろうが、気にしている暇は無い。

「苦しいから、離さぬか！ 馬鹿者め」仕方がないから、離す。  
「お主が死んだ理由は、俺が暇つぶしに読んでいた小説 まあ、ぶっちゃけるとラノベに集中しすぎて、要らんスイッチを押して殺してしもうたんじゃ。すまんかったのう」と謝る神  
俺は取りあえず、神が死ぬかどうか調べるためにリンチした。

結論 痛みはあるらしいが死なないらしいことが分かった。

## 第1話 神の所為で殺されて（後書き）

このような駄作をよんで頂きありがとうございます。

好き勝手に書くので温かい目でご覧下さい。

誤字、脱字などございましたらメールで連絡下さい。直していきたいと思いますのでよろしく願います。

## 2話 神と俺の能力設定

皆さん、こんにちは こんにちは どっちでしょう

こちらは、神をリンチにして話をしているところです。

どうも神が読んでいたのが、「バカとテストと召喚獣」というものらしい、ずっと勉強ばかりしていたから知らないが、結構有名な本だそうだ。

そういえば、神が転生させてくれるそうだ。理由は暇つぶしと俺が入ったらどんな風に壊れるのか見たいらしい。本音は不注意で殺した分の埋め合わせだと思うが

神がこっちに来た。余り相手をしたくないな

「何の用だ」

「お主がこれから行く世界の情報やお主につける能力のことで話にきたのじゃ。」

俺が行く世界だと？このまま転生するんじゃないのか？

疑問が顔に出たらしく神が嬉しそうにしゃべる。

「お主が思っているほ世界は狭くなくての、漫画やゲームのような世界が沢山あるのじゃよ。そして、その世界の中にバカテストの世界もあって、そこに行ってもらうつもりじゃ。お主が今持っている知識や記憶にこれから与える知識を持つての」

こいつの言うことを信じるなら世界はとんでもなく広いらしい。しかも俺が行く世界はバカテストで決定らしい

変に死亡率が高い世界よりはマシか。

しかし、能力だと？

「俺につける能力ってなんだ？」

腕を組み考えるおっさん 嫌 神

「いくらでもという訳では無いがいくつかの能力は自由につけてやるう」

自由にと言われても困る。何となく考えてみる

うん　こんなもんだろ

「1つ目は、問題が起こった時にすぐ回答が頭に浮かぶ危機回避能力　2つ目は、身体能力の向上　3つ目は、召喚獣？への特殊能力の付与　4つ目は、髪の色を白銀にして身長を185cmにしてくれ。」

「ふむ、それくらいならばいいぞ。それでは、能力はアンサーカードと身体能力は100倍くらいでいいか。召喚獣には後で適当に能力を足してやるう。最後のも含めて直ぐにやってやるう。」  
む、以外に簡単にOKしてくれたな　楽だから良いか。

### 3話 能力貰って喜んで 落とされて

さて今は、神 やっぱおっさんでいいや 俺はさっき言った能力を貰って有頂天になっている。

なぜかというと、アンサーターカーというのが分からなかったが、その答えが頭に浮かんできた。最初はビビったが、もう慣れたから大丈夫だろう。

それに、体が滅茶苦茶軽いさつき走ってみたらいくらでも走れる気がした。

最後に、身長が上がりました。身長が上がったんですよ皆さんテンション上がりますね。

大事なことから2回言いました。

そろそろ、バカテスの世界に行ってみたいと思う。後ろの方でおっさんが叫んでいるからそっちに向かう。

「やっと、来たか。走って行った後、中々帰って来なくて心配になったぞ。」

むう、ここは大人しく謝っておこう。悪いのはこっちだ。

「すまなかつたな。テンションが上がってしまったな。」

「構わんよ。それでは、そろそろ行ってもらうぞ。」

と言いつつ、指を鳴らすおっさん

その瞬間、俺は浮遊感に身を任せることになってしまった。

下を見ると奈落の底のように真っ暗な闇

嫌 死ぬだろうこれはと思いつつ意識を手放す その瞬間を狙ったようにおっさんが「お主には、0歳から始めてもらう。しっかり楽しむのじゃぞ。」

死ね くそ神

意識がなくなる前にそう思い 意識を手放した。

**3話 能力貰って喜んで 落とされて（後書き）**

やっと、プロローグが終わりました。長さがバラバラで読みにくいかもかもしれませんが、ご容赦ください。

やっと、本編に絡めます。

自分の文才の無さに凹みます。

設定です。

設定集です。なんとなく考えただけなので余り深く突っ込まないで下さい。

名前 東野<sup>とくの</sup> 和樹<sup>かずき</sup>

容姿 髪を真っ白にしたら、DMC3のバードルみたいになった。

身長 185cm

体重 65kg

趣味 読書

(バカテスの世界に行った後、ラノベを読んではまり元々の読書欲と知識欲に変に拍車をかける)

鍛練

(折角身体能力が上がったからと、空手と剣道を習い力の使い方を学ぶ。その時に体を動かして面白かったから、家の庭で修業している)

性格 基本楽しめれば、それでいいという考え方

持ち物 竹刀袋 中身は木刀が2本と真剣が1本

召喚獣 姿形はまんまDMC3のバードル コート有り 武装は  
閻魔刀 ベオウルフ フォースエッジ

神から貰った能力

召喚獣の無消費点数での武装変換

8分の1の点数を使って作るドッペルゲンガー 最大三体

アンサートーカー

テストの解答や普段の生活全般では非常に有用 秀と優の前では何の役にも立たない

身体能力の向上

本気で走ったら1000m7秒フラットで10km走れるスタミナ

ビルの3階建て位の高さならを助走なしで飛び越えられる跳躍力等

#### 4話 住んでいるところと優子と秀吉

さてと、神に落とされた俺だが、早速ピンチだ。なぜなら、神が言った言葉を思い出して欲しい。

「0歳から始める」と

0〜3歳まで、恥ずかしくて、死ぬかと思いました。

突然だが、家族構成を発表します。父親 母親の2人に俺という3人家族だ。結構普通の家族構成でよかったと最初は思ったが、それは間違いだった。

この2人親馬鹿だった。

寝顔の写真を撮るは、はいはいができるようになったらパシャパシャ撮るはとまだまだ有るがちょっとほっというほしいと最近よく思う。

友達ができたお隣の双子だった。作為的な物を感じる。木下優子と木下秀吉は最初に見た時姉妹と思いました。原作知識渡されてても間違える。

現実逃避終了

さて、今は5歳になったが今までの人生の中でピンチだ。理由は簡単で優子を怒らせたのだ。原因は秀吉と話した内容を聞いていたらしい。そろそろ言い訳をしよう何か後ろに修羅みたいなのが見えるが、大丈夫だろう。多分

「優子サン」と恐る恐る声をかけてみる。さっきから、アンサートーカーの能力が諦めると言っている気がするが、気のせいだと思いたい。

「和兄、楽しかった？私そんなに女らしく見えない？」

「いや、そういいながら俺の腕を掴まないでくれ。そしてそんなに笑顔で迫らないでくれ、本当に頼む離してく待てその間接は曲から

なっぎゃー！！！！」

何で5歳で臨死体験しなけりゃならんのだ。  
完治に3日かかりました。

追記

秀吉との会話

「秀吉より優子の方が男らしいよな」と俺

「そうかのう、姉上もあれで中々女らしいところが有るがのう。」  
と秀吉

ちゅーから歳で翁言葉ってどうよ？

「何処らへんが女らしいんだ？」

疑問を口にする

「うむ、それはじゃな外に出掛ける時に、毎回何がしかのおしゃれ  
をしておるのじゃ。」

へえ、以外に女らしい全然知らなかった。

「それは、知らなかったな。でも秀吉の方が可愛く見えるな。」

客観的事実を口にする、何故か秀吉から返答が返ってこない。後  
ろを振り替えるとステキな笑顔の優子と地面に転がっている秀吉が  
見えた。

嗚呼、神様俺に死ねと言うんですね。分かりました。

#### 4話 住んでいるところと優子と秀吉（後書き）

今、気付いたら自分の小説読みにくいですね。  
ギャグに出来ない自分が嫌いになりそうです。

## 5話 入学式と睡眠と（前書き）

時間かかりました。入学式って書くこと無いですね。

何か明久の扱いが酷いですが、この小説の中ではこんな扱いだと思  
って下さい。

それでは、入学式と睡眠との始まりです

## 5話 入学式と睡眠と

もう10年の年月が過ぎた。

色々なことがあった。中学生になって直ぐに優子に拉致られたり、秀吉に拉致られたり2人に拉致られたり・・・あれ？俺の思い出に拉致られた記憶しかないな そんなはずがない！探せば有るはずだ！ほかのもっと幸せな記憶が！

(記憶の中を探し中) 無い。あんな可愛い2人に囲まれて飯も作ってるのに甘い思い出が無い(泣)

くそ 心機一転だ。明日は文月学園の入学式だ。取りあえず枕を濡らすのは確定だが、遅刻する訳にはいかんから、今日はもう寝よう。

さて、朝起きたら枕が赤黒かった。どうやら血涙が何か流したらしい。貧血でフラフラするが朝食を作るために起きる。時間は6時チヨイ過ぎだから大丈夫だろう簡単な物なら作れる。

一階に降りると秀吉と優子が座っていた。こいつら早すぎね？まだ6時過ぎよ？

取りあえず朝の挨拶から

「秀に優 おはよう」

と軽く手を上げつつ挨拶をする。と、こちらに軽く手を上げつつ2人が応じる

「和兄、おはよう」「うむ、兄上おはようじゃ」

挨拶を交わしつつエプロンを身につけながら台所に立つ。気分は何処ぞの正義の味方  
振り返りつつ笑顔で

「時間が無いから、目玉焼きとサラダぐらいしか出来んぞ」  
それを聞いた2人は

「お弁当作ってくれたらいいわよ」「儂もお弁当がいいのう」と軽く返してくる。

くそ、昨日の余りと卵焼きで手を打つか

話している間に、優子と秀吉の朝食が出来た。

「優に秀々皿持ってきて」

「分かったわ」「分かったのじゃ」2人とも皿を持って近づいてきて、皿を突き出してくる。

いつもの様子に苦笑しながら皿に朝食の目玉焼きとサラダを乗せるそのあと、炊飯器からご飯をよそいで2人に渡して、ついでに味噌汁も渡す。

朝食完成だ。「先に食べててくれ 弁当の用意するから」さてまずは、卵焼きから作るうか

朝食と弁当作ってたらしい時間になってしまった 握り飯って以外に時間がかかる、今度時間が有る時に作るうと考えていたら校門が見えてきた

さて、やって来ました文月学園 今は入学式の真っ最中です。ぶっちゃけ暇です。

睡魔に勝てなくなりました。だから寝ます。お休み

しばらくしたら、肩を叩かれました。渋々起きます。  
さて、肩を叩いて起こしてくれた人を確認しましょうか。

そう思いつつ目線を上げると

柄の悪そうな男が立っていた。こいつが起こしてくれたのか？それなら、礼を言おうか

「起こしてくれてありがとう。俺は、東野 和樹。お前は？」聞きながら立ちあがる。

まあ、赤毛の時点で分かったけど

「ん？ああ、俺は坂本 雄二だ。よろしくな和樹。お前を起こした理由は隣の奴が立てないからだ」

隣の奴？ 疑問に思いつつ見てみると

そこには、吉井<sup>バカ</sup> 明久が居た。しかも、顔が赤い なんでさ？フラグなんぞ立てる気ないぞ

サア

(血の気の引

く音)

「雄二 俺はこいつの肩を枕にしていたのか？嘘だと言ってくれ！頼む！」

そう言うと雄二は無茶苦茶いい笑顔で、言ってきた。

「本当だ。しかも爆睡だったぞ。そいつの顔が赤いのは和樹の顔のアップを見たからだろう」

そうかぁ 爆睡だったのか それは悪い事をしたな ん？最後のセリフがおかしいぞ？

「なあ、雄二何で俺の顔のアップで見ると赤くなるんだ？」  
と、疑問を口に出す。

皆も考えてみてくれ 俺も隣の馬鹿<sup>明久</sup>も男だ。これで俺か明久が優か秀みたい顔か、性別が違うなら赤くなるのも納得いくと思う

思いたい

まあ、そのどっちかでも俺は嫌だ

「それは、お前の顔がいいからじゃないか？そいつの頭の中なんぞ知らん」

とぼっさりと言いきってくれる。後で本人に聞いてみようか 怖いけど

「それより、そろそろ教室に着くぞ」と雄二

微妙に緊張してきたな。クラスメイトの何人か特に主要人物とは仲良くなるう

あれ？それ考えるともう秀と雄二に明久と知り合いになったから大丈夫じゃね

「なあ、和樹 そろそろその右手で引きずっている物を離したらどうだ？」

「ああ、教室に着いたら捨てる」

ちなみに、右手で引きずっているのは何故か青い顔した明久だ

赤い顔してこっちをちらちら見てくるから、水月に入れて気絶させて襟持って引こずっている。

気持ち悪かったからだ。俺に非はない

教室に着いた。案外普通だ。普通の学校の教室だ。やっぱ2年かから変わるのか。

教壇を見るとゴツイおっさんが立っていた。

「よく来たな。俺がお前たちを1年間担当する西村 宗一だ。ビシバシしごいていくから覚悟しろ」

低い声で歓迎してくれる。全く嬉しくない。なんて野性味溢れる

先生だ。

それを聞きつつ「ゴンツ」と派手な音を立てて明久の頭を落とし、自分の席に着いてから鞆から本を取り出して読む

こんな入学式でいいのかと不安になったのは秘密だ

秀からの視線が怖い 俺が何をした？ 何であの姉妹は間接技がうまいんだろう？

## 5話 入学式と睡眠と（後書き）

やっと、主人公たちと絡めました。

2年から始めるかどうか悩みました。

次話は当然明久の観察処分者編です

## 6話 俺と明久が観察処分者？その1

「全員動くな！鞆を机の上に置いて、中身が見えるように開け」  
「……………朝のHRでいきなり恫喝されるとは思わなかった。」

あ、明久が逃げようとしてる。「逃げようなんて考えるなよ？」  
その言葉を聞いて顔を青くするクラスメイト達  
なんて素晴らしい行動力だ てか、クラスの人数の半分以上が脱走  
考えるってどうよ？

机の上に鞆を置きつつ、教室の様子を見る。  
この学校って、1年の時から十二分に楽しいな

「HRは省略する。一時間目はいよいよ『試験召喚実習』だから  
な。全員速やかに体育館に移動するように」  
締めの一言を告げ、鉄人は去っていった。

『  
試験<sup>サモン</sup>召喚っ！』

ところ変わって体育館 色々な召喚獣が動き回っていて見ていて楽  
しい

楽しいけど明久と雄二のテンションが低くてウザい

お、姫路さんの召喚獣が出てきた。知識としては知っているけど現  
実に見ると怖い

「あんな可愛い外見してるのに随分ゴツイ大剣もってるな。」

「うむ、それだけ点数が高いということじゃろうな。」  
と、隣に座る秀

「お、点数が出たぞ」雄二が言った後に参考として点数が表示される。

『Cクラス	姫路	瑞希	VS	Cクラス	古河	あゆみ
総合科目	3943点		VS	1264点		』

「苛めみたいな点数差だな。そうだ、康太デジカメ」といいつつデジカメを渡す

「……良いのか？」と聞きつつも、デジカメを受け取り、構える。

「構わん。面白そうだから、渡したんだ。まあ、バレない用にやっ  
てくれや」

「感謝する」

康太が全力でシャッターを切っている。……よく指が擦りきれないな。

「次、東野 和樹と須川 良」

お？西村先生に呼ばれた。

「んじゃあ、適当にやってくるわ。」

「兄上、頑張るのじゃ」

「まあ、頑張ってくるわ。」

「和樹 頑張ってるね」

まさか、明久にも声掛けられるとは思わなかったな

「明、しっかり見とけよ」

「さっさと召喚しろ」

「ああ」

「んじゃあ、よろしくな。須川」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

『試験サモン召喚っ！』

掛け声と共に現れた召喚獣は須川の方は道着を着て棒を持った召喚獣  
あ、何か不満そうだ。

俺の方は、青いロングコートを着て日本刀を持った召喚獣だ

次いで、点数が表示される

『東野 和樹 VS 須川 良』

総合科目 53071点 1093点』

・・・うん。いじめだ。さすがに出鱈目だなアンサートーカー  
日常生活で全く役に立たないのに  
須川が哀れだ。今度何か奢ってやろう。

さすがに一撃で終わった。

帰る途中で明が出てきた。そうか次はこいつの番か

「和樹すごいね。どうやってあんな点数とったの？」

こいつ俺がカンニングかなんかしたと思ってやがる

「俺の実力だ。それより次は明、お前だな頑張れよ『観察処分者』  
候補」

「失礼な！僕は問題児じゃないと何度も言ってるよね。」  
そう思っているのはアナタだけです。

「吉井！早くしろ！」

「じゃあ、行ってくるね」

「ああ、逝ってこい」

「字が違っ！」

結果 原作通り明は島田にボコボコにされた。

ちゅーか、ほとんど召喚獣使ってないけどいいの？

## 6話 俺と明久が観察処分者？その1（後書き）

主人公の口調が安定しません。

多分早いうちにその2が書けると思っているので待ってて下さい。

追伸

携帯のメールアドレスで登録したんですが、設定が出来てなくてメールが届きません。しかもやり方が分からず今のところ放置中です。  
設定が出来ましたら、また報告します。

7話 俺と明久が観察処分者？その2（前書き）

長かった。少し原作を変えればいいや 何て甘い考えだった。危  
うくその3までいくところだった。

## 7話 俺と明久が観察処分者？その2

「ふう……。今日は朝の持ち物検査に始まって、一日中災難続きだったよ……」

「自業自得だな」

本を読みながら隣の席に座って、グチっている明に声をかける。

「明久は随分と不用品を持ち込んでいたからのう」と秀

「そう言う秀吉と和樹は被害が無かったの？」

「いや、俺も衣装や小道具をやられた。演劇用と言っても、取り合ってももらえなかったんじゃない」

「俺は家の近所のある図書館の本をやられたな」

話しをしていて思い出しました。

「そういえば、明お前掃除当番じゃなかったか？」

『ハア……。吉井ってば。ウチに掃除押し付けてどこに隠れてるんだか』

そんな声が廊下から聞こえてきた。

「おお、噂をすれば影だな」

「確かに丁度いいな」と雄二が笑いながら明の方を向く

「相変わらずじゃのうお主らは」と呆れながら秀

「……………(コクコク)」無表情だから分からねえ

「あはは、それじゃ僕は逃げるよ」

そう言いつつ鞆を引っ掴んで廊下に飛び出す明  
……………顔が真っ青だな

『もうっ。見つけたら、手足を縛って三階から突き落としてやるんだから』

恐！死亡率100%じゃん

悲鳴と怒号が飛び交う廊下

殺伐としとるなあ

後、島田さんロープは要らないだろう。

「没収品を取り返す、だと？」

翌朝、何か覚悟を決めたように相談を持ちかけてくる明  
すごいな。小学生のためにここまでできる高校生って、まあ、そこ  
がいいところなんだろう

「うん。だから皆に手伝って欲しいんだ」

「面白そうだな。混ぜてくれ」

「ありがとう。和樹」

「兄上がやるなら、僕もやろう」

「やれやれ。お前らも物好きだな」

と呆れたように溜息をつく雄二

「ん？雄二は不参加か？明の周りに居ると退屈せずに済むからな。  
好きなんだよ」

その言葉を聞いた明の顔が赤くなる　だから、なんでだよ

「そんな和樹こんなところで告白するなんて、僕にも心の準備が」  
そんなことをのたまいやがった

思わず竹刀袋から木刀を取り出して切りつける

「のわああああ。頭が割れるように痛い痛い」

「割れてしまえ」

「兄上、少し話があるんじゃないが」

「待て秀 そんなにこやかな笑みで近づくんじゃない。待て待て待て落ちて秀廊下に連れ出すんじゃない。待って、その間接はそんな変な方向に曲がらな、ぎゃああああ」

「で、どうやって鉄人から取り戻すんだ」

雄二そんな疲れた声を出さないでくれ

俺は真面目にやっている

・・・・・・・・・・・・・・・・メツチャ体痛い。

「没収品は先生のロッカーに入っている。んで、鍵はズボン左後ろのポケットにある」

「何でそんなこと知っているんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

疑問を口に出して聞いてくる雄二に康太

ちなみに、明はまだ死んでいる。秀は笑顔でこっちを見ている。笑顔が恐い。何が悪かったんだろう？

「理由は簡単だ。何度か職員室に質問しに行ってたからだ、嫌でも目に付くからな」

「成程。それなら後はどうやって鍵を奪うか、だな。」

「そういうこと」

「それについては、俺に考えが有る。掃除の時間にやるぞ」

雄二はそういう授業を受けに教室に戻って行った

うん。俺も戻ろう。

……………何でこんなに寒気がするんだろっ？

「さて、放課後だ」

明が掃除してる、ゾンビみたいだな

「誰に言っておるのじゃ兄上」

「気にするな」笑顔で言い切る

何故か赤くなりました。可愛いですね。やっぱり女の子にしか見えません。

「で、雄二作戦って何？」と明

ああ、そういえば気絶してて聞いてないんだっとな

「ああ、俺たちでこれから鉄人のズボンに有る鍵をとるための作戦だ」

「分かった。僕は何をすればいいの？」

「ああ、それを使う」

雄二が指し示す方に目を向ける

「バケツ？これをどう使うのさ？」

「鉄人に水を被せて着替えさせる」

うん。なんとも爽やかな笑顔だ。よっぼど怨まれてるんだなあ

「この作戦での問題点は一つだな」と俺

それに続くように

「ああ、水をぶっかける明久が鉄人に目をつけられるという点だ」と雄二が締める

『まあ、取るに足らない問題だ(な)』

雄二と目でコンタクトを取ったかいがあった。

明が死にそうなくらいに真っ青です

「む。ターゲットが来たぞい」  
秀の言葉を聞いて全員が動き出す  
「よし、上手くやれよ明久」  
「……………ファイト」  
「精々楽しませてくれよ」  
「え？ちよつと！」

「上手くやるかな？」楽しみだ  
「やってもらわなきゃ困る」  
「うむ。何としても成功して欲しいぞ」  
「……………来た」

バツシャアアア

カラカラカラ

「すごいな。あそこまでするとは」呆れてしまうな  
「それが、あいつの強みだ」と雄二  
バカが強みって嫌だなあ  
「そろそろ行くべきではないかのう」  
「……………明久の悲鳴」  
うん。BGM 明の悲鳴

結構不快だ

「そうだな。行くとするか」

雄二を先頭にゾロゾロと出ていく

あ、明が期待に満ちた目でこちらを見ている

大方助けが来たとも思っているんだろうが、その考えは甘いなあ

「あれほど『先生に水をブチ撒けるなんてやめておけ』と忠告したのに……」

「『日頃の怨みを晴らす』って聞かないからこんなことになるんだぞ明」

「い、痛いっ！先生！本当にわざとじゃありませんから！だから、許してええええ」

うん。フオローする気無いなあ。

まあ、もとから助ける気はないからいいんですが

「先生。明久の処刑は後にして、着替えた方がいいっすよ。俺のジヤージでよければ貸しますけど」

「そうだな。濟まないが貸してもらおう。吉井は床をきちんと拭いておけよ」

そう言つて雄二たちとも教室の中に消えていった。

「ほれ、明。手伝つてやるから、さっさとやるっや」

「ありがとう。和樹」

後始末を2人でやっているとき秀が戻ってきた。

「兄上、明久。鍵が手に入ったぞい」と、笑顔で出てきた。

「それじゃあ、ちよろつと行ってくるよ」

「ええ！明が行くの！そこは秀か康太だろ！お前じゃあ先生につかまって帰つてこれねえって」

「酷！僕そんなに信用無いの！そんなことないよね秀吉にムツツリ

「一二？」

「僕は兄上か雄二じゃと思うのじゃが」

「・・・・・・・・明久じゃ心配」

その言葉を聞いた途端に悲しそうな顔をしながら鍵をこっちに渡してきた。

「・・・・・・・・俺は見てないぞ。顔が赤い秀と康太何か見てないからな」

ちゅーか康太何時から居たんだ？

「んじゃあ、行ってくるか」

鍵を持つて職員室の扉を開ける

「失礼します」

「うん？ああ、東野君ですか。どうしたんですか？」

先生に話しかけられる。しかし言いわけはちゃんと考えている

「西村先生が今、手を離せないそうで代わりに来ました。何でも職員室のロッカーに入っている没収品袋を生徒指導室に移すとか」

「そうなんですか。それはご苦労様です。しかし、西村先生に何が有ったんですか？」

「ええ。又、明。じゃない吉井が何かしたみたいですよ。さっき」

吉井は何処に行った』って聞こえましたから」

笑顔で嘘を付く

「又、彼ですか。それならば仕方ありませんねえ」

と、納得しつつ溜息を吐く

「・・・・・・・・明ってすごい認識だな」

「没収品袋運びますから、先生また」

西村先生のロッカーの前でそう言い、扉を開けて目的の物を持って出ていく。

「ええ。ご苦労様です」

先生は笑顔で見送ってくれた。罪悪感が少し出てきたな

「……昨日、職員室から盗難が発生した」

翌朝のHR。開口一番西村先生がそんなことを言ってきた。

「……おかしければる筈無いのに」

「これは大変嘆かわしい事態だと思わないか、吉井に東野？」

怒っているようだ。何でばれたんだろう？後でちゃんと返しにいったのに

それより、何で明も呼ばれたの？

「そうですね。全く嘆かわしいことだと思います」と明

「その通りですね。何故我々の名前が挙がったのか聞いていいですか？」

疑問を口に出す

「ああ、それはだな。先生の私物の本を堂々と身分証明書を提示して、売り捌いた奴と、先生の名を語り没収品袋を持ち去った奴が居るからだ」

「……マズイ。本は知らんが後半は思いきり俺がやったことだ。」

「吉井いつ！歯を食い縛れえっ！」

あ、取り返した後明に鍵を渡したのが、悪かったんだな。

明君フルボッコですよ

「さて、東野何故あんなことをした？」

取りあえず言い分は聞いてくれるようだ。

さて、何と言おうか

「先生。俺が取り上げられた物覚えてますか？」

まず、無難に会話を

「うん？確か本だったな」

「ええ。あれ近所の図書館で借りた物なんです」

「そうか。だから取り返したかったんだな」

おお、鉄じ……西村先生が食いついた

「はい。返却期限を守りたかったので、すいませんでした」

素直に頭を下げる

「ちゃんと理由を言えば直ぐに返してやったものを」

「そうなんですか？」

「当たり前だろう」

知らなかった

「お前から物取り上げた物は『私物』では無かったようだからな」

ホッと息を付く

観察処分者は避けれそうだ

「しかし、お前も職員会議で可決したからな。受け取れ」

……甘かった

東野 和樹。上記の者を文月学園指定《特別

処分者》として認定する

……ハイ？観察処分者じゃないの？

俺そんなに悪いの？

帰り道

「何で俺がこんな目に」テンションが下がってしまう

「兄上元気出すのじゃ」秀が慰めてくれる。

「なあ、秀。俺そんな問題起こしてないよな」

「う、うむ。しかし兄上は良い意味でも悪い意味でも目立っておるからのう」

・・・・・・・・・・・・・・・・知らなかった。

何でまた顔が赤いのだろう？風邪だろうか？

「ええい、気が滅入る。夕飯豪華にしてやる」  
心機一転だ

「へえ。良いこと聞いたわ。夕ご飯期待してるわよ。和兄」  
いきなり後ろから、優の声がしました。

「・・・・・・・・ビツクリした」

「そんなこといいから早く帰りましょ。お腹空いたわ」

「うむ。兄上早く帰るのじゃ」

何でこんな時だけ仲が良いかなあ

## 7話 俺と明久が観察処分者？その2（後書き）

主人公の特別処分者は適当に考えました。これは馬鹿の肩書きではありません。

今考えている能力としては

? 担当教師無しでの召喚フィールドの作成

? 科目の自由設定

? 自分の作った召喚フィールド内への召喚獣の召喚

の3つです。点数をいくつ使うか等は、考えていません。次回から、やっと本編に絡めます。

お楽しみに

## 8話 俺とテストとクラス替え（前書き）

いつの間にかお気に入り登録が20件以上ありがとうございます。  
いまだに携帯のメール設定が出来ません。もうドコモショップに駆け込むしかないんでしょうか？

取りあえず今日中にはDクラス開戦まで持っていこうと思っています。  
す。

それでは始まりです。

## 8話 俺とテストとクラス替え

さて、皆さん。金縛りというものをご存じだろう。朝起きたら体が動かないっていうあれだ。あれは、精神的な物らしい。

何が言いたいかというと俺は今、物理的に金縛りにあっている。朝起きると秀と優に両腕を決められていたんだ。

.....動けないし、声が出ないくらい痛い

早く起きてくれねえかな。てか、何で俺の布団と一緒に寝てんだ？

昨日確かに一人で寝たはずなのに

ああ、そういうえば合鍵渡してたな。随分前に何で今になって寝首をかかれないといけないんだ？

朝飯の支度がしたいなあ。

「和兄。おはよう」「兄上。おはようじゃ」「現実逃避をしていたら起きたらしく挨拶された。

ここは普通に返しておこう。確認は後だ

「ああ、おはよう。優に秀。いい加減離してくれないか？朝飯の支度がしたいんだ」

「ええ、分かったわ」「うむ。分かったのじゃ」「案外素直に離してくれた

良いことだ。

そそくさと下に降り朝飯の準備を始める。  
昨日のうちに仕込みをしておいて良かった。これなら30分くらいで出来る筈だ。

「……………飯食った後理由を聞いたら目を逸らして何となくよ（じゃ）」と言われた。

地味に凹む

制服に着替えて、文月学園に向かう途中桜が綺麗だった。  
平和だ

校門の前に先生が立っていた。おや、やっぱり西村先生みたいだな。

「おはよう。木下姉弟に東野。お前たちは何時も早く来るな」

「おはようございます。西村先生」

「おはようございますじゃ。先生」

「ええ。先生おはようございます」

「ああ。受け取れ。これに書いてあるクラスがお前たちの新しいクラスだ」

封筒を受け取り上の部分を破いて紙を出す

「東野」「はい？」

「お前は勉強も出来て頭も良い。しかし、先生は去年一年間お前を見て『こいつはもしかして愉快犯じゃないだろうか?』と思ったんだ」

「先生 それは失礼ですね。確かに楽しめればそれでいいですが、

さすがにテストは真面目に受けます」

さて、俺のクラスはと

『東野 和樹・・・Fクラス』

・・・何故？

「途中まで最高成績だったらしいが途中から問題の答えを書く場所が違ったんだ」

むう、気付か無かった。

まあ。いいか。楽しそうだし

後ろの方で優の悲鳴？と秀の歓声が聞こえた



## 8話 俺とテストとクラス替え（後書き）

次は自己紹介編です。

よろしく願います。

9話 俺とFクラスと自己紹介(前書き)

無駄に長くなりました。すみません。

## 9話 俺とFクラスと自己紹介

「優 何で怒ってるんだ？俺何かしたか？」

今クラスに向かう途中でAクラス所属になったらしい優に付いて行ってる

何故か怒っている優に聞く

「怒って何か無いわよ！和兄の馬鹿！さつさと教室に行きなさいよかなりご立腹のご様子

………何で？」

「さあ、兄上！教室に行くのじゃ」

優とは反対に機嫌が良い秀

何だってんだ全く

「ああ、分かった。優またな」

「さつさと行きなさい」

………優子さんが冷たい

秀に付いて行ったら腕を絡めてきた。

関節技決められる訳では無いので放っていたら、周りの視線が痛いそそくさとそれこそ脱兎のごとく逃げ出した。

Fクラスに付きました。酷いですね。

卓袱台に座布団に畳だけで教室全体がギシギシいつてます。

「廃屋みたいだな」

「そつじゃのう」

取りあえず中に入って適当な席に座る

「和樹？何でお前がFクラスに居るんだ？」

声のした方に振り向くと雄二君が立っていました。

「ああ、振り分け試験の時に答えを書く場所を間違えたんだ」

「どんな間違いをしたんだよ。まあいい、これで戦力がかなりアップしたからな」

と不敵に笑う悪友

「前に言っていた戦争の話だな。面白そうだから参加させてもらおうか」

ヤバイ 楽しい。どれぐらいかと言うと某戯言使いが『俺の敵』と分かった時の狐サンぐらい楽しい

「そういえば、雄二が代表何だろう？」

この面子で代表になれそうなのが、コイツしかいない気がします

「当たり前だ。俺以外の誰がなれるってんだ」

おお、流石は元神童

話してたらチャイムが鳴った

「先生来ないなあ」

「そうじゃのう」

「うし、行くか」

雄二が教卓の前に行って何かしてる

ということともうすぐ明が来るんだな

ボウつと見てたら肩叩かれた

振り向くと島田 美波の姿があった

「久しぶりね東野、あんた頭良いんじゃないの？」

「ああ、多分調子が悪かったんだろ？」

「ふーん。そんなもんなの」

「ああ。そんなもんだ。島田は日本語が読めなかったのか？」

「ええ。そのお陰でFクラスよ」

「災難だったな。まあ、他のクラスよりは楽しそうだから良いだろ  
う」

「あんたは相変わらずねえ」

呆れたように溜息をつかれる

何でだろう？

横で秀が頷いてるし

適当に島田と喋って別れた

『さつさと座れこのウジ虫やるう』

雄二の声が響いてきた。そちらをみると明がポカンとした顔で立っている。

おお、ついに始まるのか。感動だ

先生来ないし寝ようかな

「秀。寝るから適当なところで起こしてくれや」

「うむ。分かったのじゃ」

「……………じゃ……………起きるのじゃ兄上」

秀の声がします。大人しく起きましよう

「眠てえ。で、何かあったの？」

「自己紹介で兄上の番じゃ」

自己紹介？やべえ何も考えてない  
良いか名前だけで

てか、何でこんなに殺気だつてんだこいつら？

「えー、名前は東野和樹だ。趣味は読書で 前に座ってる秀とAク  
ラスの優とは幼馴染だ。喧嘩なら買っぞ。お前ら」

壁に立て懸けてある竹刀袋から日本刀を出しながら周りを見回す

『くそ、俺たちでは勝てんというのか』

『須川会長！』

『この場は諦めよう』

「何やってんだあいつらは？」

「分からぬのう」

「んじゃあ、本でも読むか」

「む？兄上は他の者の紹介を聞かぬのか？」

「ああ。ぶっちゃけるとどうでもいいからな」  
本を取り出して読み始める。

『大ありじゃあっ』

吃驚した

でも、気にせず本を読みます

何か皆に雄二が話してる

ああ、戦争の話か

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」「  
我らが代表が戦争への引き金を引いた  
さて、楽しませてもらおうか

## 9話 俺とFクラスと自己紹介（後書き）

.....文才が欲しいです。

どうすれば他の作家さんのような魅力的な文章が書けるのでしょうか？  
壊れるべきでしょうか？

次話は今日中に出せたらいいなと思っています。

10話 戦争と俺とDクラス戦その1 宣戦布告(前書き)

すいません。アップするの遅れました。

昨日パソコンがストおこしまして

始まります

## 10話 戦争と俺とDクラス戦その1 宣戦布告

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

姫路人気だな

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

どうやって見つけて捌いてやるうかと思っていたら

雄二がそんなことを言ってきた。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な言葉が次々と出てくる

すごいな。Fクラス

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

「それを今から説明してやる」

しかし、すごいな皆雄二の話術に引かれている。

「おい、康太。畳に顔つけて姫路のスカート覗いてないで前に来いん？康太何時の間にあんな処にいたんだ？」

「……（ブンブン）」

「は、はわっ」

流石にやるのが違うな。そのうち警察の厄介にならないか心配だ。

さてもう少し聞いていたいがやっと今読んでいる本も佳境に入って来たからな集中するでしょう。

「それに東野和樹もいる」

ん？呼ばれた気がする。

雄二の方に顔を向ける

「お前また本読んでたのか。良いからこっちに出てこい」

呼ばれたから行きます。

「こいつの名前はそんなに有名ではない。だが、皆も「本の虫」もしくは「刀神」の名どちらかを聞いたことが有るはずだ」

本の虫はともかく刀神は初耳だ

『馬鹿な！あいつが刀神だというのか』

『刀神って確か近隣の不良グループを皆殺しにしたっていう奴だろ  
う』

『何て恐ろしい奴だ』

誰だ？人のあだ名を大量虐殺犯みたいに使ったの  
誰も殺してないぞ

「お前ら。俺は誰も殺してないぞ。喧嘩売られたから真剣抜いて脅  
しただけだ」

「そつちの方が怖いぞ」

何故か雄二君に溜息をつかれました

「それにこいつは『特別処分者』だ」

俺は問題児のつもりは欠片もありません

『特別処分者って確か先生の許可を取らずに召喚出来るって奴だな』

『何だよそれ反則じゃねえか』

うん。そう思う。

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って、小学生の頃神童とか呼ばれてなかった？』

『実力はAクラスレベルが3人いるってことだな』

「それに、吉井 明久だっている」

すごいな。あれだけ士気が高まっていたのにもう水を打ったかのようになつて静まっている。

というか雄二、人の名前を落ちに使つなよ

「ちよつと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要ないよね」

『誰だよ、吉井 明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ！折角上がりかけた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、――――って何で僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「明？俺は雄二と違って、真人間のつもりなんだが？」

「何を言ってるのさ和樹！和樹と雄二は普通の人間じゃないに決まってるじゃないか」

「俺が違つんだからお前も変人だろ」

く、まさかこの二人に言われるとは

「あー話を戻すぞ。コイツの肩書きは『観察処分者』だ」

『……………それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

「ち、違つよっ！ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二」

姫路が目を輝かせてる。そんな大した者じゃないよな  
ペナルティしかないもんなあ。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろう』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるな』

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

あ、はつきり言い切りやがった。

「雄二、そこは僕をフォローするセリフを言うべきところだよな」

「明」

「何、和樹は僕のことフォローしてくれるよね？」

期待に満ちた顔でこちらを見る

「お前は雑魚だ」

トドメをさしてやる

「和樹何か嫌いだ」

うん。満足した

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」雄二

「皆、この境遇は大いに不満だろう」俺

「うっわ、すごい大胆に無視された」明

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

姫路。別に声出さなくても良いんだぞ？

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「明、心配するな雄二がお前を危険な目に合わせる筈がないだろう？心配そうな明に声をかける」

「うん。そうだね。和樹の言う通りだ。じゃあ行ってくるよ」

「行ったな」

「ああ、行った」

『やっぱりあいつは面白いな』

「お主ら存外に鬼畜じゃのう」

聞こえませんが。何も聞こえませんが。



10話 戦争と俺とDクラス戦その1 宣戦布告（後書き）

主人公のあだ名は本の虫の方は自分が中高で実際言われたあだ名です。

刀神の方は日本刀持ってるからという単純な理由です

11話 戦争と俺とDクラス戦その2 戦争前の休み時間（前書き）

まさか昼休みだけで一話使うとは思いませんでした。

11話 戦争と俺とDクラス戦その2 戦争前の休み時間

「騙されたあつ」

明がポロポロになつて帰つて来ました。

「やはりそうきたか」

「まあ、当然だな」

「やはりつてなんだよ！雄二と和樹を信じた僕がバカだったよ！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「殆ど擦り傷に打撲だろ。それぐらいは予測がつく」

「少しは悪びれるよ！」

ああ、やはり明は面白い

「吉井君、大丈夫ですか？」

おお、姫路はやさしいな。流石明に惚れているだけはある。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

「吉井、本当に大丈夫」

おお、今度は島田か。大人気だな明

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった・・・ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

本当に惚れているんだろうか？

1年の時から間近で見えてきましたが、何故惚れたのか理解に苦しみます

「ああっ！もう駄目！死にそう！」

本気にしたなあ

「そんなことはどうでもいい。それよりいまからミーティングを行うぞ」

本当にどうでもいいんだろうな。多分

「明、屋上でやるからな」

「大変じゃったの」

明の肩を叩きながら雄二の後を追う

後ろの不毛な会話何て聞こえませんから

………島田は本気でやりそうだな

「明久。宣戦布告はしてきたな」

「一応今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「それじゃあ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食べるよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

「あんな物で栄養になる訳ないだろう」

「何が言いたいのさ。2人とも」

『お前の主食って 水と塩だろう？』

「失敬な。きちんと砂糖だっただけ食べてるさー！」

「吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

「お前、本当に良く生きていけるな」

ああ、皆の明を見る目が優しい

「秀。弁当早く食って雄二の話聞こうぜ」

「うむ。しかし、兄上の作ってくれた弁当じゃ。ゆっくり味わいたくてのう」

「恥ずかしいですよ。秀吉さん。」

「メツチャ恥ずかしいですよ。」

「多分今顔真っ赤ですよ。」

「ほら、皆見てるじゃないか」

「和樹、秀吉に弁当作ってたのか？」

「あ、何か雄二が遠い」

「ああ、家が隣で秀も優も料理出来ないからな。弁当はついででみたいなもんだ」

「兄上の料理は美味しいのじゃ」

「嫌々秀吉さん。お兄さんもうライフポイント0よ！」

「これ以上言われたら恥ずかしくて死ねます。」

「だから、そんなに嬉しそうに言わないで」

「………羨ましい」

「うん。僕も作ってきて欲しいよ」

「あれ？姫路の弁当イベント潰れた？」

「てか、明に康太。男の手作り弁当食いたいか？」

「あの、明久君。良かったら私がお弁当作ってきましたよっか」

「良かった。弁当フラグ立った」

「嬉しそうだな明」

良かった。

後はどう回避するか、だ！

流石に臨死体験何かしたくない

「良かったな明、手作り弁当だぞ。頭擦り付けて姫路を崇める」

「そうだぞ明久。感謝の気持ちをここからノーロープバンジーして姫路に伝える」

は、思わず腹立って心にもないことを

「僕に死ねって言ってるんだね！2人とも！」

いや、そんなつもりは無いよ。

アナタだけ犠牲になって下さいと言ってるだけです

「……………ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

チィ 余計なことを

「あ、いえ！その、皆さんにも……………」

「俺達にも？良いのか？」

「それは楽しみじゃのう」

「……………（コクコク）」

くそ！俺だけ逃げねえ

「ああ、よ、宜しく頼む」

「……………お手並み拝見ね」

「姫路さんって優しいね」

お、告白みたいだな

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のことを好き

」

『おい明（久）、ここで振られると弁当の話はなくなるぞ』  
雄二と顔を見合わせ笑いあう

「 にしたいと思ってました」  
すごいこと言った

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」  
「カミングアウトしすぎだろう」思わず引いた

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」  
雄二が珍しく驚いている

「そういえば雄二、Dクラスが最初ってことはEクラスが敵じゃな  
いってことだろう？」

「お前は俺の考えをどこまで読んでいるんだ？」

「まあ、気にするな。最終目標はAクラスなんだ。その間俺はお前  
の刀となり壁という壁を粉碎しよう。そして盾となりお前を守ろう。  
傷一つ付けることなく無傷でAクラスまで連れて行ってやる。だか  
ら、お前は俺たちを使ってどんなことをしても勝て。それがいまの  
所一番楽しそうだからな」

言い終わった後、皆黙ってしまいました。変なことだったかな？

「あ、ああ。宜しく頼む。」

むう。何故か雄二の声が上擦っている。しかも、若干顔が赤い  
何で

「兄上。格好良いのう」  
まさか褒められるとは

「和樹は何でこうも似合うかな。悔しいよ」  
うん。訳わかんない

「……………決まっている」

康太まで一体何が？

しかも皆顔が赤いですよ

話を変えないと恥ずかしくて死ねそうです。

「ゆ、雄二。どんな作戦で行くんのだ？」

声の上擦る

「ああ、今から説明する」

11話 戦争と俺とDクラス戦その2 戦争前の休み時間（後書き）

主人公が言った台詞はほとんどでっち上げです。こういうサイト見  
てたら1つか2つは必ずありそうですね。

ついにDクラス戦です。多分その4までいくと思います。  
これからも宜しく願います。

あ、両親の話書いてないや。良いか別に書かなくても

12話 戦争と俺とDクラス戦その3 戦争開始(前書き)

今回は微妙です。この話読まなくても困りませんよ。  
主人公が活躍しません。

## 12話 戦争と俺とDクラス戦その3 戦争開始

「暇」

今は、回復試験も終わって教室で雄二の前で座っています。だってもう一回ちゃんとテスト受けないと点数無いんですよ。全教科受ける時間が無いから、2教科だけ受けてきました。

「仕方ないだろ。お前と姫路は切り札なんだから。それに今回お前を出すつもりは無いぞ」

しかも、死刑宣告しやがった！

何てこったあ

「本でも読むか。DクラスぐらいじゃFクラスといえど突破するの時間かかるし」

「阿呆。本読むくらいなら、もう2、3教科受けてこい」  
怒られました

「んじゃあ、そうしようか」

立ちあがりながら

「雄二。明が逃げそうになったらこの紙に書いてあること伝令に伝えてくれや」

と、紙を渡す。

「何だ？この紙？」

不思議そうに受け取る雄二

「開けてみ」

「これは。最高だよ。お前は」

「お誉めにあずかり光栄の至りつてな」

廊下を出ながら振り返り軽く礼をする。

廊下を歩いていると秀率いる前線部隊が戻ってきた  
取りあえず声をかけようか

「よっ。秀どうしたんだ？」

軽く手を上げて挨拶する

秀も気付いたらしくこちらに小走りに駆けてくる

「兄上。今から補給を受けに行くところじゃ。兄上はどうしてここにおるのじゃ？」

「ああ、俺も試験受けに行くところだな。ちなみに理由は、暇だからと雄二に言われたからだ」

「そうじゃったか、ならば一緒に受けにいけばよいのう」

「そうだな。じゃあ、行くか」

秀と並んでテストを受けに行く

《船越先生 船越先生》

突然放送がかかった

「何かあったのか」

「？分からぬのう」

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

「この声、須川だな」

「うむ、何の用が有るのじゃろうかのう」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「……………はいiiiiiiii!？」

吃驚した。普通に驚いた。

あ、秀の目が点になってる  
可愛いな。

「明久は勇者じゃな」

放心気味だが普通に会話する秀。

すごいなあ

「ああ、勇者だ。後で赤飯でも炊こうか」  
俺も放心気味だ

「そうじゃ。試験を受けに行かねば」  
現実に戻ってくる秀

『須川あああああああ』

明の絶叫が響いてくる。

「さ、さあ、秀。早く行こうぜ」  
「う、うむ。そうじゃのう」

思わず速足になります。

「やっと終わった」  
興が乗ったからって4教科も受けなくても良いじゃねえか。何してんだよ俺は

「む？兄上今終わったのかのう？」  
秀。別に待たなくても良いんだぞ？

しかし、そろそろ戦争終わりじゃないのか？

終わったら誰か何か言いにくるよなあ  
普通は

と、いうことは未だ終わってないのか？

聞いてみるか

「秀。今の戦況はどうなってるんだ？」

「うむ。今から雄二率いる本隊が出撃するところじゃ  
結構良いタイミングだな

「じゃあ、俺たちも行くぞ」

「うむ。ああそうじゃ兄上」

突然呼び止められました。

「何だ？」

「少し屈んでくれんかのう」  
「何だろう？」

「ああ、分かった。これぐらいで良いか？」

「うむ。十分じゃ」

「済まぬが、少し目を閉じてくれぬかのう」

「？ああ？」

何か柔らかいものに口を塞がれました。

驚いて目を見開くと

真っ赤な顔をした秀吉がいました。

しかも、アップで。

「あ、兄上。嫌じゃなかったかのう／＼／＼／＼／＼／＼／」  
秀が何か言ってる。ヤバい処理速度落ちる。

「べ、別に嫌じゃないけど何でだ？／＼／＼／」  
思わず俺の顔も赤くなる。

「兄上に女の子扱いしてもらった時にとっても嬉しかったのじゃ。その時に気付いたのじゃ。ああ、俺は兄上のことが好きなのじゃと。迷惑かのう？」

くそ、涙目で上目遣いだと！  
しかも、断る理由が無い！

「あ、ああ。秀。気付いてやれずに済まん。俺は秀のことを女の子としては見れないかもしれないがそれでも良いのか？」

「構わぬ。その内絶対に振り向いてもらうからのう」

本当にその内振り向いて女の子扱いしそうです。

その時扉がガラツと開きました。  
振り向くと皆がとても気まずそうに立っています。

あれ？見られた？

ヤバい！本当に穴が有ったら入りたい程恥ずかしい

「済まん。見るつもりはなかったんだ。戦争終わったから皆で呼びに来たんだが本当に済まん」

雄二が代表して謝ってくれます。

ヤバい！隣の秀吉の顔が強張って泣きそうだ！

取りあえず八つ当たり（照れ隠し？）に竹刀袋から真剣を2本抜き  
1本を秀に渡す。

そのまま抜刀

雄二たちが青い顔をしているが知るか！そんな物知るか！

横に並んだ秀も刀を抜き放つ

「待て！秀吉に和樹！流石に刃物は不味い！頼むから降ろしてくれ  
！秀吉ッ！振りかぶるんじゃあない落ち着け！頼むか「ぎゃあああ  
ああああああああああ」

サッパリしました。殺してはいませんよ。

活躍出来なかったのが不満です。

12話 戦争と俺とDクラス戦その3 戦争開始（後書き）

今回甘くなりましたねえ。それでも微妙ですが。すいません。戦闘描写書こうと思ったら秀吉が出てきたんです。秀吉には敵いませんから。

次のBクラス戦は戦闘させます。

13話 弁当と俺たちと昇天（前書き）

Bクラス戦に入る前に絶対入れたかったお話です。  
どうぞお楽しみ下さい

### 13話 弁当と俺たちと昇天

「うあー………づがれだー」

「お前に何が有ったんだ？」

取りあえず気になったので聞いてみる。

「な、何でも何よ和樹」

「そうか。なら良いか」

明と話してたら秀が寄って来た。

今日は何故かポニーテールにしている。

まあ、似合うからいいか

「兄上。どうしたのじゃ。じっと見て何か儂の顔に付いておるかう？」

む、そんなに見てたか

「ポニーテール似合うな、と思ったただけだ」

ヤバい！俺が変態みたいだ！俺はノーマルだ。落ち着け！落ち着くんだ

そして秀、赤くなるんじゃあ無い

「嬉しいのじゃ、兄上」

くそ、耐えろ！俺の自制心！

あれ？付き合ってるんだから別によくな？

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯チャーハンとカレーにすっかな」

ありがとう雄二。お前のお陰で救われた。

しかし、メニューが主食に持っていく物ばかりだな

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらおうね」

「……………（コクコク）」

「じゃあ、俺たちも一緒にいいか？」

「うむ。相伴させてもらおうかの」

「じゃ、僕は今日は贅沢にソルトウォーターあたりを

「

明、それはただの塩水だ。格好つけても何もならんぞ

「あ、あの。皆さん……………」

姫路が声をかけてくる。

ああ、弁当かあ

「お、お昼なんですけど、その、昨日の

約束の……………」

「おお、もしか弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かったあ〜」

「じゃあ、屋上行って食おうぜ」

もう覚悟を決めよう

死にはしないだろう

・・・・・・・・多分

「そうだね」

笑顔で答える明

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

「ん？雄二どこか行くの？」

「飲み物でも買って来る。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

おお。島田が優しい。

「悪いな。それじゃ頼む」

「おっけー」

「きちんと俺達の分をとっておけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはないはずだ。じゃ、行って来る」

ああ、良い天気だ。

何で今日に限って弁当作らなかったんだろう？

康太。そんな助けを求められても俺にはどうすることも出来んぞ？  
てか、一口食っただけで生まれたての小鹿のようになるってどんな  
料理だ？

（秀吉、和樹。どう思う？）

( どうも思つても何も演技には見えんからなあ )  
( うむ。ここで演技する必要もないしのう )

( 明。体頑丈？ )

( 正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから )

当然表情は笑顔だ。

( じゃあ、俺が食つてみるか )

( そんな兄上、死んでしまふぞ )

( 和樹。大丈夫なの？ )

( 秀に食わせるわけにはいかんだろう。それに興味があるしな )

( 興味？ )

( ああ。一口食つただけで人が倒れるんだ。試してみたいと思うのが男だろう？ )

( 辞めるのじゃ兄上！ )

( じゃあ、逝つてみるか )

字が違うとかは突つ込むんじゃない。

康太の姿みて、死ぬかも知れんと思つたんだ

「おう、待たせたな！へー、こりや旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二が人の折角の決意とか覚悟を壊してくれました。

「ゆ、雄二ちよ・・・」

「あつ雄二」

止める間がねえ

パク

バタン

ガシャンガシャン、ガ

タガタガタガタ

マジか。痙攣の仕方が人間の動きじゃねえぞ

おい、雄二。そんなに目で訴えるんじゃないぞ

『毒を盛ったな』

失礼な奴だ

『毒じゃない、これが姫路の実力だ』

『毒じゃないよ。姫路さんの実力だよ』

アイコンタクトって便利だな

さて、雄二が苦しい言いわけをしてる間に一口貰うとするか

(あ、兄上！何故じゃ！何故そこまでして)

(安心しろ。ただの知的好奇心だ)

箸を伸ばした瞬間弁当箱が消えました。

中身は雄二君のお口の中です。

「明、お前外道だな」

「……………最悪だな。」

「……………お主、存外鬼畜じゃな」

ほら、秀も言ってるじゃないか

雄二。死ぬんじゃないか？

何か魂がどっか逝きそうだぞ。

痙攣の仕方がさっきの比じゃないぞ

「お弁当美味しかったよ。」  
「馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

俺も乗っとくか

「ああ、旨かったよ。ご馳走様」

笑顔で言っていると姫路が嬉しそうに微笑んでくれた。

「あ、もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで」

明、雄二が否定してるぞ？

お前にも見えてるんだらう？

「そうですかー。嬉しいです」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二」

「う……………うう……………あ、ありがとうな、姫路……………」

雄二、目が虚ろだぞ？

しかし、雄二は優しいな

俺はその間、康太に茶を飲ませて此方に戻ってくるように言葉をかける

……………大丈夫か？何かばあちゃんとか聞こえるけど

「実はですね」

うん？姫路の声が弾んでいるな

「デザートもあるんです」

「ああっ！姫路さんアレはなんだ！！？」

素早いな、明。

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」  
おお、雄二。戻って来たのか。

何か雄二と明が言ってるな

明の持っているデザート？の容器を奪い中身を見てみる。

（ど、どう和樹？食べられそう？）  
そんなに怯えなよ

（別にそんなに危険な物は入ってないように見えるがなあ。まあ、少し刺激臭がするぐらいか？）

（刺激臭って何？何が入ってるの？）

（和樹、食べそうか？）

雄二は未だに目が虚ろだけど大丈夫だろうか？

（まあ、食ってみりゃわかる）

そういつつ雄二と明の方に笑顔で顔を向ける

「ごめんなさい。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ」  
そう言っつて姫路は去って行く

「さてこの間に食ってしまうか」

「済まん。和樹。恩に着る」

「ありがとう。和樹」

「兄上。ワシも食べるのじゃ」

いや、秀吉君。そんな自殺志願しなくても  
時間が惜しいから何も言いませんがね

「分かった。一緒に食べるか」  
「うむ」

容器を傾け、一気にかきこむ

「僅かな酸味が・・・硫酸か？」

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあッ！」

一口めを食ったら以外に旨いと思ったけど  
間違いだった。

ゆっくりと俺の体が倒れていくのを俺が見ている。

まさかの臨死体験！幽体離脱！

凄い料理だ

意識がそのまま無くなった。

### 13話 弁当と俺たちと昇天（後書き）

作者は友達に作ってもらった弁当を戻したことが有りますが、皆さんはそんな体験有りませんか？まあ、無い方がいいですね。

ちなみに本当にこんな状況に近いものが有りました。

皆顔が真っ青でしたから。

この体験からご飯を殆ど残さず食べるようになりました。

美味しいご飯って大切ですよね。

さて、次回は多分Bクラス編です。

お楽しみに

14話 明とBクラスと宣戦布告 明君リンチに合う(前書き)

長くなりましたね。

## 14話 明とBクラスと宣戦布告 明君リンチに合う

「そついえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん」

雄二の奴かなりタフだな。

茶がこんなに旨いと思ったのは初めてだ。

茶って殺菌作用があるんだよな。

さつきから秀と一緒に飲んでいるが一向に不快感が消えない  
・・・・・・・・・・・・・・・・もう食べたくないなあ

と、雄二に言うことが有ったんだ。

「雄二」

「何だ？和樹？もう大丈夫なのか？」

心配してくれる友達って大切ですよね。

俺未だ顔真つ青ですよ

「大丈夫に見えるなら眼科に行つて来い。そうじゃなくて、次のB  
クラス戦だ」

「スマン。その話か。どうしたんだ？」

根元の先手を打つておこつ。

あいつ嫌いだし

「俺をBクラス戦の時に前線部隊に配置して貰いたい。後、姫路を  
後方支援か戦闘に参加させずに護衛部隊に入れて欲しいんだ。出来  
るか？」

俺の言葉を聞いて雄二は顎に手を当てて考える。

似合ってるな

「どういうことと和樹？何で姫路さんが後方か護衛なの？」

明が当然の疑問を聞いてきた。

まあ当然だな。主力を減らせて言ってるんだから。

さて、どう言おうか。

「答えは簡単だ。一つは姫路の体力だ。姫路は体が弱いからな。Dクラス戦ぐらいなら構わないが、次の相手はBクラスだ。下手をすればと目を跨ぐ可能性がある。姫路が戦闘を続ける体力は無いだろう。二つ目は、Bクラスの代表だな。必ず姫路を狙ってくるだろうから」

言い終わって周りを見ると雄二や姫路、秀に康太は納得してくれたようだが、島田はこっち向いてないから表情を窺えないな。

「……明、分からなかったのか。」

「成程、和樹が言う理由の一つ目は分かったが、二つ目のBクラス代表が姫路を狙うってというのはどういうことだ？」

バラそうか。

その方が楽だし

「その内分かと思うがBクラスの代表はあの根本恭二だ。Fクラス的主力で一番攻めやすいのは姫路だろう？それに姫路が戦闘できなければ勝ち目がないからな」

「何だと？あの根本恭二か？」

「ああ、その根本だ」

言い終わった後、早すぎたと思ったがそんなことはないようだ。

「しかし、最初から姫路がいないと怪しまれないか？」

「……怪しい」

「そうか、なら姫路が2、3人補修室に送った後に指示を秀か明がすればいいだろう」

「そうだな。そうしようか」

何とか雄二を説得出来た

「で、明久」

「ん？何雄二？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告して来い」

「断る。雄二か和樹が行けばいいじゃないか」

俺もか？

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？」

雄二が黒い顔して明に提案する。

「OK。乗った」

「よし。負けた奴が行く、で良いな？」

「じゃあ、ただのジャンケンでもつまらないから、心理戦ありでいい」

俺がそう言い雄二の方に顔を向ける。

(分かってるじゃないか和樹)

(当然だ。明が乗るの分かり切っているからな)

「分かった。それなら、僕はグーを出すよ」

うわ！簡単に食いつくな！コイツ

『そうか。それなら俺は』

『お前がグーを出さなかったらブチ殺す(解体す)』  
ハラス

『行くぞ、ジャンケン』

「わああっ！」

パー（雄二 俺）

グー（明）

「決まりだ。行って来い」

「明。頑張つて来い」

「絶対に嫌だ！」

そうか。明

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配しているんだな？」

「それもある！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。俺が保証する」

おお！雄二格好いいなあ

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」  
へえ！初耳だ

「そつか。それなら確かに大丈夫だねっ」

明、そんな嬉しそうな顔するなよ

「でも、お前不細工だしな……」  
そうかなあ

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「5度だな」

「三人なんか嫌いだっ」

「とにかく、頼んだぞー」

「……言い訳を聞こうか」

午後のテストが終わって直ぐにBクラスに行った明がボロボロになつて帰つて来た。

『予想通りだ』

「くきいー！殺す！殺し切るーっ！」

「落ち着け」

うわっ！雄二そこ鳩尾

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

爽やかだ。爽やか過ぎるぞ雄二

「ああ、秀。帰ろつや」

「うむ。帰るのじゃ」

「明。また明日な」

「さよならじゃ」

「あ、ああ。うん。また」

「む、あそこに居るのは姉上じゃな」

「よう、優。何してるんだ？こんな所で？」

優が校門の前で立っていた

「和兄を待っていたのよ」

「俺を？」

何かしたかな

「和兄。言いたいことがあるの」

「何だ？」

本当に分からない

「秀吉。先に帰ってて。後から行くから」

「う、うむ。分かったのじゃ」

メッチャ怖い。どうしよう？

「和兄。秀吉に告白されてOKしたって本当？」

「ああ、受けただけど？」

優子さんの笑顔が怖いです。

「秀吉は男なのよ」

「ああ、分かっている」

「じゃあ、何でOKしたのよ？私も和兄の事が好きなのよ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・はい？

まさかの新事実発覚ですよ。皆さん

どうしよう？

「優。本気か？」

「ええ。秀吉と相談して和兄が受けてくれたら、私たち二人で和兄のガールフレンドになるうって話になったのよ」

あれですか？武力行使で黙らせたんですね。優子さん  
分かります。

分かりましたから、そんな笑顔で迫らないで下さい。

「分かった。お前の告白を受ければ良いんだな」  
言った瞬間優の顔が真っ赤になりました。  
可愛いですね。本当に可愛いですよ。

「そ、そうよ」

「なら帰るか。明日はBクラスと試召戦争しないといけないんだ」  
「そう言えば、何でDクラスと設備を変えなかったの？」

「代表に聞けよそんなこと俺は知らん。だが、目標はAクラスらしいぞ」

「無理に決まってるわ。そんなこと」

「ああ、そう思う。だけど面白いじゃないか最低クラスが最高クラスに勝負を挑もうとしてるんだぞ」

「兄上、姉上。話は終わったかのう？」

「ああ、終わったぞ。秀 一緒に帰ろうや」

14話 明とBクラスと宣戦布告 明君リンチに合う(後書き)

後半で優子が出せたから満足ですね。

## 15話 戦争と俺とBクラス戦その1 戦争開始

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」  
教壇に立った雄二が皆の方を向いている。  
やっと全教科のテスト受けれた。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』  
あれだけテスト出来ないのに何でモチベーション下がらないんだろ  
う。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ』

「そこで、前線部隊は姫路と秀吉に指揮を取ってもらおう。野郎共、きつちり死んでこい！」

「が、頑張ります」

「うむ。任せるのじゃ」

『うおおーっ！』

凄いな。こいつら

キーンコーンカーンコーン

「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー』

無駄に勢いが有るな

「いたぞ、Bクラスだ」

「高橋先生を連れてくるぞ！」

「生かして帰すな　っ！」

うん。俺も頑張ろうか

『Bクラス　野中長男　VS　Fクラス　近藤吉宗

総合　1943点　764点』

殆どトリプルスコアだな

「近藤、代われ。俺が戦る」

「ああ。済まん。任せたぞ。東野」

「Fクラス東野和樹だ。宜しく頼む」

『Bクラス　野中長男　VS　Fクラス　東野和樹

総合　1943点　64852点』

『なっ！六万点越え！』

「はい、さいなら」

俺の点数を見て固まっている敵召喚獣を無造作に近づき刀で一閃

「戦死者は補習だ」

「て、鉄人！嫌だあああ」

どっから現れたんだ？

てか、Fクラス死に過ぎじゃねえか？

『あいつ何者だ？』

『あんな化け物勝てる筈がない』

「先生！そこで話しているBクラスに勝負を挑みます」

『くそ！こうなりや自棄だ！戦ってやる』

『そうだ！絶対点数減らしてやる』

『サモン試験召喚』

『Fクラス	東野和樹	VS	Bクラス	A B
数学	5852点		156+187	』

「ほれ、かかって来い」

『舐めやがって』

一直線に向かってくる

試してみるか

「武装変換 フォースエッジ」

小声で呟いてみる

召喚獣が元から持っている日本刀に加え西洋風の両刃の剣が新たに増えて二刀流になる

そのまま二本の剣で突っ込んできた相手召喚獣を串刺しにして倒す。

姫路の方も敵を倒したらしい

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

「野中もだ！」

「俺たちも死んだぞ」

おお、潔いなBクラス。

「なっ！そんな馬鹿な!？」  
「姫路瑞希、噂以上の相手だ!」  
「それに一人化け物みたいのがいるぞ!」  
「何！姫路瑞希よりも危険だというのか?」  
「ああ。姫路瑞希を軽く凌駕している」  
慌ててる慌ててる  
てか、俺そんな認識なんだ

そろそろかな

「明に秀。一旦教室に戻るぞ」  
「何故じゃ兄上?」  
「そっだよ和樹」  
まあ、当然の疑問だな

「そろそろ根本が何かしてくるころだろうからな」  
「じゃあ、姫路さんも一緒に」  
「そっだな。おい！姫路」

「ああ、はい。何ですか?」  
「一旦教室に戻るぞ」  
「分かりました。それでは皆さん頑張ってください!」

「やったるでえーっ!」  
「姫路さんサイコーっ!」

姫路の声を聞いてやる気をもせる野郎共

「馬鹿ばかりだ」  
「兄上。そういうのは言わない方が……」  
「そっだよ和樹」

「そうですよ。東野君」  
「そうかなあ」

「根本って想像してたよりもっと器が小さい男だったんだな」

「酷いですね」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯、だね」

教室に戻ったら穴だらけの卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムが俺達を迎えてくれた。

「雄二。どうしてこうなったんだ？姫路を下げるんだから協定何ぞ受ける必要ないだろう？」

俺の一番の疑問を雄二に質問する。

「嫌、そうでもないぞ。相手が持ち込んできたから話を聞くために教室を出たんだが、どうやらその間にやられたらしい」  
軽く言ってくれました。

「雄二！どうということさ？」

偉いぞ。明

「簡単な事だ。Fクラスの主力は姫路と和樹だからな。昨日和樹が言ったように姫路の体力面に問題があるからな。いくら後方や護衛に回してキツイもんはキツイからな」  
納得しました。

「成程。そういう理由なら仕方ないな」

「それでは俺らは前線に戻るぞ」

「雄二、後宜しく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

「俺も行くか」

さあ、根本次は何をしてくれるんだ？

姫路も付いてきました。

計画と違います。

まあ何とかなるだろう。多分

15話 戦争と俺とBクラス戦その1 戦争開始(後書き)

変な所で区切りましたね。

多分次で終わると思います。

16話 戦争と俺とBクラス戦その2 Cクラス介入(前書き)

案外Bクラス戦長いですね。

## 16話 戦争と俺とBクラス戦その2 Cクラス介入

「吉井に東野。戻ってきたか！」

須川がこちらに近づきながら声をかけてくる。

あれ？島田は？

「島田が人質に取られた」

「なっ！？」

どうやら島田は人質にされたらしい

さあ、明どうするんだ？

見ている方が楽しそうだが、秀が心配だ。

「明」

声をかけこちらに向かせる

「何？和樹？」

「行くつもりなら、絶対に島田を怒らせるなよ」

「？どういう意味さ？」

「分からないならいい」

「じゃあ、俺は秀の方に行ってくるからな」

「分かったよ。気を付けてね」

秀の方に行ったらもう終わってた

良いんですけどね。暇潰しくらいの気持ちで来たから。

寂しく何か無いからな！

「兄上、何時来たのじゃ？」

秀がこちらに気付いたらしく声をかけてくる。

「さっき来たところだ。明の方も大丈夫そうだったからな」

「そうか。ならば安心じゃのう」

「協定通りなら今日はもう終わりだから、教室に帰ろうぜ」

「そうじゃのう」

周りからの殺気何か気にしません。

教室に付いたら何か血達磨になった明がいた

「コイツに何が有ったんだ？」

「ああ、どうも島田を怒らせたらしいんだ」

そうか、結局怒らせたのか。

「雄二、戦況は？」

「ん？ああ、これだ。こちらの被害も少くないが、一応計画通り教室前に攻め込めたぞ」

言いながら雄二はこちらの被害が書かれたメモを渡してくる。

被害は予想の内何だけど

「死に過ぎじゃねえか？」

「嫌。これでも俺の予想よりは少ないから大丈夫だろう」

雄二がそういうならそうなんだろう。

「……………(トントン)」

「お、康太。どうした」

相変わらず気配が無い奴ですね

「何、Cクラスが怪しい？」

「・・・・・・・・・・（コクリ）」

「漁夫の利って訳か。下らん奴等だ」  
「ん？Cクラス代表って確か」

「雄二。今Cクラスに行くのは不味い」

「和樹。どう言うことだ？」

「Cクラス代表は確か小山だ」

「それがどうしたんだ」

「あいつは根本と付き合っているらしい」

「本当か。それは？」

「ああ。俺の情報網に引つ掛かったんだ」

情報網云々は本当にあります

康太と俺で作った物だからそう簡単には破れない。

偶に教師の恥ずかしい話とか聞けて案外面白い

「何かお前といるところがちが頑張るの馬鹿らしくなるな」

「気のせいだ」

「まあ、どっちにしても行かないとな。このままじゃ面倒なことになる」

「そうだね。早く行かないとCクラス代表が帰るかもしれないし」

「んじゃあ、行くか」

「うむ。行くのじゃ」

護衛として

「嫌、和樹と秀吉は残っていてくれ」

「何故じゃ？」

「何で？」

しかし、明頑丈だな。もう動けるのか。

「お前たちの顔を見られると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」  
「ふむ。そういうことなら仕方ないか」

「分かった。なら無事に帰って来いよ」

「当然だ」

「大丈夫です」

「分かってるよ」

「……………（コクリ）」

教室に二人きりで残されました。

会話しようとしたら秀が真っ赤な顔でこっちを見ているので、視線を逸らせず困っています。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

間がもたねえ！

こっちから話を振ってみることにします。

「なあ、秀」

「な、なんじゃ。兄上」

「何か話したいことでも有るのか？」

秀が焦っています。

何ででしょう？

「い、いや。別に何も無いのじゃ」

「そ、そうか。なら良いんだが」

秀が目線を逸らしてくれたんで持つてきた本に目を通します。

しばらく本を読んでたら、いつの間にか秀がえらく近いところからこちらを見上げてきてました。何でしょう？

「どうした？秀？」

聞いたら顔を真っ赤にしながらかっこちに擦り寄ってきました。

「兄上、二人つきりじゃのう」

そうですね。

二人きりですね。

「そうだな」

取りあえず読んでいる本を畳に置き秀の方に向き直る。

ジッとみられたら目線逸らしたくなりませんか？顔を真っ赤にして秀が何か言いたそうにしています。

「そのじゃな、兄上にお問い合わせの」

お願い？

何でしょう？

「何だ？願いつて？」

聞いてみましょうか。

「兄上のこと名前で呼びたいのじゃ。嫌かのう？」

案外簡単なことでした。

安心です。

どんな無理難題吹っ掛けられるかと内心ビビっていたので安心です

「別に構わないぞ」

言った瞬間秀に抱きつかれました。

微妙に首が決まっっていて目線が動かさせません。

「ありがとうなのじゃ！兄上！いや、和樹」  
「簡単じゃ有りませんでした。」  
「ダメージが以外に有りました。」

嬉しそうなので何も言いません。  
秀の頭が良い位置に有るので撫でてみます。  
気持ち良いので撫で続けます。

顔が見えませんかから喜んでるかどうかわかりません。

ガラスとFクラスの扉が開きました。  
皆帰って来たようです。

仕方がないのでこの体制で話しましょう

明と島田がいません。

「お帰り。雄二に姫路に康太。無事で何よりだ」

「あ、ああ。お前何してんだ？」

「……………（コクコク）」

「羨ましいです」

……………姫路の言葉は聞かなかったことにします。

「俺のことは放っておいてくれ。島田と明はどうしたんだ？」

『『『こいつ馬鹿だあーっ！』』』  
そんな声が響いてきました

「成程。困か」

「そうだ。明久ならそう簡単に負けないしな」  
「そうか、《観察処分者》の利点の一つだな」  
「そういうことだ」

その後暫く喋っていたら明と島田が帰って来た。  
無事？つばいから大丈夫だろう。

後、島田が明のことを吉井から《明》って呼ぶようになっていた。

明の方も島田さんから《美波》に代わっていた。  
進展があったようで、嬉しく思う。

「こうなった以上Cクラスも敵だな。雄二どうする気だ？」

「ああ、俺に考えが有る。明日の朝決行する。楽しみに待っておけ」

雄二の言う計画に一抹の不安を覚えました。  
嫌な予感がします。

16話 戦争と俺とBクラス戦その2 Cクラス介入(後書き)

ちなみに主人公はこの後優子にも同じことを言われてOKします。

17話 戦争と俺とBクラス戦その3 Cクラス挑発(前書き)

いつの間にかお気に入り登録が随分ふえていますね。皆さんありがとうございます。

いまだに携帯の設定の仕方が分からないのですが、もう諦めた方がいいでしょうか？

## 17話 戦争と俺とBクラス戦その3 Cクラス挑発

「和樹、大丈夫か？」

「大丈夫じゃない。何で戦争も始まってないのにこんな大怪我せんといけんのだ！」

「いや、朝のはお前が悪いだろ」

「何だと！」

そりゃ、朝から秀と優がくっ付いてきたさ。

噂になりました。

怪我の原因は嬉しそうな顔の二人から逃げたことだそうです。

恥ずかしいから逃げたら異端審問会にリンチに遭いました。  
その内仕返ししてやる。

「雄二。俺のことは放っておいて作戦を始めてくれ」

「あ、ああ」

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Cクラス相手だ」

「あ、成程。それでどうするの？」

「先ずは和樹の回復が先だ」

え！俺？秀じゃねえの？

「和樹？和樹をどう使うのさ？」

うん。俺も疑問だ。

「秀吉にコイツを着てもらい、和樹と共にCクラスに行ってもらう」

そうですか。分かりました。

雄二。女子の制服何かどうやって手に入れたんだ？

「優の代わりにCクラスを挑発して来いってことだな？」

「その通りだ。和樹、動けるか？」

言われたので立ちあがって軽く体を動かしてみます。

……大丈夫そうだ。

「雄二イケるぞ」

「分かった。なら秀吉コレを着てくれ」

「うむ。分かったのじゃ」

そう言くと秀は何の躊躇いもなしにその場で着替え始めました。

「秀」

「何じゃ、和樹」

「外で着替えてくれ。その間に異端諮問会にお話しがあるから」

「分かったのじゃ」

周りからのブーイング何か知りません

さてと、

「お前ら！朝はよくもやってくれたな！ノシ付けて返してやる！」  
言いながら木刀を構えます。

真剣は西村先生に取り上げられました。

「く、怯むな！相手は一人だ！物量で押せ」

『サー！イエッサ！』

一斉に襲いかかるクラスメイト、いや、かたき敵

ここに仁義なき戦いが幕を上げた

「和樹、その位で許してやれ。お前のせいで戦力が減ってしまう」「雄二。我関せずじゃなくて少しくらい手伝ってくれても良いじゃないか。」

「何か死屍累々って感じだね」

「……（コクコク）」

「何だ？お前ら生きてたのか？」

青い顔して教室の惨状を説明してくれます。  
しつかり狙ったはずなのに

「ちょっと和樹！それどういう意味さ！まるで僕たちも狙っていたように聞こえるよ！」

「……外道っ！」

「何を言ってるんだお前は」

「そうだよ。和樹はそんな友達を傷つけることはしないよね」  
そんな明君達にプレゼントです。

「全力で狙ったに決まっているだろう」

「アンタ最低だよ！」

「……（コクコク）」

「和樹。もうよいかのう」

「ああ、良いぞ」

秀が帰ってきました。

「和樹。似合うかの？」

「似合い過ぎるくらい似合ってるぞ」  
とても似合っています。

もう、まんま優ですね。

「んじゃ、Cクラスに行くか」

「おうよ」

「うむ」

「あ、僕も行くよ」

Cクラス遠い。

「雄二。具体的に何をすればいいんだ？」

挑発するのはいいが、その方法が分からん。

「それはお前たちで勝手にやってくれ」

適当な答えが返ってきた。

「ここからは済まないが二人に頼むぞ」

「じゃあ、秀。何時もの優を宜しく頼む」

「大丈夫じゃ。和樹」

ガラガラッとCクラスの扉が開きます。

「静かになさい、この薄汚い豚ども！」

「黙れ！雑魚共！」

少しハツチャケたいと思います。

秀、お前の中の優のイメージってそんなのなん？

まあ、これでAクラスに敵意が向いたな。

『な、何よアンタ達』

そりゃ、怒るわな。

『話かけないで！豚臭いわ！』

『近づくんじやない！ゴミ虫が！』  
挑発って難しいですね。

秀？演劇部ってそこまで出来ないといけないのか？

『Aクラスの木下と東野ね？ちょっと点数良いからって良い気にな  
ってるんじゃないわよ！何の用よ？』

俺ってAクラスって認識なんだな。

根本は伝えて無いのか？

それとも興味がないのか？

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢なら  
ないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『これはAクラス全体の総意だ！これからお前達に相応しい教室に  
送ってやろう！』

『なっ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』  
小山さん。別に豚小屋〓Fクラスでは無いですよ？

むしろ、あそこは廃屋です。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達全員  
を始末してあげようと思うの』

『穢れた豚共を肅清し、在るべき所に送ってやろう』  
微妙に楽しいですね。

秀何かノリノリです。

『Aクラス何かに絶対に負けないからね！覚悟しておきなさい！』  
何か火でも吹きそうです。

『覚悟するのはお前達だ。丁度戦争の準備をしているようだから、  
徹底的に潰して始末してやる』

『ふん！負け犬の遠吠え、いや豚の遠吠えね』

『『精々怯えて待つている（なさい）！』』

散々言っただんでさっさと教室から出ていきます。  
だって、リンチ何か嫌ですから

横に並んだ秀が妙にスッキリした顔で歩いている。  
ストレス解消にでもなったんだらうか？

「これで良かったか？」

雄二達の所に付いたので聞いて結果を聞いてみましょう。

「ああ、二人共素晴らしい仕事だった」

『Fクラスなんて相手してられないわ！全力でAクラスを潰しにい  
くわよ！』

『おおーっ！』

………以外に成功したようだ。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始める  
ぞ」

「あ、うん」

さて、戦争開始です。

17話 戦争と俺とBクラス戦その3 Cクラス挑発(後書き)

挑発って難しいですね。

## 18話 戦争と俺とBクラス戦その4 戦争終了

「ドアと壁をうまく使うのじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」  
秀の指示が飛ぶ

「お前ら！勝負は単教科で挑め！常に2〜3人で囲んでたたんでしまえ！補給は念入りに行え！」

『おおーっ！』

「左側出入り口、押し戻されています！」  
「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」  
流石に負けそうだなあ。

「俺が行く！」  
「任せた。和樹」

『試験召喚』

取りあえずボコボコにして帰ってくる。

姫路がさっきからフラフラしている。  
雄二の命令を聞かなかったのかな？

「明。姫路の相手してやれ。何か悩みでも有るんだらう」  
「分かったよ。その間頼むね」

明が何か姫路と話した後Bクラスの教室を見て走っていった。  
何かするつもりなら頑張ってもらおう。

「取りあえず、教室に釘付けに出来たな」  
「うむ。後はどうするかろう」

「まあ、明が何かするつもりみたいだから待ってみようぜ」

「明久が？何をするつもりじゃろう？」

「分からんが、面白そうなのは確かだ」

「それなら安心じゃな」

秀と話しながら姫路の所に行く。

「姫路」

「あ、はい。何ですか？」

「心配するな。明がどうにかしてくれるから。ただ待っていればいいさ」

「はい！分かりました！」

持ち直したっぽいから大丈夫だろう。

暫く秀と喋っていると雄二が護衛部隊引き連れてきた。

「どうした雄二？何かあったか？」

「いや、明久が頑張つて隙をつくからそれまでの時間稼ぎだ」

「じゃあ、付いて行って良いか？（入って皆殺ししてもいいか？）」

「ああ、構わない（根本は残せ。奴はムツツリー二が殺る）」  
「ほほう！康太が」

アイコンタクトって便利ですね。

「じゃあ、行くぞ」

「おう」

「俺も行くのじゃ」

で、Bクラス前



何とか応戦しだすBクラスの面々

………俺は魔王か何かか？  
そんな怯えられると困るな。

徒党を組んで突っ込んでくる。

普通に切りあうと人数が多いBクラスの方が有利だから、先頭行っている奴から崩していこう。

「武装変換 ベオウルフ」

言った途端に召喚獣の武器が刀から白に黒の様子が付いた籠手と具足に代わる。

あっちの方が多からこちらも増やそう

「ドツペルゲンガー 1」<sup>ワッ</sup>

同じ姿形をした召喚獣が現れた。

武器が変わっても驚かなかったBクラスの面々の召喚獣の動きが止まる。

その瞬間に二体に増えた召喚獣で先頭の召喚獣をボコる。  
刀よりこういう武器の方がやりやすいな。

隣の壁からドンツドンツと破壊音が響く。

雄二の方を見ると面白そうな顔をしているからこれも作戦の内だろう。

『余所見してんじゃねえ！』

悪役みたいだな。

突っ込んできた相手の召喚獣の刀を受け流して柄空きになった胴体に突きこむ。

さらに寄って来た奴の肩に手を置き重心を崩してそのまま蹴りで吹

き飛ばし、増やした召喚獣でトドメをさす。

これで残るは8体

もうチヨイ頑張るか

「な！今の動きは何だ？」

何か言ってるけどシカトします。

「時間だ。和樹引け」

雄二の声が届く

「分かった」

召喚獣を下がらせ迎撃態勢を取らず。

「あとは任せたぞ、明久」

雄二が言った瞬間、BクラスとDクラスを遮る壁が破壊された。

ハツチャケ過ぎだと思いません。

壊した穴から明や島田が飛び出してくる。

随分と豪快な作戦だな、オイ。

「遠藤先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！試験召喚」サモン

まだ、生きてたのか近衛部隊

てか、根本ビビり過ぎじゃね？

「残りの相手は俺がしてやるから早く根本倒せよお前ら」  
雄二の方を向くと頷いたので良いんだろう。

「分かったよ。和樹。ありがとう」  
「もうすぐ終わり何だからさっさと終わらせて本読ませてくれ」  
これは俺の切実な願いです。

島田と明が根本の方に行こうとした瞬間

ダン、ダンッ！

康太と鬼の生活指導がBクラスの教室に飛び込んできました。  
屋上から来たんだらうなあ、多分。

「……Fクラス、土屋康太」

全員戦闘中で根本の助けに行けないねえ。

「き、キサマ……！」

「……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーツ！」

康太を見ただけでその名が浮かぶ彼はダメな気がします。

「サモン試験召喚」

『 Fクラス	土屋康太	V S	Bクラス	根本恭二
保健体育	441点		203点	』

流石は康太だ。

保健体育だけならAクラスより高いからな。

これでBクラス戦が終了だな。

18話 戦争と俺とBクラス戦その4 戦争終了（後書き）

すいません。遅くなってしまって、しかも戦争終わっただけというこの状況。

今日中に戦後対談も載せるつもりです。

19話 Bクラスと雄二と戦後対談 Aクラスに謝りに

「明、随分豪快な作戦を実行したな」

「明久、随分と思いついた行動に出たのう」

終戦後明の近くに行つて話かける。

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

何て言うか

「自業自得だ。明」

「なんと……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めていいと思つよ」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「後先考えず自分の不利になることばかりする、何ともお前らしい作戦だ」

「遠まわしに馬鹿つて言つてるでしょ！」

そつだよ。

「ま、それが明久の強みだからな」

分かります。

馬鹿が強みなんですな。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表」  
雄二が根本の方に向き直る

根本、今までの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言をにザワつく一同

「お前ら、俺達の目的はAクラスだ。ここは通過点に過ぎない」  
雄二が言つと皆納得したように頷いた。

「条件はなんだ」

根本が力なく問う。

「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

すごい言われようだな根本

Bクラスの何人が笑ってるし、人望も無いんだなあ。

しかし、飽きたな。

「雄二」

声をかけよう

「ん？どうした和樹？何かコイツにしたいことでも有るのか？」  
さて、そんな物は無いが

「お前確かアレ持ってたな。アレ着せてAクラスに戦争の意思と準備があると伝えに行かせたらどうだ？勿論写真を撮った後にな」

「お前えげつないぞ」

「そうか？俺は優の所行つてくらあ」

「優？ああ、Aクラスか、どうしてだ？」

「今日の朝の事バレテたら非常に拙いから先に謝りに行くことと思つてな」

足の震えが止まらん

めっちゃ怖い。どうしよう？

「そうか、分かった。頑張つて行って来い」

「わ、ワシも行くぞ！和樹」

恐いならやらなきゃいいのに

「取りあえず菓子でも作ってから行く。手ぶらじゃ格好付かんし」  
「う、うむ。そうじゃの」  
「さっさと廊下に出ます。」  
後ろから根本の悲鳴が聞こえた気がします。  
気のせいという事にしよう。

一路家庭科室へ

「で、何を作るのじゃ和樹？」  
「んークッキーか何かだなそんな手の込んだ作る時間も無いし」  
「そういえば、家庭科室の鍵はどうするのじゃ？開いておらぬじゃろっ」  
「大丈夫だ。康太からピッキングを習ったから。材料はもう揃ってるはずだ」  
「あ奴は何処でそんな物を覚えたのじゃ？それに材料が揃っているとは？」  
「康太が何処で覚えたかは知らんが、材料はさっき須川や近藤にメルで知らせたから持つてくるはずだ」  
「先程携帯を弄っておると思ったらそんなことをしておったのか」  
呆れたように言われました。

話していたらもう目の前ですね。  
須川に近藤も居るし、感心だな。  
「待たせたか？」  
片手を上げてこちらに答える須川  
「そんなに待つて無いから大丈夫だ」  
「そうか、良かった。なら、さっさと開けて作るか」

「東野、何でいきなりクッキー何か作るうと思っただ？しかも、カスタードクリーム何かクッキーに使わないだろう？」

「クッキーの方は何となく作りたくなっただからで、カスタードクリームは明日、シュークリームを作ろうと思っただからだ」

「そうか。分かった。存分に作ってくれ。報酬を忘れるなよ」  
袋を渡しながらか言ってくる須川と近藤

「大丈夫だ。忘れる物か。お前達の協力に感謝だな」  
袋を受け取りながら笑顔で頷く

ちなみに報酬は秀の普段着の写真だ。

それくらいならと秀もOKしてくれたので、良いんだろう。

「さて、始めるか」

「最初に何をするのじゃ？それにクッキーといっても沢山種類があるのじゃが」

「まずは、生地から行こう。作るのチョコチップとバター風味だ」

#### 料理中

「上手に出来ましたー」

「うむ。完成じゃのう」

後はラッピングした袋に入れて渡すだけです。

「しかし、和樹作りすぎでは無いかのう？」

「ああ、余りは明や雄二、康太の分だな。それでも余ったら須川と近藤にでもあげよう」

「そうか。それでは包むかの」

「ああ」

包み終えて気が付きました。

島田や姫路にあげても3袋程余ります。

Aクラスに行く前にFクラスに寄りました。

何か異端審問会がいます。

「お前ら、何してんだ？」

「シイーーーーーッ！。静かに。今、吉井が姫路と良い雰囲気なんだ。何時邪魔してやるうか隙を窺っているところなんだ」

状況説明有難う。

さつさと要件済まそう。

「雄二に島田、康太」

クッキーの包みを放り投げます。

雄二と康太は危なげなく、島田は少し落としそうになったがキヤツチした。

「……………何？」

「何だ？コレ？」

「何よコレ？」

「クッキー。戦争終わった後から作ったんだ、家に帰った後にでも食ってくれ。出来れば、感想もくれや」

「……………（コクリ）」

「分かった。後で頂こう」

「ありがとう。東野。お菓子も作れるんだ」

「ああ、少しな。後、須川に近藤、お前らにもやるよ。どいつがどいつか分からんから取りに來い」

『有難う。東野』

「ん。あ、後。雄二、明のと姫路のも頼めるか？」

「ああ、構わんど。渡せば良いんだろっ」

「ああ」

雄二の手が出てきたんでその手の上に二つ乗せる。

「じゃあ、また明日な」

「おう。また、明日」

「バイバイ。東野」

「・・・・・・（コクコク）」

Aクラス前

何か根本が居た。

しかも、女子の制服着て

思わず物陰に隠れました。

「雄二、本当にやるとは、恐ろしい奴だ」

「あ、あれは酷いのっ」

恐ろしい程似合わない

「あ、根本が出て行った。じゃあ、行くか」

「うむ」

Aクラスの扉を開けたら何か大和撫子みたいな人が居た。

「・・・・・・誰？」

「あ、ああ。Fクラスの東野和樹だ。で、こっちが木下秀吉だ。待てお前ら殺気立つな。戦争しに来たわけじゃねえ」

そんなに根本に腹立ったのかこいつら？

「……待つて皆。何の用？」

その一言だけで周りが静まった。凄いな。

「有難う。優、あ、いや、木下優子を呼んで欲しいんだ」

「……優子を？分かった呼んでくる」

歩くの早くね？

「霧島だったよな？確か」

「……そうだけど何？」

「そんな不信感全開で言われたら話しにくいが、クッキー好きか？作り過ぎて余ったんだ。良かったら貰ってくれ」

「……分かった。有難う」

手を出してくるから、その手の上に置きます。

「和樹！何しに来たの？」

「お、優。丁度良い所に霧島に呼んでもらうのも悪いと思っていた所だ」

優がドンドン近付いてきます。

「で、何の用よ？」

「少しは落ち着け。今日はクッキー渡しに来たんだ」  
頭を撫でてやると気持ちよさそうに目を細めました。

外野五月蠅い

「それだけの用で来たの？」

「それだけってお前なあ。明日の昼こっちに食いに行くけどいいか？」

クッキー渡しながら聞きます。

「い、良いわよ。別に」

しっかりと袋を両手で支えるのが良いですね。  
顔が赤いぞ。優

「和樹！それは聞いておらんぞ！」

「そりゃ、言っていないからな。俺がFクラスになってから秀とは良く食うけど優とは食って無いからな。で、久しぶりに食おうと思っただんだ」

その言葉を聞いて納得したらしく秀が黙ります。

「ああ、結局もう一袋余ったな。どうしようか」

思わず独り言を言う

「なら、僕が貰っても良いかい？」

声のした方を向くと何かボーイツシユな女の子が立っていた。

確かコイツは

「確か去年の暮ぐらいに転校してきた工藤だったな？」

「正解だよ。覚えていてくれて嬉しいよ」

「当たり前だろ、これ貰ってくれるのか？」

「うん。女の子はお菓子が好きなんだよ」

「そうか。捨てるのも勿体ないからな。貰ってくれて嬉しいよ。有難う」

笑顔で渡すとAクラスの女子何人が倒れた。

工藤も真っ赤になるし、隣で立っている秀と優は何か煙出している。  
大丈夫だろうか？

「……（クイクイ）」

袖を引つ張られました。

そちらを見ると霧島がクツキーを食べていた。

「どうした？霧島。不味かったか？不味かったんなら明日違う物を

ちゃんと持ってくるぞ?」

「……………違う。とても美味しかった」

「そうか。なら、良かった」

「……………翔子と呼んでいい」

ボソツと言われました。

呼んでいいということなので呼びましょうか。

「明日はシュークリーム持ってくるからな。楽しみにしててくれ。

翔子

「……………うん」

そのまま何も言わず去っていきます。

そろそろ帰ろう、遅くなって時間が足りないの嫌だから

「秀、優帰るぞ。戻って来い」

声をかけたら戻ってきてくれました。

「あ、ああ。分かったのじゃ。和樹」

「分かったわ。和樹。早く帰りましょう」

「じゃあな、工藤。また明日来るぞ」

「あ、ああ。うん。楽しみに待っているよ。それから僕の事も愛子  
って呼んでくれないかな?」

何なんだ? 一体? 名前で呼ぶのが流行っているのか?

「構わんぞ。じゃあな、愛子」

「うん。また、明日」

「さて、お前ら。先に帰っていてくれ。材料が足りなくなったから  
買いに行く」

「分かったのじゃ、和樹。どれ、鞆を持ってやろう」

「おう、有難う」

「さっさと帰ってきなさいよ」

「大丈夫だ。行ってくる」

「行ってらっしゃいじゃ」

「行ってらっしゃい」

さて、シユーの皮も足りないな。先ずはそこから行こう。

結局、謝ってねえや。

諦めて喰らおうか。

19話 Bクラスと雄二と戦後対談 Aクラスに謝りに(後書き)

次は幕間を二つ挟む予定です。  
しかし、文才無いですねえ。

## 幕間 俺と優とシュークリーム

「出来た」

「昨日、約束したシュークリームが出来ました。いそいそと箱に詰めます。」

弁当も今日は少し豪華にしてみました。偶に本気で料理すると楽しいですね。

「和樹、お早うじゃ」

「和樹、お早う」

ナイスタイミングです。

「ああ、お早う。用意は出来ているから、一緒に食べよう」

「珍しいじゃない和樹と一緒に食べるなんて、何時もは私達より先に食べ終わっているのに」

「今日は少し興が乗ってな。それに皆で食べた方が美味しいだろう」  
「そういつつご飯をよそい配る。」

秀と優も自分の席に着く前に味噌汁を注ぎ配る。

「用意出来たわよ」

「出来たのじゃ」

「じゃあ、食べるか」

『頂きます』

食事中

「食った、食った」

「ご馳走様じゃ」

「ご馳走様でした」

「お粗末さまでした」

立ち上がり食器を運び軽く水で洗い、お湯を張った鍋の中に入れる。

「さて、学校に行くか」

「ええ、行きましょう」

「うむ。行くかの」

其々自分の鞆を持ち玄関に向かう。

ちゃんと箱も持ってますよ。

しかも、二箱

スポーツバックの中に入れて運びます。

一箱はFクラスに放りこみます。

どうなっても知りません。

面白そうなので後でどうなったか聞きに行きましょう。

#### 校門前

「お早う、木下姉弟に東野」

「お早うございます。西村先生」

「お早うじゃ。先生」

「お早う。先生。お一つ如何ですか？」

そう言いながらスポーツバックから箱を取り出し、開けて見せる。

「む？シュークリームか？誰が作ったんだ？」

「俺です。味には自信が有るんで大丈夫ですよ」

「そうか、それなら一つ貰おう」

手を伸ばして一つ持ってそのまま口に運びます。

さて、味はどうでしょうか？

「ふむ。普通に旨いな。変な勘ぐりをして済まなかった」  
何か謝られました。

「いえ、大丈夫ですよ。それじゃもう行きますね」

「それじゃ、先生またの」

「先生また」

「ああ、分かった」

#### Aクラス前

「それじゃあ、また昼にな」

「姉上、さらばじゃ」

「ええ、それじゃ」

優と別れる前に軽く頭を撫でる。  
撫でやすいから気にいっています。

#### Fクラス前

「お早う」

「お早うじゃ」

教室に入ると雄二が暇そうにしていた。

「ああ、和樹に秀吉か。今日は早いな」

「そうか？」

「そうかのう？」

「ああ、かなり早いぞ。それより和樹は何でスポーツバックを持っているんだ？」

「そうか、早かったのか。ああ、この中に俺が作った菓子が入っているんだ。昼に渡すから食ってくれ」

「分かった。有り難く頂こう。後、昨日のクッキーかなり旨かったぞ。有難うな」

おお、嬉しいな。

「気に入ってくれて嬉しいよ」

「そうじゃ、和樹の料理は美味しいのじゃ」

秀、恥ずかしいです。

暫く無駄話をしました。

結構楽しいですね。

秀が途中で上に乗ってきたので焦りましたが、それ以外は大した問題は有りませんでした。

「お早う、東野、坂本、木下」

島田が来たようだ。

『島田お早う(じゃ)』

「何で木下は東野の上に乗ってるの？」

そんなに不思議かな？

「何か乗ってきたんだ。軽いし、気にならんから、そのままにしてる」

「和樹の上は気持ちいいのじゃ」

そんな嬉しそうに報告されても微妙な気持ちになります。

「そ、そう。なら、いいわ」

良いらしいです。

去りながら「ウチも何時か明と………」とか聞こえました。  
頑張れ明

「そろそろ時間だな。お前ら席に戻れ」

「ん？もうそんな時間か。ほれ、秀。降りろ」

「運んでくれんかのう？」

上目遣いは反則だと思えます。

「分かった」

立ちあがってお姫様だっこで運びます。  
この運び方以外に楽で気に入ってます。

周りの殺気が増えました。

「和樹。有難うじゃ／＼／＼」

席に着いたので降ろします。

真っ赤になってお礼を言ってくれました。  
可愛いですね。

「・・・・・・・・・・パシャパシャパシャ」

・・・・・・・・・・康太何時の間に居たんだけ？

「康太。それ売ったらもう二度とシャッター切れないようにしてやる」

「・・・・・・・・・・わ、分かった」ガクガク

ネガを渡してくれます。

素直なのは良いことです。

教師が入ってきました。

授業開始です。

席に着いて暫くしたら眠気が襲って来ました。  
寝ることにします。

「和樹、和樹。起きるのじゃ」

秀の声で一発で覚醒しました。

「お、おう。お早う」

「お早うじゃ。和樹もつすぐ昼じゃぞ」

嘘おー！！

「本当か！」

「ほ、本当じゃ！」

本当！  
マジか

「秀、シュークリームちゃんと取ったか？」  
今、一番重要なことはそれです。

「うむ。キッチンと一箱だけ取ったぞ」

それを聞いた瞬間抱きしめてしまいました。

「良くやってくれた秀。じゃあ行ってくるからな」

スポーツバックと鞆を持ってAクラスを目指します。

決してFクラスからカッターナイフが飛んできたからじゃないんですからね。

チラッと見たら秀が真っ赤になって倒れてました。

#### Aクラス前

「着いた。崩れて無いといいが」

特にシュークリームが

崩れて中身が残念なことになってた何て目も当てられない。

「失礼しまーす」

他のクラスなので失礼の無いように礼をしてから入ります。

「あ、いらっしやい東野君」

愛子が居ました。

「おう、愛子か。優は？」

「優子はまだ勉強してるよ。呼んでこようか？」

首を傾げながら聞いてきます。

良いですね、可愛いです。

今、中央の長机に座って待っています。

「勉強の邪魔する訳にはいかな。と、愛子はもう飯食い終わったのか？」

「もう終わったよ。何かくれるの？」

「ああ、少し待て確かめる」

スポーツバックを開いて見てみます。

良かった。ちゃんと有る。

取り出して開いてみる。

ちゃんと形も崩れずに有りました。

良かった。食われて無かった。

「わあ。シュークリームだ。くれるの？」

そんな目輝かせて聞いてくるな、ちゃんとあげるから

「ああ、食っても良いぞ。ちゃんと優と翔子の分残してやれよ」

「有難う。東野君。僕シュークリーム大好きなんだ」

早速手に持って食い始めます。

メッチャ嬉しそうに食いますね。

作った人間としてとても嬉しいです。

「そんな急いで食うなよ。誰も取らないから」

自分と優の弁当を出して待ちます。

「ああ、ほら。急いで食うから口元にクリーム付いたじゃねえか。取ってやるからジツとしてる」

愛子の口元に指を近づけてクリームを拭う。

さて、取ったは良いがこのクリームどうするか。

考えてたら指を啜えられました。

……心臓止まるかと思った。

「い、行き成り何をする？」  
腰が砕けそうです。  
恐怖で

「その場で止めるから舐めて良いのかなと思って」  
そうですか。

俺が悪いんですね。  
分かりました。

(くそ！木下だけでなく工藤も落としたというのか！)

(とんでもない奴だ)

(神は滅んだというのか！)

………AクラスもFクラスも変わらない気がします。  
このクラスも馬鹿が多いらしい

「………東野」

行き成り後ろから声が聞こえました。

俺を驚かすのが最近の流行り何だろうか？

「翔子か。昨日言ったシュークリーム作って来たぞ。食べ」  
シュークリームを渡します。

「………有難う」

「気にするな。趣味で作っただけなんだから」

食い始めますが、無表情で何を思っているか分かりません。

「う、旨いか？」

「………美味しい」

「そりゃ、良かった」

優遅いな。

ある意味心臓に悪いので早く帰りたいのですが

「あ、代表に愛子、それに和樹までどうしたの？  
やっとなりました。」

「どうしたもこうしたも昼食に来てお前が来るの待ってたんだ」

「呼んでくれれば来たのに」

「勉強中って愛子から聞いたからな。邪魔しちゃ悪いと思ったんだ」  
そう答えながら弁当を渡します。

「そんなの気にしなくていいのに」

小声で何か言ったようです。

聞こえませんでした。

向かいの席で愛子が良い感じの笑顔でこっちを見えています。  
俺には何も聞こえませんが。

「有難う和樹」

笑顔でお礼を言われました。

赤面しそうですね。

「そ、それより早く食おうぜ」

蓋を開けて箸を構えて

「頂きます」

「そうね。頂きます」

優も蓋を開けて食べようとして箸が止まりました。

変ですね？好物ばかりのはずですが、どうしたんでしょう？

「どうした優？」

「な、何でも無いわ。い、何時もより豪華だったから驚いちゃった  
だけなの」

そんなに何時も貧相な弁当を食わした記憶は無いのですが

「ああ、折角一緒に食うんだから豪華にしてみただ。偶には良い

だろう？」

ええ、ただそれだけの理由です。

やはり、大勢で食うと美味しいですね。

二人はシュークリーム食べてるだけですが

「ご馳走様でした」

「ご馳走様でした」

二人して手を合わせて言う。

「優。未だ入るか？何時もより少なめに作ったから大丈夫だと思うが食えないなら無理するなよ。放っておいたら完食する奴が二人もいるんだから、気にしなくて良いぞ？」

愛子と翔子を見ながら言います。

二人とも放っておいたら全部食べそうな勢いだったので止めたのだ。

二人がバツが悪そうな顔をしたのでそれ以上は言いません。

「じゃあ、少し貰うわ。愛子取ってくれる？」

「良いよ。ハイ。東野君も要る？」

渡しながらこちらに聞いてきた。

「俺は要らん。元々優の為に作って来たんだからな」

「そうなんだ。優子は愛されてるねえ」

突然何を言いますか！アナタは

「な！何を言うのよ！愛子」

ドモっとるぞ。優

「……愛子。二人の応援しよ」

何を言いますか翔子サン？

「代表まで！」

そんな裏切られたって顔しなくても

「落ち着けお前ら。優は早く食ってしまえ。愛子も翔子も優をからかうんじゃない」

「ええー。折角面白くなってきたのに」

「……私は本気」

「（もつきゆもつきゆ）」

「なおさら悪い気がするなあ。そうだ、忘れてた！」

「何を忘れたんだい？東野君」

「呼び方だ。俺は愛子も翔子も名前で呼んでるけど、二人とも俺のこと名字で呼んでるだろ？それじゃ不公平だから名前で呼んで欲しいんだ。良いか？」

聞いたら笑われました。

本気で言ったのに

「僕は良いよ」

「……私も構わない」

「良かった」

思わず笑顔がこぼれます。

ふと、優の方を見るとどことなく怒って見えます。  
何かしたでしょうか？

それより優の口周りのクリームが気になります。  
シュークリームって食べるの難しいんでしょうか？

「優。お前口周りクリームでベタベタじゃねえか。取ってやるから動くなよ？」

何かさつきも同じことした気がしますね。

優子が優に何か囁きました。

何か優の顔が真っ赤になりました。

クリームを指で取ってやります。

全部取って指を離そうとしたら舐められました。

………愛子が悪戯成功みたいな顔してます。

そうですか。

コレを言っ たんですね。

「ゆ、優。離してくれないか？隣に座っている悪戯者に拳骨か何か  
したいんだが」

顔を真っ赤にして舐めないで下さい。

こっちも恥ずかしいです。

殺気がまた大きくなりました。

不可抗力です。

俺は悪くない！

悪く無いんだ！

コソコソ

（代表やっぱり優子は面白いねえ）

（うん。面白い）

（和樹君も固まっちゃてるし）

（和樹も面白い）

聞こえてるぞ二人とも

俺たちは玩具か？

「ご馳走様でした」

指舐めてご馳走様はおかしいと思います。

「お粗末さまでした」

合ってるかどうか分かりません。

飯食っただけでえらい時間食った気がします。

もう家に帰って寝たい。

「じゃあ、帰るわ。また邪魔しに来る」

「何時でもおいでよ、和樹君。面白いし」

「・・・・・・歓迎する」

「もうすぐ授業だしね。夕ご飯楽しみにしてるわよ」

「ああ、腕によりをかけて作ろう」

Aクラスから出る前に愛子に捕まった優の姿が見えました。  
楽しそうですね。

異端審問会に捕まって気付いたら放課後だった。

・・・・・・そのうち殺すかもしれん。

幕間 俺と優とシュークリーム（後書き）

無駄に長いですね。

本当は半分くらいの長さのはずでしたが、何処で伸びたんだろう？

## 幕間 俺とテストと文月新聞

二年F組 東野和樹さんからのコメント

俺が小さい時に父さんが言っていた言葉が一つある。

『和樹。自分の障害になる物はどんな物でも破壊してしまえ』

父さん……これで良いのか？

俺は不安になってきたよ。

『コイツだけは敵に回したくない生徒ランキングNO・1』

『暴言が似合う男子ランキングNO・1』

『刃物が似合う生徒ランキングNO・1』

の三冠を達成した東野和樹さんからのコメントでした。

尚、暴言が似合う男子ランキングNO・2の坂本雄二さんへのコメントを求めた結果、部員が病院へ運ばれたため取材できませんでした。

同クラス吉井明久さんのコメント

僕が小さい頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久。泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国に居る筈の祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん……

これで、本当にいいのかい……？

『女装が似合いそうな男子ランキングNO・1』

『こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNO・1』

『モテそうな男子（同性愛編）ランキングNO・1』

『虐めたら面白い男子ランキングNO・1』

の四冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは『むしろ、女子だろ』等の意見の結果、結論として除外されます。

## バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい

『調理の為に火をかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

### 姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応

する為危険であるという点

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引掛問題でしたが、姫路さんは引掛かりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金(すごく強い)』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

東野和樹の答え

『問題点・・・マグネシウムと酸素が反応しあって危険であること  
合金の例・・・真鍮』

教師のコメント

正解ですが、良く真鍮なんて出ましたね。

バカテスト 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1)得意なことでも失敗してしまうこと』

『(2)悪いことがあつた上に更に悪いことが起こる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1)弘法も筆の誤り』

『(2)泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

『(1)弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『(2)泣きつ面蹴ったり』

東野和樹の答え

『(1)河童を島流しに』

『(2)踏んだりシバイたり』

教師のコメント

君たちは鬼ですか。

バカテスト 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my  
grandmother had used regularly  
」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

東野和樹の答え

「これは私の婆さんが愛用していた本棚でした。」

教師のコメント

何故過去形にしたのですか？

土屋康太の答え

「これは

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「

教師のコメント

できれば地峡上の言語で

バカテスト 物理

問 以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であつて、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

東野和樹の答え

『ゴールド聖闘士の武器』

教師のコメント

先生はセイント聖闘士星矢も好きです。

幕間 俺とテストと文月新聞（後書き）

他の問題もAクラス戦ぐらいから載せていきたいと思います。  
次はいよいよAクラス戦です。スピード遅いですね。  
上がったらいいなあ。

## 20話 俺と雄二とAクラス 宣戦布告

バカテスト 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希・東野和樹の答え

『C6H6』

教師のコメント

二人共正解です。

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

次はいよいよAクラス戦だ。

雄二が最後の作戦の説明をしている。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している」

雄二が礼を言ってる。

違和感有るなあ

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」  
ああ、やっぱりこいつは格好良いな。

「残るAクラス戦は一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

『どうということだ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

「やるのは当然、俺と翔子だ」

まあ、当然だな。

代表同士の一騎打ちで決着はすぐつくしな問題は勝てるかどうかということだ。

明も同じことを思ったらしい

「馬鹿な雄二が勝てるわけなああっ!?!」

おお、明。天罰が下ったな。

「次は耳だ」

「そこは首だろ。雄二」

「で、お前の事だ。勝てる勝負をするんだろう?しかし、翔子に苦手科目何て有ったか?」

「ああ。日本史でレベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、純粋な点数勝負だ」

翔子って日本史苦手だったかな。

何か裏技でもするつもりか？

「でも、それじゃあブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとうりじゃ」

「どうせお前の事だ。何か秘策でも有るんだろう？」

「和樹の言う通りだ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると俺が知っているからだ」

ある問題？

「その問題は 『大化の改新』」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

明の言う通りですねえ。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

「単純というと 何年に起きた、とかか？」

「ビンゴだ和樹。その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」  
確か645年だったな。

翔子がそんな問題答えられないとはとても思わんが

「ちなみに、大化の改新が起きたのは645年だ、明」  
今、思いっきり目逸らしやがった。

何年だと思っただんだ？

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばだ」

「あの、坂本君に東野君」

「ん、何だ姫路？」

「ん、俺もか？姫路？」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」  
雄二は幼なじみときいたが

「ああ。最近仲良くなった」

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙えっ！」

「なっ!? なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える!？」

「ちよつと待て、俺は関係ないだろう!？」

こいつらは、何でこんな時だけスペックが高いんだ？

「黙れ、男の敵! Aクラスの前にキサマ達を殺す!」

「俺が一体何をした?」

くそ、無駄な団結力を見せやがって

「遺言はそれだけか? ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

本当に無駄なスペックだ。

「あの、吉井君」

「ん? なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好み何ですか?」

「そりゃ、まあ。美人だし」

「……」

「え? なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの! ? それと、美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険物を投げようとしているの?」

自業自得だ。

「まあまあ。落ち着くんじゃ皆の衆」

助かった。

「む。秀吉は雄二と和樹が憎くないの？」

雄二は関係ないだろう。

「良くかんがえるのじゃ、相手はあの霧島翔子じゃぞ？それに和樹は浮気なぞ絶対にせん」

「それに男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」  
ええ、しませんよ。

絶対バレますし、バレたら俺の命がリアルに無くなるから。  
浮気する必要がありませんし

「むしろ、興味があるとすれば……」

翔子、お前凄い誤解を受けているぞ。

ほら、姫路が困ってるじゃねえか。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は

『システムデスクだ！』

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

今、Aクラスで宣戦布告中だ。

「うーん、何が狙いなの？和樹」

え、そこで俺に振るの？  
ほら、皆こつち見てるし

「Fクラスの勝利が目的らしいぞ。それよりCクラスはどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったわよ？ああ、一つ面白い話が聞けたわね」

ヤバい、優の目が攻撃色に変わった！

「そ、そうか。今度何か埋め合わせに作ってこよう。それで、手を打たないか？」

戦争より命の方が大切だ。

「和樹、何を言ってるんだ？」

そりゃ、疑問に思うわな。

「雄二。これは俺の命に関わることだ。譲る訳にはいかん」

「そ、そうか。時間をかけるなよ」

優、何時まで悩んでるんだ？

「決めたわ。今度一緒に遊びに行きましょう。それに、またお菓子を作ってきて貰うわ」

それくらいならいいか。

頷こうとしたら、体が動きませんでした。

後ろに居る筈の秀の声が真横から聞こえてくる。

「和樹？お主は何の為に姉上の所に行ったのかのう」

「ま、待て。秀。落ち着け！助け……誰か助けてえええ！」  
引きずられました。

皆、生温かい目で見てないで助けてよ

『待って、秀。その間接はそんなに曲がらな、外れる、壊れる、待って、落ち着け話し合ぎゃあああああああ』

何か気絶している間に話し合いは終わっただらしいです。  
参加しなかったよう。

後、秀もどこか連れて行くことになりました。

21話 俺と雄二とAクラス 戦争開始そして終了(前書き)

更新が遅いですね。何とかしたい

## 21話 俺と雄二とAクラス 戦争開始そして終了

バカテスト 保健体育

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の身体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、整理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達するところに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均一二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

東野和樹の答え

『5〜6年前に赤飯炊いたら、優に間接外された』

教師のコメント

君と木下さんの関係が気になります。

バカテスト 生物

問 以下の問に答えなさい

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？タンパク質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時は遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時は原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

東野和樹の答え

『？秀　？優　？食事　？睡眠　？平和な日常』

教師のコメント

君の最後の答えを見て泣きそうになりました。

「では、両名共準備は良いですか？」  
さて、いよいよAクラス戦が始まるな。

「それでは一人目の方、どうぞ」  
「アタシから行くよっ」  
おお、優か。

「ワシがやるっ」  
こっちからは秀が出る。

「ところでさ、秀吉」  
「何じゃ？姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」  
「ま、待て、姉上。その話はもう終わったじゃろっ」  
「何言っているのよ、秀吉。終わったのは和樹の分だけよ」  
秀、可哀そうに

「か、和樹！助けてくれんかの」  
待て、秀。俺の後ろに隠れるんじゃない。  
俺だって恐いんだぞ。

しかも、何か異端審問会が出てるし

「和樹。早く秀吉を渡しなさい」

「あ、あのう。早く召喚してください」

ナイス、先生。

「ああ、先生。もうすこし待ってください」

うん。笑顔が眩しいよ。

背筋が凍る程に

「分かりました。では、もう少し待ちましょう」

先生—————！

「な、なあ。優」

「何よ和樹。早く渡しなさい」

「どうしたら、秀のことを許してくれるかな？」

一応聞いてみないと

「そうね、それじゃあ今回は……………」

何だ、何をしたら許すんだ？

「骨を外すだけで許してあげる」

爽やかに死刑宣告しやがった！

ほら、後ろで秀が震えてるじゃねえか

「優、それは死刑宣告だ。じゃあ、優。俺が代わりにお前とやるから俺が負けたら秀の骨を外していい、その代りに俺が勝ったら秀を許してやって欲しい。駄目か？」

「それって和樹が有利よね？」

「そうだ。だからハンデとしてこっちは明とコンビを組むから、そっちも誰でも良いからコンビを組んでくれ。これぐらいでいいだろう」

何せこっちは観察処分者とコンビを組むんだ。

これがハンデじゃない何て言わせんぞ。

「分かったわ。じゃあ、美穂一緒にやりましょ」  
「有難う。優」

笑顔で礼を言いました。

優の顔が真っ赤になりました。

「か、和樹。僕がコンピでいいの？秀吉の方がいいんじゃない？」

「阿呆。秀じゃあハンデにやらんだろぅが、期待してゑぞ明」

「教科はなんにするの？」

「そっだな」

「じゃあ、物理で行こうか」

「分かったわ。じゃあ、行くわよ。和樹。試験召喚」

「さあ、一緒に踊ろっぜ。明。試験召喚」

「試験召喚」

「分かったよ。和樹。試験召喚」

4人の掛け声に合わせて現れる召喚獣

さて、明の点数は？

『Aクラス 木下優子 佐藤美穂 VS Fクラス 東野和樹 吉

井明久

物理 421点 389点 2892点

62点』

「明、お前もう少し頑張れよ。五倍以上じゃねえか」

「五月蠅いよ。和樹。和樹の点こそ出鱈目じゃないか」

「そうか？今回は悪い方だぞ」

話しつつ近寄り刀で切りつけるが避けられる。

明の方も木刀で切りかかるが逆に跳ね飛ばされる。

反対に優と美穂？のコンビに明の点数が削られていく。うわ、本当に役に立たん。

仕方が無いので、後ろから切りかかり蹴り飛ばす。

「優は随分扱い慣れてるな」

「有難う。和樹」

「和樹！話してないで助けてよ」

「何言ってるんだ？明、周り見てみる。敵何か居ないぞ」

「え、本当だ。何で？」

明の周りにいたのはもう切りつけて補修室送りにしてある。残るは優の召喚獣だけだ。

「さて、優？覚悟は良いか？」

「覚悟するのはアナタの方じゃない？」

何言ってるんだ？

召喚獣の方に視線を移すとズタボロにされた俺と明の召喚獣何でさ？

「腕輪か？」

「正解よ。点数を消費して見えない斬撃を飛ばせるの。反則みたいな能力だ」

「そうか、ならこつちも使おう」

「そつちえば、和樹の腕輪の能力って僕見たことないよ」

「そりゃそつちだ。俺だって初めて使うんだ」

召喚獣が腕輪を前に突き出す。

その瞬間無数の透明な剣が空中から飛び出し優の召喚獣を襲つ。おお、面白い能力だ。

優の召喚獣が串刺しになると同時に俺の召喚獣が消える。

点数が切れたらしい  
燃費悪いな。

横を見ると明の召喚獣も串刺しになっていた。  
後ろで明が悶えている。

「全身が斬りつけられるように痛い！！！！！！！！！！！」

「優、この勝負は引き分けのようだな」

「そうね、じゃあ、どっちも勝ち点一ってとこね」

「そうだな、秀はどうする？」

「もういいわ、面白かったし。終わったら何か秀吉と一緒に食べて  
帰りましょ」

「そうするか。ほら、明。邪魔だ。早く退けろ」

そういいつつ蹴り込み明の身体を転がす。

「雄二。済まなかった。負けてしまって」

「何、気にすんな。こっちも勝ち一になったんだから」

雄二の隣で観戦します。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

康太か。

どうせ、保健体育だろうな

さて、相手は？

「じゃ、ボクが行こうかな」

あれ？愛子じゃねえか

「よう、愛子」

「やつほー。和樹君。久しぶりだね。もうAクラスには来てくれな

いの？」

「いや、行くぞ。優と約束したし、翔子も愛子も気に入ってくれたみたいだし」

「うん。ボクも和樹君のこと好きになったよ。どう？もっと親密になつてみない？」

「何か愛子が言うつと変な意味に取られそうで怖いな」

「そんなことないよー」

本当かなあ

「そうだ、土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

嬉しそうだな愛子

「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？・・・キミと違って、実技で、ね」

問題発言だ。

随分とオープンな娘だ

ほら、Fクラス男子が喜びの余りウェーブをしているぞ。

「和樹君、ボクと実技の予習でもしないかい？」

「要らん。そういうのは明にでもやってくれ。ちゅーか、俺の場合は復習になるな」

「ちよつと、和樹！」

「待つんじゃ、和樹！」

双子の声なんか聞こえん。

「へえ。じゃあ、最初はどっちだったか聞いていい？」

「俺の人生が終了するから言わん。というより、こんな人が多いなかで言えるか」

「何だ詰んないな」

本当に残念そうに言いますね。

「後で優子に聞こつと」

「ああ、そうしてくれ」

「じゃあ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「フツ。望むところ」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！必要ありません！」

「島田に姫路。明が死ぬほど哀しそうな顔してるんだがあつという間にHPOだぞ。」

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。試験召喚サモンと」

「……試験召喚サモン」

先生随分気が長いですね。

「なんだあの巨大な斧は！？」

破壊力有りそうだな。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

巨大な斧に電光をまとわせ、かなりのスピードで康太の召喚獣に詰め寄り

「バイバイ。ムツッリーニ君」

そのまま勢いを殺さずに剛腕を振るう。

「……加速」

おお、あれが康太の腕輪の力か。

あつという間に愛子の攻撃の射程外に居る。

「……加速、終了」

康太の声のみが響く

愛子の召喚獣が血を噴き出し倒れる。

『Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太  
保健体育 446点 572点』

さ、流石。康太。

多分、明の総合科目並の点数なんだろうな。

「Bクラス戦の時は出来はイマイチだったらしいからん  
本当に無駄に凄い。」

「そ、そんな……！この、ボクが……！」  
相当シヨックみたいだな、愛子。

「これで二対一ですね。次の方は？」

「あ、はい。私です」

姫路か。

「それなら僕が相手しよう」

あちらは学年次席の久保利光か

「やはり来たか、学年次席」

「ああ、ここが一番の心配どころだ」

さて、実力はほぼ互角のはずだ。

どうなるかな？

「科目はどうしますか？」

順番で言えば次の二つはあちらだな

「総合科目でお願いします」

「ちよつとまった！何を勝手に

「構いません」

「姫路さん？」

クリームをつける必要がないな

「それでは・・・」

高橋先生の合図で二人が召喚を行い、点数が表示される。

『Aクラス 久保利光 VS Fクラス 姫路瑞希

総合科目 4341点 4409点 』

姫路が負けたな。

さて、これで二対二だな。

久保が強い気がする。

「最後の一人、どうぞ」

「・・・はい」

翔子が出てきた。

手を振ってみる。

何かこつちに来ました。

「・・・和樹」

「何だ？」

「・・・また、お菓子作ってきてくれる？」

首を傾げて聞いてきます。

破壊力有ります。

「あ、ああ。作ってきてやる。今度は何がいい？」

「・・・カップケーキ」

「分かった。近いうちに作ってこよう」

「・・・楽しみ」

「ああ。戦争、頑張れよ。どっちが負けても俺は面白いからな」

「・・・行ってくる」

「科目はどうしますか？」

高橋先生の声が響く

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

おお、Aクラスの面子が騒いでる。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」「  
「そういい、高橋先生が出ていく。  
多分、問題を取りに行っただろう。」

「雄二、あとは任せたよ」

明が雄二の手を握り声をかける。

「ああ、任された」

「……………(ビツ)」

次は康太か

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………(フツ)」

康太、そんな顔も出来たのか。

「雄二、気張れよ。ここまで舞台が整ったんだ。最後は決めろ」

「雄二。ワシ等には見ることにしか叶わぬが、しっかりやるのじゃぞ」  
笑顔で雄二に拳を突き出す。

「ああ、お前達は良くやってくれた。最後は任せろ」  
拳を合わせ、楽しそうに笑った。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

「……はい」

「じゃ、行ってくる」

「行って来い。雄二」

「いつてらっしゃい。坂本君」

「ああ」

さあ、決着だ

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」  
しかし、デカイディスプレイだ。

『では、問題を配ります。制限時間は50分。満点は1000点です』

『不正行為は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『分かっているさ』

『では、始めてください』

二人の手により問題用紙が表にされる。

「さて、いよいよだな」

「そうじゃな。いよいよじゃな」

「これが出なかつたら負けてしまうのう」

「まあ、負けたらリンチにしてやるう」

「和樹。お主は……」

「と、出たな」

「出たのう」

『システムデスクだ』

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 VS Fクラス 坂本雄二

97点

53点》

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

「三対二でAクラスの勝利です」  
負けたなあ。

「……雄二、私の勝ち」

翔子が雄二に近づき話かける。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「吉井君、落ち着いてください」

「姫路、そのまま抑えてろ」

「え、はい」

「え、和樹？何で拳を握り込むの？あり得ないくらい力入ってるよねっ！？」

「少し黙れ」

満面の笑顔で明の背骨まで打ち抜く勢い突き抜く。

位置は人体急所の一つである水月

明はそのまま崩れ落ちる。

放っておいて、雄二の方に歩み寄る。

「お疲れ、雄二」

「お前は怒らないのか？」

「全力を尽くしたんだろ？それに元々楽しむために参加しただけだから。十二分に楽しめたからな」  
これは本音だ。

「・・・雄二、約束」

約束？

何のことだ？

「・・・！！（カチャカチャカチャ）」

何してるんだ？あいつ

「分かっている。何でも言え」

「・・・それじゃ

何でこっちを見るんです？

「雄二、私と付き合って」

告白ですね。

やるなあ。翔子

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」  
格好いいな、翔子。

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「・・・私には雄二しかいない。他のひとなんて、興味ない」  
言いきつたよ。

愛されてるな。雄二

「拒否権は？」

「・・・ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあつ！離せ！か、和樹助けてくれ！」

何で俺かな

まあ、皆処理落ちしてるけどね

「翔子。雄二が他の女に告白したらどうする気だ？」

「どうもしない。私は雄二だけを愛し続ける」

「そっか。なら、もう言うことないな」

「そうか。良かったな雄二。お前は果報者だ」

「てめえ！役に立たんにも程があるぞ！」

「失礼な。こんなに愛してもらって何が不満だ」

「翔子、デートなら映画館に行つて来い。暗闇で色々出来るんじゃないか？」

「そっか。映画のチケットを渡す。」

「有難う、和樹はやっぱり良い人」

「ぐいっ　つかつか」

そのまま雄二を持って颯爽と去っていく。

21話 俺と雄二とAクラス 戦争開始そして終了(後書き)

残りのページを書いた後、ラブレター編ともう一つ書きます。

22話 俺と西村先生とFクラス 担任交代（前書き）

遅いですね。昨日の内に投稿するつもりでしたが。  
やっと、一巻終了です。

## 22話 俺と西村先生とFクラス 担任交代

「さて、Fクラスの皆。お遊びは終わりだ」

おや、西村（鉄人）先生だ。

「どうしたんですか？先生」

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明をしようと思ってな」

我がFクラス？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうさ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」  
大変そうだな

「なにいつ!？」

「大変ですね先生。これからよろしくお願いします」

大半のクラスメイトは悲鳴を上げる。

あの先生、良い人なんですよ。

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない。ああ、東野。宜しく頼むぞ」

そんなついでみたいに言わないで下さい。

「吉井。お前と坂本と東野は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》と《特別処分者》とA級戦犯だからなあれ、俺も呼ばれた？」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「俺もですよ。今まで通り、秀と優との楽しい生活を過ごします」

「…………お前には悔い改めるといふ発想はないのか。後、東野それは家ででもやっっている」  
「そうさせてもらいます。」  
「というか、やります。」

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやる」  
「う」

「明日から勉強時間が増えるのか。  
優に会う時間が減るなあ。」

「カップケーキの材料買ってきて秀と優と食べて翔子に持って行こう。  
愛子の分も作って」

「考えていたら、島田が明の近くに寄って行った。  
何だろう？」

「さあ〜て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べて帰りましょ」

「え？美波、それって週末の話じゃ……………」  
「へえ、約束なんてしてたんだ。」

「島田が一步リードかな？」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ？」

「デートの申込みですね。」

「明は幸せ者です。」

「姫路も負けてないなあ。」

「じゃあ、和樹も行きましょう！」

「和樹も行くのじゃ」

「俺も？」

ああ、そういえば何か一緒に食べる約束してたな。

「良いぞ。買いたい物も有るし、何処行く?」

「そうね。なら、映画でも観ましょ」

「そうするか、秀もそれで良いか?何処か行きたいなら言えよ?今なら変更がきくぞ」

「ワシもそれで良いのじゃ」

「そうか。なら、行くか」

『うむ。(ええ)』

「に、西村先生!明日からと言わず、今日からやりましょう!思い立ったが仏滅です!」

「『吉日』だ、バカ」

何言ってるんだ?あのバカは

「良かったじゃないか、明。デートだと思って楽しんで来い」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないよ和樹。僕の食事が塩水すら危いんだよ!」

「知らん」

「あんた最低だ!」

「最低で良いから速く行って来いよ」

「そうだぞ、吉井。無理することはない。今日だけは存分に遊ぶといい」

「おのれ鉄人!僕が苦境にいると知った上での狼藉だな!こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持ってお前を待つ!」

『斬新な告白だな、オイ』

ああ、やっぱり明は面白い。

「速く行くわよ!和兄!」

「そっちの方がシツクリ来るなあ」

ボソツと呟くと優が顔を真っ赤にして、こっちを見ってきます。  
良いですね。とても、可愛らしいです。

「速く行くのじゃ！和樹！」

「待て、お前ら！行くのは良いが関節を決めるのは止めてくれ！」

そっちには曲がりませんよ？

それより、人間の関節の稼働域を最近越えてきた気がします。

俺は人間でいたいんですよ？

分かっていますか？

明日の朝、何を作ろうか？

22話 俺と西村先生とFクラス 担任交代（後書き）

次はラブレター編と前からやってみたかった性転換編です。

幕間 俺と明とラブレタ ?

「何だ？コレ？」

靴箱を開けたら手紙が入っていた。

あれか、果たし状か？

「和樹、どうしたの？」

「和樹、どうしたのじゃ？」

「ん？ああ、手紙が入っていたんだ。読むか、秀」

何のためらいもなく手紙を秀に渡します。

だって、分からない物ですし、間違いかもしれませんから。

「読んで良いのかの？」

「良いんじゃないか。知らないけど」

「うむ。それでは読ませてもらうかの」

気になってたらしいです。

手紙を開いた途端に表情が変わりました。

どんな内容だったんでしょう？

ビリビリッ！

秀に手紙を破られました。

しかも丁寧に細かく千切ってくれます。

もう読めないね。

・・・・・・・・・・・・・・・・気になるじゃないか

優、どんな内容かは知らんが手紙を踏だみ抜たくものな紙が可哀そうだ。

「おーい。秀？どんな内容だったんだ？」

「和樹は知らなくて良いことじゃ!」  
何か怒鳴られました。

「教えてくれんならいいか。教室に行くぞ、秀に優」

「そうじゃな」

「そうね」

二人共怒っています。

何故でしょう？

教室に着いて暫くしたら先生が来た。

出席確認は大切な仕事です。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

「近藤」「はい」「斎藤」「はい」

平和だなあ。

「坂本」

「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

……………雄二。平和な日常って素晴らしいと思わないか？

しかし、良かったな。明

誰からかはしらんが

『殺せええっ!!』

ああ、今日も授業にならないのか。

『どついう事だ？吉井がそんな物を貰うなんて!』

『それなら俺たちだって貰ってもおかしくないはずだ!自分の席の  
近くをさがしてみる!』

『ダメだ!腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

「もつとよく探せ！」

「……出てきたっ！未開封のパンだ！」

「お前は何を探しているんだ！」

カオスだ

カオス過ぎる。

「お前らっ！静かにしろ！」

おお、流石は先生。この状態のFクラスを鎮めるとは

「それでは出席確認を続けるぞ」

あ、続けるんだ。

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」

「東野」「硫酸を明の目玉に流し込もう」

「戸沢」「いや、それより塩酸を吉井の皮膚にかけよう」

乗ってみました。

「皆落ち着くんだ！何故皆僕を殺す気で話を続けてるの！？」

「吉井、静かにしろ！」

「先生、注意する相手が違います。僕はこのままじゃ私刑に遭います！」

「新田」「火あぶりはどうだ？」

「布田」「ガソリンが勿体ない」

「酷！僕にはガソリン程の価値もないの！」

「根岸」「ノーロープバンジーにしよう。これなら、落とすだけだ」

「それだあっ！！」

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

出席簿を閉じて、何事もなかったように教室を後にしようとする先生  
何と堂々としているんだろう。

「待つて先生！行かないで可愛い生徒を見殺しにしないで！」  
必死に止めようとする明。

まあ、俺が発端だが、ここまで乗るとは思わなかったからな。  
流石はFクラスだ。

「吉井、間違えるな」  
ん？何か間違えたか？

「お前は不細工だ」  
先生。それは教師としてどうですか？

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」  
ほら、明泣きそうじゃねえか。

面白そうだけど、秀を愛でる方が楽しいから放っておこう。

「秀、こっちおいで」  
手招きで秀を呼びます。

「何じゃ和樹？何か用でもあるのかのう」

「ここで馬鹿騒ぎを見てようぜ」

「そうじゃの。それでは失礼するぞい」

そう言いつつ俺の膝の上に乗ってくる秀。

高さ的には丁度秀の旋毛が見えるという本当に丁度いい大きさ。  
秀の腰に手を回して軽く抱きしめます。

「おお、明の肩から聞こえてはいけない音がするぞ」

「島田も速く自らの気持ちを伝えるべきじゃと思うのじゃが」  
溜息を吐かれました。

「それが出来ないから困ってるんだろうに」  
「それはそうじゃが、む？次は姫路じゃのう」  
何と言うか

「姫路もすっかりFクラスだな。こういうのを朱に交われれば紅くなるっていつのか？」

「確かに大分明るくなったのう」  
俺はそういうことが言いたい訳じゃないぞ。

「皆ちよつと落ち着け」

おや？雄二何をするつもりだ？

アイツが助ける訳ないし

「いま問題なのは明久の手紙を読むことじゃない」  
なら、何だ？

「どうグロテスクに明久を殺すかだ」

うん。もう友達じゃないよね

「前提条件が間違ってたんだよ畜生！」

荷物を引つ掴み脱兎のごとく逃げる明。

どうせ屋上に行くんだらうな。

下見でもする気で

さて、逃げられるかな？

敵はFクラスと化したクラスメイト

嫉妬の鬼

『逃がすなあ！追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！吉井を殺せえ！』

『サーチ&デス』

「そこはせめてデストロイで！」

本当に素晴らしいクラスメイトだ。

結局、教室に残ったのは雄二と姫路、俺と秀の4人だけで他のメンバ―は明を狩りに出て行った。

暇なので秀の耳を噛んで遊ぼう。

「か、和樹、そ、そこはダメ」  
変な声上げるなよ秀

「お前は何してんだよ。和樹」

雄二に呆れられた。

「見て分かんか？」

「分からんから聞いているんだ」

「そうか、ただ、秀を愛でてるだけなんだが」

秀の方を見ると秀の目が潤んでいる。

ヤベエ。普通に可愛い

「そうだ。雄二どうせ屋上いくんだろ？一緒に行つていいか？」

「ん？構わんぞ」

「良かった。ホレ、秀。屋上に行くぞ」

声をかけるが反応がない

寂しかったりします。

「す、少し待つのじゃ。今落ち着くから」

小声で言われました。

「しゃーない」

そのままお姫様抱っこで運びます。

「行くか。雄二、姫路」

声をかけると雄二が複雑そうな顔で、姫路が顔を真っ赤にしてこちらを見ている。

「どうした?」

「いやいい。じゃ、行くか」

「おうよ」

「は、はい」

姫路、小声で『私も吉井君に……』ってのは聞かなかった事にしてやる。

さて、所変わって屋上です。

秀が落ち着いたので降ろしたら寂しそうな顔をされました。

お、明。来たな。

トイレにでも行けば誰にも邪魔されずに読めるのにな。

「雄二に姫路さん、それに和樹に秀吉まで……!」

「雄二に和樹、どうして僕の邪魔をするのさ!二人には彼女がいるんだから関係ないはずだよ!」

明、現実の厳しさを教えてやる。

「そうだな、確かに俺たちにはお前を邪魔するメリットが欠片もない」

これは、俺だ。

「だったら、どうして?」

当然の疑問だな、明。

「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺たちはただ……」  
雄二が答える。

それに合わせるように俺も口を開く。

『お前の幸せがムカつくんだよ!』

「アンタたちは最低の友達だ!」

これだけやられてまだ、友人と呼ぶのか明。  
その心意気には素直に感心しよう。

「さて明久。『手紙を渡せ』なんて野暮なことは言わねえ。本気で  
かかってこい」  
最終決戦とこだな。

「和樹。手を出すなよ」

「当然だろ。面白い物をもっと面白くして特等席でみるのが一番面  
白いんだからな」

「姫路。上着を持っていてくれるか?」

やっぱり、雄二の身体は良い感じに鍛えられてるな。

さあ、どうする明?

戦力差は歴然だぞ

あれ?何でお前も上着渡すの?

「おーい、明。上着のポケットの中の手紙処分して良いんだな?」

「そ、そんな反則だよ!」

「知るか!秀へあげる」

取りだしたのはピンクの可愛らしい便箋  
それを見て姫路の顔が強張る。

「やれ!秀吉、そいつを処分しろ」

「それでは、やるぞ、明久よ」

おお、するんだ。

「ちよつと待つて秀吉はそんな酷いことしないよね？だから、それを大人しく」

『細切れにするんだ』

「違うっ！そうじゃない！雄二に和樹、卑怯だぞ！そうやって僕のセリフみたいにつなぐのは反則だ！」

「うむ。分かったのじゃ」

「いや、『分かったのじゃ』じゃなくて、何で半分破つて姫路さんに渡すの！しかも、姫路さん！そんな丁寧に破いたら、もう読めないよね！返して、僕の青春と努力を！返してよ」  
本当に破るとは

「済まぬ。明久。どうもムシャクシャしておつての。八つ当たりをしてしまったのじゃ」

そついいつつ、破いた分を持ってくる。

「まさか本当に秀が破くとは………すまん。明」

『せめてものわびだ』

俺と雄二で破いた手紙を明の前に持つていく。

「ありがとう。和樹に雄二。この紙クズをつなぎ合わせ」

『未練を絶つてやる』

俺がオイルで浸し、雄二がライターで火を付ける。

以外に豪快に燃えてビクツたのは内緒だ。

「明久。お前は知らないだろうが」

「何、雄二。それより早く水を持ってきてよ！」

「俺はお前の幸せがム力つくんだよ」

「知ってるよバカ！ちくしょー！」

さて、手紙も灰になっただし、暇も潰れたから

「俺は帰るぜ。暇も潰れたし、また、騒ぎ起こしてくれよ」

「そんなしょっちゅう起きる筈ないだろうが」

呆れられました。

教室に秀と帰る途中に、Fクラスが血走った目で獲物明を探していた。

……明日の太陽を拝めることを祈ってしよう。

追伸 手紙の送り主はAクラスの子だった。

「手紙見てくれた？」と聞いてきたから、「見てない」と答えたら、告白された。

その瞬間にその子が消えたけど何があったんだろう？

そろそろ薬が出来る筈なので楽しみます。

幕間 俺と秀が性転換 薬が完成しました。

「出来た！出来たぞ！ついに完成したぞ！やべえ、超嬉しい。テンション上がる」

皆さん。引かないで下さい。

別に怪しい物ではありませんから

.....本当だよ？

「それでは、早速実験台として、俺で試そう」

試験管の中に入っている何色？赤？黄色？な薬を飲み干す。

「不味ッ！こ、これはキツイ。もっと改良があるか？それとも、何かに混ぜるか？混ぜた方が安心か。うん。決めた」

早速、朝飯の中にブチ込もうとしたら、行き成り身体に痛みが走った。

「そうか。痛みがあるのか。未だ、使えんな」

脂汗流しながら言っても仕方ないですね。

余りの痛さに思わずしゃがみこみ、そのまま、意識を失った。

結論 未だ、完成には程遠い

目が覚めたら自分の部屋の天井が見えた。

おかしい、気絶した時は台所にいた筈だが、何故だ？

「おお、起きたのか和樹！心配したぞ！」  
「おや？秀の声が聞こえるぞ？」  
「ということは、運んでくれたのか。」  
「これは、礼をせねば」

「ああ、お早う？秀、お前が運んでくれたのか？」  
「う、うむ。姉上と一緒に運んだのじゃが、和樹何か身体におかしな所はないかのう？」  
「何故か目線を合わせてくれません。」  
「しかし、おかしな所ねえ」  
「身体を見下ろすと、見覚えのない胸の膨らみがあった。」

・・・・・・・・・・・・・・・・おおう

ビビった。心臓止まるくらいビビった。

取り合えず、薬は成功したようです。

「女になってるな。俺、どう見ても」

「その通りじゃ、ほれ、鏡で確認せい」  
鏡を渡してくれます。

大人しく見てみるとそこには

無駄に髪が長くなって、全体的に華奢な感じになった俺？が居た。  
誰だよ、こいつ本当に

「それより優は？」

「秀と優が運んでくれたなら優もいる筈だがここにはいない。  
何故だ？」

「うむ。姉上はお粥を作ってくると言っていて出たぞ」

答えてくれて有難う秀

「お粥って風邪じゃないぞ俺は」

取りあえず今日は土曜日で良かった。

解除薬の試作品飲んで早く戻ろう。

「それはそうなのじゃが、姉上が『女になっても和樹は和樹よ、倒れたらお粥でしょ』と言ってるのう」

秀、別に声変えんでも良いと思うぞ。

「何か違うと思うが」

取りあえずは

「うん、月曜になったらこの姿で学校に行つて皆を驚かそう。今は薬飲んで直すけどな」

「何とその格好で行くのか？しかも、治るのか？」

そんな驚かんでも、

「直すぞ、普通に」

立ちあがってみた。

ふらつく感じもないから大丈夫だろう。

秀も立ち上がりこちらを見ている。

よし、身長も変わって無い。

制服が入る。

見上げてくる小さい子って頭撫でたくなりませんか？

P・S 優の作ったお粥は普通に旨かった。料理出来るとは思わなかった。秀も驚いていたから隠していたんだろう。

日曜日に着せ替え人形にされた。

・・・・・・・・・・・・・・・・泣きそうです。

んで、月曜日です。

普通に学校に行く途中メツチャ見られた。

何で？

あれか、秀にも薬飲ませたからか。

そうだな、本当の意味で美少女が二人いるもんな。

起きた後に薬の味が出ないように頑張ったのだ。

おお、やはり校門前に西村先生がいる。

『先生、おはようございます（じゃ）』

「ああ、お早う？」

何故疑問形なのですか

「あー先生の見間違いでなければ、東野と木下弟が女になっているように見えるんだが」

「先生。見間違いじゃありません。薬飲んだらこうなりました。やれば出来る物ですね」

原因は俺ですからね。

「お前は何かしたかったんだ？」

あ、頭抱えた。

「楽しそうだからしました。後悔も反省もありません」

言った瞬間拳が飛んで来た。  
慌てて屈んでかわす。

「な、何するんですか？先生？」

「済まん。馬鹿に制裁を加えようとしただけだ」  
え？馬鹿なん俺？

「はあ。早く教室に行け」

溜息を吐かれた。

「分かりました。それじゃ先生また」

「またの、先生」

「それでは、先生さようなら」

#### Aクラス教室前

「じゃあな優」

「さらばじゃ姉上」

「じゃあね二人共、昼にね。後、ちゃんと迎えにきなさいよ」

「分かってるって」

優の頭を撫でます。

優の顔が赤くなった。

#### Fクラス教室前

「さて、行くか」

「そうじゃな」

二人して教室に入りました。

お、雄二だ。何時も早いな

「ん？和樹に秀吉か？」

不思議そうに言うなよ

「そうだ。見えんか？」

「見えん。女に見える」

おお、素晴らしい。

「そうか、見えるか。実験は完璧に成功のようだ」

「実験？何のことだ？」

「性転換薬だ。作ってみたら成功した」

メツチャ呆れられた。

しかも、溜息吐かれた。

軽く凹む

「そんなことより雄二、今日はアップルパイをあげよう」

そっぴいっつ鞆から取り出し、雄二に渡そうとしたら雄二が居なかった。

何処行つた？

秀に袖を引つ張られて振り向くと異端審問会が開催されていた。

何故だ？

『これより異端審問会を始める』

『罪人坂本雄二は東野 女 に菓子を貰うという裏切り行為にでた。異論はないか？』

『ありません』

裏切りなのか？

「ま、待て、何で俺が男に貰って縛られなくちゃいけないんだ！？  
和樹は男だぞ！」

うん。正論です。雄二

通じるとは思えませんが

しかし、東野 女 ってなんだ？

『判決は死刑だ』

『羨ましいんじゃない！死ねえええ！』

「あー。落ち着け皆」

『何故だ？まさか本当に坂本に好意を持っているのか？』

おお、殺気が膨れ上がった。

流石はバカFクラスの集まりだ。

「違う。今日はお前らの分も作ってきたんだ。要らんならいいんだが、どうする？」

笑顔で聞いたら何人か倒れやがった！

俺、男よ！男！

あれ？身体は女なんだから別にいいのか？

『『『欲しい！どうか、下さい！』』』

不快な大合唱だな。

「やるから一人ずつ取りに来い」

『『『よっしゃ　　！』』』

そんな嬉しいか？

「秀、配るの手伝ってくれ。予想より人数が多い」

「うむ。わかったのじゃ」

秀に半分渡して片していく。

15分後

一応全員に渡った байна。

・・・・・・・・・・・・・・・・疲れたあ

「お早う坂本、東野、木下？」

今度は島田か

「な、何で！東野と木下が女になってるのよ！はっ！まさかアンタ達もアキの事を・・・・・・・・」

「違う。明に興味はない。これは単に薬を飲んだらこうなったただだ」

「本当でしょうね」

そんなに信用ないかねえ。

「大丈夫だ島田。和樹は明久に興味はないし、秀吉がいる」  
ナイスタイミングです。雄二

「そう、ならいいわ」

安心したらしい

「島田！。アツプルパイあげる」

靴からとりだし渡します。

「あ、有難う。東野」

「暇潰しで作ったただだから気にせんでいい」  
これは本当

「東野君と木下君が女の子に！まさか吉井君を・・・・・・・・・・・・・・・・  
不潔です！」  
面倒くせえ

こいつらの脳味噌の中身は明のことしかないのか？

姫路にアップルパイを渡して

「島田パス。説明しといてくれ。俺は寝る」

そのままゴロンと横になり、寝る体制を作る。

「か、和樹！何で女になってるのさ！秀吉も！分かったよ秀吉ついに自分の本当の姿に気付いたんだね！」

何だこの異常な連鎖は？

明の無駄に爽やかな笑顔がキモい

こら！雄二、笑ってるんじゃない

「明。説明するのが面倒だからせんぞ。アップルパイやるから黙れ」  
靴から取り出し声のする方に投げる。

「僕のカロリー！有難う和樹！やっぱり和樹は優しいね」  
笑顔で近付くな、悪い予感しかせん。

ああ。ほら姫路と島田に捕まったじゃねえか、どうしてくれる？

「やっぱり東野君は敵です。私達の最大の敵です！」

死ね明！

お前の所為だぞ

「そつよ！やっぱり東野がウチらの最大の敵よ！」

「和樹！まさか本当に明久に好意を持っておるのではあるまいな？」  
秀も来たよ。

身体の色々な部分が悲鳴をあげそうです。

「落ち着けお前ら、ここで和樹を殺しても何の意味もない。それよ

り、問題は」

雄二助けてくれて有難う。

俺にはこれ以上問題が見つからないよ？

「明久をどう私刑シリンチにするか、だ」

ああ、明にぶつけようと

「え、何で僕なの雄二？それより、姫路さん？教卓は鈍器じゃないからね？美波？僕の足はそんなに曲がらないよ？足が碎けるように痛い痛い痛い！」

合唱

「秀」

「何じゃ和樹」

恐っ！怒ってるよ

「こつちおいで」

「何故じゃ？」

聞きながらもちゃんと来てくれるのがいいですね。

無言で抱きしめて押し倒します。

「／／／な、何をするのじゃ！？和樹！離さぬか！／／／」  
離しませんよ

「秀。眠いんだ。だから枕になってくれないか？」  
大きさに丁度いいんです。

『くそ、両方女では手が出せん』

『いや、東野が元に戻っても似合ひすぎていて手が出せんぞ』

『確かにそうだが』

『皆、見守ろうではないか』

俺そんな風に思われてたの？  
しかも、女同士だと手出さないんだ。

秀が大人しくなったのでこのまま寝ます。  
秀がえらい嬉しそうにしていたのが少し気になる。

「……………きるのじゃ！起きるのじゃ！」  
秀の顔がえらいアップで映っているなあ。

……………ああ、そうか。抱き枕にしたんだっけ。

「お早う。秀」

「お早うじゃ和樹。早く姉上の所に行くのじゃ」  
秀の身体を離して立ち上がります。

秀、そんな残念そうな顔するな。

#### Aクラス前

「さて、行くか」

「うむ」

Aクラスの扉を開けると翔子が立っていた。

「……………和樹？それに優子の弟？でも、女に見える。何故？」

首を傾げて聞いてくる翔子

「ああ。薬を作って飲んだらこうなったんだ。解除薬も作ってるが面白そうなんでこのまま来た」

「……………そう。和樹はそんな人」

俺ってどんな認識何でしょう？

「翔子。アップルパイをあげよう」

また、鞆から取り出して渡す。

「……………有難う。優子を呼んでくる」

受け取って、そのまま優を呼びに行ってくれる。  
なんて出来た子だろう。

「あれ？和樹君に優子の弟君？でも、女に見えるよ？何でかな」  
次は愛子か

「実験で作った薬飲んだらこうなったんだ。面白そうだから、このまま来た」

「あはは。やっぱり和樹君は面白いね」

だから、どんな認識よ？

愛子にもアップルパイを渡して優を待ちます。

弁当箱出して暫く待っていたら優がきました。

「和樹に秀吉、待たせたわね」

「そんな待ってないから安心しろ」

「そうじゃ、姉上」

二人共笑顔で答えます。

Aクラスの何人かが倒れた。

秀の笑顔を見たからだと思いたいですね

「じゃあ、早いとこ食ってしまっか」

「そうじゃな」

「そうね」

箸を構えて

『頂きます』

食事中

『ご馳走様でした』  
完食ですね。

「はい。お粗末さまでした」

二人にアップルパイを渡して持ってきたお茶を飲みつつ眺めます。

平和ですね。

お茶が美味しいです。

「食い終わったか？」

「うん。和樹有難うね」

お礼を言われました。

「和樹。今度は何を作るのじゃ？」  
さて、何を作ろうかな？

「まだ、決めてないな。リクエストがあるなら、それを作るぞ」  
聞いたら悩み始めました。

暫く待ちましょう。

周りを見るとAクラスの何人かがこちらを観てますね。目があったら真つ赤な顔して目を逸らします。

変な奴等だ。

阿呆なことしてたら決まったらしく此方に顔を向けています。向き直つて聞いてみましょう。

「何に決まっただんだ？」

「ショートケーキよ」

以外に面倒臭い物がきました。

「分かった。又、今度作ることにしよう」  
言った瞬間、秀と優が歓声をあげました。

やっぱりケーキ好きなんですね。

作りがいがあります。

「そろそろ昼も終わるから帰るわ」

「さよならじゃ、姉上」

「ええ。また、後でね」

教室を後にして、Fクラスに帰る途中告白された。

しかも、男から

秀も告白された。

割合的には秀7 俺3だった。多いのか少ないのか分からん。

話を聞くと須川が主犯らしい、須川君をリンチにしようと思えます。

次の日、男に戻って学校に行っても男に告白されました。  
何かに目覚めたんでしょうか？

不安です。

**幕間 俺と秀が性転換 薬が完成しました。(後書き)**

無駄に長い割に内容薄いですね。

もっと、告白の描写書きたかったんですけど、力量不足で断念しました。

次から文化祭編です。

23話 清涼祭開始 Fクラスと俺と文化祭 出し物決め

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておこます。

土屋康太の答え

『成人向けの写真館』

教師のコメント

それは、商売になりませんね。

東野和樹の答え

『幼なじみにやられても大丈夫な間接』

教師のコメント

君の幼馴染は木下さんと木下君の筈ですが、そんな人なんですか？

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

「で、あいつらは出し物を決めもせずに遊びに行った、と」

「そうじゃな和樹」

残っている面子は姫路に島田、秀に俺だ。

この面子で決めても仕方がない。

他の面子は校庭で野球をしている。

「仕方ないな。まあ、どうせ喫茶店かなんかだろう。皆が戻ってきたら教えてくれ」

「分かったわ」

「分かりました」

「分かったのじゃ」

自分の席に戻って本を読み始めます。

「貴様等、他のメンバーは何処に行った？」

「おや？西村先生ではないですか。」

「え、あ。はい、皆校庭で野球をしてくると言ってお出て行きました」  
姫路は律義ですね。

「そうか。分かった。全員連れてくるから待っている」  
怒ってますねえ

冥福を祈るとしようかねえ

さて、鉄人の怒号と明の悲鳴が聞こえたがクラスメイト全員が集合

したな。  
何にするんだろうな出し物

「和樹、案が出たぞ」  
む、もう出たのか？

「ああ。有難う。秀。で、何が出たんだ？」  
そう言いつつ、黒板を見ます。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

・・・・・・・・・・・・・・・・何がしたいんだろう？

ああ、前にいるのは明と島田か、どうせ明が書いたんだろうなあ。  
補習の時間が増やされても知らんぞ、こいつ等。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

おや、西村教諭？

「今の所、候補は黒板に書いてある三つです」  
さて、反応はどうでしょう？

「・・・・・・・・・・・・・・・・補習の時間を倍にした方が良いかもしれんな」  
ですよね！

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が書いたんです！』

「僕らがバカなわけじゃありません！」

流石はFクラス、明を生贄スケープゴートにして生き残ろうとしている。

「馬鹿者！みつともない言い訳をするな」

おお、流石は教師だ。

Fクラスの考えが気に入らない何て

「先生は、馬鹿な吉井を選んだこと自体が頭が悪い行動だと言ってるんだ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・俺の感動を返せ

何て言うか

「西村先生もFクラスに染まってきたな」

「うむ。特に明久関連だとそうなるのう」

「まあ、明は行動が行動だからなあ」

「自業自得じゃな」

二人して笑いあいます。

話してたら五月蠅くなった。

どうやら稼ぎでクラスの設備を向上させようということらしい。

しかし、雄二がいないと何の纏まりもないな。

いい加減に鬱陶しいし

立ち上がり黒板の方に歩み寄り刀を抜きます。

それだけで静かになりました。

良いですね。素直な人たちが多いようです。

「さて、お前ら！これ以上話していても決まらないだろう？だから、今出ている三つの中から決める。何が選ばれても文句は受け付けん。

島田、数えてくれ」

「え、あ。うん。有難う、東野。それじゃ、写真館に賛成の人

はい、次はウェディング喫茶  
― 最後、中華喫茶!」

クラスが静かだとあつという間に決まるな。

Fクラスの出し物は中華喫茶に決まった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

須川、料理出来たのか

「・・・・・・（スクツ）」

おや、康太？

「康太、料理出来るのか？」

「・・・・・・紳士の嗜み」

そんな嗜み聞いたことがない。

どうせコイツの事だからチャイナ服見たさに忍び込んで覚えたんだ  
ろうな。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川  
と土屋の所、ホール班はアキの所に集まって！」

ふむ。どっちに行こうか。

「それじゃ、私は厨房班に  
」

・・・・・・誰か止める

死傷者続出の中華喫茶なんて冗談じゃない!

「ダメだ姫路さん!キミはホール班じゃないと!」

有難う明

『明、良くやった』

『明久、グツジョブじゃ』

『・・・・・・・・・・（コクコク）』

雄二、寝てても夢に出るのか？

それとも起きているのか？

「え？吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

必殺仕事人が何を仰いますか。

口が裂けても言えませんがね

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店としても利益が痛あつ！み、美波！僕の背中はサンドバックじゃないよ！？」

「か、可愛いだなんて・・・・・・・・。吉井君がそういうなら。ホールでも頑張りますねっ！」

ホールだけで勘弁して下さい。

「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

「うん。適任だと思う」

島田って料理上手いんだろうか？

「和樹はどっちにするのじゃ？」

「俺か？俺は厨房だな。接客ってガラじゃねえし」

本音です。

「それなら、ワシも厨房にしようかの」

別に合わせなくていいぞ？

「秀は接客上手そうだから、ホールで頑張ってくれ」

「そうだよ秀吉に和樹！何を馬鹿なことを言っているのさ。秀吉は可愛いし、和樹も前みたいに女になれば綺麗なんだからホールに決まってみぎゃああ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大

「事な骨が！」

「何でこう墓穴を掘るかな、コイツは？」

「明久はああいうとるが、どうするのじゃ、和樹？  
さて、どうしようか。」

「まあ、女になるのは別に大したことじゃないから少しくらいなら  
接客してもいいぞ」

「ならば、家に帰って特訓じゃな」

「あれ？地雷踏んだ？」

「お、お手柔らかに頼む」

「……………ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……………それがいいと、思います……………」

「こんな幕開けで良いんだろうか？」

「激しく不安だ。」

23話 清涼祭開始 Fクラスと俺と文化祭 出し物決め(後書き)

やっと投稿出来ました。

明日から大学が始まるのでまた、かなり遅れると思います。

24話 俺と文化祭と学園長 礼儀作法って大切ですよ

バカテスト 第二問

以下の問いに答えなさい

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太のコメント

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

東野和樹の答え

『イングランド スコットランド 北アイルランド』

教師のコメント

それはイギリスを構成する三国です。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう。

さて、放課後になった。

「アキ、ちょっといい？」

明が島田に呼び止められた。

「ん？何の用？」

しかし、明に何のようだろう？

面白そうなので聞いてみましょう。

「用って言うか、相談なんだけど」

真面目な話のようだ

『相談？僕で良いなら聞かせて貰けど』

「うん。ありがと。内容は坂本をなんとか学園祭に引っ張りだせな  
いかって話なんだけど」

そつえば、雄二は今回やる気が無いな。

「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょ？」

驚きの新事実発覚だ！

確かにそれっぽい言動があったが

「もう僕お婿に行けないっ！」

必死になって否定してるけど、怪しいねえ。

「明、お前そうだったのか」

「嘘だからね、和樹！だから微妙に距離を取らないで！それに僕は  
雄二何かより、秀吉や和樹のほうがいいよ！」  
いや、それもどうよ？

秀だけじゃなく俺もなのか？  
まあ、渡しませんかね

「明」

「・・・・・・・・・・あ、明久？」

おや、秀？

「き、気持ちは嬉しいのじゃが、ワシには和樹が居るから、その、ホラ。だから、ご免じゃ」

「気持ちは嬉しいが、俺はお前を友達として見ていたいんだ。だから、ご免」

「ひ、秀吉に和樹。そんなきっぱりと振らないでも良いじゃないか」  
さて、明がダメージを受けてくれたばってる間に話を聞こうか

「ところでお前らはさっきから何の話をしているんだ？随分と深刻そうだが」

「深刻ってほどじゃないけど、喫茶店の経営とクラスの話で

「

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ・・・・・・・・・・」  
ふむ。何の話だ？

明の復活が早いですね。

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われたけど、事情が事情だし・・・・・・・・・・。けど、一応秘密の話だからね？」

「うん。分かった」

さて、何の話かな

「実は瑞希なんだけど」

姫路がどうしたんだ

「あの子、転校するかもしれないの」  
「ほえ？」

素っ頓狂な声をあげる明  
まあ、寝耳に水の話だが

「待て、島田。明が処理落ちしてるぞ」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから」

「明久！目を覚ますのじゃ！」

秀が明の肩を持ち揺さぶっている。

「秀吉………、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれる  
かい………？」

コイツの脳内で何が起こったんだ？

「………何か、心配して損したわ」

「………どういう処理が起こったんだ？」

「ある意味、稀な才能かもしれないのう」

三者三様の答え

心配したのは島田だけだ。

「で、転校の話にどう繋がるんだ？」

明を置いていこう。そのうち、戻ってくるだろう。

「瑞希の両親が『Fクラスの設備』に問題があるから転校させるつもりみたいよ」

確かにFクラスの設備は酷いな。

姫路は身体も弱いし

「で、喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も対抗してるみたいだけど、イマイチみたいなの」

「……………アキはその……………瑞希が転校したりとか、嫌だよね……………」

「もちろん嫌に決まってる！姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、和樹であつても！」

名前をあげてくれたことは素直に嬉しいが、何故雄二の名前があがらないんだ？

ようするに

「雄二を炊きつけばいいんだろ」

「そうだけど、和樹に出来るの？」

「ああ、アイツは今頃翔子から逃げているはずだからな。明、雄二に電話してみてくれ」

「で、どうだった？」

「『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか聞こえたけど」

島田、明が『使えない』のは知っているだろ？

だから、そんな目で見てやるな。

「さて、何とかして雄二を捕まえないとな」

「大丈夫だよ。僕に作戦がある」

任せてみましょう。

「やあ雄二。奇遇だね」

なあ、雄二。俺はお前の考えに付いていけないんだが、てか、何で明は分かるんだ？

現在、俺たちは女子更衣室で雄二を見つけたところだ。本当にこんなところに隠れているとはな

「何で和樹も一緒に居るんだ？」

「俺は明が『雄二の居る場所に行くよ』って言ったから付いてきただけなんだが……」

ガチャ

後ろを振り向くと優が立っていた。しかも、体操着姿で

「えーっと……あれ？Fクラスの問題児コンビに和樹？ここ女子更衣室だよな？」  
そりゃ驚くわな。

お前ら言い訳になってないぞ。

「先生！覗きです！変態です！」

「逃げるぞ明久！」

「了解！」

す、素早い

「和樹はどうしてこんな所に居たの？」

腕を決めながら聞くことじゃねえよな

「優、はつきり言おう」

「何よ。言い訳なら聞かないわよ」

ここで言い訳をしたら、俺の腕が再起不能になります。

「体操着姿似合ってるな」

活動的な感じが良いですね。

「あ、有難う和樹／＼／＼」

腕を離してくれたので、優の方に顔を向けます。

さて、雄二と明は逃げる事が出来たかな？

真つ赤な顔の優と暫く話して別れました。  
始終笑顔だったので、良かったです。

さて、Fクラスに帰ってきたら我らが代表の雄二君が明に何故姫路が転校するのかを話していました。

「ん？ああ、お帰りと樹。今まで何してたんだ？」

「優と話してたんだ。また、どっかに連れていくことになったからな。秀も一緒に行こうか？」

頼むからそんな笑顔で見ないでくれ

何で笑顔なのに恐怖を感じるんだらう？

「で、どこまで、話は進んだんだ？」

「えーつと。確か学園長に直訴しに行くとか雄二が言った所で和樹が来たんだよね？」

おお、良いタイミングだな。

「さて、それじゃ。学園長室に乗り込むか」

雄二、喧嘩売りに行くんじゃないかな？

「じゃあ、俺も行くか。そうだ、秀。西村先生と翔子に雄二は帰ったと伝えてくれ」

「え？僕の方も伝えてよ！お願い秀吉！」

秀に縋り付くな、明。

無造作に足を振り上げて明の頭を踏み抜く

「のわああああ！頭が潰れるように痛い！！いいいいいい！！」  
「？」

「明久、早くしろ。時間がないんだから」  
「やっておいてなんだが、こいつ等は本当に友達なのだろうか？」

明を引きずって行くことにしました。

何故か島田の顔が青かった。

さて、学園長室前です。

『……………賞品の……………として隠し……………』  
『……………こそ……………勝手に……………如月ハイランド  
に……………』

何かお話し中のようですねえ。

「雄二、暫く待つか、出直さないか？話し中みたいだし」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

いい性格してるよ、全く。

「失礼しまーす」

誰かこいつ等に礼儀作法を教えてやってくれ

ノックをしたなら、声かかるまで待てよ。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

あなたも十分失礼です。学園長

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね……………  
……………まさか、貴女の差し金ですか？」

おや？先程の声は教頭の声でしたか

「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコイ手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」  
「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」  
何かキナ臭い話しですね。

「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……………そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

竹原先生、部屋の隅に何を仕込んだんですか？  
目の動きで丸わかりです。

何も言いませんが

「で、アンタたちの用はなんだい？」

さて、まずは名前から

「私は二年F組の東野和樹です。こちらが代表の」

「坂本雄二です。最後にコイツが」

『二年生を代表するバカです』

「ほう……………そうかい。アンタ達がFクラスの坂本と東野と吉井かい」

凄いな明。名前を呼ばなくても連想出来るなんて、しかし、学園長の頭の中も明にバカで決まっているんですね。

「話はなんだい？手短に頼むよ」

何でこんなに偉そうなのでしょう？

「有難うございます」

雄二つて、敬語が使えたんですね。

「礼なんて言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「分かりました」

雄二は意外に気が長いようです。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳味噌のように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

腸煮えくりかえっているらしいです。

良かった。いつもの雄二だ。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」  
「そうとうキれているらしい。」

それと雄二、学園長は確かに容姿がアレですが、一応人間の筈ですよ？

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」  
「知ってますか雄二？そういうのを慇懃無礼と言うのですよ。」

「あの、学園長……？」

明、心配するだけ無駄です。

「……ふむ、丁度いいタイミングさね……」

何か小声で言いましたね。聞こえませんでした。

「よしよし。お前達の言いたいことは良く分かった」  
「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」  
多分、糠喜びだと思えます。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」  
「待て、明。それより薪の代わりに燃やしてしまおう。乾いているからよく燃えるはずだ」

「……お前ら、もう少し態度には気を遣え」  
は、つい本音が漏れてしまった。

しかし、雄二。あなたには言われたくありませんよ。

「まったく、どうか理由をお聞かせ願えますか？」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「首と胴体が泣き別れしたくなければ早く教えてください。ようか・  
・いえ、ババア」

「最後のクソガキ令、思いつきり妖怪扱いしたね！……お前達は本当に聞きたいと思っっているのかい？」  
え？当たり前じゃないですか。

何もおかしなこと言ってますしね。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学校の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」  
本当に薪にしてやるのか？

「それは困ります！そうになると、僕らはともかく身体の弱い子が倒れて」

「と、いつもなら言っているんだけどね」

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みを聞くなら、相談に乗ってや

ろっじゃないか」

流石にタダでやるほど安くはないか

雄二が考え込んだので代わりに聞きます。

「条件はなんですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知っているかい？」

「ええ、まあ。一応」

「じゃ、その優勝賞品は知っているかい？」

えーっと、

「確か、賞状とトロフィーと『白銀の腕輪』、副賞が『如月ハイランドのプレオーブンプレミアムペアチケット』の二つでしたね？」  
余り興味がなかったから、ちゃんと覚えてないんです。

雄二？何故ペアチケットと聞いた瞬間震えるんですか？

「で、どっちを回収して欲しいんですか？普通に考えるならペアチケットですか？」

「頭の回転が速い奴は好きだね。この副賞のペアチケットには良からぬ噂があつてね。できれば回収したいのさ」  
しかし、会話するのも面倒になってきたな。

雄二が復活したし、交代するか。

「雄二に明、交代だ。ババアと会話するのも飽きた」

「本当に失礼なガキさね」

明が質問してババアが答えるという形をとって暫く会話が続いたまに雄二が壊れたりしたが、概ね問題なく進んだ。

「ああ、そうそう。最初にいつておくが東野は召喚大会に出場出来ないからね」

「何ですか！ババア」

当然です。

「明久。当たり前だろ、良く考えてみる。教師より平気で点数を取れる奴が出たら、勝負にならないだろう。ある程度は戦力の均一化を図らないと見世物にならないからね」

雄二君の説明です。

「えーと、ようは和樹は出れないってことだね」

そうですが、それでは趙訳になりますよ。

「さて、アンタ達。ここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

学園長、何を言ってるんですか

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

雄二の不敵な笑み。

嬉しそうですね。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」  
おや、明もヤル気ですね。

さて、

「明も雄二もヤル気になったからな、優勝は確実だろう。俺は店で頑張るか」

店の売り上げで設備を向上しなければなりませんからね。

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「おしよ(任せる)」「」「」「」  
「文月学園の誇る最低コングが誕生しました。」

24話 俺と文化祭と学園長 礼儀作法って大切ですよ（後書き）

学園長の話しを書くか、どうか悩みました。

## 25話 雄二と明と三途の川 渡し守に感謝

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと思っています。

東野和樹の答え

『私服もしくは制服で統一し上にエプロンを着て、ロゴ入りのリボンやネクタイ等をつける』

教師のコメント

皆で同じものを着ることによって連帯感も生まれますし、簡単に揃えられるものなので良い考えだと思います。

「雄二がやる気になって、良かったな」

「坂本の統率力は凄いわね」

「いつもは、タダのバカなのにね」

明、雄二もお前には言われたくないと思うぞ

今、いるのはFクラスです。

見た目は非常にサツパリとしていて、いつもの小汚い教室から中華喫茶店へと姿を変えている。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

これがあの段ボールとはとても思えないですね。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なク

ロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

流石は演劇部です。

クロスを捲ると段ボールというのが痛いですね。

「しかし、これを見られたら店の評判はガタ落ちじゃのう」

「見たとしてもその人の胸の内にはしまってもらおうことを祈ろう」

「そうですね。わざわざアピールするような人はきませんよ、きくと」

本当にそうだといいいのですが

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」  
そんなに不安そうにしなくても大丈夫でしょう。

「……………飲茶も完璧」

おや、康太。

相変わらず気配が薄いですね。

「康太、厨房はもういけるか？」

「……………大丈夫。味見用」

木の盆に載った胡麻団子とティーセットを出してくれます。

「わぁ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では遠慮なく頂こうかの」

「うんじゃ、貰うぞ」

胡麻団子を手に取り、勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「康太、後でレシピ教えてくれ。普通に旨い」

大絶賛です。

「……………（ダクダクダク）」

笑顔で言ったら鼻血出して倒れました。

すっかり忘れていましたが、今は女になっているのです。

心境は複雑ですが、友達を殺す訳にはいきませんから止血します。

「ムツツリーニ。僕も貰うよ」

明、何故貴方は冷静に食べようとするのですか？

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても　んゴパっ」

あ、明が倒れた。

どうやら、姫路が作った胡麻団子らしい。

………食わなくて良かった。

明に感謝です。

………どんな味なんでしょう？

「あ、それはさっき姫路が作ったものじゃな  
やっぱりそうですか。」

「………！！（グイグイ！）」

康太、復活早いな。

「む、ムツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」  
必死ですね。

「うーっす。戻ってきたぞ」

おや、雄二。お帰りなさい。

「あ、雄二。お帰り」

「雄二。お帰り」

「ん？なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

何故、そんなに躊躇いもなく自分の命を犠牲にできるのですか？

「……………たいした男じゃ」

「雄二、迷わず成仏してくれ」

「雄二。キミは今、最高に輝いているよ」

「？お前らが何を言っているのかわからんが……………ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても　んゴパっ」

いやな既視感デジャブですね。

しかし、それだけ聞いたらタダの刺激物にしか聞こえませんか。飲茶の味では確実にないようです。

「あー、雄二。とつても美味しかったよね？」

明？雄二の目には今、何も映ってませんから伝わりませんよ？

「ふっ。何の問題も無い」

おお、男らしい。もう耐性が付いたのですか？

「あの川を渡ればいいんだろう？」

……………その川は渡つてはいけない川です。ぶつちやけると三途の川です！

「ゆ、雄二。その川はダメだ！渡ったら戻れなくなっちゃう！」

「起きろ雄二！お前にはまだやり残したことがあるだろう！」

島田と姫路に見えないように心臓マッサージを行いつつ、呼びかける。

帰ってこれるか？

「大丈夫だよ、ちょっと足が攣っただけみたいだから。おーい、ゆーじー、おきろー」

(どう和樹？雄二は帰ってこれそう？)

(わからん。このままじゃ五分五分だ。雄二の生命力に期待しよう)  
(くそ！神に祈るしかないのか！)  
アイコンタクトって本当に便利ですね。

「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まって

はっ！？」

蘇生完了です。

渡し守に感謝ですね。

尊い命が散らずにすみました。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

「そ、そうだぞ。雄二、お前は足が攣ったんだ」

慌ててフォローに回ります。

余計なこと言われたら困りますから

「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の

」

(……もう一つ食わせるぞ)

(……もう一回行ってみるか？)

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

雄二の危機回避能力に感謝です。

(……明久に和樹、いつか殺す)

(……上等だ。殺られる前に殺ってやる)

(……返り討ちにしてやるわ)

何で笑顔でこんな会話してんだろう？

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

流石にこんな言い訳は二度も効きませんか

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういう身体  
って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐ  
べあっ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」  
豪快な自爆ですね。

「……明、島田にその話はタブーと自分で言ったじゃない  
ですか、何故自分で被爆しているんですか？」

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

秀が話題を逸らしてくれます。

「ああ、ちよつと話し合いにな」

召喚大会の話し合いですね。

内容は知りませんが

「そうですか。それはお疲れ様でした」

姫路は少し人を疑うことを覚えるべきだと思います。

「いやいや、気にするな。それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……お茶と飲茶も大丈夫」

「任せろ」

姫路製品は入ってないと思います。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリーニ、和樹に任せろ。

俺と明久は召喚大会の一回戦を済ませてくるから」

地味に力を込めて叩かないで下さい。

痛いです

「あれ？アンタたちも召喚大会に出るの？」

確かに今まで興味も無かった人間が行き成り出ると言ったら、驚き

ますよね。

「え？あ、うん。色々あってね」  
バラす訳にはいきませんよね。

「もしかして、賞品が目的とか……？」  
不安にならなくていいですよ。

「うーん。一応そういうことになるかな」  
ま、学園長の使いつぱしりですけどね。

「……誰と行くつもり？」  
？ああ、如月ハイランドのペアチケットですね。

島田さんの目が怪しく光っています。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くことかと思っただけですか？」  
さて、なんと答えるんですか？明？

「明久は俺と行くつもりなんだ」  
何と、ここで雄二が答えますか  
衝撃の事実です。

「え？坂本とペアチケットで『幸せになり』に行くの……？」  
それはシヨックでしょう。

「俺は何度も断っているんだがな」  
え？

「ちょっと待て、明。本当なのか？」  
確認させてくれ

「本当だ。明久にも色々あるんだろう」

そんな仕方ないなって感じで言われても

「明、ついにそっちに行っただんな」  
冷めた目で見る

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持ったほうが……」

ほら、姫路も困ってるじゃないか。

「待つて、和樹に姫路さん。僕はそっち側には行ってないよ！それに和樹、微妙に距離を取らないで本当に傷付くから！」  
だつてなあ

「それが出来れば明久も苦労しないさ」  
肩を竦めて言ってくれます。

「雄二、もつともらしくそんなことを言わないで！全然フォローになつてないからね！」  
フォローする気が感じられません。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」  
「……くつ！と、とにかく、誤解だからね！」  
捨て台詞を残して行かないで下さい

26話 俺と先輩とお客様 営業妨害です(前書き)

遅れましたね。

## 26話 俺と先輩とお客様 営業妨害です

バカテスト

以下の空欄を埋めなさい。

『私は彼のことを考えると胸が（ ）（そうだ』

姫路瑞希の答え

『張り裂け』

教師のコメント

正解です。余りにも感情が爆発してしまいそんなことの喩えです。

土屋康太の答え

『膨らみそうだ』

教師のコメント

土屋君が書くと違う意味に思われて仕方ありません。

吉井明久の答え

『破裂しそうだ』

教師のコメント

破裂させないで下さい。

「いらつしゃいませー！」

今、現在中華喫茶ヨーロッパは大繁盛です。

味に釣られたのか、秀に釣られたのか知りませんがね。  
……周りの客の視線がウザいです。

「和子！お客様じゃ！」

誰が和子だ！

女になったからって、名前まで変えることはないと思います。

「いらっしやいませ！ようこそ、中華喫茶ヨーロッパアンへ」  
お客様には笑顔で接客です。

新しいお客はモヒカンと禿げの先輩でした。

あれは、確か常村と夏川先輩ですね。

あまり良い噂聞かないんですね。この二人

「おう！席、空いてるか？」

と、今は考えてる場合じゃない

「はい。こちらにどうぞ」

席に案内します。

「ご注文は如何いたしますか？」

「そうだな。じゃあ、胡麻団子を二つと茶を貰おうか」

「畏まりました」

注文を聞いたので厨房に戻ります。

「康太に須川、胡麻団子二つに茶を二杯頼む」

「……………（グッ）」

「任せろ」

さて、出来るまで待ちましょうか。

「お姉ちゃん。こっちの注文も頼むわ  
お客様に言われました。」

「はぐい。少々お待ち下さい」  
注文を聞きに行きます。

何でこうなっただんでしょう？

今、現状は夏川と常村がクロスを捲り、文句を言いだしたところで  
す。

面倒臭いな、本当に

秀に目で合図を送る

(秀、急いで雄二を呼んで来い)

(分かったのじゃ。その間手を出さぬよう気を付けるのじゃぞ)

(出来るだけ気を付ける)

騒ぎの元凶に近付いて声をかける。

「お客様方、他のお客様方のご迷惑になります。これ以上騒ぐよう  
でしたら外でお願いします」

出来るだけ笑顔でお願いします。

引き攣っていると思います

「アア！手前こんなテーブルに食い物置いて食わせたのに謝罪の

言葉もないのかよ！」

柄悪いですね。

「確かにこちらの不手際で机の搬入が遅れてしまって、このような物しか用意が出来ず暫定的にはいえ、使用していたのは完璧にこちらの落ち度ですから、その点については謝ります

」

そう言っただけで周りの客に頭を下げる。

何故か文句を言っていたお客が黙ってしまった

(私はそんなの気にしないわ。一生懸命してくれているもの)

(そうよ。それに料理も美味しいし)

(そうだな。机くらいで文句言っても仕方ないしな)

あれ？仲間増えた？

居心地悪そうですね先輩方。自業自得です。

「確かに設備は酷いですが、このような事をしてまで文句を言うなら物理的に黙らせませすよ？お客様？」

「は！確かに設備は悪いな！」

「ああ、全くだ」

もう、殴っていいですか？

(やっちゃんえ嬢ちゃん！)

(そうだ、そうだ！)

(そうよ、そんな屑ども黙らせなさい！)

随分とお祭り騒ぎになってしまった。

最後の人は過激派ですか？

「さて、他のお客様がそう仰っていますが、どうしますか？」  
足を曲げて何時でも動ける体制を作ります。

「それより、ここの代表はいないのか！代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満の点でも御座いませうか？」

「はっ！つい手が出てしまった！」

「良いか雄二も殴ったし」

何故か客から拍手を貰いました。

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」  
「知りませんよ。そんなことは」

「それは私共のモットーの『パンチから始まる交渉術』です。何かご不満でも？」

雄二、不満がなかったらタダの変態ですよ。  
しかも、俺もなんだな。

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！なにが交渉術ふぎやあつ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です」  
雄二と俺の蹴りでモヒカン先輩が吹っ飛んだ

「最後に俺は『プロレス技で締める交渉術』が」

「俺は『袈裟斬りで締める交渉術』が」

「待っていますので」

うん。こんな交渉術聞いたことない。

袈裟斬りの辺りで秀が俺の刀を持ってきてくれたので、無言で抜きます。

怯えた目で見られた

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちよ、ちよつと待てや常村！お前、俺を売るつと言つのか！」  
五月蠅いですねえ。

「それで常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるか？」  
もう少しくらい敬語を持たせましょうよ、雄二。

「安心して下さい。ちゃんと刃は潰してありますから、骨折ぐらいで済みますよ？」

多分、一番の懸念事項でしょう。

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらおう」

逃がしませんよ

「そうか（そうですね）。それなら

雄二は坊主頭の腰を抱え

俺はモヒカンの方に刀を大上段に振りかぶり

「これにて交渉は成立だ（です）」

雄二はバツクドロップを

俺は袈裟斬りを

其々決めて気絶させました。

さて、後はお客の反応ですね。

「皆様、不快な思いをされたでしょうが、ご容赦下さい。ですが、たった今本物のテーブルが届きましたので御安心下さい」

「その通りです。流石に全てを揃えるには暫く時間を頂きますが、それまでの間どうかお待ちください」

雄二と一緒に深々と頭を下げる。

その後ろでは多分雄二が指示したのである。演劇部のテーブルが幾つか到着する。

（そうね。そんなに待たなくてよさそうだし、一寸待たせて貰うわ）

（そうですね。そうしましょうか）

（確かに時間もかからないだろうしな）

お客の反応は上々ですね。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせて頂きますので、ご使用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおつくり下さいますように」

雄二、敬語使えるならもう少し使いたいですよ。

常夏コンビを外に放り投げてつと

「さて、明と雄二は足りないテーブルを調達してきてくれ。島田と姫路は俺たちと喫茶店でウェイトレスだ。笑顔で愛想よく頼む」  
これからのことについての話です。

「分かった。和樹に秀吉。頼んだぞ」

「頑張つてね。姫路さんに美波」

別れて喫茶店に戻りました。

.....客が減るところか増えた。

テーブル足りませんか？

何でこんなに増えたんですか？



26話 俺と先輩とお客様 営業妨害です(後書き)

また、来週にでも更新する予定です。

27話 俺とチビツ子とメイド服 閑古鳥が鳴いています(前書き)

大学の宿題の合間に書きました。

後、いつの間にかちゃんとメールが届くようになっていました、感想、誤字脱字等ドシドシ送って下さい。

シヨウ様ガイア様報告メール有難うございます  
和尚様リオナ様有り難い感想嬉しく思います。

27話 俺とチビツ子とメイド服 閑古鳥が鳴いています

バカテスト

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace-keeping Operations（平和維持活動）の略

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

東野和樹の答え

『Picture Keeping Operations（絵画維持活動）の略

絵画の修復を主に行う活動団体』

教師のコメント

何故、絵画一本に絞ったんですか？

土屋康太の答え

『PantsKoshit-sukiOppaiの略

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているんですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

「暇だな」

「うむ。暇じゃな」

「暇ですね」

「暇ねー」

喫茶店に客が来ません。

お陰で閑古鳥が鳴いています。

どうでしょうか？

「ただいまー……って、あんまりお客さんがいないなあ……」

ん？ああ、お帰り明。

「お帰り。勝ったのか？」

召喚戦争の話です。

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんか？」

そつえば居ませんね。

「うん。トイレに寄ってくるってね」  
「そうですか」

「それより秀吉に和子。これはどういうこと？お客さんがいないじゃないか」

「何でこいつらは俺のことを和子って呼ぶんだ？女になったのが悪いんでしょうか  
ならなければ良かったと最近思いだしました。」

「知らん。どうせ、さっきの二人組がどうかで又、悪評でも流してるんだろっ」

「それ以外考えられませんからね。」

「………ワシ等はずっとここにおったから、詳しいことは分からぬのう」

「秀が首を傾げていいいます。」

『お兄さん、すみませんです』

『いや。気にするな、チビツ子』

『チビツ子じゃなくて葉月ですっ』

「おや？雄二が誰か連れてきたようですね。」

「ピシヤ！」

「和樹！居る？」

「扉が碎けますよ優子さん？」

「何のようでしょう」

「優、何しに来た？」

「それより、何故メイド服なんでしょう」

「良いから！秀吉、やっちゃんなさい！」

はい？

「うむ。大人しくしているのじゃ和樹」

何故、腕を擦じるんですか？

俺何かしたかなあ

「は、離せ！秀！ヤバいつて、そっちには曲がらな、ぎゃああああ

ああああ」

あつという間に意識が落ちました。

「ここは？」

目を開けると優と秀が良い感じの笑顔でこちらを見えています。

・・・・・・・・・・・・・・・・何か足元がスースーします。

見下ろすとメイド服を着ていました。

ああ！予想はついたよ！馬鹿野郎！

「優、秀。何て物着せやがる」

お姉さんは少々ご立腹です。

『似合うかと思ってね（のう）』

黙れ確信犯共

「はあ。服返してくれない、よな」

二人の顔を見て諦めました。

「いいじゃない。似合ってるわよ」

「うむ。綺麗じゃぞ」

うわ！全然嬉しくない評価ですよ！

「……………和樹、似合ってる  
翔子まで」

「似合ってるよ和樹君」  
愛子もか？

「で、何時までこの格好させる気だ？」

「私達が満足するまでよ」  
何処の王様ですか

「分かりました。お嬢様。全身全霊働かせて頂きます」  
人間開き直りが大事です。

頷かれた、泣きたいです。

「お客さん来たよー」  
はいはい。出ますよ。

「お邪魔しまーす」  
待て、島田。入ってくるな

「……………お帰りなさいませ、お嬢様」

「お帰りなさいませじゃ、お嬢様」

「お帰りなさいませ、お嬢様」

条件反射が出てしまいました。

秀の訓練の成果が出ました。

……嬉しくありません。

「わあ、綺麗……」

ええ。翔子と秀は綺麗です。

何時の間に着替えたんでしょう？

「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様  
来ないでいいです。」

「お帰りなさいませ、全身の骨を砕かせて頂きます。旦那様」

「お帰りなさいませじゃ、お嬢様に旦那様」

何か島田似の小さいのと明が入って来ました。

「和子に秀吉！何で、メイド服何て素敵な物を着てるのさ！後、和子。今、僕を殺そうとしたね！」  
黙れ、和子と呼ぶな！

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

何て、大胆な告白でしょう。

雄二は幸せですね。

「霧島さん、大胆です……！」

「それより、東野が綺麗なのが腹が立つわね」

「お姉さん達綺麗です」

何も聞こえません

「……メニューをどうぞ」

無駄に装丁が豪華なメニューですね。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

流石は女の子です。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

だから、ただの塩水だっていつてるでしょう。

「んじゃ、俺は」

「……………ご注文を繰り返します」

あれ？

「……………『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を

一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

素晴らしい注文です、雄二。

翔子、何故雄二の家の実印を持っているのですか？

「さて、葉月ちゃん。キミの言っていた場所ってここで良かった？  
何の話ですか？」

「うんつ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話し  
てたの!」

ああ、分かりました。

「ねえ、和子。それってあいつらのことよね？」

優、あなたまでそう呼ぶのですね。

「ん？どいつだ？」

「あれよ」

優が指差した先では先程ボコボコに伸した先輩方が居ました。

腹立たしいですね。

と、携帯に着信です。

誰でしょう

「誰だ？」

「……………和樹。ネタが揃った」

康太でしたか。

ん？

「お前、携帯持つてなかったよな？それよりネタが揃ったんなら学園長呼び付けてくれ」

「……………須川に借りた」

流石は康太です。

全て任せましょう

通話を切って携帯をしまい皆のほうに向くと不思議そうな顔でこちらを見ってきます。

……………何でしょう？

「どうしたんだ？」

「いや、不穏な会話が聞こえたからな……………」  
そんなに物騒な会話した覚えはないですね

「ああ、康太に頼んだ情報の裏が取れたからな。もうすぐ詰みだな。」

康太の実力を白田の元にさらしましょう。

さあ、教頭先生どうしますか？

もうすぐ詰みですよ  
チエックメイト

あれ、いま気付きましたが秀と明がいませんね。

「雄二、秀と明はどこ行っただ？」

こういうことは雄二君に聞きましょう。

「ん、もうすぐ帰ってくるはずだぞ」

答えになってませんがね。

ふと、入口の方に視線を動かすとメイド服を着た明？と秀が近付いてくる。

以外に似合いますね、明。

「雄二。存外に似合っているが、あれは何がしたいんだ？」  
思わず頭を抱えてしまいます。

「ああ。あの格好で近付いてポコポコにしようという考えだ」  
そうですか。

「そうか、頑張ってくれ。俺はここで暫く働いてるから」

「ん？ああ、分かった。お前も大変だな」

話していたら、騒ぎが起きました。

そちらを見ると明がバッグドロップをかましていました。

豪快ですねえ。

「じゃあ、俺も行ってくる」

いつてらっしやい、雄二。

「ああ。存分にシバイて来い」  
笑顔で見送ります。

素敵な笑顔で雄二は騒ぎの輪に入っていました。

「じゃあ、アタシたちも帰ろうか」

おや、島田。もう帰るのですか？

「まあ、少し待て。話がある」

「何よ話って」

「何ですか？」

「何々？何の話」

そんな食いついてこられると困るんですがね

「もう少し待ってくれ。主役が来てないんだ」  
主役は学園長です。

「全く、一体何の用だいクソガキ？」  
相変わらず良い性格してる。

後ろを振り向くと康太と連れ立って学園長先生が立っていました。

「康太から話は聞いた筈ですがね」  
苦笑で返しましょう

「……………あれが学園長なんだ」

「……………以外です」

シヨックかな

シヨックだろうな

「ふん。一応聞いたけど、分かりにくかったらなかったさね」  
まあ、康太はあまり喋りませんからね。

「ここで話すと色々面倒なので場所を代えさせて貰います」  
流石に店の中です話し、じゃありませんし

「勝手にしな」

許可を頂きました。

「よし、じゃあ。島田に姫路付いて来い」  
声をかけて席を立ちます。

「何処に行くの？」

「人が中々入ってこないところ」  
さて、皆の反応が楽しみですね。

「で、話ってなんさね？」

少しは待ちましょうよ

「康太。宜しく頼む」

康太がテープレコーダーを置きます。

「何これ？」

「何ですか？コレ」

見たこと無いですかね

「……………和子。準備が出来た」

さて、始めましょうか。

「分かった。さて、今からコレに録音されている会話を聞いて貰うぞ。まあ、結構ショックがあるかもしれんが全部真実だからな」  
スイッチを入れて再生スタートです。

まあ、ぶつちやけると内容は教頭の悪巧みを録音しただけなんですけどね。

「あいつはここまで腐ってたのかい」  
流石にいやそうですねえ

「……………そんな信じられません、教頭先生がこんなことをいうなんて」

「……………ウチも信じられないわね」  
証拠がここまで揃って信じられませんか

全く人がいいというか何というか

「実はもう一つ有ってな。姫路と島田に関係が有るのはこっちなんだ」

康太がカセットの中身を代えます。

「まだあるのかい。アンタ達どつから手に入れてくるんだい？」

まあ、当然の疑問ですね  
寧ろ遅いぐらいですがね

「それはですね。俺と康太で一年の頃に、この学園内に情報網を作りましてね。殆どのところでの会話は入ってくるんですよ」

この情報網を俺たちは単に康和ネットワークと呼んでいます。  
分かりやすくして重宝しています

こちらの中身はもし雄二と明が勝ち残った時のことを話している物です。

教頭先生は良い感じに腐ってますね。

二人は声も出ませんか

「さて、学園長。ここまで証拠をだしたんですからね。教頭に一泡食わせてもらいますよ」  
これが目的です。

「分かっているさね。しっかりと締めあげてやるぞ」  
精々頑張ってもらいましょうか

学園長が席を立ってさっさと出てきました。  
無論、証拠となるもの全てを康太から受け取ってです。

「お前ら、話しは聞いたな」  
頷く二人

「この話は他言無用だ。後、これから何があるか分からんから俺が  
康太と一緒に行動してもらおうぞ」  
学園長を信用しないわけではないんですがね

警戒するに越したことはありませんから

「ウチや瑞希はそれで良いとして、木下はどうするの？」  
おや？珍しいですね秀の心配をするなんて

顔にでていたらしく睨まれました。

「そつちは心配無いぞ。秀は優と一緒にAクラスから極力出ないよ  
うに伝えたし、もしもの時の為に発信機と盗聴器を持たせてあるか  
らな」

全部康太に持ってこさせたものです。  
お姉さんは康太君が捕まらないかどうか心配です。

「あの！東野君。吉井君や坂本君は大丈夫ですか？」

別に殺しても死なない気がします

「雄二にも同じもの持たせてあるから心配しなくても大丈夫だよ」  
まあ、嘘ですがね。

ここで、不安にさせてもしかたありません

明らかにホツとしたようです。

そんなに明が大事ですかね

「もう質問が無いなら店に戻るぞ」  
無い方が楽です

二人共頷いたので良いんでしょう。

さあ、稼ぎましようか。

27話 俺とチビツ子とメイド服 閑古鳥が鳴いています（後書き）

テンション低いとシリアスになりますね。

誘拐話し書いていたらどうしてもレイプ物にしかありませんでした。だから、その部分全面カットです。

もう一度書き直すか無くすかはその時のテンションできめます。

あれ？葉月ちゃんと康太が空気ですね。

28話 俺と秀とチャイナ服 こんどはチャイナですか(前書き)

投稿遅いですねえ。平日に投稿される方々を見習いたいです。

課題で実習の企画書書かなきゃならんで、また遅れると思います。

28話 俺と秀とチャイナ服 こんどはチャイナですか

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を運営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか?』

【?可愛らしさ?統率力?行動力?その他( )】

土屋康太の答え

『【?可愛らしさ】候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【?可愛らしさ】候補……島田美波』

教師のコメント

何故字が歪んでいるのですか?

坂本雄二の答え

『【?その他(結婚相手)】候補……霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

東野和樹の答え

『【?その他(嫁)】候補……木下秀吉&木下優子』

教師のコメント

幸せそうでいいですね。

「で、三回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」

「……………姫路の料理食ったとかじゃないよな？」

「じゃあ、明。こっちの立て直しを手伝ってくれ」

客が少ないんです

「それはいいけど、和子はいつまでメイド服を着てるの？」  
放っておいて下さい。

優が制服返してくれないんです。

「仕方がないんだ。優が返してくれないんだから」  
肩を竦めて応じます。

もう、慣れたので気になりません。

開き直りです。

「雄二、何かアイデアはある？」

客寄せのアイデアです。

「任せてくれ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはず」

雄二？貴方は一体どうやって手に入れてるんですか

「ほう。若干裾が短いような気がするが、これならば確かにインパクトはあるじゃろうな。コレを宣伝用に

誰に着せるんだ？姫路か島田、それか秀だるうなあ。

「ああ。コレを  
明久が着る」  
衝撃が強すぎます。

「ちょ………！お願い、許して！メイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」  
もうホンモノで良くありませんか？

「冗談だ。これは秀吉と和子と姫路と島田に着てもらおう」  
俺もかあ

「あ、なんだ。良かった」

「ワシと和樹は冗談ではないのかのう………？」  
俺もそう思います

「マジすんませんでした！自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前………」  
明、ちゃんと頼めば着てくれると思うぞ？

「店の宣伝だ」  
「明久はチャイナドレスが好きだよな？」  
初耳です

「大好 愛している」  
「………お前は本当に嘘をつけないヤツだな」  
「………そこまで言い切るとは思わなかった」

まさか普通に答えるとは

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」  
「そ、そうですね！お店の為ですしね！」  
「単純な人たちで助かります。」

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

ああ、島田の妹の

「え？葉月ちゃんも手伝つてくれるの？」

「手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」  
なんて、出来た娘でしょう。」

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数  
が」

「・・・・・・・・！！（チクチクチクチク）」

康太！何時の間にかきたのですか？

「康太。さつきまでいなかったよな？てか、何故に裁縫？」

「・・・・・・・・俺の嗅覚を舐めるな」

何故でしょう？これだけ聞けば凄く格好良いのに駄目な人間の匂い  
がするのは？

何か聞いてて思ったんですが

「明。お前つて本当に・・・・・・・・チャイナドレスが好きなん  
だな・・・・・・・・」

友人の新たな一面を発見しました。

・・・・・・・・複雑です。

しかも、否定しねえ！  
もう一度言います。  
否定しねえ！

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分達の所属がFクラスであることを強調するんだぞ」  
雄二の指示が飛びます。

「……………できた」

「……………嘘でしょう？康太

「わ、このお兄ちゃん凄いです！」  
本当に出来たんですか！

「じゃあ、秀。着替えるか」

「そうじゃの」

面倒臭いから、もうこの場で着替えましょうか。

「ちよ、ちよっと秀吉に和子！きちんと女子更衣室で着替えないと駄目だよ！」

全力で止められました。

「……………今は身体が女だからな、女扱いは目を瞑ろう」

「……………和樹はまだ良いではないか。ワシなんて最近女としかみられておらんのじゃから」

秀の気持ち少し分かった気がします。

横を向いたら、葉月ちゃんが康太を血の海に沈めていました。

……………康太？あなたの守備範囲はどれだけ広いですか？

幸せそうですね、康太。  
もう逝ったらどうですか？

あつという間に客が来ました。  
あれですね、コスプレ目当ての客って嫌ですね。

姫路と島田も帰ってきたので、さらに客は増えることでしょう

「君。注文してもいいかな？」

「ええ。どうぞ」

近くの客に声をかけられたので、注文票を構えて聞きます。

「本格ワーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。元教頭先生」

顔を見ると教頭だったので、元の部分に力を入れて言ってみました。

あ、青筋立った

「……………君は、中々失礼ですね」

そんな、褒めて貰ってもなにも出ません。

「いえいえ。言い足りないくらいですよ。暴行幫助に誘拐幫助、盗  
聴なんかもありますね」

笑顔で接客です。

「全く、何の証拠が有ってそんなことを言っているのですか？」  
冷や汗流しながら言われても説得力ありません。

袂から写真を出して机の上に置きます。

出した写真は全て教頭先生が映っています。

まあ、オマケとしてそこらへんにいる不良が映っていますがね。

「さて、まだ言い逃れしますか？」

もう脅しですねえ。

「言い掛かりは辞めて貰いましょうか」  
「顔色が悪いですよ」

「それでは、こちらを聞いてもらいましょうか」  
MDプレイヤーを取り出して、イヤホンを渡します。

そんな不審そうな目で見ないで下さい。

そんな怪しいものではありませんから

耳に付けたので再生開始です。

おや、顔色が変わりましたね。

叩きつけないで下さい高かったんですから

「君は、一体何処でこれを……」

そんなに怯えないでください。

「いえ、こういうことに鼻の効く友人がいるんですよ」  
不敵に笑ってみました。

似合つてしょうか

「君は何が望みなんですか？」  
望みですかあ

「今の一番の望みは、あなたがこの学園から去ることです」  
情報収集つて案外面倒なんですよ

「東野！厨房の土屋が、アキと一緒に茶葉持ってきて欲しい、つて  
おや？島田。

「それでは、これで失礼します。どうかお寛ぎ下さい」  
一礼して、去ります。

しかし、明とですか

「じゃあ、和子。一緒に行こうか」  
いい加減にして欲しいです。

「ちゃんと、名前で呼べつて言ってるだろうが」

「気にしない。気にしない」  
俺が気にするんだが……

さて、あれだけ馬鹿にしましたからね。  
何か仕掛けてくると思いましたが

空き教室です。

「さて、明。これから起こることは他言無用だぞ」

「?どついうこと?何かするつもりなの」

「ああ。少し面倒事だ」

獰猛な笑顔ってどんな感じなんでしょうかね

茶葉を明に持たせてつと

「そろそろ出て来い。俺らも暇じゃないんでね」

声をかけると驚いたように5人の同年代ぐらいの男達が入って来た。

「何で分かった?」

疑問かねえ

「普通に考えたら分かるだろうに。さて、用があるのはどつちだい?」

「え?この人たちが迷ったんじゃないの?」

相変わらずお気楽な脳味噌ですね、明。

「吉井明久に用があるんだ、姉ちゃん。退いて貰おうか」  
反吐が出ます

「何だ明か。アイツも案外根性無いんだな」  
肩を竦めて言います。

だって、意趣返しを期待してたんですよ。  
がっかりです

「へ?僕に何か?」

「動けなくして欲しいんだとよ、おとなしく殴られな」  
拳を固めて明に殴りかかる。

俺を無視するなよ。寂しいじゃないか

相手の進路上に入り込み、拳を握り軽く触れ合うくらいの間合いに  
入る

「何しやがる姉ちゃん!」

やっぱり、もう女になるの辞めましょう。

不愉快です

身体を引いて避けようとするのに対して、相手の懐にさらに入り拳  
を軽く相手にあてがう。

慌てて距離をとろうと相手が足を動かした瞬間に、思いっきり踏み  
込みつつ拳を突き出す。

これで衝撃が倍加して、相手に通る、筈です。

声も上げずに崩れ落ちる不良A

よっしゃ!成功です。

以外に上手く行きました。

「て、テメエ!何しやがった!?!」

「い、行き成り倒れたぞ!」

精々慌てて下さい。

そのほうが好都合ですから

近付いたら慌てて離れて警戒してくれました。

「さて、未だ戦るかい?」

早く店に戻りたいんですけどねえ

「何フザケてやがる！テメエ！ボコボコにしてやる」  
戦る気ですねえ。

「分かった。全員入院希望なんだな」  
ギタギタにしてやりましょう

手近に居る一人に近付き、無造作に膝を踏み抜き次の相手の方に向  
き直る。

悲鳴を上げて膝を抱えて転げ回る。

五月蠅いですねえ

「喰らいやがれ！」

声を出すのは辞めましょうよ  
隙が出来ますから

顔面狙いのパンチを軽く屈んで避けて、相手のパンチを捌き重心を  
前に持つていき、腰を回転させて突きを放つ。  
骨が折れたような感触と共に苦悶の表情で倒れ伏す相手  
気絶してくれました。

さて、あとは二人ですね。

「和樹って強かったんだね」  
明？なんだかんだ言いつつ全ての攻撃をかわしている貴方に言われ  
たくありませんよ？

「何言つてやがる。10年も武道習つてたら大体2〜3人は相手出  
来るようになる筈だぞ？それより、明。雄二を呼んで来いよ」  
雄二に丸投げしましょう。

「分かったよ。後、宜しくね」  
えらく晴れやかな顔して去って行きましたね

「あ！待てやコラ」  
普通は待ちません  
追わないで下さい。

「もう少し遊んで行って貰うぞ」  
精々妨害させてもらいますよ

「くっ……」  
いや、そんなに警戒してもらっても困るんですが

ガラッバキッ！ドサツ  
……  
うわっ！痛そう

ええーと、雄二？タイミング良すぎませんか？

ああ、えーと。今起こったことの説明をします。  
ガラッ（雄二が扉を開けて入ってくる）

バキッ！（手近の不良を殴り飛ばす）

ドサツ（壁に叩きつけられて倒れ伏す不良D）

「雄二？どうしたんだ？」  
何の用でしょうか？

「ん？ああ。ムツツリーニが茶葉の他に餡子も持って来てくれと言

「つたからな、伝えにきたんだが、何だコイツラは？」  
殴り飛ばしておいてそんなことを仰いますか

「ああ。阿呆に言われて邪魔しに来た奴等だ」

「さつさと伸して店に戻るぞ。客が増えて大変なんだ」

「分かった。ん？雄二。明に会わなかったか？」

雄二を呼びに行かせた筈ですが

「明久なら、扉の前で固まってたぞ」

なにをしているんでしょう？

「手前等！無視してんじゃねえ！」

自棄になったからって突っ込んでこなくてもいいでしょうに

『阿呆が』

雄二は拳で、

俺は蹴り足で、其々応じます

結果は

「ガッ・・・・・・・・・・」

後頭部に俺の蹴りを

顔面に雄二の突きを喰らいました。

全員入院出来ましたね。

「さつさと茶葉と餡子持って戻るぞ」

雄二。何事もなかったように進めますね

「そうだな」

明に全て持たせて行きました。

28話 俺と秀とチャイナ服 こんどはチャイナですか(後書き)

清涼祭編もつすぐ完結。

これが終わった後、プール編書いてフェチ話させます。

まあ、フェチと言ってもブレザーかセーラーかですが

29話 俺と雄二と召喚大会？ おめでとう。霧島雄二（坂本翔子）（前書き）

やっと書けました。

29話 俺と雄二と召喚大会？ おめでとう。霧島雄二（坂本翔子）

バカテスト アンケート

以下のアンケートに答えて下さい。

『喫茶店で大事な物はどれだと思いますか？』

【？料理？接客態度？スピード？その他（ ）】

姫路瑞希の答え

『？料理・・・・・・・・美味しい料理は人を幸せにするから、私もそんな料理を作ってみたいです』

教師のコメント

姫路さんらしい優しい答えですね。姫路さんの料理を食べる人はきっと幸せだと思いますよ。

土屋康太の答え

『？その他（制服）・・・・・・・・制服一つで客の増減が決まると言っても過言ではないだろう』

教師のコメント

言い切らないで下さい。

吉井明久の答え

『？その他（栄養）・・・・・・・・そろそろ固形物が食べたいです』

教師のコメント

本当に良く生きていきますね。

東野和樹の答え

『接客態度……秀に鍛えられたから』

教師のコメント

君達の関係は職員室でもよく話題に昇ります。是非その腕前を披露してください。

何でこんなに客が増えたんですか？

「姉ちゃん。こっちにも注文」  
「またですか」

「はい。今行きます」  
大繁盛です。

今、召喚大会で明や雄二、島田に姫路が出払ってしまっって人出が足りません。  
完璧な人手不足です。

島田の妹が以外に役に立っていて嬉しいです。

と、雄二達が帰ってきましたね。

「お帰り。どっちが勝ったんだ？」

「お疲れじゃ。それはワシも知りたいのう」

秀、いい感じに客の視線が集まっていますね。

後、明。秀に興奮するな、殴りたくなりますから

「雄二、かな？」

「そうね。坂本の一人勝ちね」

「そうですね」

「同じチームじゃなかったかな明は」

「？明は雄二と同じチームだろう？」

不思議ですねえ

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

そうですね。

客の視線もコチラに集中しまくっていますし

俺も秀も男だと知った時の反応が見てみたいですね

「売り上げの為に頑張りますか！」

「はいっ。葉月も頑張りますっ」

「……………ワシは一応男なのじゃが……………」

「……………俺も男なんだがな……………」

「秀吉。絶対に性別バラしちゃダメだからね？それと、和樹！和樹は今、和子なんだから男じゃないよ！」

何か腹の立つ言い方ですね。

「やれやれ、仕方ないのう……………。あ、いらっしやませー！中華喫茶ヨーロピアンへようこそー！」

流石は演劇部ですね。変わり身も早いです。

今、Aクラス前です。

雄二君がどうしても優勝したいからと、翔子と優を足止めしに行き

ます。

「和樹、どうやって止めるつもりじゃ？」

秀？俺は君の持っている縄が気になります。

「まあ、話してみないとどうもならんからな」  
恐怖で足がピクリとも動きませんがね！

「じゃあ、入るぞい」

何故、今回はやる気になっているのですか？

「あら？和樹に秀吉？どうしたの」  
扉開けたら目の前にいました。

「お、おう。優。少し時間いいか？」

「？別にいいけど、早くしてよね」

声の上擦りました

「……………和樹？どうしたの？」

良いタイミングです。

「翔子か。お前にも用があるんだ。こっち来てくれ」

「……………分かった」

「代表にも用があるの？一体なんの話よ？」  
さて、どういいますよか

「うむ。霧島に雄二から伝言が有ったの。それを伝えにきたのじゃ」  
秀。ナイスアシストです。

「……雄二から？なんていつているの？」

「ええとな。まずは（秀、俺が言うことそのまま雄二の声でいつてくれ）」

（分かったのじゃ）

「……何？」

（翔子。召喚大会で俺を勝たせて欲しいんだ）

（か、和樹！直球は不味いぞ！）

（良いから！）

（う、うむ）

「翔子。召喚大会で俺を勝たせて欲しいんだ」（BY雄二の声）

「……雄二の声？」

周りを見回す翔子さん

「秀吉……」

冷めた目で見ないで下さい優子さん

（俺はお前と如月グラウンドパークへ行きたいんだ）

「俺はお前と如月グラウンドパークへ行きたいんだ」

演劇部が凄いのか、秀が凄いのかどっちなんだろう

「……雄二、嬉しい」

あ、もう声だけでいいんですね。

（だが、それはお前の力で手に入れても仕方がないんだ）

「だが、それはお前の力で手に入れても仕方がないんだ」

「……？どういうこと雄二？」

大丈夫だ翔子。これからもっと面白いことになるから

「ちょ！ちよつと、秀吉に和樹！」

もう少し待ってくれ優

そろそろ間接が壊れる覚悟をするべきですかね

(俺は自分の力でペアチケットを手に入れて、お前と幸せになりたいんだ)

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れて、お前と幸せになりたいんだ」

「……………雄二」

トリップしましたね翔子

もう一息です。

「代表！」

待て優！今覚醒させるのは不味い  
具体的に言っと俺の頭が割れる！

(だから翔子、俺に勝ちを譲ってくれ。そして、結婚しよう)

「だから翔子、俺に勝ちを譲ってくれ。そして、結婚しよう。愛してる翔子」

秀？実はこういうものが好きなんですか？

さて、翔子は暫くトリップして戻ってこないから、その間に優を何とかしてみたいと思います。

「ちょっと秀吉に和樹！どっいつつもりよー！」  
怒ってらっしやる

……………どうしましょっ？

(和樹。ここはワシにやらせてくれんかの?)

おや？本当に珍しくやる気になっていますね。

(何をするつもりか分からんが任せたぞ)

(任せるのじゃ)

嬉々とした様子で優に近付く秀

何をするつもりでしょう？

「秀吉？さつさと言いなさいよ！」

「姉上！覚悟！」

無謀にも、何の策も持たずに縄を持ち出し飛び掛かる秀吉君

あ、後ろとられた。

ガッ (足払いをかける音)

ドッ (マウントポジションをとる優)

ガッガッガッ (拳を振り下ろす音)

あ、私刑リンチだ。

「一丁上がりね」

ポコポコにされて縛られて転がされた秀

本当になにがしたかったんでしょ？

後、優？笑顔が怖いぞ？

「秀。お前、何がしたかったんだ？」

「今日こそは、姉上に勝てると思ったのじゃ！」

いやあ、無理だと思いますよ

「お前が優に勝てる筈無いだろ？だから、優！迫るな！あれは秀が

勝手にあ、待ってそんなに曲がらなげや ああああああ  
あっという間に意識が暗転しました。

「秀吉？秀吉ってあのゴミのこと？」  
誰だ？行き成り暴言を吐いたのは？

「ひ、秀吉に和樹！？どうしてこんな姿に！」  
現在、俺たちはボコボコにされた拳匂、背中合わせて縛られています。

……………理不尽です

で、翔子はトリップしつつ雄二にアイアンクローしてますが、誰も止めないんですか？

あ、止めませんか。分かりました。

……………康太？カメラ後で寄越しなさいよ？

「撮影なんかしてないで、早く秀吉と和樹の縄をほどいてあげてよ！  
（その写真、後で売って欲しい）」  
あなたは何をほざきますか？明？

「いいから、早くほどけよ！（康太！俺も買っぞ）」  
「お主等、本音が混ざっておるぞ」  
しまった。つい本音が出てしまった。

「……………了解」

康太、写真も忘れないで下さい。

「康太？姫路と島田を頼んだ筈だが？」

何故、ここに居るのですか？

「……………大丈夫」

そういつつ、康太が取り出したのは何か四角い機械と液晶画面が付いたパツと見に携帯にも見える機械

「何だこれ？」

見たこと有りませんね

「……………盗聴の受信機と発信機」

……………康太？

「何故、そんな物もっているのかは、聞かないでおこう」  
コイツ、その内絶対に警察の厄介になるよなあ

それよりも、

「優！よくも縛ってくれたな！」

非常に痛かったんです

「何よ！文句有るの！」

何処の女王様ですか！アナタは

「言いたいことは沢山あるが、今は明の手によって怨みを晴らさせて貰うぞ」

さあ、明君！頑張ってください。

主に俺の為に！

「和樹……それって僕が痛いだけだよね!?」  
流れて召喚してくれると思ったんですが、甘かったですか。

「じゃあ、吉井君を倒してから、改めて和樹を締めるわ。試験召喚<sup>サモン</sup>」  
恐!

「く、僕もただじゃやられないよ、新巻鮭<sup>サーモン</sup>!」  
はい?

「……試験召喚<sup>サモン</sup>」  
康太?あなたは選手じゃ無いでしょう?

「……加速」

「ひ、卑怯　　きゃあっ!」  
腕輪まで使いますか!

「うわぁ……」  
思わず引いてしまった

『Aクラス 保健体育	木下優子 321点	&	Aクラス UNKNOWN	霧島翔子
VS				
『Fクラス 保健体育	土屋康太 511点	&	Fクラス UNKNOWN	坂本雄二

あ、ちゃんと康太の名前が出るんですね。

「よしっ!僕と雄二の勝利だ!」  
もう何も言えんわ

『……ただいまの勝負ですが』

まあ、普通物言いがつくでしょうね。

「優、あいつ等の勝ちで良いか？」

「言いたいことはそれこそ山のように有るけど……」

うん。俺もまさかこんな手で勝つとは思わなかったから、

「まあ、代表も満足してるから、いいわ」

有難う優

また。後で差し入れでも持っていきましょう。

「……わかりました。坂本・吉井ペアの勝利です！」

明？客の冷たい視線が非常に痛いですよ？

そそくさと逃げるように会場を後にします。

「ところで雄二をあのままにしておいて良いのか？」

雄二君、大丈夫でしょうか

「え？別にいいんじゃない」

「そうか。明久がそう言うのであれば良いのじゃが」

「あはは。雄二もたまには素直になるべきだと」

「翔子が雄二に薬盛ってるが良いんだな？」

「き、霧島さん！雄二には決勝もあるからクスリは許して！」

引き返した我々を迎えたのは虚ろな目をしてタキシードに着替えている雄二の姿と恍惚とした顔の翔子の姿でした。

29話 俺と雄二と召喚大会？ おめでとう。霧島雄二（坂本翔子）（後書き）

次はこのゴールデンウィーク中に出せると思います

30話 俺と誘拐と明 明君大活躍（前書き）

投稿遅いですね。本当に何とかしたい今日このごろ  
しかも、タイトルと違って明久君が活躍しないというこの状況！  
生温かい目で見てください

30話 俺と誘拐と明 明君大活躍

バカテスト 化学

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニアと（ ）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収材』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

東野和樹の答え

『水酸化ナトリウム』

教師のコメント

きつと誰か書くと思っていました。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

さて、準決勝も終わってFクラスに帰る途中です。

何故か、優に右腕を秀に左腕を、それぞれ決められていて、身動きがとれません。

「秀、優。離してくれないか？そろそろ感覚が無くなってきたんだが……」

メツチャ笑顔で睨めました。

………怖い

「何で？」

「何故じゃ？」

え？

「だからな、感覚が………もういいです。すみませんでした」

秀と優の後ろになにか見えませんでした。

鬼や般若なんて目じやない位恐かったです。

「ちょっと、その姉ちゃん達。一緒に来て貰うぜ」  
おお、ナンパですか。

でも、やっぱり柄が悪いのばかりですね。

「ご遠慮いたします」

「遠慮するのじゃ」  
「にべもないですねえ」

「固いこと言うなよな」  
違う声が聞こえました。

周りを見ると6人の学生が囲むように立っています。

「か、和樹。どうしよう?」

「ど、どうするのじゃ?」  
取り合えず腕を離して下さい。  
話しはそれからです。

「まずは腕を離してくれ」  
慌てて腕を離してください。  
有り難いですね

「さて、お客様方。本人達も嫌がっておりますから、ここはお引き取り願いたいのですが、如何でしょうか?」

腕を回して、血を通わせます。

だって、本当で感覚が無いんですから

「生言つてんじゃないよ」  
五月蠅いですね

「さて、それでは実力行使で通らせて頂きます。優、秀。近付いてきたら、こいつを振り回せ」  
秀と優にスタンガンを渡します。  
康太がくれたんですよ。

「それはいいけど、和樹はどうするの？」  
いいんですか

後ろ襟から仕込杖を引き抜きます。

「俺はこいつを使う」

そのまま正眼に構えて待ちます。

「いいか、手前等！顔は傷付けるんじゃないぞ！」  
一斉に掛ってきてくれました。

手加減してくれるそうです。優しいですね

擦り足で手近にいる不良君に近付き、腕をそのまま振り抜く。  
骨に当たると刀が折れるので、首か腹を狙います。

首を軽く裂いて、下がります。

殺す訳にはいきませんから

「し、真剣かよ！」

ええ。模造刀ではありませんよ。

「まだヤルか？今度は首を撥ねるぞ」

睨みつけると脅えだしました。

失礼な人達ですね。

「くっ………逃げるぞ！」  
良いことです。

全員逃げたので刀を納めて、秀と優の方に行きます。

お、無事っばいですね。

「怪我は無いか？」

「大丈夫よ」

「大丈夫じゃ」

良かった。

「じゃあ、店に戻るか」

こっちに来たんですから、島田や姫路が心配です。

「そうじゃの。姉上、気を付けるのじゃぞ」

いや、送っていきますよ

「優、Aクラスまで送って行くぞ。秀も付いて来い」

また来ないとは限りませんし

「そうね。宜しく頼むわ」

任せて下さい

優を送ってから、Fクラスに帰ると明と雄二が、康太と話していました。

まあ、姫路と島田の話でしょう。

「なんの話をしておるのじゃ？」

「秀吉に和樹！無事だったんだね！」

嬉しそうですね

「ただいま。康太、島田と姫路は何処だ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・近所のカラオケボックス」

流石は康太。調べが早い

「そうか。雄二、明。島田と姫路は任せる」  
俺は教頭を叩きに行きましょう。

「え？なんで！和樹もきてくれるんじゃないの！？」  
明、騒ぐな。雄二を見習ったらどうですか

「なにをするつもりだ？」

警戒しなくてもいいですよ。

「何、元凶<sup>教頭</sup>を殴りに行くこうと思つてな」  
笑顔で言つと脅えられました。

「元凶つて和樹は誰が犯人か知ってるの？」  
知つてますよ。

多分、康太も知っています

「ああ。だが、今回、お前のすることは考えることじゃないぞ」  
先ず、行動です。

「和樹、任せていいんだな」  
任せて下さい

「任せろよ。俺に喧嘩売つたんだぞ。精々高く買つてもらつたぞ」  
覚悟していて下さい

「そうと決まつたら、明久がやることは一つじゃな」  
秀？楽しそうですね

「ああ、一つだ」

雄二君が悪い顔で笑っています。

それでは俺も入りましょう

「王子様の役目は昔から決まっているだろう？」

明君大混乱です

「王子様の役目って？」

良い役ですよ。安心して下さい

『お姫様をさらった悪者を退治することさ（じゃ）（じゃ）  
上手く行けば好感度UPです。』

多分、余り意味はありませんけどね

秀を教室に残して先ずは、学園長室を目指します。  
さて、扉をノックしてつと

「学園長、今、時間良いですか？」  
ちゃんと返事を待ちましょう

「なんだい、クソガキ。入りな」

貴女も少しは、言葉を選びましょうよ。

「失礼します」

そういつつ扉を開けて入ります。

偉そうに踏ん反り返る学園長

何か腹立ちますね。

「何のようだい？」

白々しいですね。

「学園長。場所を代えます」

盗聴されたくありませんし

「構わないよ。何処で話すんだい？」  
有難うございます。

廊下に出て教頭室を目指します。  
面倒なので歩きながら話します。

「学園長室が盗聴されているのをご存知ですか？」  
多分知らないでしょうけど

「知らないねえ。竹原はそんな下らないことばかりしているねえ」  
ええ。そう思います。

「ええ。康太に調べさせたら学園長室に三つ仕掛けられていました」  
康太が驚いていましたよ。

まあ、驚いた理由は『俺が気付かない何て』という駄目っぽい理由  
でしたが

「ということは、これから竹原の所に行くんだね」  
そうですね。

「俺に喧嘩売ったんですからね。後悔して貰います」  
ポコにして学園長に突き出します。

さて、教頭室に着きました。

「それでは、学園長。まずは手順を説明します」  
振り返って、笑顔で言います。

「手順？なにをするつもりさね？」

大したことではありません

「一番初めに扉を蹴破ります」

「オイ！」

突っ込まれるとは

「次に踏み込んで周りを見回し、部下がいればぶちのめします」

「ちよつと待ちなクソジャリ」

待ちません

「最後に教頭の鎖骨を折って、終了です」

これで全部です

「アンタは過激派かい！」

驚かれました。心外です。

「じゃあ、さっきの手順で行きますよ」

「だから待ちなつて……」

聞こえませんか。

「扉を蹴破つた！」

そういつつ足を振り上げ扉を蹴り込みます。

「な、何だ!？」

蝶番が軋む音と共に扉が吹き飛び、その扉の上に乗り上げながら部屋を見渡します。

良いですね。その『何が起こつたか分からない』と言つた表情

「周りを見渡す!部下に近付きブチノメス！」

部下つぽい人が三人程いたので近付いてぶん殴つて気絶させます。

「そして、最後に教頭の鎖骨を……」

教頭に詰め寄り、拳を振り上げ

「待て……！」

む?

「何を言っているのですか。大人しく俺の計画通り鎖骨を折られな

さい」

「嫌です！」

むっ

「竹原。このクソジャリは放っておいて、アタシの話を聞きな」

もう少し待ってくれば、鎖骨を折れたのに

「学園長がこんな強硬手段に出るとは思いませんでしたよ」

そうですか？

「ふん！この行動は全部このクソジャリの独断さね」  
「そうですよ」

「何とでも言えます」  
「それよりさつさと縛に付きな。証拠は拳がっているんだからね」  
「そういつつ取り出したのは康太が渡した写真とカセットテープ、  
それに見たことの無い資料でした。」

「こ、これを何処で……」  
「おや、顔色が変わりましたね。  
何の資料何でしょう？」

「何処でもいいさね。それより大人しくしてることだね」  
「学園長つてちゃんと交渉出来たんですね。」

「私より先に東野君が捕まるのではないですか？」  
「俺が？」

「証拠がありませんし、アナタの証言だけでは捕まりませんよ」  
「物的証拠は皆無です。」

「そうですかね？」  
「そうですよ」

「まあ、やってみることでですね。無駄だと思いますが」  
「そうさせてもらいましょう」

道連れなんてセコイ真似にはやられません

「学園長。鎖骨が折れなかったのが、残念ですが後は二人で話して  
下さい」

もう用はないでしょう

「アンタ鎖骨好きだねえ。分かったよ。勝手にしな」  
「変ですかね？」

「有難うございます。それではまた後で」  
「さつさと蹴破った扉から外に出ます。」

帰る途中に康太から連絡がありました。

姫路も島田も島戸の妹も無事だそうです。

良かったですね。

さて、明日も清涼祭ですからね、頑張りましょうか。

31話 俺と校舎と花火 玉屋で校舎破壊(前書き)

投稿出来た

### 31話 俺と校舎と花火 玉屋で校舎破壊

バカテスト

以下の問いに答えなさい

『冠位十二階が制定されたのは西暦（ ）年である』

姫路瑞希の答え

『603』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『603』

教師のコメント

一体どうしたのですか？驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『603』

教師のコメント

君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許して下さい。

東野和樹の答え

『空気を読んで603』

教師のコメント

別に読む必要は無いでしょうか？

今教室で明が姫路と島田を心配しています。

あいつ等は無駄に凶太い精神を持っていると思うので、大丈夫だと思いませんがね。

「安心しろ明。康太と秀、俺で守るんだぞ。大船に乗ったつもりでいろよ」

それに姫路と島田には康太のスタンガンを持たせてありますし

「そうじゃぞ、明久。ワシ等を信用するがよい」

「………任せろ」

康太もヤル気ですから、大丈夫でしょう。

「お、今日は無事だったな二人共」

雄二、早いですね。

「あれ？坂本もう来たの？」

「そういえば明久君も早いですね」

明は何時も遅刻ギリギリで来ますからね

「うん。朝一番でテストを受けてきたからね。ふわぁ……………」

寝むそうですねえ

「今日の決勝であいつ等に目に物見せるんだらう？寝てきたらどうだ」

昨日帰ってから、雄二からメールで連絡が有ったんです。

「ありがとう和樹。じゃあ、喫茶店は任せても大丈夫？」

誰に物を言っているんですか

「任せる。島田に姫路に、秀もいるんだ。人手は十分足りている」

人任せです。

「うむ。任せるのじゃ明久、雄二」

「そうですね。決勝まで寝ていて下さい」

「……………大丈夫」

「そうですね。こっちは任せなさい」

皆優しいですね

「いや、11時頃に起こしてくれ」

「そうだね。一番込み合うお昼時くらいは手伝つよ有り難いですね

「じゃあ俺らは屋上で寝てるからな」

ええ。お休みなさい。

(やっぱり一緒に寝るんでしょうか……………?)

(間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……………)

(いや、それはありえんぞ)

少しは落ち着いて下さい

「さてと。行こうか雄二」

「そうだな。島田、俺たちは抜けるが大丈夫か？」

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦何だからね？」

頑張ってください

「ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ」

「……………優勝」

「出来なかったら、俺が今作っている薬の実験台だ」

前に本で読んだアイツが俺で、俺がアイツというのが面白かったです作っています。

『本気で行ってきます』

何だ詰まらん。

康太？お前に飲ませてやるのか？

二人が飲まないと効果が無いから康太に飲ませたら愛子に飲ませよう。

うん。面白そうだ。

(ねえ、雄二。今度はどんな薬だと思う？)

(分からん。アイツは面白いと感じたら何でも作るからな)

(き、危険な物じゃないよね！)

(それこそ本人にしか分からん)

(と、言うことは……)

(ああ……)

(絶対優勝してやる！)

何だ？不愉快な気配がするぞ？

「さつさと勝って店を手伝え」

もうすぐ時間でしょう

「え？あ、本当だ！雄二、行くよ！」

「ん？ああ」

行ってらっしゃい

さあ、働きましょう

「さて、それでは開店といくつかの  
ええ。」

「……………」(コクコク)

「頑張りましょう」

「そうね」

「さあ、戦闘開始だ」

接客は戦争だと思いました。

なんだ優勝しやがったのか。  
折角の実験材料が……

島田の妹はいつまで明の鳩尾を圧迫する気でしょう？

「おめでとう雄二に明」

「有難う和樹」

「ああ」

「さて、優勝したんだ。早速喫茶店を手伝ってもらおうぞ」  
「うむ。お主等の優勝のお陰で客が増えて大変なのじゃ」  
「さあ、働いて下さい。」

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「もうやらねえからな……」

「……（コクコク）」

足から力が抜けていきます。

客が増えたのは素直に嬉しいですが、多すぎるのも困りものです。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

行つてらっしゃい

「ええっ!!!!どうして!!?」

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょう?」

「すいません。すぐ戻りますので」

「待って!二人とも考え直すんだ!カムバアーク!」

五月蠅いですよ

俺も着替えましょう

「じゃあ、秀。俺らも着替えようぜ」

「うむ。そうじゃのう」

「させるかっ!せめて秀吉と和子だけは着替えさせない!」

タツクルなんぞかますな!疲れてんだから

『なっ!?何をしゃがる(するのじゃ)明(久)』

「……(フルフル)」

康太……そんな捨てられた子犬のような目をするんじゃない  
断れないじゃないか

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

何故、そんなにピンシヤンしているのですか雄二?

ああ、交渉の報告ですね

「なら、その間に着替えを」

「行かせない!秀吉も和子も一緒に連れて行く」  
迷惑です

「雄二、なんとかかしてくれ」

「こちらも頼むぞ」

あ、苦笑しやがった

「ん……面倒だから和樹も秀吉も来いよ。ムツッ  
リーニは当然付いてくるだろうから」

裏切り者

「雄二？手前、後で翔子共々実験体にしてやる」  
「仕方がないのう。着替えは後回しじゃ」

「和樹！なんて恐ろしいことを！」  
「知りません」

「まあまあ、雄二。行こうじゃないか」  
「明？何時の間に離れたんだ？」

「ほれ、康太も離せ」  
「……………分かった」

そんなに残念そうな顔をするな

「やれやれ。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじゃろ  
うに……………」

その意見には賛成できません。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

全く敬意が感じられません。

「お主等、全く敬意を払っておらんじゃろっ」

「そう？きちんとノックをして挨拶したけど？」

そういう問題ではありません

「さて、学園長？昨日の話し合いはどうなりました？」

「ふん？アンタに言う話じゃあないね」

確かにそうです

「迷惑を被った人間としては結末を知りたいですね」

さあ、さっさと吐きなさい。

「多分アンタの考えている通りさね」

それは良かったです

「？何の話をしておるのじゃ？」

疑問ですかね

「なに、昨日からの妨害工作の後始末の話さ」  
それだけです

「和樹。何時から気付いていたんだ？」

だからそんなに警戒しないで下さい

「割と最初からだな。犯人の目星が付いたのは常夏先輩が来たあたりだ」

康太に調べさせたり、自分も康和ネットから洗い出したり大変だったんです。

「それって本当に最初じゃないか！」  
そうですよ

「では、何故その時に捕まえなかったのじゃ？」

「証拠がな、今一出なかつたんだ」

「成程。それで遅れたのか」

納得してくれて嬉しいです。

「つまりどうということ？」

分からなかつたんですか、明。

「つまり犯人は教頭だつて話だ」

メツチャ端折りましたね雄二

「なんだそういうことか」

さて、馬鹿<sup>明</sup>は放つておいて

「・・・・・・・・・・・・・・・・人の気配」

康太？

「チツ！」

扉を明け放つ雄二君と複数の足音が遠ざかる気配がしました。

「やられた・・・・・・・・追うぞ明久！」

「ちよつ……どういうこと雄二」

「盗み聞きだ！あの野郎共はってやがった！」

「つまり？」

「今の一連の会話が録音されたかもって、ことだ。急げ明久！」

「録音！それは不味い！」

下手されたら学園が潰れますね

こんな犯罪臭がする会話を外部に漏らす訳にはいきません。

「二手に分かれて追うぞ！」

ええ。

「じゃあ、雄二と明で校舎側を俺と康太、秀は出口を潰す」

『了解！』

「じゃあ、見つけたら携帯で連絡をくれ！」  
任せて下さい。

「何かあっさり見つかった」

新校舎の屋上で作業している先輩達を見つけました。

「そうじゃのう」

「……あっさりしすぎている」

取り合えず携帯で連絡を

「か、和樹！」

「…………花火」

は？

ドオン！

花火だな。明が撃つたのか？

「玉屋くつてか？」

放送機材全滅ですよ

「あ奴等は全く……」

「……豪快」

ええ。全くその通り

まあ綺麗ですけどね

暫く見物しましょう

ヒュ……ドオン！

わぁお！校舎に直撃です

「やり過ぎだ。馬鹿」

「全くじゃ」

「……面白い」

康太、実はやりたかったり？

さて、見物はこれくらいにしましょう

「打ち上げるらしいから、行こうぜ」

「そうじゃのう。ここで捕まっても馬鹿らしいの」

「……」(コクコク)

出発です

余談ですが、教頭の部屋から学園長関係の資料がゴッソリ出たらしいです。

そんなに学園長に失脚して欲しかったんですね

31話 俺と校舎と花火 玉屋で校舎破壊(後書き)

後残り少しなので今日中に清涼祭終わらせる予定です

32話 清涼祭終了 俺と打ち上げと酒 島田の攻撃、明は即死した(前書き)

短いすね

32話 清涼祭終了 俺と打ち上げと酒 島田の攻撃、明は即死した

バカテスト

『マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【other】（他人）です』

教師のコメント

その通りです。MOTHERから『M』がなくなるとOTHER（他人）という単語になります。こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー（母）から【M】を取ったら【S】（他人）です』

教師コメント

土屋君のお母さんが『MS』でも『SM』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

東野和樹の答え

『マザー（母）から【天然】を取ったら【ドS】（他人）です』

教師のコメント  
もう何も言えません

『かんぱーい』

おお、もう初めてやがる。

「おーい。俺らも入れてくれ」  
寂しいです

「おおー。誰かジュース持ってこいよ」

「分かったー」

テンション高いなあ

「ホラよ」

おや、須川

「有難よ。須川料理出来たんだな」

この祭りで一番の驚きです。

「ああ、昔から母親に習っていたからな」

立派ですね。

「へえー」

「立派じゃの」

「………偉い」

ええ。康太とは大違いです。

ジュースを飲んでみたら、少し味が苦かったです。  
安物何でしょうか？

「と、明に雄二だ」

なんかボコボコになって帰ってきましたね。

「お疲れ」

「先に初めておいたぞ」

「………遅い」

労ったの俺だけじゃん

「ああ、ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさだから顔が面白いことになっているんですね。」

「お主等、もはや学園中で知らぬ者はおらんほどの有名人になってしまったのう」

「………(コクコク)」

「悪い意味で有名人だもんな」

「………コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ………」

五十歩百歩だと思いません。

「あれだけのことやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだって気になるし」

多分、学園長が手を回したんでしょう。

「………これアルコール入っていませんか？」

Fクラスの面々が何時もより三割増しでテンション高いですよ？

しかし、この儲けだと

「机と椅子は苦しいな」

「ああ、精々畳と卓袱台だ」

常夏コンビの所為ですね。

お、姫路も来たな。

明の邪魔にならないように、秀と康太の所に帰りましょう。

「……………和樹！」

康太、何を驚いているのですか？

「和樹」

秀？

「こ、康太！どういうことだ？」

なんでこんなに

「可愛らしいんだ！」

「……………問題が違う」

え、そうですか？

「……………原因はこのジュース」

そっぴいっつ出したのは、さっきのジュース

成程

「酔ったのか……………」

「……………非常に可愛い」

その意見には賛成です

何か猫みたいですな

現在秀を膝枕して、康太と話しています。

秀が気持ちよさそうに寝ているので、いいのでしょう

秀が酒に弱くて助かりました。

主に俺の理性が

「……………島田が」

島田がどうしました？

康太が冷や汗を流しながら呟きました。

「島田がどうした………うわあ」

明がフルボッコにされていました。

「今日は手加減がないな」

「………いつもそう」

そうでしたね

それよりも

「康太？なにもしないから、そのカメラを寄越せ」

笑顔で言ったら断られました。

「どうせ、秀が写ってるんだろ？早く寄越せ」

「………これは売らない」

観賞用とでも言うつもりですか

「どうするつもりだ？」

「………和樹に渡す」

なんて良い人でしょう

「有難う康太。お礼に秀になにかコスプレさせて写真を送ろう」

康太、鼻血は早いですよ。

康太の介抱をして、秀を背負って帰りました。

明の悲鳴が耳に残って恐かったです。

どうやって秀にコスプレさせましょうか？

とても楽しみです。

翌日、翔子が真っ赤な顔をして雄二を引き摺っていました。

理由を聞くと婚姻届が受理され無かったそうです。

「………雄二？いい加減諦めたらどうですか？」

まあ、翔子も少し行きすぎな所もありますが



32話 清涼祭終了 俺と打ち上げと酒 島田の攻撃、明は即死した（後書き）

幕間のネタは、『俺がアイツで、アイツが俺で』、『フェチ議論セーラー？ブレザー？それとも・・・』、『王様ゲーム、平伏せ！』後普通にプール編を書く予定です。  
感想お願いします

幕間 俺とフェチと制服 セーラー？ブレザー？それとも……………（前

高校時代に一度はやりませんでしたか？

自分は元女子高だったので、女子も混ざってというか、女子が主体で話してましたが

しかし、もっと書きたい事が有ったんですが、書けませんでした。残念です

幕間 俺とフェチと制服 セーラー？ブレザー？それとも……………

バカテスト 漢字

以下の質問に答えなさい

『自分の周りに居る人に対する四字熟語もしくは諺をその人の名前と共に書きなさい』

姫路瑞希の答え

『吉井明久 馬鹿な子程可愛い』

教師のコメント

クラスメイトにはつきり馬鹿というのはどうかと思います。

吉井明久の答え

『坂本雄二 鬼

島田美波 天敵』

教師のコメント

諺ですらないじゃないですか

坂本雄二の答え

『吉井明久 厚顔無恥

霧島翔子 鬼に金棒』

教師のコメント

吉井君は嫌われているのですか？

東野和樹の答え

『木下秀吉 千変万化

木下優子 才色兼備  
霧島翔子 神出鬼没』

教師のコメント

霧島さんはそんな人なんですか？

「ねえ、雄二。雄二はブレザー派？それともセーラー派？」

放課後の教室で明君はそんな戯けたことをのたまいました。

「は？なにを言ってるんだ明久？」

うん。俺も聞きたい

「だから、セーラーとブレザーどっちが好きって聞いてるんだよ  
分からない

「スマン。さっぱり分からない」

「俺もだ明」

「ウチの高校はブレザーだけど、姫路さんや秀吉がセーラー着たら  
似合うと思ったから、どう思うかと思って」  
やっぱり

『お前は馬鹿なんだなあ』

あ、ハモツた。

「失礼な！それより質問に答えてよ」  
ふむ。

「ちなみに明はどっちなんだ？」

どっちが好きなんでしょう？

「僕？僕はブレザーさ」

そんな自信満々に答えられても

「なぜだ明久」

「分かってないなあ雄二、和樹。ネクタイでもリボンでも良いんだよ！最高じゃないか！」

熱弁を振るわれても

「じゃあ、俺はセーラーか？」

雄二君？

「雄二！分かってくれたんだね」

嬉しそうですなぁ

「雄二？」

「確かにセーラーを着た姫路や秀吉は見たい・・・・・・・・翔子も見てみたいし」

雄二？見たいなら翔子に頼んでみたらどうですか？

「和樹はどっちが良いの？」

どっちかと言われても

「うーん。俺は

」

ガララッ！ピシャ！

「和樹！」

おや？優？

「どうした？授業は終わったのか？」

扉がボロなんですからそんな全力で開けないで下さい

「うん！秀吉と一緒に待とうと思って来たの」

そうですか

「そういえば秀吉がいないね。何処に行ったの？」

今気付いたんですか

「秀は部活だ。先に帰っても仕方ないから待ってるんだ」

一人で帰っても暇なんです

「それで秀吉の姉さんが来たのか」  
「そういうことです」

「で、和樹？セーラーとブレザーどっちが良いの？」  
「まだ続けるんですか」

「そうだな。和樹はどっちが良いんだ？」

雄二まで

「何の話？」

人の膝の上で動かないで下さい

「ん？セーラーとブレザーどっちが良いかって話」

「和樹はどっちが良いの？」

あれ？食いついた？

「そうだな。俺は」

「俺は？」

「体操着だ！」

『濃っ！！』

そんな驚かなくても

「体操着の何処がいいんだ？」

愚問ですね

「あの活動的などころとか、袖で手が隠れているところとか色々あるだろう？」

「ゴメン。分からないや」

分かりませんか

「和樹？また着たほうがいい？」  
「食いついた！」

「優！着てくれるか！有難う」

普通に嬉しいですね

「和樹。今度秀吉にセーラー着せてくれ」

雄二？お前は翔子に着てもらえ？

「雄二？霧島さんに着て貰ったら？」

翔子は来るでしょうね。そして、着るでしょう

「ば、馬鹿なこと言ってるんじゃないねえ！誰が翔子なんかの

」

「……………雄二」

！何時の間に！

「しよ、翔子？」

「……………セーラー着てくる」

あっという間に見えなくなりました。

「あ！待て！翔子」

雄二も翔子を追って出て行きました。

「あの二人は見てると面白いね」

ええ。そう思います。

「お似合いだと思っただけど」

「雄二はそろそろ諦めるべきだと思っがな」

捕まるでしょうね

「明久君！」

「アキ！」

今度は姫路と島田ですか

「どうしたの？二人共」

どうしたんでしょう

「一緒に帰りましょう」

「一緒に帰るわよ」

おやおや

「だってさ明」

「じゃあね吉井君」

「え？」

未だ状況がつかめていないらしいです

「さあ、早く！」

「行くわよアキ」

島田が明君の右腕を決めているように、見えます。

「グワツ！美波？僕の腕はそんなに曲がらないよ？」  
メツチャ既視感デジャブ

「明くまた明日な」

「吉井君またね」

笑顔で見送ります

何故か頭の中にドナドナが流れてきました

「台風みたいだな」

「本当にね」

顔を見合わせ笑いあう

さて、秀が来るまで待ちましようか

「和樹はどうして体操着が好きになったの？」

？

「ああ、さっきの話か」

「そうよ」

うーん

「清涼祭の時に見た優の体操着が、一目見て気に入ったんだ」  
それだけです

「えっ！」

嬉しそうですねえ

「和樹、有難う」

お礼を言われました

「俺が気に入ったただけだからな」

「それでも嬉しいの」

そうですね

「和樹！今終わったぞ」

おや、タイミングが悪いのか良いのか？

「お疲れ秀」

「秀吉、お疲れ」

「うむ。さあ帰るのじゃ」

そうですね。帰りましょう。

「優、帰るぞ」

「そうですね」

立ち上がり、鞆を持って歩き出します。

この後暫く優が家でも体操着で過ごしてくれました。タダのジャージでは面白く無かったので非常に嬉しいです。

結局、翔子はセーラー姿で雄二に迫ったらしいです。携帯に『俺はもうダメだ』というメールが届いたときは何事かと思いましたが



幕間 俺とフェチと制服 セーラー？ブレザー？それとも……………（後

それぞれの姿は皆様の想像力にお任せします。

幕間 俺とプールと水着 準備編、プールサイドにて（前書き）

プール編長ええ！

結局前後編です。

幕間 俺とプールと水着 準備編、プールサイドにて

土屋と工藤の性生活小噺

「・・・・・・・・・・・・・・・・土屋と」

「工藤の」

「性生活小噺」

「と、さつき拉致られた東野です」

「はい。このコーナーでは、日々の生活に根差したちょっとエッチな小噺をボクこと工藤愛子とムツツ」

「（シカト）」

「・・・・・・・・土屋康太」

「ムツツリー二君が紹介していくという物です」

「・・・・・・・・最近、本名を呼ばれ無い・・・・・・・・」

「そうか、康太。頑張ってくれ。じゃあ、俺はこれで」

（ガシツ）「では、今日のテーマですが」

「オイイイ！人を拘束しつつ、笑顔で話すんじゃねえ！」

「・・・・・・・・和樹、頑張れ」

「『シャワーの正しい使い方』です」

「・・・・・・・・！！（ドバツ）」

「待て、愛子。康太が倒れたぞ！」

「ええっ！まだタイトルを言ったただけだよ!？」

「・・・・・・・・構わず続ける」

「大丈夫か康太」

「う、うん。ちょっとエッチなお話ということなので、ボクの体験談をお話します。実は昨日、学校帰りに急に雨が降ってきて」

「・・・・・・・・っ！（ダラダラ）」

「康太、大丈夫か？」

「運の悪いことに、その日は部活でふざけていたらプールに着替えを落としちゃって、下着がビショビショになっちゃったんだ」

「・・・・・・・・！！（ダバダバ）」

「康太、その出血量はヤバくないか？」

「下は流石に我慢して穿いていたんだけど、上は  
てムツツリー二君！？もうニリッターくらい血が出ているみたい  
んだけど本当に大丈夫なの！」

「……構わずに、続けるんだ……っ！！」

「ええーと、輸血パック、輸血パック」

「そ、それで、雨でシャツが透けてきちゃって」

「……っ！！（ブシャアアア）」

「康太……！？」

「やっぱりこの企画無理があるよ！まだシャワーの話に入ってい  
ないのに相方がグロッキーになってるんだもん！」

「……死しても尚、魂で聞き続ける……っ！」

「あ、救急車一台お願いします」

「そんなの無理に決まってるでしょ！？とにかく今回はこれで終わ  
り！それでは次回お会いしましょう！お元気でー！」

「……続きが気になる」

『先ずは病院！』

「プール掃除？」

本を読んでいたら、そんな事を言われました。

「ああ、今週末にプール掃除をするんだ。和樹も来ないか？  
面倒だけど」

「分かった。暇だから手伝いに行くぞ」

明、ガッツポーズは見えない所でやりなさい。

「本当かの和樹！」

何故そんなに嬉しそうのですか？

「康太も行くんだらう?」  
康太の方に向くと嫌そうな顔されました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・面倒」

確かに

「ちなみに、島田と姫路にも、声をかけるつもりだ」

「・・・・・・・・ブラシと洗剤を用意しておく」

変わり身の早いことで

「おい、島田に姫路!」

雄二の声はよく響きますね。

「何ですか坂本君?」

最近、姫路の料理が恐いから近付きたくないんだが

「何の用坂本?」

島田は明をボコボコにでもしてくれ、被害がないから

「二人共今週末暇か?学校のプールが貸切で使えるんだが、良かったらどうだ?」

「え・・・・・・・・?」

見事に固まったね

「あ、さては二人共予定があつたりする?」  
違うと思いますよ明

「プールって水着よね?」

「水着ですよね」

水着以外で泳ぐ人間は日本に中々いないと思いますよ

「そういえば秀はどんな水着で行くんだ?」

楽しみですね

「そういえばいい加減に新調せねばならんのう。良い機会じゃから

「買いに行くかの」  
「楽しみが増えました」

「明久に見せるらしいぞ？」  
「まあ、そうもなるかな？」

「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」

「そ、そうですよ！木下君はズルいです！」

「お主等は何を言っておるのじゃ？」  
「分かりたくありません」

「雄二、翔子はどうするんだ？」  
「婚約者の霧島翔子です。」

「そうだね。霧島さんにも声をかけておいてね」

「……言われなくてもそのつもりだ」  
「おや？珍しい。」

「雄二、珍しいな」

「雄二も大人になったんだね」

「いや、そういう問題じゃない」  
「嫌そうですねえ」

「いいか、想像してみる明久、和樹。俺の立場で、後々になってからこのことが翔子に知られるという状況を」

「？ふむ。翔子に秘密で雄二が他の女の子と遊んだのがバレたら……」

「……」

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「コンクリ詰め……いや、南極か北極……」

「俺の死体の処理方法まで想像する必要はないが、まあそんなところだ」

雄二、冥福を祈りましょうか？

「と、とにかく全員オツケーのようだな。んじゃ、土曜の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」  
声が震えてますよ雄二

さて、週末です。

「おはよー。絶好のプール日和だね」

随分と爽やかな笑顔ですね

「おはようじゃ明久。良い天気じゃな」

「おはようございます明久君。今日は良い一日になりそうですね」

「ああ、おはよう明」

「お早う。吉井君」

優も誘ったので一緒に来ました

「お、康太。お早う」

「ムツツリーニ。おは」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」  
まさに鬼気迫るですね

「康太、無駄だ。辞めておけ」

「そうだよ、ムツツリーニ。辞めなよ」

「……………何故？」

いや、何故って、あーた

「鼻血出して倒れるに決まっているんだから」

「……………舐めるな」

言いながら大き目のスポーツバッグを取り出して俺たちに中身を見せる康太君

「……………輸血の準備は完璧」

「うん。男らしいよ。康太」

「最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」

鞆の中身は大量の輸血パックでした。

足りるかな？

……………足りるよな？

「ねえ和樹。何時もこんな感じなの？」

「そうだな。何時もこんな感じだ」

楽しいですよ。

あ、今秀の水着が男物と聞いて、明と康太が絶叫を挙げたところです。

「私には付いて行けないわ」

そうかなあ

「慣れたら楽しいぞ」

慣れるまで時間がかかるかな？優は結構真面目だし

「お、島田の妹だ」

確か葉月だったかな

「へえ、島田さんの」

的確に明の急所を抉っていますね。

将来が楽しみです

「そつえば代表と坂本君は？」

「ん」。もうすぐ来るんじゃないか？鍵を借りに

って、来

たな」

噂をすればですね

雄二と翔子が並んで歩いてきました。

「お、秀吉の姉さんも一緒か」

「……優子も来たの？」

「ああ、誘ったら暇だったらしくてな一緒に来たんだ」

「代表、今日は楽しみましょうね」

嬉しそうですね

「んじゃあ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けたからついていってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」  
「じゃあ、着替えますか。」

ん？

「葉月ちゃん。お姉ちゃんに付いていきなさい。明に襲われても知らないよ？」

「失礼な！いくら僕でも小学生は襲わないよ！」  
「そうかなあ」

「バカなお兄ちゃんにならないんですけど、刀のお姉兄ちゃんが言うなら、お姉ちゃんについて着替えてきます」

「なんだ？今、聞き捨てならない呼び名があつたぞ？」

それに、台詞もかなり危ない物があつたぞ？

「それに秀吉も女子更衣室だよ」

また、バカなことをほざいていますね。貴方は

「ワシは男じゃと言っておるうに……」

しかし、秀と一緒に着替えたら康太が逝く気がしますね

「ほら、遊んでないでいくわよ。葉月、木下」

島田もか

「優、頭抱えても解決しないぞ？」

「うめかないで下さい」

「……そ、そうね。じゃあ、秀吉が別の所で着替えるってことかどうかしら？」

「それは良い考えだね、秀吉のお姉さん」

「……私は何時名前を呼んで貰えるようになるのかしら？」

「諦めるべきだと思いますが」

「和樹。ワシは男子更衣室で着替えたいのじゃが……」  
「諦めて下さい」

「秀、我慢しろ。俺も頭が痛い」

「取り合えず、秀と優と別れて更衣室に向かいます。」

「康太、逝く覚悟は出来ているのか？」

「友の最後を看取る準備をしなくては」

「……心配ない」

「おや、以外に平気そうですね」

「……256パターンの出血を確認した」

「致死率100%じゃないか（じゃねえか）」

「本当に逝く気がしてきたな」

「お、誰か来たぞ」

「雄二の声がしたので、更衣室の方に視線を向けます。」

「……葉月ちゃんだよなあ」

「どどどどうしよう雄二、和樹！あれってスクール水着だよね！そんなもの着た小学生と遊んでいたら逮捕されたりしないかな!?」  
「……………弁護士を呼んで欲しい（ポタポタ）」  
「あのかな……………落ち着け二人共。小学生の水着にそこまで取り乱すな」  
「馬鹿言っていないで、相手してこい」  
もう疲れました

「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」  
「ああ、葉月ちゃん、少し待ってね」  
馬鹿二人の相手をしなくては  
「分かりました」

素直な子は貴重です  
「懲役は二年程度で済みそうだね」  
「……………実刑はやむをえない（ポタポタ）」  
「お前等冷静なフリをしてるだけだろ」  
「寧ろ捕まってしまう」  
さっさと戻ってきなさい

「刀のお姉ちゃん。似合いますか？」  
だから、その呼び名はなんですか？  
「とても良く似合っているが、その呼び名はなんだ？」  
「はいっ。有難うございます。葉月が一番初めに見た時はお姉ちゃんだったのに、次に見たときはお兄ちゃんだったので、こう名付けました」  
納得しました

「葉月ちゃん。バカなお兄ちゃんに相手して貰いなさい」  
疲れた

まあ、今の明には相手している余裕は無いと思いますが  
「分かりましたっ」  
元気なのは良い事です。

「ん？和樹、何処に行くんだ？」

「疲れたから隅で本でも読んでるよ」

「……俺はもう少し頑張ってみる」  
無駄だと思いますが

「そうか、じゃあ全員揃ったら声をかけるぞ」

「そうしてくれ」

隅に陣取って本を読み始めます。

凄いな翔子、まさに流れるような動きだ。  
攻撃対象が雄二の目だという点を除けば

「……和樹？」

誰だ？

「ん？ああ、優か。水着似合ってるな」

ワンピースタイプの水着を着て、健康的な印象を与えてくれる優

「本当！有難う和樹」

花が開いたような笑顔を見せてくれました。  
いいですね

「しかし、もう少し静かに出来んのか？」

姫路が来てから騒がしくて堪りません。

「姫路さんは凄いわね」

まあ、凄いかね

「俺は優位が丁度いいんだが」

「有難う和樹」

「康太、輸血間に合ったんだ」

「土屋君？死んだんじゃないの？」

地味に毒を吐くんだね、優。

「あ、秀も来た

？」

「秀吉？」

秀が来たんですが、何と云うか

「あれ、女物だよな？」

「………そうよ」

認めたくないんですね優

そんな気持ちも露知らず、秀吉君がコチラに来ました。

「和樹！どうじゃ！これで男に見えるかのう」

見えませんね

「秀、それは女物だ」

「そうよ秀吉」

溜息を吐きながら、答えます。

まあ、似合っていますか

「秀、似合ってるから良いじゃねえか」

「ええ。似合ってるわよ。秀吉」

そんなに凹まなくても

「そ、そうか！似合っておるのじゃな！」

途端に上機嫌になりました。

「……………和樹」

翔子がこちらに近付いてきました。

「どうした翔子？」

「……………雄二が褒めてくれない」

悲しまなくてもいいですよ

「アイツは照れ屋なだけだ、気にしなくてもいいぞ」

「そうよ代表。気にしなくても大丈夫よ」

「そうじゃ、雄二は照れておるだけじゃ」

似たような認識の様です

「……………安心した」

そう言っつて、雄二の方に近付き、また目を潰してました。

……………雄二、死ぬんじゃないかな

康太の冥福でも祈っつていようか

幕間 俺とプールと水着 終了編 頂きます。(前書き)

短いすねえ。

幕間 俺とプールと水着 終了編 頂きます。

「お前等は何がしたいんだ？」

現在進行形で雄二と翔子のデスマッチが開催されています。

まあ、翔子の一方的な攻撃なんですが

「……………雄二が他の人を見ないように」

「お前はそれで人の目を潰すのか!？」

それが翔子の愛なんでしょう

「和樹は泳がないのか？」

「ああ、周りを見ている方が楽しいからな」

雄二と翔子の掛け合いや康太の行動は面白いです

「霧島さん」

明？

明に呼ばれて泳いで近付く翔子

何か話してるなあ

「どわっ!？」

横で一息吐いていた雄二君が空に舞ってプールに叩きつけられました。

俺も巻き込んでね!

『あゝきゝひゝさゝ』

「わ、和樹。ゴメンなさい!」

『問答無用!』

「……………雄二、逃がさない」

こうして、明と俺&雄二と翔子の水中鬼が始まった。

「あれ?プールを使ってるのは誰かと思ったら代表だったの?」

ん？誰だ？

「……………愛子？」

愛子か

「和樹君も久しぶりだね」

そうか？

「昨日も会ったぞ」

「あはは、そうだったけ？また遊ぼうね」

遊んだっけ

「愛子、何して遊んだの？」

待って、優子さん

「ハツハツハツ、優？俺の関節はそっちに曲がらないぞ？」

「うむ。和樹。何をしたのじゃ？」

話を聞いて下さい

「愛子。冗談はやめてくれ。俺は死にたくない」

爆笑してないで、助けてくれ。

「ああ、お腹痛い。うん。冗談だよ、安心して優子に

木下君」

良かった。命が繋がった。

「そうだ、ボクも泳いでいい？」

良いんじゃないかな

「覗くなら、バレないようにね」

何だこの悪寒は！

「和樹、動いたらどうなるか、分かってる？」

「和樹、怪しい動きを見せるでないぞ？」

身体が恐怖で動きません

「和樹、お腹空いたね」

「ん？もうそんな時間か？」

「確かに腹減ったな」

「そうですね、なら」

嘘でしょう！

「ちょっと失敗しちゃって人数分用意できなかったから黙っていたんですけど」

「ずっと黙っていて下さい。」

「お、姫路も作ってきたのか。俺も少しは持ってきたんだ」

鞆から重箱を取り出して皆に見せます。

「……助かった？」

「あ、そうなんですか！私はワツフルを四つ作って来たんです」

ああ、笑顔が眩しい

「じゃ、じゃあ、姫路さん！まずは和樹の弁当と一緒に食べようよ！」

ナイスフォロー

「そ、そうじゃな。食べるのでしょうか」

「……楽しみ」

「ねえ、和樹」

「優？どうした？」

「姫路さんの料理が出てきた瞬間に皆固まったけど、どうしたの？」

うーん

「王水入りの卵焼きや硝酸、酢酸入りの肉じゃがを食べたいのか？死ぬかと思いました。」

「それは料理下手ってレベルじゃないわね」

「しかも、味見しねえんだ」

あ、絶句した。

弁当は好評の用でしたから、もうさっさと帰りたいです。

プール掃除して帰りました。

週明けに西村先生に呼び出されました。

「何の用ですか？」

「東野、プール掃除御苦労だった」

おや？

「いえ。大したことではありません」

まあ、疲れましたが

「では、東野。何故プールが破損しているんだ？」

破損？

「ああ、それは明と雄二が水抜きした後、セメントを流しまして・  
・・・」

「そうか。あの馬鹿共が・・・」

鉄人先生降臨です。

走り去って行って、暫くしたら明、雄二の悲鳴が響いてきました。

**幕間 俺とプールと水着 終了編 頂きます。(後書き)**

さて、次回やっとな強化合宿編です。

第一問

傍線部『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。

父が沈痛な面持ちで私に告げた。

『彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい』

その話を聞いた時、私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。彼のことはなんとも思っていなかった。彼がどうなるうとも知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ち揺れるのだろう。

姫路瑞希の答え

『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたという事です。

東野和樹の答え

『私にとって彼は下』

教師のコメント

下ですか？

吉井明久の答え

『半』

教師のコメント

半？

坂本雄二の答え

『身のように』

木下秀吉の答え

『大切な存在じゃったのじゃ』

教師のコメント

4人で一つの答えですか。不正解ですが、良く考えましたね。

土屋康太の答え

『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント

その認識はあんまりだと思いません。

いつも通りに登校して靴箱を開けると手紙が入っていました。

「ん？何だ？」

手紙を取り出して、眺めてみる。

「和樹、どうしたの？」

「どうしたのじゃ？」

優に秀、大したものではありません

「ああ、手紙が入っていた

俺の関節が！？」

行き成り決めることは無いと思います

「これは私達が責任もって燃やすわ  
え？燃やすんだ

「まあ、待て。俺に読ませてくれ。恋文と決まったわけではないだろ」

果たし状かもしれない

そういえば最近Fクラスの面子から来ませんね

無い方がいいんですけど

「確かにそうね」

納得してくれましたか

「じゃが」

何でしょう？

『読み終えた後に燃やすわ(のじゃ)』

燃やすことは決定事項なんです

「わ、分かった」

手紙を受け取り封を切ります。

さて、中身は？

『あなたの秘密をバラ撒きます』

何と素敵な脅迫状でしょう。

「・・・・・・・・新パターンだな」

開いた口が塞がりません

秀と優に手紙を渡し、教室に向かいます。

・・・・・・・・・・・・・・・・聞こえませんかよ。後ろからの歓声なんて

チラッとみたら、俺のメイド服姿とチャイナ姿でした。

『最悪じゃ

っ！！』

おや？明の悲鳴が聞こえますね

教室に着いて暫く本を読んでいたら、明が帰ってきました。秀に聞いたら凄い良い笑顔でこっちを見てきたので、恐くて聞けませんでした。

「ちよつと康太と話してくる」

席を立つて康太のいる場所を目指します。

「康太、ちよつといいか？」

「和樹、俺の方が先約だ」

おや、雄二

「雄二も用があるのか？」

珍しい

「……………雄二の結婚が近いらしい」

おやおや

「引き出物は何が良い？」

目出たいですね

「俺は未だ結婚しねえよ！」

そうなのか

「で、和樹はなんのようだ？」

忘れていた

「そうだ、康太。俺（和子）のメイド服姿かチャイナ姿売ったか？」

「……………売っていない」

目を逸らすな康太

「あれ？雄二に和樹、なにしてるの？」

明、いらっしやい

「多分、お前と同じ目的だ」  
脅迫され仲間って嫌ですね

「え？和樹もなの？」  
何故、雄二には聞かないんですか？

康太に捜査は任せて席に戻りましょう。  
西村先生鉄人も来ましたし

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席に着いてくれ」

冊子が配られたので、パラパラ捲っていたらFクラスの集合場所が書いてありません。  
どういうこと？

「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは  
地集合だからな」  
現

『『案内すらないのかよっ！？』』  
全級友が突っ込んだ（涙した）

納得しました。

### 34話 俺と移動と久保 優？それは拉致って言うんだぞ？

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所、何か素敵なことが起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できることを願っています』

東野和樹の日誌

『朝、優を学校まで送ってから、何故か、Aクラスのリムジンの中で久保と過ごした。場所は田舎だが風情があり、やる気になった』

教師のコメント

何が有ったのか気になりますね。久保君とどのような話をしたのですか？

土屋康太の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだっただろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二の日記

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの匂いがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と灌漑深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませんね。

「準備はいいか？」

今日は合宿です。

用意の確認をして出発です。

楽しみです

「良いわよ」

「良いのじゃ」

良いそうなので行きましょう。

優達Aクラスは学校に集合で俺達は現地集合なので急がないとキツインです。

んで、学校の近くにまで優を送って行きました。

……秀と優が笑顔〓俺の生命健康が危険に晒される、と最近になって気付きました。

……遅い気がします。

「じゃあな、優。合宿所で」

ここからなら駅に近いので間に合つてしょう。

ガシィ

何？

肩を掴まれました、秀に

何で？

「どうした秀、早く行かんと間に合わんぞ」

電車が出てしまう

「安心するのじゃ和樹。和樹とワシはAクラスのバスで行く事になつておるからの」

はい？

「何故だ？」

説明して下さい。

「あ、東野君に木下君。早くバスに乗って下さい」

高橋先生、今の状況がオカシイと思っっているのは俺だけですか？

「実力行使に出るわよ（ボソ）」

恐ッ！

「分かった！だから腕を捻るんじゃない！俺の関節はそっちには曲がらないぞ？」

釘を指しておかないと本当にやってくるからな、この姉妹は

さあ、嫌々ながらバスに乗り込み目的地に向かっています。

「やあ、東野君。君とこうやって喋るのは初めてだね」

そうですね。初めてですね。

「ああ、そうだな」

今現在（進行形）　ここ重要！

俺と久保の二人で向かい合って座っています。

秀は！優は！それが愛子！翔子でもいいから！

誰か、コイツの代わりに座ってくれ！それが一人にしてくれ！

「僕はね、東野君。君と話してみたいと思っていたんだ」

良かったですね。夢が叶って

「そうか、俺は早く帰りたくなってきた」

疲れた

「ホームシックかい？意外だな」

違います

「で、話ってなんだ？久保」

多分、明関連だろうな

「君はもう少し世間話でも、しようと思わないのか？」

全く思いません。

「そうかい、なら本題だけど」

「ふむふむ」

「僕は一人の人間に好意を持っている」

どストライクかよ！

「そんな嫌そうな顔をしないでくれないか」  
だって

「お前が好きなのって」

「ああ、吉井君だ」

どうしよう？会話したくない

「そ、そうか。で、俺と何の関係があるんだ？」

明とそんなに会ってる訳じゃないし

「聞いてもらいたかっただけさ……………」

と言って自嘲気味に苦笑する久保

……………どうしようキモい

「で、告白とかしないの？」

そのシーン押さえて後で再生しよう

面白そうだ

「告白だって！そんな恥ずかしいこと……………」

男同士っていうのはこの際見なかったことにして

「しかし、お前のやってることってストーカーだよな？」

陰から見守る何て生易しいレベルではありませんが

「失敬な、監視していると云ってもらおうか」

どっちにしても犯罪者です

てか、さらに悪くなってませんか？

「僕はね。東野君」

聞きたくなくなってきた

「何だ？」

「吉井君と仲良くなりたいたいと思っている」

なれば良いじゃないか

「なればいいだろう？」

「それが出来れば苦労はしないさ」

？

「普通に話かけたり、餌付けしたり色々あるだろう？」

餌付けが一番確実かな

「彼の顔を見るだけで今は充分さ」

本人がそう言うなら何も言えん

というか、言いたくない

「和樹、終わった？」

もっと早く来て欲しかったな

「終わった、のか？」

微妙ですね

「ああ、話を聞いてくれて有難う東野君」  
席を立てて個室から出て行く久保

「優。何しに来たんだ？」

「お腹が空いたから、一緒に食べようと思ってきたの」  
そうですか

「秀は？」

「もうすぐ来るわよ」  
じゃあ、待ちましようか

「和樹、入るぞい」

どうぞどうぞ

「和樹君。お邪魔するよ」

おや？

「……………皆で食べる」

翔子も

「まあ、大勢で食った方が美味しいからな」

「じゃあ」

弁当を出して、箸を構えて

『頂きます』

飯を食って暫く談笑していたら合宿所に着きました。



34話 俺と移動と久保 優？それは拉致って言うんだぞ？（後書き）

久保ってこんな喋りかたでしたっけ？

好きなんですけどね、久保利光

35話 俺と覗きと間接 冤罪です？(前書き)

高橋先生登場！しかし、絡みようがありません。

### 35話 俺と覗きと間接 冤罪です？

強化合宿一日目の特に印象に残った出来事を書いて下さい。

吉井明久の日記

『ある人の作った弁当を食べて綺麗な川でおじいちゃんと話した後、姫路さんと美波に拷問を受けた』

教師のコメント

三途の川ですか？

坂本雄二の日記

『冤罪で翔子にアイアンクローを喰らった』

教師のコメント

そつえば覗きがどうのこうの言っていましたね。冤罪なんですか？

東野和樹の日記

『合宿所に着き本を読んでいただけなのに、間接を破壊されそうになった』

教師のコメント

君達は随分とハードな生活を送っているんですね。

合宿所に着きました。

明君がさつき『済まぬ』と誰かに謝っていました。

「明、良く帰ってこれたな」

雄二君が随分と心配していました。

「ところで、ここは合宿所？」

何か目が虚ろですね

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園  
が買い取って合宿所に作り替えたらしいぞ」

その金をFクラスの畳の張替に使いたいです。

「む。明久、無事じゃったか！良かったのう……。お  
主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと  
……。」

生き返って良かったです

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」

「うむ。ムツリーニも含めた五人でこの部屋を使うのじゃ」

問題児を故意（悪意）に集めたと思えませんか

「そういえば康太は何処に行ったんだ？」

合宿所に着いてから見てません

「そうだね、覗き？盗撮？」

友人にその扱いは酷いですね

「友人に対してそんな台詞がサラッと出てくるのはどうかと思うの  
じゃが……。」

ガチャ

おや

「……。ただいま」

康太、お帰りなさい

「おかえり、ムツリーニ」

「康太お帰り、どうだった？」

収穫はありましたか？

「……。犯人を特定できる情報を得た」

おや、朗報ですね

雄二、聞きたいならもつと近くに來たらどうです？

「誰だったんだ？」

「・・・・・・・・・・」犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

そこまで分かれば特定できるでしょう

ダメっぽいので、本を読み始めました。

明？秀は女子では無いですよ。

ドバン！

「全員手を後ろに組んで伏せなさい！」

女子がゾロゾロと入って來ました。

嫌な予感がヒシヒシとします。

逃げるのも面倒なので本を読み続けます。

「な、なにごとじゃ！？」

「木下はこつちへ！そつちのバカ三人は抵抗をやめなさい！」

バカ三人？

そちらを向くと明、雄二、康太が貴重品だけ引っ搦んで窓に向かっています。

「なぜお主等は咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ・・・・・・・・・・？」  
突っ込み所が多すぎます。

「仰々しくゾロゾロと、一体何の真似だ？」

逃げるの諦めたんですね。

「和樹はいつまで本を読んてる気なの？」

面倒ごとが終わるまでです

「ある意味男らしいね」

「ああ、何故逃げないで本に集中出来るんだ？」

「……異常」

好き勝手言ってますね。

「逃げてても無駄だからな」

諦めると身体が全く動かないんですね。

「で、一体何の用だ優？下らない用なら怒るぞ？」

人が趣味に熱中しているのに邪魔し腐って

「えーとね、覗き疑惑があるの」

へえ？

「下らん」 俺

「そうだね」 明

「………冤罪」 康太

「そうじゃな」 秀

「全くだ」 雄二

『『嘘よ！』』

さて、拷問器具が出てきましたよ

「お前等、少しは人の話を聞こうと思わんのか？」

「どうせ言い訳でしょ！」

うわっ！腹立つ！

「雄二、お前の口八丁で」

雄二の方を向くと

『………浮気は許さない』

『翔子待て！落ち着ぎゃあああああっ！』

私刑執行中でした。

「じゃあ、アキも」

「そうですね。明久君も」

どっから出したんでしょう？

……駿河問いだっけか？

……石抱だっけ？

違ったかな

康太、関係無いよな

「和樹」

「優」

腕を持たないで下さい

「後で言い訳を聞くわ」

「聞く耳は？」

「無いわ」

素晴らしい笑顔です

「待て、優。そっちには曲がらぎゃあああああっ!?!」

冤罪にも程があると思います。

「雄二、大丈夫か？」

さつきから無言で虚空を睨んでいます。

身体を動かす度に嫌な音がします。

……理不尽ですね

「……上等じゃねえか」

何か決意したらしいです

「何をするつもり雄二？」

嫌そうですねえ

「本当に覗いてやろうじゃねえか!」

壊れてきたなあ

「……………(クイクイ)」

「康太、どうした？」

「……………さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「なんじゃと？それは本当かの？ムツツリー二？」

「……………間違いない」

「そうか。それは嬉しい事実だな」

「そうじゃな」

「……………(コクリ)」

犯人への手掛かりが手に入りました。

「つまり、どういうこと？」

「あー、和樹。説明してやれ」

面倒

「分かった。説明するからこっちに来い、明」

「え？あ、うん」

素直ですねえ

説明中

「分かったか？明」

「うーん。用はその火傷の痕がある人を探すんだね？」

まあ、そうです。

「理解したか、明久？」

「大体は分かったよ」

大体何だ……………

「じゃあ、行くぞ」

雄二の声に応じて席を立ち部屋を出て行く。

「さあ、雄二？どうするつもりだ？」

正面突破は厳しいですよ

「何を言ってるんだ和樹、正面突破に決まっているだろう？」  
「そうかい、期待した俺が馬鹿だったよ」

「君達、止まりなさい！」

おや、布施先生

「雄二、どうする？」

「構わん！明久、ブチのめせ！」

「そこは構いなさい坂本君！私は一応教師ですよ！」

「了解！一撃でケリをつける！」

「吉井君も了解じゃないでしょう！？」

明と雄二は生き生きとしますね

「この前の補習の怨みをくらえっ！」

『思いつきり私心で行動しておらんか（るじゃねえか）！？』

あんまりだ

「ひいひいっ！さ、試験召喚<sup>サモン</sup>」

おやおや

そつえば教師の召喚獣も物理干涉能力がありましたね

「こつなりや徹底抗戦だ！布施センを召喚獣ごと叩き潰すぞ！」  
やる気ですねえ

さて、少しは動きましようか

「秀、明、康太、雄二。先に行け」

「え？」

「あ？そついうことか！」

「……任せた」

「和樹、任せたのじゃ」  
そう言つて駆け出す面々  
「あ、待ちなさい!」

「いえ、先生には暫く遊んでもらいます。試験召喚<sup>サモン</sup>」  
召喚獣を出して行く手を阻む

「東野君、君はこんなことに参加しないと思つていましたが」  
そうですか？

「自分の為でもありませんからね」  
そう言いつつ召喚獣を走らせ一刀の元に斬り伏せる。

「相変わらず滅茶苦茶ですね」  
「いえいえ、高橋先生程ではありませんよ」  
一体何時現れたのか召喚獣の鞭で俺の召喚獣を拘束している高橋先生  
………何で鞭何でしょう？

ちなみにこの人の総合科目の点数は俺より上だ、絶対何か憑いてるに違いない

「さて、坂本君も木下君も土屋君も捕まつたみたいなので、そろそろ行きましょう」  
捕まるの早いなあ

「はいはい」  
「ハイは一回」  
「はい」

召喚許可を取り消したらしく、召喚獣が消えて行きます。  
抵抗するのも馬鹿らしいので大人しく付いていきます。

結局、西村先生に明、雄二、秀も捕まつたらしい。  
………三対一で勝利つて何処の化け物ですか？

英語の反省文を書いた後、出された課題をさっさと終わらせて部屋に帰って寝ました。

35話 俺と覗きと間接 冤罪です？（後書き）

高橋先生の総合科目の点数は和樹君の点数＋千点＝一万点です。

36話 俺と覗きとFクラス 馬鹿の割合が増える(前書き)

清水美春と会話させてみました。

### 36話 俺と覗きとFクラス 馬鹿の割合が増える

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってAクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Aクラスと一緒に勉強することで姫路さんに得られるものがあつたようで何よりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう。

東野和樹の日誌

『昨日、高橋女史に負けたのもう一度勉強をやり直した。今日にでも雪辱を晴らしてやろうと思った』

教師のコメント

高橋先生に勝つのはかなり難しいと思いますが、努力は認めます。

土屋康太の日誌

『前略。夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使うものではありません。

吉井明久のコメント

『全略』

教師のコメント

あまりにも豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

「……………雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな、クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

相変わらずラブラブですね

流石はFクラス、他人の幸せは許せないと

あ、こつちも他人のこと言えませんか

「秀、優。降りてくれ、馬鹿共が獲物を構えだした」

カッターナイフは凶器だと言っているでしょう  
渋々降りてくれました。

明、これくらいは分かって下さい

「あ、代表に優子ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

愛子、いらっしやい

「工藤さん、だっけ？」

ああ、そういえば明はそんなに会ってませんね

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

こつち爽やかな笑顔は好きです。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物は何となく和樹君の作ったお菓子とシ

ヨークリームだよ」

それは特技ではありません

餌付けしたつもりもありません

「ん？どうしたの吉井君、和樹君？」

え？俺も？

「愛子、もう少しソフトに言えんのか？」

「工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その・・・

・・・

興味があるんでしょう？

『目があああ！？目が痛えええええ！？』

何だ？目に致命的なダメージが有った気がするぞ？

横で雄二ものたうち回っているし、一体何が？

「流石は代表直伝の眼潰し、恐ろしい威力だわ」

「・・・・・・優子、その調子」

突っ込ませてえ！

会話がおかしいし、翔子直伝の時点で人体に有害なダメージが有ると気付いて下さい。

お願いします

そして、お前等俺たちを放置して話すな

「康太、あれ何だ？」

「・・・・・・小型録音機」

へえ？

「愛子、随分面白そうな物持ってるな」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば

そういつて機械を弄る愛子

」

ピッ 《愛子》 《もっとソフトに》 《やらない？》

何故俺の声が？てか、後半は明だな

『かゝずゝきゝ？』

何て恐ろしいことを！

「待て！今のは明らかに合成で、俺の腕が！？」

人体には不可能な曲がり方をしている気がします

「あ、愛子！助けてくれ！」

今日が命日かもしれません

「優子も木下君も落ち着いて、今のは冗談だから」

助かった？

「む、仕方ないのう」

「そうね」

『この場は止めにするわ（のじゃ）』

何て恐ろしいんだ！

「同性愛を馬鹿にしないで下さいっ！」

清水美春？

明は一体何を言ったんだ？

「み、美春？なんでここに？」

「お姉さまっ！美春はお姉さまに遭いたくて、Dクラスをこっそり  
抜け出してきちゃいましたっ！」

人のこと言えないけど勉強しろよ

「くっ、東野バリアー」

「お姉さま！こんなもので美春の愛は止まりません！」  
物扱いされた

「待て、清水」

「何です豚野郎」

名前で呼んで下さい。

「島田のどこが良いんだ？」

美人だとは思いますが

「良い質問です。東野和樹、先ず第一に

「第一に？」

「あの男らしい胸！」

え？

「次に、あの意志の強い眼！」

ふむふむ

「最後にポニーテールです」

堂々としてますね

「分かりやすく、三つに纏めましたよ。東野和樹」

有難うございます

「ふむ。ということはあの山頂には興味がないんだな？」

姫路を指差す

「当たり前です。私はペツタンコに興味があるんです」

「成程、絶壁が良いんだな？」

「その通りです、あなたとは良い関係が築けそうですね」

「ああ、確かに微妙に波長が合ったな」

「私のことは美春と呼んで下さい」

「俺のことは和樹と呼んでくれ」

ガシツと握手を交わします

微妙な同盟が出来ました。

明がソツチの人だと認定されるのも時間の問題ですね

「僕は工藤さんが犯人だと思っただけど」

「その可能性は高いだろうな」

「違うと思うぞ」

愛子はそんなことしないだろう。多分

「何故だ？」

「アイツは康太とタメ張れるんだぞ？そいつが仕掛けたなら……」

「成程、確かに工藤は犯人じゃないな」

「……認めない」

康太、良い勝負だと思います。

「で、雄二。Fクラス全員で攻め込もうと」

「その通りだ」

「どういうこと？」

「あー、覗き仲間を増やそうって話だ」

「成程」

「坂本、俺たちに話って何だ？」

須川を先頭にFクラスの男子全員が到着しました。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

悪い顔してるなあ

『提案？』

嫌そうですね

「女子風呂の覗きに興味は無いか？」

『『『詳しく聞かせろ』』』

やっぱりF<sup>バカ</sup>クラスばかりですね

「全員気合いを入れろ！Fクラス、出陣<sup>で</sup>ろ」

『『『おっしやああ　　っ！』』』

さあ、お祭りの始まりです。

精々楽しませて貰いましょう。

脅迫の犯人も分かりましたし、

あ、雄二達には内緒ですよ。

アツハツハツ！

馬鹿ばっかりだ！

「楽しそうじゃの、和樹」

「ああ、楽しいね」

現在、Fクラスで編隊を作って突撃、布施先生を撃破  
明達の援護にまわっています。

「目的も達したからな、後は祭りを楽しむだけだ」

「ほう？犯人が分かったのじゃな？」

ええ

「あ、雄二達には内緒な。その方が面白いし」

「むっ、和樹がそう言うなら良いのじゃが」

「和樹」

お、優

「よう、大変だな？」

笑顔で聞いたのに睨まれました。

「覚悟は良いわね」

「それは、こっちの台詞だ」

中指立てて応じます。

「いい度胸ね」

親指を下に向けて応じてくれます。

この頃優もノリが良くなりましたね。

『サモン  
FUCK YOU』

《 放送連絡です。Fクラス吉井明久。至急臨時指導室に来  
るように》

人が折角やる気になったのに

西村先生と高橋女史にボコボコにされました。

36話 俺と覗きとFクラス 馬鹿の割合が増える(後書き)

同盟の名前は好き勝手考えて下さい。

### 37話 俺と久保と古今東西 覗き仲間を増やそう！

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌

『前略（坂本雄二に続く）』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思い付くものです。

坂本雄二の日誌

『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に迫っていて妙な雰囲気になっており（東野和樹に続く）』

教師のコメント

君達に一体何があったのですか？土屋君が略した部分がとても気になります。

東野和樹の日誌

『翔子が雄二の前で服を脱ぎ、今にも問題を起こしそうだった。さらに、明に島田が迫り（吉井明久に続く）』

教師のコメント

そこで切らないで下さい。

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここでその引きはないでしょう。

「またコイツは人の布団に入ってきやがって  
目を開けてみると秀がいた。  
まあ、今日は決められている訳ではないのでいいでしょう

「秀、起きろ」

「む、和樹。お早うじゃ」

そろそろ起床時間です

「ぐふあっ！」

ん？何の声？

おお、雄二が蹴り出されてる

「雄二は何をしたんだ？」

と、明が花瓶を抱えあげたぞ

「待て、明！流石に死ぬぞ！」

「そうじゃ、明久。少しは落ち着くのじゃ」

「殴る！コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」  
落ち着いて下さい

ガチャッ

「おいお前等！起床時間だ　　ぞ・・・？」

「死ね雄二！死んで詫びるんだ！あるいは法廷に出頭するんだ！」

「何だ！？朝からいきなり明久がキまつているぞ！？持病か！？」

「西村先生！頼むからコイツを大人しくさせてくれ！」

「どうか手伝って頂きたい」

「……………(コクコク)」

「……………お前等は朝から何をやってるんだ」

「で、雄二。どうするつもりだ？」

「何の話だ？」

コイツは

「覗きの話だ。Fクラスだけじゃ突破できんぞ」

「ああ、だからAクラスを誘う」

Aクラスか

「なら……………」

「ああ」

『行ってこい明久(明)』

久保を誘って来て下さい

「それは別にいいけど、どうして僕が久保君の説得をするの？」

そりゃあ

「……………」

すいません

「何で皆目を逸らすの!？」

「あ、あのさ、凄く嫌な予感がするんだけど……………」

気のせいと言ってやりたいのですが

「そ、そのじゃな。一応、久保はお主に悪意を持っておらんと断言  
できるが……………」

「あ、ああ。久保はお前を憎からず思っているはずだ」

「……………彼に悪気はない」

「何でそんな回りくどい言い方をするの?」

言いたくないからです

「明、もし何かあればこれを使え」

「コレも持っていけ」

スタンガン（二十万ボルト）

催涙スプレー

「物凄く不安になってきたよ……」  
諦めて下さい

さて、明が久保の所に行きましたよ。

「雄二、Aクラス以外も誘った方が良いんじゃないか？」

「ああ、それもそうだな」

「明が帰ってきてから行くか」

「そうするか」

今、勉強中ですよ。

本当ですよ

ん？

「和樹、携帯が震えておるぞ」  
誰からでしょう

「おお、美春からだな」

何の用でしょう？

「どうした？」

「和樹。あの写真の件ですが」

「ああ、賭けは俺の勝ちみたいだな」

「ええ。吉井明久を殺すことが出来ませんでした……」  
残念そうに言わないで下さい。

「約束は約束です。大人しく脅迫は取り下げましょう」

「有難う美春」

ピッ

通話終了です。

さあ、これで祭りに熱中できますよ

「何の電話だったのじゃ？」

「賭けの清算の報告だ」

「賭け？和樹は何か賭けておったのか？」

「ああ。まあ、俺が勝ったから問題ない」  
本当に良く逃げてくれました。

お、明が帰ってきましたね。

どうやら無事なようですし

「明久。どうだった？」

「ごめん。失敗だったよ」

「そうか。まあ、無事で何よりだ」

「いや、そんな危ないことはしてないけど」  
そう思っているのは貴方だけです。

「さて、まずはD・Eクラスからだ」

「和樹、誰に言っておるのじゃ？」

気にしたら負けです。

「雄二、どうやって中に入るの？」

「簡単だ、誰か一人が囷になればいい」

「断る」

警戒してますね。

多分、あまり意味は無いでしょうが

「やれやれ。それなら、ゲームで決めないか？」

面白そうですね。

「ゲーム？何するんだ？」

「古今東西だ」

へえ？

「坂本雄二から始まる」(雄二のコール)

「「「「「イエ ツ！」「」「」(俺、秀、明、康太の合いの手)

「古今東西」

「「「「「イエ ツ！」「」

「【A】から始まる英単語」

「【Appie】！」「雄二

さて、次は明だな

「……………僕の、負けだ……………」

嘘オ！

「一つも思い付かんのか!？」

それこそAndでもいいでしょう

これくらいは知ってますよね？

「康太は何が出たんだ？」

「……………舐めるな」

お、自信有りげ

「それじゃ……………古今東西、【A】から始まる英単語」

「【Almond】」

さて、康太。何を言うのですか

「……………【AV】」

英単語かなあ？

「ちよつと待つて二人共」

お、流石に止めるか

「なんだ、明久」

「今のムツツリーニの英単語はどうかと思うんだ」

「何を言っている。きちんとAから始まっていたらだろつが  
そうですけどね

「【Agent】」

「……………【Akihisa】」

おや？

「はい、待つて二人共」

「今度はなんだ明久」

「いつの間に僕の名前が英単語になったのかな？」

「ええと、良く覚えてないんだが」

「何、和樹？」

確か

「【名刺】バカの意。またはそれ相応の人物だっけ？」

「……………そう、例文は He i s s o A k i h i s a  
f u l l (彼はこの上なく愚かな人物だ」

そうか

「済まない康太、形容詞系を忘れていた」

「……………誰にでも間違いはある」

「ちよつと待つとうか二人共」

何です？

「まるで僕の名前が実際に辞書に載っているように話さないで、お  
願いだから！」

その内載るかもしれませんがよ

「もう明の負けでいいよな？」

「もう充分だろ」

「……………(コクリ)」

「うむ。存分に使命を果たしてくるのじゃぞ」

「納得いかないっ！って、もう誰もいないし!？」

さて、この間に

D・Eクラスが覗き仲間に加わった

お好きな効果音をどうぞ

「次はB・Cクラスだな」

「ああ、という訳で」

『行ってこい明(久)』

囧となって

「絶対に嫌だ！今度は雄二か和樹に行って貰う  
ほう？」

「良い度胸だ」

「明久、それは不可能と言うんだぞ？」

「やってみなくちゃ分からないよ」

いえ、もう分かっています。

「それじゃ…………吉井明久から始まる」

「…………イエッ!」「…………」

「古今東西っ」

「…………イエッ!」「…………」

「【O】から始まる英単語っ」

さて、何を言おうか

「オーガスト」  
August

それはAから始まる英単語です。  
やっぱり馬鹿ですなぁ

B・Cクラスも加わった

明君曰く「五十嵐先生は意外と足が速い」そうです。

37話 俺と久保と古今東西 覗き仲間を増やそう！（後書き）

中学で習う英単語って結構数有りますね。  
殆ど忘れましたが

38話 俺と夜襲と学年主任 ある意味絶体絶命(前書き)

感想有難う御座います。

一月位見てなかったらいつの間にか感想が増えてました。

返し方が分からないので、この場でお礼を言います

ヒユウガ様

ゼロ様

城希様

有り難い感想励みになります

どうも有難う御座います

junky様

指摘メール有難う御座います

38話 俺と夜襲と学年主任 ある意味絶体絶命

バカテスト 英語

以下の英文を訳しなさい

Although John tried to take the airplane for Japan with his wife's handmade lunch, he noticed that he forgot the passport on way.

姫路瑞希の答え

『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしたが、途中でパスポートを忘れていることに気がついた』

教師のコメント

はい正解です。

東野和樹の答え

『ジョンは妻の手作りパスポートと飛行機で日本に行こうとしたが、途中で弁当を忘れたことに気付いた』

教師のコメント

密入国です。

土屋康太の答え

『ジャンは

』

教師のコメント

ジョンです。

吉井明久の答え

『ジョンは手作りのパスポートで日本行きの飛行機に乗った』

教師のコメント

手作りパスポートという言葉の意味をもう一度よく考えてみて下さい。

「結局、Aクラスは手を貸してくれぬか」  
「仕方ないだろう。Aクラスは久保が動かないかぎりどうしようもない」

さて、こちらの人数も百人以上になりましたから、昨日よりは面白くなりますよ

「雄二」

「どうした和樹？」

「そろそろ出た方が良さぞ」

翔子が楽しみにしている筈です。

「何故だ？」

「吉井つ、大変だ！」

お、須川だ

「須川君、どうしたの？作戦開始まであと少し時間があるはずだ」  
「ど」

「やられた！大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ！今は戦力が分

断されて各階に散り散りになっている！  
やるなあ

「ほら、雄二。翔子が待ってるぞ」

「くっ、こっちの考えは筒抜けって訳か……………」  
悔しそうだねえ

「よっぽど雄二の覗きが許せないんだね」

「流星は霧島翔子じゃな」

「……………迷っている時間はない」

「雄二？」

「ど、どうするのさ!？」

「とにかく出るぞ!」  
行ってきます

うわあ

……………女子強ええ

あ、須川が死んだ

お、布施先生だ。補給テストでも受けたんでしょうか

さて、正面突破して

「……………雄二、待っていた」

おやおや

「翔子、やってくれたな……………」

翔子率いる女子勢

「お、高橋女史」

「東野君。あなたには特に指導してあげます」  
結構です

「雄二、袋の鼠も良い所じゃねえか!」

「し、仕方ないだろ！」

困まれています

「和樹、覚悟は良い？」

「良くない！全く良くない！」

「くそ、試験召喚サモン」

あ、明

「止める！明！」

「せめて一太刀」

高橋女史に迫る明の召喚獣

「吉井君、覚悟は良いですか？」

鞭を振り上げ、振り下ろす

「いったあああああつ！これは凄く痛いっ！さすがは拷問用の道具だよ！」

と、ここで彼我の戦力差が表示される

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 吉井明久

総合科目 77913点 VS 902点』

………良く一撃で戦死しなかったな

俺よりチートってどういう事です？

「で、東野君はどうします？」

「和樹？」

恐っ！

「優？何怒ってるんだ？」

こここの所ずっと怒っています

「アンタが女子風呂覗こうとしてるからでしょ！？」

「そ、それは誤解じゃ。姉上」

「そっだぞ。優」

「どづいづことです？」

「どづいづこと？」

「答えは単純。覗く必要が無いからだ」

これは確実ですね

「？じゃあ、何故こんなことをしているのですか？」

どうでしょうか？

バラしても良いんですが  
うん

「面白そうだから、参加したんだ」

あ、コケた

「そ、そんな理由なの？」

「そうじゃったかのう？」

秀、ボソツと言わないで下さい。

あ、周りの生徒？

土下座ですよ

明と雄二は折檻の真っ最中です

「優、分かったか？」

「ええ。どうやら私の勘違いだったみたいね」  
助かった？

「じゃあ和樹」

え？何で俺の腕を持つんですか？

「お休み」

「違うつ！気絶は睡眠じゃねえええええ！？」

お休みなさい

「酷い目にあつた」  
雄二のは若干自業自得  
「高橋先生に勝てる人なんているの？」  
「俺の点数より高いからなあ」  
揃って溜息を吐きます

「じゃがどうする？このままではお主等は脅迫の影に脅え、且つ覗き犯という不名誉な称号を掲げられてしまつぞい」  
別に良いような気がしますが  
「そういえば和樹は何かやってたな。何をしてたんだ？」  
む？

「えーと。犯人分かつた」  
バラしましょう

『え つ！』

五月蠅え

「誰なんだ？その犯人は？」  
コラコラ殺気立たない  
「Dクラスの清水美春」  
「アイツが……」  
「清水さんが……」  
そんな驚くことでもないでしょう  
「あ、脅迫も止めたからな」  
「ほう？前の賭けの話しじゃな」  
その通りです

「何だ、ならコレ以上覗きに行く必要が無いね」  
「何を言ってるんだ明久」

「……………それは甘い」  
「え？どうということ？」

「ここまで騒ぎが大きくなったからな」

「俺たちが抜ける訳にはいかなかったんだ」

Aクラス以外の男子全員ですからね

「どうということ？」

分かって下さい

「このまま覗きを続けるってことだ」

男らしいですね

「問題はどうかやったらAクラスを巻き込めるか、だな」

「その通りだ。だから、秀吉にコイツを着て貰う」

浴衣ですか

きつと似合うでしょう

「それは構わぬが……………」

少しは構った方がいいですよ

「明、さつきから何を悶えてるんだ？」

「そうだと明久。何時もより五割増しの馬鹿面で何してるんだ？」

暇だから雄二と一緒に明の方に近付く

「色々大変なことになっちゃったんだ！今は僕の邪魔をしないで

『大変なこと？それは　　』と

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタツ（俺と明を巻き込んで倒れる音）

バキッ（俺が明の携帯電話を踏み潰す音）

「明久。大変なこととは何だ？」

「そうだぞ、明」

「たった今キサマ等が作った状況だ」

ん？足元に

「ああ、明の携帯電話か。スマンな。今度修理して返す」

「雄二、携帯貸して」

「ん？別に構わんが」

シンプルな携帯ですね

おお。今度は雄二が悲鳴を上げている

「和樹も携帯電話貸して！」

「何で？」

「良いから」

「あ、ああ」

携帯を渡すとカコカコと何かを打ち込み始める明  
何してるんだ？

「はい。有難う和樹」

「そりゃ構わんが……………」

？

明は一体何をしてたんだ？

携帯を開いて確認

【To：優 From：東野和樹

話がある。今夜浴衣を着て俺の部屋に来てくれ】  
何てこった！

「手前！何てことしやがる！」

「煩い、さらにごうだ！」

「何の怨みがあるってんだ？」

他人様の携帯を茶の中に放りこみやがって

「雄二も和樹も巻き込んだからもう良いよ」

何て爽やかな笑顔でしょう

「明、歯を食い縛れ」

「へ？」

明を気絶させた後に姫路が来た。

康太が一心不乱に浴衣を着た美少女二人（誤字に非ず）を写真に撮っています。

鼻血が出てもシャッターを切り続ける姿には素直に感嘆しますね

さて、明日は高橋女史に目に物見せてやりましょうか  
今は睡眠を

「・・・て、起きて、和樹」

誰だ？貴重な睡眠時間を奪うのは？

目を開けると優が居ました

「何故？」

「え？」

さて、考えてみよう

優がいる

何故？

メールを見て

多分、怒っている

凶器＋笑顔＋真夜中

「ああ。苦しまないように一撃で頼む」

「・・・・・・・・・・和樹のことが偶に分からないわえ？違うの？」

「だってお前あのメール見て来たんだろう？」

「そ、そうよ。話して何よ？」

頬を赤らめて此方を見てきます。

「あんな優」

「うん」

どうしよう？

取り合えず

「秀？狸寝入りは趣味が悪いぞ」  
間接を決めないで下さい

「むう。何時から気付いておったのじゃ？」

「優が来た直後に俺の関節に激痛が走った」

「・・・・・・・・・・」

無言で目を逸らさないで下さい

「優。あのメールは」

『メールは？』

「横にいる阿呆が送ったんだ」

『へ？』

「 Bannon! 」

「 今度は何だ? 」

「 お姉さま無事ですか!? 美春が助けに来ましたよ! 」  
「 お? 」

「 美春!? どうしてアンタがここにくるのよ! 」

「 美春。素晴らしい行動力だ 」

「 フツ。お姉さまの事でこの美春に分からないことはありません! 」  
「 凄え 」

「 立ちあがって美春に近付き 」

「 で、美春は島田を 」

「 ええ。お姉さまを 」

『 イロイロしに来ましたっ! (来たんだな) 』

「 .....!! (ボタボタボタ) 」

「 康太? いつから起きてたんだ? 」

『 流石は美春 (和樹ですね) 』  
「 握手を交わし笑顔で答えます 」

「 和樹! そんな呑気な事言ってる場合じゃないよっ! このままじゃ、 」

鉄人に気付かれて  
「ああ、そんな大きな声をだしたら

「なにごとだつ！今吉井の声が聞こえたぞつ！」

おお、流石は西村<sup>鉄人</sup>教諭

問題児の声だけを聞き分けるとは

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「え？なに？何で全員が『吉井が声を出したせいで見つかったじゃないか』みたいな目で僕を見てるの？」  
その通りでしょう

「くそつ！明久のせいで面倒なことになった！」

「明が鉄人の目を引いてる間に逃げろ！」

「待つんだ二人共！絶対に僕だけのせいじゃない！」  
いえ、アナタのせいです

美春、少しは落ち着け

『吉井に坂本、東野。お前等だと分かっているんだ！その場を動か  
なよっ！』

ついに俺まで呼ばれるようになったか

「優、すっかり逃げろよ」

「どつちかと言うとアナタ達の方じゃないかしら？」  
否定できませんね

「んじゃあ開けるよ？」

明がドアの取っ手に手をかけ、一気に押し開けた  
バン！ガストツ！

うわぁ。痛そうな音

「吉井、キサマぁぁぁ！」

「げっ！」

『フラインプレイだ』

サムズアップ+満面の笑顔で応じます

おお、明やるなあ

浴衣を被せて帯で縛りつけました

「雄二！」

「応よ」

雄二に声をかけて明を見捨てにかかる

「貴様等！よっぼど俺の指導を受けたいようだな！」

拘束時間10秒

短っ！

『冗談じゃねえ！』

明、雄二と脱兎の如く駆け出す

途中で明と雄二と別れて逃げました。

え？見捨てた？

人聞きの悪い事を言わないで下さい

まあ、別れた直後に悲鳴が響きましたが

さあ、明日は最終日です  
全力で楽しみましょう

38話 俺と夜襲と学年主任 ある意味絶体絶命（後書き）

友人に質問したら、この小説は15禁だそうです。

……何故？

しかし、段々ネタに詰まっている気がします

39話 俺と覗きと性転換 アキちゃん頑張る(前書き)

すみません。明日、友達と遊びに行くんで、ココで切ります。

### 39話 俺と覗きと性転換 アキちゃん頑張る

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい

木下優子の日誌

『他のクラスと勉強して良い刺激になったと思う。夜の馬鹿騒ぎについては、和樹が参加しているのにムシヤクシャしてボコボコにしまった。今度から言い訳位は聞いても良いと思った。最後にこの合宿中にAクラスで良かったと実感した』

教師のコメント

幾つか危なっかしい言葉がありますが、今のままAクラスで頑張ってください。

霧島翔子の日誌

『雄二、愛してる』

教師のコメント

幸せそうだなによりです。

東野和樹の日誌

『暇が潰せた』

工藤愛子の日誌

『打倒ムツツリー二君!』

教師のコメント

君達は日誌を何だと思っているんですか？

「眠そうだな」

盛大な欠伸をしているのは明君と雄二君です

「大して寝てないからね」

「ああ、気合いが入れば違

ふおおおつ!?!」

あ、覚醒した

「康太、何見せたんだ？」

「………自信作」

誇らしげに見せてくれました

「おお、コレは………」

「凄いのう」

姫路と秀の浴衣姿

コレは一発で目が覚めるでしょうね

「雄二、他の奴も起こせばいいんだろう?」

「ああ。ま、この写真見せれば一発だな」

「それよりも面白いものを見せてやる」

「何をするつもりだ？」

見てのお楽しみです

「秀」

「何じゃ和樹」

雄二と話し終えて、秀に声をかけます。

「あの性薬転換薬持ってたよな？」

「む?確かに持っておるが………」

何で持ってきたのかは知りません

てか、今持ってるんですね

「誰に使うのじゃ？」

そりゃ当然

「明に決まってるだろ」

そっちの方が面白い

「ふむ。それでは一つは明久に」

一つは？

「もう一つは和樹に使うかの」

何てこった！

「ま、待て！秀！俺はもう女にならんと、だから！迫るな！待っぎやあああつ！？」

間接を決めて無理やり薬を飲まされた。

side out

side 明久

さつきムツツリーニが見せてくれて写真のお陰で目が覚めたよ

「ねえ、雄二？和樹と秀吉は？」

さつき和樹の悲鳴が聞こえた気がするんだけど

「分からん。が、楽しそうだぞ」

？どういうことだろう

ダッダッダッ

何の音？

スパンッ

豪快な音とともに扉が開いた

そちらに向くと秀吉と女子の制服を着た和子いた

・・・・・・・・・・・・・・・・何で？

「ひ〜で〜?」

「うむ。似合っておるぞ和子!」

こんな嬉しそうな秀吉見たこと無いよ

まあ、確かに似合っているけど

ムツツリーニ、後で写真を見せて欲しいよ

『『『』』』』和子!愛してる!』』』』

あ、覚醒した

「断るっ!」

そんなに怒らなくてもいいと思っつよ

「クソツも面白い」

諦めたのかな?

「秀、薬寄せ」

「うむ」

「よし」

何だろう? 凄い嫌な予感がする

「明。あーん」

何だと!

こんな

まさか!

和子が僕にあーん何て

「どうした? ああ、そうか」

と言って、行き成り屈んで僕を見上げてくる

「あーん?」

くっ！上目遣いだとっ！？

和子は綺麗系だから、さらにクルよ

『『『羨ましいんじゃない？あぁあぁ！』』』

僕の体に行き成り痛みが走った

『これより異端審問会を開催する』

何だっ？

このままじゃ僕は異端者扱いだっ！

「待て、お前等」

「和子、やっぱり僕の事が……」

「阿呆な事言っでないで、さっさと飲め」

強引に口を開けさせられて何かを飲まされた

『『『アキちゃん！！？』』』

吐き気がするよ

でも、皆戦る気になったみたいだ。

さあ、鉄人に一泡吹かせてやる

39話 俺と覗きと性転換 アキちゃん頑張る(後書き)

今までに輪をかけて馬鹿な話しのような気がしますね

和子の容姿は自分的にはデル戦のシェラの軽い劣化版のつもりで書  
いていますが、皆さんは好き勝手に想像して下さい

#### 40話 俺と覗きとAクラス 二年男子全員集合

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい

土屋康太の日記

『覗きは犯罪では無く、保健体育の実習である。工藤愛子には負けない』

教師のコメント

君はその力を別の道に使おうと思わないんですか？

木下秀吉の日記

『ワシ一人だけ無罪なのは納得がいかんのじゃ！』

教師のコメント

強く生きて下さい。

坂本雄二の日記

『初日に覗き扱いされ、翔子にアイアンクローを喰らい、襲撃をしなければ鉄人の補習を受けるハメに陥り、翔子に襲われかけた。散々な強化合宿だった』

教師のコメント

そうですね。

久保利光の日記

『初日に東野君にある人について相談をして、次の日に、その人から話しかけられ最終日にその人の本心を聞き、僕はそのまま突き進もうと思った。中々有意義な合宿だったと思う』

教師のコメント

誰か気になります、頑張ってください。応援します。

廊下で追いかけて

「アキちゃん。ジツとしなさい！」  
不審者みたいですよ

「イヤだ！絶対セーラー何て着るもんか！！」  
くそ！チヨコマ力動きやがって

こうなったら

「秀！」

「うむ」

二対一です

「秀吉っ！助けてよ！？」

「明久よ。大人しくするのじゃ」

流石は秀だ

『さあ、覚悟しろ（するのじゃ）』

「え？冗談でしょ？」

「待つて、和樹！秀吉！お願いします。自分で脱ぐから！……………」  
……キヤアアアアッ！！」  
楽しかった

とても楽しかった

「うう。僕もうお嫁に行けない……………」  
……そんな大袈裟な

セーラー似合いますよ

「明。もうそろそろ時間だから部屋に帰るぞ」

「む。もうそんな時間かのう」

そうですよ

「うー。分かったよ」

嫌々ですねえ

おや？あれは

「学園長だな」

「え？何でババアがここに居るのさ？」

「明久よ、少しは敬意を払うのじゃ……………」

無理だと思えます

「何してんだい？クソジヤリ共」

開口一番それですか

「ババアこそ何でこんな所に発生してるのさ？」

「そうだぞ。大人しく学園長室で置物やってる」

「……………お主等は」

秀に呆られました

「アンタ達とは一度じっくり話す必要がありそうさね」

逃げさせて貰います

「で、何しに来たんだ？」

「ふん。馬鹿騒ぎが起こってるからって、西村先生に呼ばれたのさ」  
要らん事を……………」

「そうじゃったのか。学園長も大変じゃのう」

「アンタの爪の垢でも煎じて、その馬鹿に飲ませてやりな」  
失礼な

「と、和子。もう時間じゃない？」

「ん？ああ、そうだな」

「む？それでは学園長失礼するのじゃ」

「仕事増やすんじゃないよ、餓鬼共」

「何でこんな言われなさいといけないんだ？」

『じゃあなババア』

あ、ハモツた

さて、学園長に怒鳴られる前に行きましようか

「和子、アキちゃん、秀吉。遅かったな」  
気にするな

「戦況は？」

康太、後でツラ貸しなさい

正確にはカメラを寄越しなさい

「今、長谷川先生を」

『翔子たん！翔子たん！はあはあはああつ！！』

『優子さ　ん！！踏んで下さ　い！』

『島田のぺったんこおお　つ！』

『和子！好きだあ　つ！』

『姫路さん結婚しましよお　つ！』

『アキちゃ　ん！』

『全員死んでしまえ』

特に優と俺の名前を叫んだ奴

雄二まで言うとはねえ

「全員やられてしまえ」

明、顔色悪いですよ

「和子、三階と二階を落とすのも時間の問題だ」

「ああ、問題は二階だな」

一階に着きました

「おいおい……………」

思わず茫然としてしまう

「く、Bクラス程度じゃ止められんか」

相手が悪いとしか

「……………雄二、覚悟はいい？」

「明久君。ここは通しません」

「さて、皆さん。補習の準備は良いですか？」

最強の布陣ですね

「翔子かつ！」

「姫路さん……………」

「高橋女史……………」

「Aクラスがおらんようじゃな……………」

<sup>久保</sup>同性愛者がいない

というか

「優は？」

「そういえばそうじゃな」

優がいませぬえ

「……………優子は『和樹に覗くつもりが無いって分かったから』  
って」

そうですか

まあ、楽だから良いです  
肉体的にも精神的にも

「……………雄二。お仕置き」

「くっ！根本バリアーっ！」

「さ、坂本っ！折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか!？」  
雄二君、そこそ外道ですね

さて、戦力差は

『Aクラス 霧島翔子 VS Bクラス 根本恭二

総合科目 4762点 VS 1931点 』

……………根本弱いな

「明久君。大人しくセーラーを、じゃなっかった！降参して下さい」  
姫路も大分壊れてきたなあ

明の顔が蒼白になりました

さて、雄二は

「よし、翔子。落ち着け」

「……………覚悟」

「翔子、話を聞け」

「……………後で聞く」

もう駄目っばい

翔子、そのままアイアンクローで締め上げてなさい  
その方が面倒臭くなくて良いですから

『 今、僕は 純粹に欲望の為に女

子風呂を覗きたいっ！』

あ、変な電波が

「お主はどこまでバカなんじゃ!？」

「明、犯罪だからな？」

「世間のルールなんて関係ない!誰にどう思われようと、僕は僕の気持ちに正直に生きる!」

モノホンのバカですね

まあ、分かりやすくして良いですけど

『よく言った、吉井明久君っ!』

あ、久保ホの声だ

「高橋女史、Aクラス男子も覗きに参加するそうですよ」  
茫然自失な高橋先生

「……………男子つて一体……………」  
重いですね

「ですが、ここを通れるとは思わないことですね  
立ち直りの速いことで  
試験サ召喚」

「いいや、通らせてもらいますよ!教科選択終了」  
さて、久しぶりに使いますね

OPEN  
開戦

雑用以外で使ったのは初めてですが  
忘れていると思えますが、フィールドを作る事が出来ます  
……………誰が覚えてるんだ?

「干渉ですか……………!やってくれますね東野君……………!」

「行け明、康太」

「俺たちを理想郷アガルタに導いてくれ」

お、雄二が復活した

「さて、高橋女史？」

「何です東野君？」

「倒させてもらいますよ」

「良いでしょう。返り討ちにしてあげましょう」

「さあ、楽しみましょう」

40話 俺と覗きとAクラス 二年男子全員集合（後書き）

グダグダですねぇ

41話 俺と高橋女史と最終決戦 男子停学！？（前書き）

戦闘描写が書けません

#### 41話 俺と高橋女史と最終決戦 男子停学!?

以下の問いに答えなさい

『観測者Aが速度 $v$ で走っていると、正面から周波数 $f$ の音を発し速度 $v'$ で走行してくる救急車がやってきた。音速を $V$ としたとき、観測者にどのようなことが起きるのかを書きなさい。また、その現象の名称も併せて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『観測者Aには車には車が発する周波数が現象の名称……ドップラー効果』

教師のコメント

F1マシンが通過する時もこれと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しいように思われますが、意外と身近に存在するものです。

式が書けませんでした

東野和樹の答え

『観測者Aが速度 $v'$ + $v$ で決められる現象の名称……人身事故』

教師のコメント

その速度で人身事故が起こった場合、肉片すら残らないと思います。

吉井明久の答え

『観測者Aが速度 $v'$ + $v$ で撥ねられる現象の名称……交通事故』

教師のコメント

きちんと相対速度を補正しているあたりが腹立たしいです。

さて、

「久保、翔子と姫路。相手にするならどっちが良い？」  
姫路だったらそのまま

翔子なら雄二とタツグ

「そうだね。なら、僕は姫路さんと戦るとしよう」  
精々頑張ってください

「翔子、雄二をボコしてくれ」  
少しなら時間を稼げるでしょう

「……雄二、こっちに来て」  
「は？ま、待て翔子。落ち着け、な」

ガシィ（雄二の頭を掴む）

ズルズル（引き摺っていく翔子）

ギリギリギリ（何かを締め付ける音）

以下、自主規制

子供泣くんじゃねえか？

「東野君？」

何です？

「何か問題でも？」

「いえ、あの、坂本君が……え？」

「ああ、気にしないで下さい。何時も通りですから……」

必死に何かを我慢する高橋女史

「さて、戦りますか」

「え？あ、ああ。はい」

可愛い？

『サモン試験召喚』

両者の呼び出しに応じて、出てくるのはもう馴染んだ召喚獣

「？居合、ですか？」

「ええ」

刀を鞘に納めて柄に手を置き、重心を落として高橋女史の召喚獣を睨みつける

「本来の戦法に戻す事にしました」

「本気では無かったと？」

うーん

「分かりやすく言うと某龍球の戦闘モードと試合モードですかね」

「ああ、成程」

納得した！

てか、読むんだ漫画

「本領発揮って所ですね」  
と言いつつ鞭を構える先生

「さあ」高橋女史  
「いざ」俺

『尋常に勝負！』

「先手必勝！」

刀を鞘から抜き放ち、斬りつける

「まだまだですね」  
鞭で捌く

「まだまだあ！」

抜刀術の連打

「次元斬」

召喚獣の手元がブレる程のスピードでの抜刀術を行いつつ距離を詰める

その斬撃を全て鞭で弾きながら反撃する高橋女史の召喚獣

……人間か？

「中々やりますね」  
「いやいやいや！」

あれだけの攻撃を片腕無くすだけで済ますって、どんだけですか！  
ぶっちゃけるとアレだけで翔子と姫路を殺れるんですよ？

side out

side 高橋女史

まさかここまでヤルとは思いませんでした  
私の召喚獣がダメージを受けたのは何時振りでしょう

それにしても犯しそうに笑いますね。東野君は

さあ、今度は此方の番ですよ。

「トドメえ！」

私の召喚獣の脇を東野君の召喚獣がすり抜ける  
甘いですよ

鞭を振り回し、迎え撃つ

「それは此方の台詞です」

流石に生徒に負ける訳にはいきませんからね

side out

「いえ、もう詰みです」

鞘に刀を収めた瞬間に血を噴き出して倒れ伏す高橋女史の召喚獣  
ギリ範囲外でした  
危くやられる所だった

『は!?!?』

「くっ! やつてくれますね。東野君！」

「滅茶苦茶危なかったですがね」

こっちの召喚獣もボロボロですよ

腕何てもう半分ありませんし

腰から下何てもう無いに等しいですよ

「俺の勝ちです」

さあ、勝ち鬨をあげよう

「高橋女史討ち取ったりいいいいいい！  
拳を突き上げる」

『うおおおおおおおおお！！』  
本当にノリ良いな！コイツ等は！

『凄えよ！和子！』

『高橋女史を倒すなんて！』  
『最高だ！』

嬉しいというより恥ずかしいです

「……………和樹」

おおう

「雄二。どうした？」

ビビった

「翔子を良くもけしかけてくれたな」

恐ッ！

「どうやって抜けてきたんだ？」

不思議ですね

「ああ、木下優子が助けてくれたんだ」

へえ？優が

「珍しいというか何というか」

どうしたんだろう

「何でも『偶には代表とやってみたい』だそうだ」  
？

「まあいいや。雄二、行ってらっしゃい」  
覗いてこい

「？あ、ああ。じゃあな和樹」

逝ってらっしゃい

「しかし、これだけ教師が集まって止められませんか」  
「さうとう危なかつたですがね」

「学園長の許可を取って訓練でもしますか」  
「ヤル気ですなえ」  
「そんなに悔しいですか」

「和樹」

「ん？優か」

「どうしました？」

「代表に勝ってきたわよ！」

「さういえば雄二がそんな事を言ってたな。何で翔子と戦り合つたんだ？」

特に理由が無い気がします

「和樹の手伝いをしたかつたの」

くっ！

可愛いじゃねえか

「有難う優」

頭を撫でて気分を落ちつけよう

『『『割にあわねーっっ！！』』』  
おおっ？

「ああ、さういえば今の時間帯は  
高橋女史？」

「学園長が入っていましたね」

どんな拷問だよソレ

「可哀そうな奴等」

「学園長も災難ね」

それはまあどうでもいいですが

こんな終焉で良いんでしょうか？

処分通知

文月学園第二学年

全男子生徒

総勢149名（木下秀吉・東野和樹は除く）

上記の者たち全員を一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

ついムラツときてやった。

今は心の底から後悔している。

より抜粋

〜とある男子生徒の反省文

41話 俺と高橋女史と最終決戦 男子停学！？（後書き）

段々グダグダになっていく

42話 強化合宿終了 俺と停学明けと接吻 おお、青春だ(前書き)

短いすね、この話必要でしょうか？

幕間を挟んで4巻です

42話 強化合宿終了 俺と傳学明けと接吻 おお、青春だ

次に示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を作りなさい。

『あいまいもこ』

姫路瑞希の答え

『漢字【曖昧模糊】』

例文【責任の所在を曖昧模糊としていた】

教師のコメント

【あやふやではつきりとしないさま】をあらわす四字熟語ですね。読める人は多いのですが、書ける人はそう多くありません。良く出来ました。

東野和樹の答え

『漢字【相馬芋個】』

吉井明久の答え

『漢字【合間妹子】』

教師のコメント

なんとか答えようという気持ちだけは伝わってきました。

土屋康太の答え

『例文【小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋使として旅立った】』

教師のコメント

一名男性が混じっているので気を付けて下さい。

「平和な日常が今日、終わる」  
覗き実行犯達の停学明けです

「む？平和だったかのう？」

「私にはとてもそう思えないわ」

失礼な

「何が言いたいんだ？」

『西村先生に追いかけていたでしょう（おったじやろう）  
くっ！』

「明や雄二がいないから、そのエネルギーが俺に来るんだよなあ」  
疲れました

「む。明久じゃ」

「吉井君？」

おお、明か

「姫路と一緒に、暫く会話させてやるっ」

「こんな機会中々無いもんね」

「そうじゃな」

さっさと教室に行きましょうよ

「お、島田じゃな」

「何か凄い勢いね」

楽しそうだね、君達

『和樹！？』

呼ばれた、そして腕が曲がった

「ぎゃあああ！？何だ、敵襲か！？」  
俺まだ何もしてませんよ

「速く見るのじゃ！」

「そうよ！」

首がっ！

そちらに無理やり顔を向けると

島田と明が接吻をしていました

・・・・・・・・青春だねえ

**幕間 俺と女王と王様ゲーム 待って！試食は止めて！（前書き）**

すいませんでした。風邪を引いてしまって倒れてました。

それと、来週は大学の教授の研究の手伝いをするので、多分更新できません

幕間 俺と女王と王様ゲーム 待って！試食は止めて！

工藤と土屋の性生活小啻二発目

「工藤と」

「……………土屋の」

『性生活小啻！二発目』

「と、また拉致られた東野です」

「さて、今回のテーマは『着替え』です」

「……………（ブシャアアアアアア）」

「早ッ！」

「ムツツリー二君、まだ速いって」

「……………続きを」

「うん。僕がこの前体験した話なんだけど……………」

「おう」

「……………（コクコク）」

「優子と代表と一緒にデパートに行っただよね」

「ほう」

「……………珍しい」

「そうかな。そこで、僕は下着売り場に行っただよ」

「……………（ブシャアアアアアア）」

「えーと、また、救急車呼ばないと」（プルルル）

「だから、速いってムツツリー二君！」

「……………俺の魂を舐めるな」

「血を流しながら言われてもな」

「とりあえず、病院に行こっか」

「……………続きが」（ドサッ）

「あ、倒れた」

「康太 ……！？」

『『王様だーれだ？』』』

「あ、私です」

また姫路か

「それでは、3番と7番の人にコレを」

そう言っ取っ取り出したのは見た目は綺麗に出来たワッフル

「くっ！また俺か……………」

雄二君三回目

「僕もだよ……………」

明君四回目

さて、死体が出来た所で何故こうなったのかを振り返ってみましようか

ある日の放課後

「雄二、引いて」

「何をだ明久」

「コレ」

グイッと突き出したのはタダの割り出し  
何がしたいんだろう？

「スマン。分からん」

「ワシにもサツパリじゃ、明久」

「……………理解不能」

「王様ゲームをやるうと思ってね」  
ふむ。

「で、引けと」

「うん。さあ雄二引いてみてよ」

「分かった分かった」

雄二君が一本引きました

「うむ。ではワシも引かせてもらおうかの  
あ、乗るんだ

「……………コレにする」

康太まで

「じゃあ、和樹も」

へーへー

「じゃあ、コレにするか」

「さて」 俺

「うむ」 秀

「……………さあ」 康太

「ああ」 雄二

『『王様だーれだ?』』』

「あ、僕だね」

嬉しそうだねえ

「明久か、どんな命令にするんだ?」

どうせ大して命令じゃないでしょう

「それじゃあ、平伏せえ!」

は?

「こんなんでいいのか?」

「まあ、明久だしな」

「何が良いのじゃろう?」

「……………流石は明久」

「<sup>キング</sup>王様」

うわあ、超嬉しそう

何か震えてるし

「あれ？何をしてるんですか？」

お。姫路か

「何って」

「王様ゲームじゃ」

「王様ゲーム？」

知らんのか

「ああ、棒の先に数字と王の字を書いて、それを引くんだ」 俺

「それで、王になった奴が他の奴に命令できるんだ」 雄二

「命令は数字を選ぶか、全員共通の物を考えるのじゃ」 秀

「面白そうですね、入っても良いですか？」

「あ、姫路さんもヤルの？」

あ、帰ってきた

「はい」

嬉しそうだねえ

「さて、始めるか」

まさか、あんなことになるなんて

『『王様だーれだ』』

「……俺」

お、康太

「ムツツリーニか」

「どんな命令にするんじゃ？」

「……1番と2番がコレを着る」

取り出したのは、

……セーラー服

「またかよ!？」

「てか、1番僕だよ!」

「むう。2番はワシじゃな」

ああ、秀と明か

なら、良いや

「速く着替えてこい」

「……雄二」

……幻聴だと良いなあ

「ん？翔子の声が聞こえた気がするな？」

「アツハツハツ。気のせいだろう。和樹」

雄二、声が震えていますよ

「……許さない」

え？

「ぎゃああああああ!」

わあ

「あれ？代表は？」

何だろうこの連鎖は

「愛子、一緒に王様ゲームでもするか？」

「王様ゲーム？面白そうだね。入れさせて貰うよ」

さて、翔子も参加するんでしょうねえ

「じゃあ」

『『『王様だーれーだ?』』』』

「ああ、俺だな」

「和樹か……」

「和樹、軽い命令にしてね」

「……楽しみ」

「和樹君か」

「さて、今度は誰が犠牲になるのじゃ？」  
「楽しそうだねえ」

「さて、じゃあ、3番と5番が握手で、1番と2番が一発芸と行くか」

「3番は俺だな」

お、雄二か

「……………5番」

翔子ですか

ピンポイントですなえ

狙ったつもりはありませんが

「さらば、俺の左手……………」

泣くな、後で薬塗ってやるから

「……………雄二、手」

ボキボキボキイ

「ギヤアアアアアッ!!」

何て殺伐とした握手でしょう

「1番は僕だね」

愛子か

「2番は私ですな」

姫路ですか

「じゃあ、僕は

脱ごうかな」

やっぱりそうですよな

問題しか見当たらん

「待て待て待て待て！秀っ！？そ、その関節はそんなに曲がらなぞ

「やあああああ」

「……………（ブシヤアアアアア）」

「明久君、一寸こっちに来て下さい」

「え？姫路さん。待って！落ち着こう。一寸、話し合おう」  
「まあ、一発芸かな？」

酷い目にあつた

「次は誰だ？」

雄二、もう辞めませんか？

「あ、私です」

姫路か

「それじゃあ、2・3・5・6番の人はコレを食べて下さい」  
「嘘オ！」

2番俺だよ

「えーと、3番」

明

「俺は6番だ……………」

雄二

「……………5番」

康太

何故、皆コツチを見るんですか？

分かりましたよ！

「2番」

「あ、そうですね。皆さん召し上がって下さい」  
「わあ、超嬉しそう」

「天に召します我らが神よ」

雄二、神に祈っても意味はありませんよ

「……………試練を与えず」

康太まで

「我らを導きたまえ」

明もか

『『『 AMEN 』』』

まあ、俺も祈りますが

『『『 頂きます 』』』

さあ、今度はどんな世界を見せてくれますか

最恐の料理人  
姫路瑞希？

あ、起きた後に翔子に雄二が襲われたりなんたりしました

愛子の命令でコスプレしたり、秀の命令で明と手料理を作ったり  
姫路の手料理を食べたり

……………死ぬかと思ったなあ

もう二度と王様ゲームをしないと誓いました

**幕間 俺とアイツと人格交代 さあ、私は誰でしょう(前書き)**

やっと書けたけど、微妙ですね

美春と久保にも飲ませるつもりでしたが、諦めました。

しかし、中身変わっても皆そんなに困らない気がしますね

幕間 俺とアイツと人格交代 さあ、私は誰でしょう

東野と清水の絶壁万歳

「俺と」

「美春の」

『絶壁万歳!』

「さあ、このコーナーは俺こと東野和樹と」

「美春こと清水美春が」

「島田のペツタンコに対する思いを伝えて行く」

「というコーナーです」

「さて、和樹。こちらを見て下さい」

「ん？美春！コイツは……」

「お姉さまの水着姿です」

「素晴らしい！この何とも言えない控えめな自己主張」

「この女では有り得ない曲線！」

『完璧だ（ですわ）!』

「流石は島田美波」

「流石はお姉さまですわ」

perfect  
「完璧だ。美春」

「感謝の極み、ですわ。和樹」

「美春！」

「お姉さま!？」

『和樹!!!』

「優、秀!？」

「くっ！情報が漏れていたようですわ」

「万事休すか!？」

破碎音 悲鳴 何かが碎ける音

.....この番組は終了いたします。

「さて、どっちに飲ませるべきか？」

どっちも面白そうだけど

うーむ

「籤で決めるか」

割り箸を用意します。

片方に丸を付けます

箱に入れて準備完了

「さて、どっちになるかな？」

楽しみですねえ

『和樹、おはよう(じゃ)いらっしやい』

「ああ、飯食う前に机の上の割り箸を引いてくれ」

「む？これかのう？」

「何で引くの？」

「秘密」

楽しみは後に取っておく物です

「まあ、姉上引こうではないか」

「そうね。じゃあ、私はこっち

決めるの速っ！

まあ、どっちでもいいんですけどね

「で、どつちだ？」

「？あつ！丸が付いてるわ！」

お、優か

「むう。何も付いておらんのかな」

いや、そんなに凹まれても困るんですが

「で、これは何？」

「ああ、大した事じゃないから心配するな。それより、飯食おうや」

「そうじゃな」

一気にテンション下がったな秀

「さっきの籤はなんじゃったのじゃ？」

「そういえばそうね」

デザートを食べながら聞かないで下さい

今日はモンブランを作ってみました

あ、ちゃんと薬入りです

「うーん。もうそろそろだと思っただが」

薬の調合間違えたかな？

「何が？」

と、聞いてくる俺！

お、成功ですね

「む？和樹。何を言っておるのじゃ？」

「秀、俺はこつちだ」

今は優ですね

「え？何で私がいるのよっ！？」

くっ！俺の身体で女口調、予想外にキモい

「実験は成功だな」

「説明してくれんかの？」

ああ、笑顔が眩しい

「簡単に言っと人格を移したんだ」

まあ、それだけです

「？」

分からないんですね

「だから、今、俺は優の身体の入っているし、優は俺の身体に入っているだろ？」

「む？姉上。そうなのかの？」

俺の身体に姉上って、複雑だなあ

「そうみたいね。私が目の前に居るんだから」

「あ、効果は解除薬を飲むまでだから  
今、超笑顔だろうな」

「ええ                   ！？」

優の、というか俺の絶叫  
微妙だ

#### 校門前

「じゃあ、優。しっかりと俺を演じてくれ」

コレ以上ファンクラブ会員が増えないように

「和樹こそ、しっかり私を演じなさいよっ！」

分かっていますよ。

しかし、楽しみですね

#### Aクラス前

「じゃあ、またお昼にね」

女口調って寒気がしますね

「それじゃ、和樹<sup>姉上</sup>。またの」

秀、嬉しそうですね

「またな。優」

精々頑張ってください

さて、

「優子。お早う」

おお、愛子か

「お早う。愛子」

多分、不自然じゃないと思いますが

「・・・・・・・・・・優子、お早う」

翔子か

「翔、じゃなかった。代表、お早う」

危なかった

「・・・・・・・・・・？」

気にしないでくれたら嬉しいなあ

「木下さん、お早う」

優、大人気だな

「ええ。久保君、お早う」

とりあえず別れて席に、って、俺、優の席知らない  
どうしようか

む？携帯が

「はいはい」

「あ、和、じゃなかった。優」

あっちも苦労してそうだなあ

「何の用？和樹」

「席分かるか？」

分かりません！

「何処？」

「スクリーンの正面三席のどれでも良いぞ  
そんな所に座ってたのか

「分かったわ。有難う」

しかし、優も楽しそうだねえ

side out

side 優子

和樹の身体に入って、Fクラスに入ったのは良いんだけど  
この状況は何？

『『『和子っ！付き合ってくれっ！！』』』

「えっ？何で？」

訳、分かんない

『『『最高じゃー！』』』

Fクラスってバカしかないの？

「ん？和樹に秀吉。今日は遅かったんだな」

坂本君ね

代表の彼氏の

「和樹、今、寒気がしたぞ」

随分と勘が良いのね

「気のせいじゃないか」

「気のせいじゃろう」

「秀吉、和樹。お早う」

ああ、吉井君ね

えーと

「ああ、明。お早う」

「うむ。明久、お早うじゃ」

そう呼んでいたわね

「和樹、何だかいつもと少し違う気がするね」

まさか、バカの吉井君にバレる筈が

「気のせいじゃろう明久。姉上和樹は何時も通りじゃぞ」

ええ。何時も通りね

こんな薬作る暇が有るなら、もっと相手してくれても良いじゃない

「そうかなあ？」

しかし、Fクラスって以外に面白いわね

吉井君。お願いだから気付かないで

side out

side 和樹

流石はAクラス

Fクラス何ぞとはレベルが違う

「ねえ、優子？」

どうしました？

「愛子？どうしたの？」

「何かいつもと違うねえ？」

気のせいでしょう

「ね、代表」

翔子を巻き込まない

「………和樹」

「ん？何だ？」

あ、



「……………その薬まだある？」

「ありますよ」

「どうするつもりでしょう」

「……………出して」

「嬉しそう？」

「……………行ってくる」

「行ってらっしゃい、代表」

side out

side 雄二

それは、俺が昼飯を食べようと弁当箱を開けたときだった

スパン

ああ、嫌な予感がする

「……………雄二、あーん」

翔子？お前は瞬間移動でも出来るのか？

「待て翔子、俺に分かるように説明しぎゃああああああ！？」

あ、頭が割れる

行き成りアイアンクローは無いだろっ！

「……………<sup>和樹</sup>優子から薬を買った」

「そ、そうか。今度はどんな薬を作ったんだ？」

コイツは碌な薬を作らない

「えーと、人格入れ替わりかな。簡単にいうと」

和樹？

「……………今は和樹じゃなくて優子」  
「……………は？」

何を言ってるんだ翔子？

「愛子、今日半ドンなら、そう言えよ」

「ゴメンゴメン。まさか、知らないなんて思わなかったから  
木下優子じゃないのか？」

「チ ス！優、秀。飯食いに来たぞ」

「和樹、あっさりバレたのじゃな」

「私の努力は……？」

「和樹じゃないのか？」

「どういうことだ？」

「……雄二」

畜生！俺は何で翔子から目を離してしまったんだ！

「ま、待て！翔子！」

「……待たない」

そして、俺は翔子に『何か』を食わされた

……旨かったのが救いだな

side out

side 和樹

さて、翔子が雄二にも食わせたみたいですね

「えーと、木下さん？」

お、姫路か

「私はこっちよ」

優、そんなにいやそうに言わないで下さい

「えーと、良く分からないんですが……」

俺が説明しようと口を開

「なっ！何じゃコリヤアアアアアッ!？」

雄二、「いや、翔子の絶叫  
新鮮だねえ

「……雄二の身体」

翔子の変態みたいだ

「まあ、こういう訳だ」

「何となく分かりました」

分かったらしいです

姫路と島田も巻き込みましょう

「姫路、島田と一緒にコイツを食べてくれ」

薬入りモンブランです

「分かりました。今日も美味しそうですね。いつも有難うござい  
ます」

素直なのは良いことです

しかし、

『カオスだ(ね)』

現在、雄二翔子を翔子雄二が襲っていて、それをFFF団が阻止しようとバ  
トっています。

翔子に勝てる訳が無い

さて、島田の嬉しい悲鳴は置いて  
後、残ったのは明・秀・康太・愛子か

誰に食わすかな？

「明。コッチにおいで」

フリーズしてないでこっちに来なさい

「え？あ、うん」

康太と明で行こうか

「康太もおいで」

「……………何の用だ？」

相変わらず静かですね

「さあ、口を開ける！」

ブチ込んでやろう

『え？』

「せーのっ！」

『モガッ！？不味ッ！いや、旨い？』

味わって食べなさい

「愛子と秀」

「ん。僕は木下君だね」

「ワシは工藤か」

その通り

「それじゃあ」

「うむ」

『頂きます』

さて、皆食べましたね

「ちょっと！和樹、何してくれるのさ？どつせ変わるなら秀吉が良かったよ！」

うん。康太が大きな声で話している新鮮だねえ

明、フザケルなよ？

「……………明久の身体何て屈辱だ」

静かな明ってレアですよ

嫌われてるのか、明？

さて、明と康太が舌戦を開始しましたよ

「か、和樹！助けてくれ！」

おや、雄二

「翔子ちゃん。そんな口調で話してはいけません」

「手前っ！覚えてやがれ」

視線で人を殺すを地で行かないで下さい

翔子だと本気で出来そうに恐いんですから

「東野君」

ん？島田、じゃないな。姫路か

「どうしたの、姫路さん？」

優、さん付けは違和感しか出ません

「美波ちゃんの身体、滅茶苦茶軽いですよ！」

嬉しそうに報告しない

「そうね。瑞希の胸ってこんなに重いよね」

そんな報告は要りません

「和樹？胸って重いのか？」

知りませんよ、そんなことは

「知らんが、島田が言ってるんだから、そうじゃないのか？」

「我が愛すべきペツタンコの言う事ですから、間違いでは無いでしょう」

「和樹君」

おお、愛子か

「愛子、どんな感じだ？」

「良いね。木下君の中、動きやすいし」

「……………表現方法が微妙に違う気がします。」

「秀吉、愛子の身体はどう？」

「うむ。存外動きやすいので、驚いておるわ」

元が女みたいだからじゃないですか？

あ、翔子が雄二に襲われるってレアじゃありませんか？

そして、それを必死の形相で撮影する明

島田と姫路の攻撃に晒される康太

翁言葉の愛子に色々とおーブンな秀

女口調（ちゅーか、優口調）の俺に男口調の優

いつもなら、有り得ない光景ですからね

無茶苦茶楽しいですねえ

「何というか、こう」

ん？どうした優？

「平和よね？」

ええ、果てし無く

「まあ、バカ騒ぎして楽しめば充分だろう」

それが、Fクラスの存在理由だと思えます

最近、Aクラスも巻き込んでいる気がしますが

まあ、気のせいでしょう

追伸

結局、放課後になって、解除薬を渡したら、雄二（中身は翔子）と

姫路（同じく島田）にいやな顔をされました

戻った後に、雄二・明・康太にボコボコにされた

………仕返ししてやろうと思いました

ああ、後、久保と美春が『薬を売ってくれ（下さい）東野君（和樹）

』と詰め寄って来たので、薬を売りました。

どうなったのか、楽しみです



幕間 俺とアイツと人格交代 さあ、私は誰でしょう(後書き)

四巻の表題って、『清水美春襲撃編』で良いんですかね

43話 清水美春襲撃編スタート 明と雄二とFFF団（前書き）

祝っ！！アクセス数58万突破！ユニークも5万を突破！

感動したので、雄二君と和樹君に会話させます

表題『翔子に借りた本』

「和樹、何を読んでいるんだ？」

「ん？翔子に借りたんだが……」

「翔子に？どんな話なんだ？」

「タイトルが『夫を拘束する50の方法』と『私にも出来る簡単黒魔術』と、待て、何故取り上げるんだ、雄二？」

「取り上げるに決まってるだろ！？こんな物燃やしてやる」

「………許さない」

「待て、翔子。話をぎゃあああああっ！？」

雄二君に合唱

43話 清水美春襲撃編スタート 明と雄二とFFF団

第一問

次の言葉を正しい英語に直しなさい

『ハートフル ラブストーリー』

姫路瑞希の答え

『heartfull love story』

教師のコメント

正解です。映画や本の謳い文句によく見かける単語ですが、たまにheartの部分の間違える人がいます。身近にある英語なのですが、意外とわかり難いようですね。

島田美波の答え

『hurt full rough story』

教師のコメント

約『怪我一杯の荒っぽい物語』  
こんなハートフルラブストーリーを演じるのは貴女だけだと思います。

霧島翔子の答え

『hurt full rough story』

教師のコメント

まさかもう一人いるとは

須川良の答え

『羨ましいんじゃないやあああっ!!』

教師のコメント

後で西村先生の所に行ってください。

おお、Fクラスの

「異端審問会じゃな」

「何それ？」

優は知らんのか

有名だと思っていましたが

「彼女持ちやその疑いがある人間を集団でリンチにするという恐ろしい団体だ」

何度襲撃を受けたことが

須川や近藤なんか顔は普通より上なんだから、頑張ったら彼女出来ると思うんだが

「……………私は何も見なかった」

ハイ。現実逃避しない

「お、今度は雄二が囲まれて……………」

「流石に多勢に無勢じゃな」

「坂本君も可哀そうに」

ええ。多分、雄二は関係ありませんから  
どうせ翔子が何かしたんでしょう

『東野！歯を食い縛れッ！』

はあっ!?!?

「俺もかよ?」

待って、近藤君。刃物はヤバイ！

須川君？君は何か武道でもしていたのかな？  
動きが半端ないよ？

「くつ。手前等。やってやろうじゃねえ……か？（ガクッ）」

根岸！殺す！

いきなり後頭部から火花が散りました  
そして、急速に暗闇に落ちて逝きました

side out

明久side

『諸君。ここはどこだ？』

『最後の審判を下す法廷だ！』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『宜しい。これより 二 F 異端審問会を開催する！』

目を覚ますと、そこはサバトの会場だった

「え？どういふこと？」

この畳の感触に腐ったような匂いから、ここはFクラスだとわかる

けど

「起きたか明久」

「明。コロシテやりたいよ」

聞きなれた声が聞こえてきた

そして、僕は何故脅されたんだろう？

「……………和樹に雄二、何やってんの？」

「……………お前の巻き添えだ」

「……………キサマの所為だ」

僕は和樹に何かしたかなあ？

「さて、Fクラス諸君？覚悟は良いかな？」

え？いつの間に抜けだしたの和樹？

「和樹どうやって抜けだした？」

「ハッ！優と秀と付き合ってみる。縄抜けくらい出来んと話にならんぞ」

あ、和樹から哀愁が

『クツ！いくら東野といえども、この人数相手では勝てまい』

『皆の者！かかれ！！』

『『ウオオオオオオオオオオオ！！』』』

「死にさらせ！バカ共」

え？あの人数相手に素手で行くの？

「明久。確認したいことがある」

「何だい雄二？」

『か、勝てねえっ!』

『泣きごとを言うな!』

『そつだ!まだ此方が優勢だ』

え?

そちらを見るともう半分程しか残っていなかった  
奴は化け物か!?

「話を聞けバカ」

突如、僕の顔面に痛みが走った

「……………陥没したように痛い……………」

「島田と何があつた?」

美波と?

「んー?告白みたいなのを言った」

「……………は?島田がお前にか?」

何で美波が僕何かに告白するんだらう?

「違う、僕が美波に」

「そつかそつか」

えーと、雄二?何で僕の方に足を向けるの?

「くたばれ」

顔が凹んだ気がする

「顔が……………」

「気にするな。元から不細工なんだから変わらんだろ」

僕は何でここまでバカにされないといけないんだ?

『撃破!!!』

『……………化け物め!』

あ、居たんだ。ムツツリーニ  
てか、和樹。もう勝ったの?

「さて、明久。何て言ったんだ?」

ん?確かメールで

「『雄二より好きだ』って」

「待て!お前の好きの判断基準は俺なのか!?」  
失礼な

雄二の筈が無いじゃないか

というか、僕はコイツが嫌いはずだ

『東野!貴様は憎く無いのか!?』

須川君。生きてたんだ

「は?須川、何言ってるんだ?俺は島田と明の仲なら応援するぞ」  
待って!まるで僕が美波と付き合っているみたいに言わないで!

『何故だ!?』

えーと、近藤君かな?

皆同じ格好だから良く分からないや

「良く考えてみる」

『『『何を』』』』

「島田に(明が)ボコられる回数が増えるんだぞ、最高じゃないか」  
嬉しそうに死刑宣告しないでくれる!?

『『『それもそうだな』』』』

「貴様ら!最低だ!」

薄々気付いていたけど

「……………貴様等は停学明け早々に、何をしているんだ？」

底冷えするような声と共に鉄人が入って来た

「ああ、先生。少し異端審問会とお話しただけですよ」

和樹、君の周りには死体の山が見えるんだけど

僕の気の所為かな？

「……………お前等は……………それよりも点数補充のテストは受けなくていいのか？」

ああ、そういえばあの覗き騒ぎで点数が無くなったんだ

まあ、大した問題じゃないんじゃないかな

何と言つても学園の底辺だし

『『そんなことよりも、吉井を殴りたい!!』』』

この頃復活するスピード上がってるよね絶対

「分かった。俺が出て行つた後にやれ」

……………最低の教師だ

可愛い生徒を見殺しにするなんて

『『『分かりました。鉄人!!』』』

「西村先生と呼べと言ってるだろうが……………」

鉄人行かないでっ!

僕はこれからクラスメイトにリンチにされます

「さあ、吉井。覚悟しろ」

くっ

「誰か助けて!」

誰か、誰か!居ないのか?僕を助けてくれる勇者は?

姫路さん、無理だトリップしてる

雄二、は今縄抜けに挑戦してるし

和樹、は助けてくれる訳がない

万策尽きたか、出来るだけ犠牲者を増やしてやる

「随分と面白いことになっておるのう」

秀吉っ！

「秀吉！今日はなんで遅かったの？」

「うむ。異端審問会に和樹が拉致られた後に、姉上とAクラスでお茶をしておつたのじゃ」

え？秀吉は和樹が心配じゃなかったの？

「しかし、雄二はわからんでもないが、明久は今朝の件かの？」  
何てこつた！秀吉にも見られてたなんて

「その通りだ木下。異端者・吉井明久はこの学園内で島田美波と接吻などという不埒な真似を」

ガラッ

扉を開けて入ってきたのは、美波だった  
耳まで真っ赤になった美波って、レアだなあ

「……」

皆どうして黙っちゃうの！？

凄く居心地が悪いんだけど

「おはようございます皆さん。今日は諸事情により布施先生の代わりに私が授業を  
どうしたんですか皆さん？」

先生、今日も授業になりません

43話 清水美春襲撃編スタート 明と雄二とFFF団(後書き)

良いですよね。異端審問会。

44話 明と美春と島田 何色の青春かな？俺は朱色だと思っ（前書き）

前回地味に書いてて楽しかったので、今回も会話させます

表題『優の読んでいる本は？』

「ん？優。何読んでるんだ？」

「和樹。な、何でもないわよっ！」（慌てて隠す）

「へえ？何々『馬鹿と野獣の作戦会議（明×雄二）…………お前は』」

「何よっ！文句あるの？」

「いや、もう何も言わんが、ん？もう一冊あるな」

「あ、そっちは…………」

「『馬鹿と天才？の化学反応』（俺×明）ほう？」

「えーと、あのね。和樹、そんなに睨まれても困るんだけど…………」

「ちよつと、こっち来い」

「え？ちよつと、待って！キヤアアアア」

もう一発

表題『姫路の手料理！番外編』

「はい、明久君。あーん」

「え？うん。あーん」（ゴックン）

（ボタンツ！）

「美味しいですか？」

「お…………美味しいです。はい」

「良かった。まだまだ沢山ありますからね」

「・・・・・・・・ハイ」（シクシクシク）

今回の使用薬品 黄燐 硝酸 ブロム水素

良い子は真似しないで下さいね

#### 4 4 話 明と美春と島田 何色の青春かな？俺は朱色だと思う

バカテスト

以下の問いに答えなさい

『西暦1492年、アメリカ大陸を発見した人物をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、以外とファーストネームが知られていないことが多いです。意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかったようです。よくできました。

東野和樹の答え

『クリス・ダ・ガマ コレ以上良いボケが浮かびません』

教師のコメント

分かってて、間違えないように。そして、西村先生が呼んでいましたよ。

清水美春の答え

『クリス』

教師のコメント

慣れ慣れしいですね。

島田美波の答え

『ブス』

教師のコメント

過去の偉人になんてことを。

こんな静かなFクラスは初めてですね

さて、明と島田が急接近中です

まあ、殺気が膨れ上がっていますが

『では須川君。この場合3molのアンモニアを得る為に必要な薬品はなんですか？』

『塩酸を吉井の目に流し込みます』

『違います。それでは、朝倉君』

『塩酸を吉井の鼻に流し込みます』

『流し込む場所が違うという意味ではありません。それでは、有働君』

『では、吉井の身体に濃硫酸を振りかけ、苛性ソーダを口に押し込みます』

『『それだつ！！』』

『少しは真面目に答えなさいっ！！』

流石はFクラス

あ、チャイム鳴った

「はぁ……、今日はここまでにします」

お疲れ様です

「和樹、どう思う?」

「どうって、雄二。微笑ましいが、明には似合わないな」  
彼には暴行と不条理が似合っています

「……被写体が増えた」

康太? 嬉しそうですね

「明久が血迷った事を言っておるが」

ええ。お昼に水飲み場はフザケているとしか言えません

「お姉さまっ! 何をしていますか!? そんなに豚野郎に密着して!?!」

おお、美春。いらっしやい

「美春!? ウチの邪魔をしにきたの!?!」

邪魔というか、自分に正直に生きているというか

「流石じやのう。清水は」

「俺には島田のことが他人事とは思えない」

「……霧島より悪質」

「良くもまあ、あそこまで調べられるものだ」

やるねえ美春

愛は盲目というのかのねえ

「だって、ウチはアキと付き合っているんだから」

「畳返しっ!」

「……お前等は

カッターは凶器だと言ってるでしょう

そして、雄二は関係ないでしょう

『』

チツ  
『』

舌打ちまでしますか

美春？

「少し落ち着け美春」

美春の後ろから近付き、羽交い絞めにして動きを止める

「離しなさいっ！！和樹！そして、あの豚野郎の皮を美春に寄越しなさいっ！！」

落ち着いて下さい

非常にグロイから止めて下さい

「か、和樹。有難う」

「東野。そのままDクラスに戻ってきて」

そうしましょうか

「和樹、折角面白そうなんだから、離してやれ」

まあ面白いんですが

「グロイの苦手なんだがなあ」

美春を離すと、水を得た魚のように明に突っ込んでいった

「裏切り者っ！！」

失礼な

「さあ、5秒上げます。神への祈りを済ませて下さい」

楽しそうですね

「さあ、授業を始めるぞ。今日は遠藤先生は別件で外しているので

俺がビシビシ

ん？やれやれ・・・また清水か・・・

・・・授業を始めるから自分の教室に戻るように」

鉄人先生、今、クラスが非常に面白いことになっています

「きよ、今日は先週までとは違って特に大事な用なんです！西村先生、今だけは美春を見逃してください」

大事な用ねえ

「特に大事な用？まさか、また先週みたいに『邪魔者のいない教室

でお姉さまと一緒に授業を受けたいんです』とかじゃないだろうな」  
美春、アナタはそんなことをホザイタンですか  
島田を愛し過ぎでしょう

「いいえっ！今日は『この教室の和樹以外の男子を全て殲滅する』  
という特に大事な」

「今後この教室への立ち入りを禁じる」  
ピシャン！

酷い。折角面白くなってきたのに  
そつえば秀は美春の目から見た場合、どちらになるんでしょう？  
今度聞いてみましょうか

『お、お姉さまっ！まだお話が！せめてその豚野郎から席を離して  
貞操を』

島田の貞操より、明の生命健康の方が気になります  
普通に守れそうですし

「清水。最近のお前の行動は目に余るものがある。……そ  
んなに生活指導を受けたいのか？」

俺は遠慮します

最近特に鉄人から逃げにくくなっているので

「美春、安心しろ。明にそんな甲斐性はない」

『嫌ですっ！！お姉さまは美春の物ですっ！！』

「貴様等、良い度胸だ」

おっと、授業を受けなければ

鉄拳制裁何て御免ですから

「で、一難去つてまた一難か」

明？周りのカッターが見えないんですか？

「明久をコロシタイ」

頭撫でるのは構いませんが、時と場合を考えましょう  
雄二君、壊れ過ぎです

「……………（パシャパシャパシャ）」

康太、相変わらず素早いですねえ

「……………（グイ）」

何です、秀。頭を突き出して

「ああ、分かった」

頭撫でて欲しいんですね

『『『もう我慢ならね

つつ！！』『『』

で、FFF団で血祭りにあげると

そりゃキれるわ

『さつきから見たりゃあ、これ見よがしにイチヤイチャしやがって

』！

『殺す。マジ殺す。絶対的に殺す。魂まで殺す』

『……………お姉さまの髪に触るなんて……………八つ裂きに

しても尚、赦されません……………！』

おや？美春の声が聞こえた気がしますね

『豚野郎！！小便はすませましたか？神さまにお祈りは？部屋のス

ミでガタガタふるえて命ごいする心の準備はOKですか？』

いつ入って来たんですか、美春？

何か、サマになってますねえ

命ごいしても殺すんでしょうね

「お前等！今は授業中だぞ！！」

西村先生、そんなの気にする筈ないでしょう

「清水、授業はどうした？」

「そ、それどころじゃありません……………！お姉さまが」  
「清水」

恐っ

流石の美春も鉄人の声に委縮しました

「二度目の警告だ。おとなしく自分の教室に帰れ。それと、もう一度言つがこの教室の出入りを禁止する。わかつたな？」

「……………わかりました」

あれですね、憎しみで人が殺せたらですね

「お前等も授業中に遊ぶんじゃない。そういうことは休み時間にやれ」

休み時間なら明君がどうなっても構わないと

さて、美春の事ですから面倒事を持って来てくれるでしょう  
楽しめたら良いのですが……………

45話 明と島田とDクラス 告白(誤解)をしよう(と)ころ( ) (前書き)

最近、タイトルを付けるのが難しくなってきました。  
以外に4巻は特徴のない話が多いので、難しいですね

今回のネタは

『メイド服』

「……………屈辱だ！」

「うん。似合うよ。ムツツリー二君」

「……………何故、俺が」

「和樹君に負けたからだってね」

「……………そして、なぜ工藤愛子がいる？」

「ん。和樹君からムツツリー二君の写真を撮っておくように、言われたから」(カメラを構える)

「……………好きにしろ」

「じゃ、遠慮なく」(パシャパシャパシャ)

土屋康美で売れたらしいですよ

#### 45話 明と島田とDクラス 告白(誤解)をしよう(としよう)

以下の人物について答えなさい

『非暴力・不服従を提唱したインド独立の父は誰でしょう?』

姫路瑞希の答え

『マハトマ・ガンディー』

教師のコメント

流石は姫路さんですね。正解です。

吉井明久の答え

『鑑真』

教師のコメント

ニュアンスで覚えたということは伝わりました。

土屋康太の答え

『空海』

教師のコメント

君は本当に興味があること以外は酷いですね。

東野和樹の答え

『モHANDAS・カラムチャンド・ガンディー』

教師のコメント

どうしたんですか?正解です。

今は休み時間です

先の鉄人先生の言葉通り

明君の命を狩り捕ろうとFクラスが頑張ってます

「……………和樹、雄二。これを聞いて欲しい」  
ん？

「ムツツリーニ、どうした？」

「康太、また厄介事か？」

何でしょう？

「……………Dクラスで試召戦争を始めようとする動きがある」

「……………美春、そこまで明が嫌いですか？」

「清水か……………」

「だろうなあ……………」

明君、敵ばかり増えますね

「そつえば、島田と明久は」

「ん？僕がどうしたの、雄二？」

おや、お帰り

なんとなく全身ポロポロになって帰ってきました

「ああ、丁度良い。お前に聞きたいことがあるんだ」

「何、雄二？また厄介事？」

ええ

「お前の所為でな」

「え？僕？」

ええ。アナタの所為です

「む？和樹、どうしたのじゃ？」

おや、秀

「ああ。Dクラス美春がな」

秀に状況説明中

「島田とお前は付き合っているのか？」

そういえばそうですねえ

地味に気になります

「僕の記憶だと、付き合っていない、と思う……………」

自信なさげですね

まあ、明の記憶力には元から期待してませんが

俺としては、姫路とくっ付くよりは島田とくっ付いて欲しいですね

「で、話を纏めると」

「俺と雄二の所為だと」

アナタの所為でしょう

「そうだよ、二人共。腹を切って詫びるべきだよ」

「最悪のタイミングでやらかしたものじゃな……………」

まあ、明君の色恋なんてどうでもいいんですが

「何にせよ、誤解というなら話は早いのもう」

「そうだな。Dクラスに、というか、美春に『島田美波と吉井明久は付き合っていない』というのを伝えれば、大人しくなるだろ」

「さらに、俺たちはいつもの日常を取り戻せて、万々歳だ」

「何だ、簡単じゃないか」

そうですね？

明が主役なんですよ？

非常に心配です

「……………作業を始める」  
任せます康太

おや？姫路

「あ、あの、明久君っ！聞きたいことがありますっ！」  
おやおや

「何かな姫路さん？」

「そ、その……………っ！あ、明久君は……………美波ちゃんに告白したんですか……………？」  
明君モテモテですね

「姫路、その話なんだが、島田と一緒にの方がいいだろう。どこにいるかわかるか？」

「美波ちゃんなら、さっきまで屋上にいましたけど……………」

「よし、それなら俺たちも屋上に行くか。ここで話すのもなんだしな」

移動かぁ

「康太、屋上にも盗聴器があるか、確認できるか？」

「……………問題ない」

相変わらず頼もしいですね

さて、屋上です

今日も良い天気ですね

あ、康太君が盗聴器探してます。

さっき、明君に頼まれた仕事をするそうですよ

「あ、瑞希　とアンタたちも？皆揃ってどっしたのよ？」

まあ、大した用ではありません

折角、屋上に来たんだから

「お前は何しに来たんだ？」

おや？

「良い天気だから、本でも読もうと思ってな」

最近、ハマっているのは山田 介と乙 という人の本です  
レンタル ルドレンと小 物語でハマりました

「後でやれ」

何故か溜息をつかれました

「神よ、ご加護を……！」

「何してるの、アキ？」

「うん。まあ、ちよつとしたおまじないだよ」  
死を覚悟したと

「美波、実は強化合宿の時に送ったメールなんだけど……」  
「あ、あのメールがどうしたのよ？」

おやおや、青春ですね

「実は 誤解なんだ」

「……え？」

絶句

「ま、間違えたって、誰と……？」

フリーズ中の島田

いつ帰ってくるかな？

「須川君、かな」

あのメールを送られても須川は困るだけでしょうが

「「ええええっ!？」」

姫路まで

しかし、以外に帰ってくるのが速いですね

「じゃ、じゃあ、アキはウチじゃなくて須川に告白したつもりだっ

たの!？」

「そ、そんな! 明久君はなんだかんだ言っても女の子が好きなんだと思っていたのに、やっぱり男の子を、しかも坂本君でも木下君でも久保君でもなくて、須川君が好きなんて……!」

君達の明に対する認識も十二分に酷いと思いますかね

あ、ちなみに優の部屋からそれぞれが相手の本が出てきましたよ  
タイトルはそれぞれ

『馬鹿と秀才と勉強会』(久保×明)

『馬鹿と悪鬼羅刹と肉体言語』(雄二×明)

『馬鹿と演劇娘?と発表会』(明×秀)

の三冊です。

秀のは発行元に殴り込みに行ったので、販売中止です  
他のは、まだ発行してるらしいですが

須川のは見てないですねえ

タイトルはどうなるんでしょう?

読む気は欠片も起こりませんが

「で、でも、坂本より好きだなんて言われたら普通誤解するでしょ!？」

そうですか?いつもの言動・行動を見てても『何でコイツラ友人や  
ってるんだろ?』と良く思います

週に七日位は

「しないよ! 僕は普通に女の子が好きなんだから!」

ハイ。雄二君、首を傾げない

明は多分、女の子が好きなんでしょうから

「いいなあ美波ちゃん……。私も坂本君より好きだなんて  
言われてみたいです……」

言われたいんですか!?

「姫路さんっ! 悲しまないで! 嘘だからね!？」

「あ、明久………。俺はどんな返事したらいいんだ……?」

流石は雄二、ノリが良いですね

「普通に嫌がれ!」

明君の絶叫が響き渡りました

雄二が楽しそうに笑います

「まあとにかく、そんなワケで間違いメールだったんだよ」

「そっか。誤解だったのね。ウチもちよっとおかしいな、と思ったんだけど、やっと納得がいったわ」

「あはは。美波はそそっかしいなあ」

「もうっ。送り先を間違えるアキには言われたくないわよ」

二人で楽しそうに笑って見つめ合うこと、しばし

行き成り島田が明の胸倉を掴み、ガツクンガツクン揺さぶる

「どうしてくれんよ　!? ウチのファーストキス　　っ!」

良いじゃないですか、明に捧げたんですから

「ごごごごめんなさいっ! 僕も悪気はなかったんですっ!」  
悪気があったらタダのすけこましです

「ごめんで済む問題じゃないでしょ!？」

まあ、そりゃそうでしょうね

「そ、その美波」

「なによ!？」

「えっと　　僕も初めてだったから、おあいこっつてことじゃ、ダメかな……?」

『ダメに決まっつてんだろ』

何言っつてんですかあんたは

やっぱり明君なんか頭に飼ってるでしょう

「え……？そ、そうなんだ……。それは、その……えっと……ご馳走様……？」

まあ、満足そうですから、いいんでしょう

「あのさ美波。怒らないで答えて欲しいんだけど」

「え？何？」

「僕と美波が付き合っているって話なんだけど、あれってもしかして、美波が僕のことを……。その、す、好き、とか……」

「あ……。！そ、それは……。っ！」

おお、面白くなってきましたね

「どう見る、雄二？」

小声で雄二に聞いてみました

「ん？ああ、多分、島田は素直に答えないだろう  
勿体ない」

「折角のチャンスなのに」

「だから島田なんだろう」

流石はツンデレ島田ですね

ムツツリ商会の商品名です。

ネーミングセンスがあるのか、ないのか  
どちらでしょうね

「あ、あれはね、ほらっ。美春があまりにもしつこいから、彼氏でもいたら諦めてくれるかと思って、それでタイミングよくアキが告白してきたもんだから……」

「ああ、なるほど。そういうことが」

さて、どうしましょうかねえ

「むづ。島田にも困ったものじゃな」

「まあ、ああいう距離感がいいんじゃないか？」  
「わかりませんけど」

「……歯痒い」

良いじゃないか、被写体が増えて

しかし、この面子だと誰も後押し出来ないんだよなあ  
可哀そうな人達だ

「まあ、どつちにしても」

「苦しい言い訳だな」

「一人以外にはバレバレじゃぞ？」

「……素直じゃない」

「べ、別に言い訳とかじゃなくてホントに……っ！だ、誰がこ  
んなバカと！」

まあ、これで問題は解決ですね

明の悲鳴は放っておいて

「これで誤解は解けたようじゃな」

「あとはこの話を美春に伝えれば、問題は解決だな」

「そうだな。これで清水も納得するだろう」

「……話はうまく伝えておく」

康太、任せました

これで、終わると楽なんですけどねえ  
終わらないでしょうね

45話 明と島田とDクラス 告白(誤解)をしよう(と)ころ(後書き)

東野君を後書きに呼んでみよう

いらつしやい

「作者、何の用だ？」

不機嫌そうですなえ

「当たり前だ。これから新薬を作ろう、って時に呼びやがって」

まあまあ、落ち着いて

「で、何の用だ」

うむ。感想で気になることを書かれていたのでな

「気になること？」

ああ、明久君の扱いが酷いと

「酷いのか？普通に接したつもりだが」

酷いらしいぞ

「これからは少し気にかけてみるか」

そうしてくれ

「要件は終わったか？」

ああ

「じゃ、帰るわ」

またねえ



46話 俺と平賀と異端審問会 いやあ、楽だわ（前書き）

今、気付きましたけど、この話するとかかなり話短くなりますね  
まあ、平賀君は普通の人っぽいので少しくらい苦労してもらおうか  
と思ひまして

で、今回の表題は『七色の声』

「和樹、何やってるの?」

「ん? 優、じゃなくて秀か。お前こそ何やってんだ」

「暇だったからね」（明の声）

「楽しいか?」

「……………余り」（康太の声）

「そうか。なら、少し実験に付き合え」

「俺は嫌だぞ」（雄二の声）

「お、随分と余裕があるじゃねえか」

「ワシが悪かったのじゃ。だから、勘弁してくれんかの?」

「ダメだ。お前も楽しめ」

4 6 話 俺と平賀と異端審問会 いやあ、楽だわ

バカテスト

以下の状況を想像して質問に答えて下さい。

『あなたは大好きな彼と二人きりで旅行に行くことになりました。ところが、飛行機に乗っていざ出発、というところで忘れ物に気が付きます。さて、あなたは一体何を忘れてきたでしょう？』

姫路瑞希の答え

『頭痛薬や胃薬などの医療品』

教師のコメント

これは『あなたが好きな人に何を求めているか』についてわかる心理テストです。忘れ物はあなたに欠けている物を表し、忘れても気が付かずに出発してしまったということは、一緒にいる彼がそれを補ってくれるとあなたが考えているからです。

どうやら姫路さんは好きな人に安らぎを求めているようですね。

霧島翔子の答え

『手錠』

教師の答え

忘れ物の前に、持って行くこうとする時点で間違っています。

工藤愛子の答え

『下着を穿いていくこと』

教師のコメント

あなたは好きな人に何を求めているのですか。

木下優子の答え

『サンドバック』

教師のコメント

彼が可哀そうです。

で、なんだかんだあつて昼休みです  
Dクラスも大人しくなりましたし

「何だ明久。島田が作った弁当は貰えなかったのか？」  
「うん。美波のご機嫌が斜めでもらえなかった。凄く期待していたのに……」

少しは自分で作るなり、なんなりしましょうよ  
料理できるんですから

「まあ、この状況で手作り弁当なぞ渡したら、また清水が乗り込んでくるかもしれんからな。諦めることじゃ」

「じゃあ、和樹か秀吉。僕に恵んでくれない？」

何でそうなるかなあ

「ワシは嫌じゃぞ」

早っ！

あつという間もなく弁当箱を後ろに隠してしまいました

「じゃあ、和樹。少しでいいから頂戴」

やってもいいんですが

「三回回って、ワンと」「1・2・3。ワンッ！」お前にプライドはないのか!？」

最後まで言わして下さい

そして、即効で実行しないで下さい

「プライド？そんな物じゃ、お腹は膨れないよ？」

何か無駄に説得力がありますね

「分かったよ。約束だし、ホレ」

弁当箱を明に手渡す

「有難う！和樹」

嬉しそうに蓋を開き、食べ始める明

まあ、偶には良いでしょう

「ああ、全部食べよ。勿体ないから」

「ありやお、きやずき（有難う、和樹）」

何言ってるんだが

「で、康太は？」

「ああ。さつき何か妙な情報を掴んだみたいで、確認しに出て行ったが　おつ。戻って来たぞ」

「……………ただいま」

お帰り康太。

それより、俺の昼飯、どうしましょう？

「どうしたのじゃムツリニ？また何かあったのかの？」

明君、幸せそうに食べますねえ

「……………（コクリ）」

「さつき言っていた情報か？」

「……………今朝よりも更に良くない状況になってきている  
コレ以上良くない状況ですか？」

再生されたスピーカーから流れてきたのは

『あ、あのっ、土屋君っ。明久君のセーラー服姿の写真を持っているって噂は本当ですかっ？』

『…………一枚100円。二次配布は禁止』  
『二次配布は禁止ですか…………。残念です…………。でも、私個人で楽しむだけでも充分に』

プツッ

「…………再生するファイルを間違えた」

「康太。一枚100円は安い」

せめて、300円

「問題が違うからねっ！」

折角綺麗に撮れたのに100円は安い

「…………こつちが本物」

え？その機械一つじゃ無いんですか？

『Fクラスの様子はどうか？』

『何かまたバカなことをよっていたようで午前中は点数補充もやっていないみたいだ。あの様子だと、こつちの意図に気付くこともないだろうな』

『そうか。当面は俺たちも点数補充をして、向こうにこちらの動きが気取られたら即座に宣戦布告を行おう』

おやおや。物騒ですねえ

「で、どうする雄二？」

「Bクラスのゲス野郎めっ。随分と姑息な手を…………。そういうえば、根本の写真集って微妙に売れてるんですね、康太が驚いてました

「どづいづこと？」

明…………

「単純に言つとBクラスでFクラスに対して試験召喚戦争の動きがあるってことだ」

「ええっ！そんなのタダの弱いもの虐めじゃないかつ」

まあ、戦力差が元々凄いですし

「で、だ。回避する方法だが」

「む？どうするのじゃ？」

「Dクラスと戦争をすれば良い」

「どうやって？」

単純明快

「お前達がもう一度恋人をやればいい」

雄二君。それはそれで面白そうですが、提案があります

「雄二、異端審問会借りるぞ」

「あん？和樹、どうするつもりだ？」

「こちらから喧嘩を売りに行くんだ」

可哀そうな平賀君

「良く分からんが、面白そうだ。そっちはそっちでやってくれ  
さて、許可も降りましたし」

「おい。お前等、今暇だよな」

拒否権は認めませんが

「まあ、暇だが……」

「俺たちに何の用だ？」

楽しみにして下さい

「裏切り者」

『東野、案内しろ』

小声で呟いたのに、バツチシ反応してくれました

「Dクラスの平賀を拘束して欲しい。……殺すなよ」

？」

あれ？人選間違えた？

アナタ達は何処からその獲物を出しているんですか？

『諸君、血の制裁の時間だ』

『『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』』』

いや、だから殺すなって

まあ、取り合えずDクラス前です。

良いですね、近くて

『行くぞっ！』

そう言つて、須川は足を振り上げ、扉を蹴破った  
オイッ！！

「な、何だっ！？」

「な、何よ？あいつ等？」

お食事中、お邪魔します

『『平賀あああつッ！』』

相変わらず、無駄にハイスペックですね  
拘束するのに、扉蹴破ってから5秒つて  
もう、プロですね

「な、何だっ！？俺が何かしたか？」

いえ、別に

『諸君。ここはどこだ？』

『『最後の審判を下す法廷だ！』』

『異端者には?』

『『『死の鉄槌を!!』』』』

『男とは?』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの!』』』』

『宜しい。これより

一一 F 異端審問会を開催する!』

「和樹、何の騒ぎです?」

おお、美春。

「少し、平賀に話が有ってな」

「で、彼らは?」

「有名な異端審問会だ」

「ああ。あれが、あの」

美春は知っているんですね

「と、お前等。俺はこいつに用があるんだ、だから殺すな」  
要件が終わった後にして下さい

「と、東野。要件はなんだ?!?」

『血の制裁をツ!』

ビビらすな

「俺たち、Fクラスは今、少し面倒なことになっていてな」

「そ、それが、どうした?」

「俺たち、Fクラスに宣戦布告をして欲しい」

「どういうことですか?」

「ああ、Bクラスが少しな」

「成程。点数補充してなくてBクラス戦はきついから、Dクラスに頼もうと」

正解です

「その通りだ。で、平賀。OKしてくれないか？」

「了承したら、コイツラを除けてくれるか？」

まあ、それ位なら

「構わんぞ」

「分かった。俺たちも点数補充はしてないが、命は惜しい。俺たちDクラスはFクラスに対して宣戦布告をしよう」  
さて、帰るか

「お前等。平賀の処刑はいつでも出来る。今は点数補充をしてDクラスに備えるぞ」

『チツ。平賀、覚悟しておけ』

舌打ちまで寄越すのか、お前等は

ああ、忘れていました

「お前等、先帰ってろ」

『？何をするつもりだ』

「少し用がある」

『分かった』

ぞろぞろと帰って行く異端審問会

何故、扉から帰らずに窓から帰って行くのですか？

「で、美春。秀のことどう思っ？」

「は？秀？ああ、木下秀吉ですね」

「そう。お前が前に俺以外の男子を殲滅するって、言っていたからな。秀はどうなるのかと少し疑問に持ってたな」

「木下秀吉は、微妙な境界線上に居ますからね。多分、殺さないと  
思います」

「そうですか」

「分かった。またな」

「ええ。また」

さて、明達はどうなったかな？

後ろから平賀君の悲鳴が聞こえてきました。

やっておいてなんですが、この学校は呪われているとか、そういう  
の無いんですかね

いつも、血と悲鳴が付いてきますし

46話 俺と平賀と異端審問会 いやあ、楽だわ（後書き）

バカテスト 男子編

『あなたは大好きな彼女と2人きりで旅行に行く事になりました。ところが、飛行機に乗っていざ出発、というところで忘れものに気がつきます。さて、あなたは一体何を忘れて来たでしょう』

東野和樹の答え

『入院費』

教師のコメント

怪我をすることは決まっているんですね。

坂本雄二の答え

『解毒薬』

教師のコメント

霧島さんは薬まで使うのですか？

吉井明久の答え

『食費』

教師のコメント

あなたが求めているものが人と違うことに気付いて下さい。

47話 俺と雄二と平賀 何やってるんだ？（前書き）

もう平賀君は諦めよう

気付いたら、誰かが酷い目に遭っていますね

## 47話 俺と雄二と平賀 何やってるんだ？

東野と姫路の夕食崩壊！

「東野と」

「姫路の」

『夕食崩壊！』

「はい。このコーナーは私こと姫路瑞希と」

「俺こと東野和樹が夕飯のメニューを」

「紹介するというコーナーです」

「早速だが、今回のメニューは『カレー』だ」

「はい。材料は皆様のご家庭にある物に以下の材料を足して下さい」

材料

グリセリン（ベビーオイルでも可）

硝酸

硫酸

塩酸

各種適量

「これで、彼のハートもバツチリですっ！」

「ちなみに、家庭にビーカーが有る場合はそれに、ベビーオイル（グリセリン）を3・硝酸を4・塩酸（硫酸）を3の割合で素敵な物が出来るぞ」

絶対に試さないようにお願いします。

これで、出来るのはニトログリセリンです。

「雄二、Dクラスとの交渉終わったぞ」

『良くやってくれた、和樹。急いで屋上に来てくれ』

？明がまた何かやったかな

急いで屋上に向かいます

「雄二。と、島田？」

何で泣きそうなんです？

「明のバカアアアアアッ！！」

あん？

「秀、雄二。説明してくれ」

「明久の野郎が演技の途中で逃げやがった」

成程

「で、島田がこうなつたと」

「その通りじゃ」

一体明は何をしたんです？

「まあいい。和樹。Dクラスと交渉が終わつたつて、どういふことだ？」

「ん？異端審問会に『平賀に彼女がいる可能性がある』と匂わせて、脅して言質をとつたんだ」

呆れられました。

『東野オオオオオオッ！！』

おや？

平賀だ

まっすぐ突っ込んできました

「ん？どうした、平賀？」

右手を突き出してきたので手首を払い、そのまま振り上げます

「ギヤアアアアアアッ！？」

「何の用だ？」

「先ずは右手を離してくれっ！？」

むう

「分かった。で、何の用だ？」

「実は宣戦布告を取り下げたいんだ」

はあ？

「おーい？大丈夫か？」

思わず足払いを掛けて、踏んでしまった

「お前は鬼か」

雄二、お前には言われたくない

「和樹、こ奴は何をしにきたのじゃ？」

「良く分からん」

まあ、放っておいていいでしょう

「で、本当に何の用だ？」

「だっかつらっ！宣戦布告を取り下げさせて欲しいんだ！」

何故かキレ気味の平賀君

「何故だ？」

あ、回復したつばいので、現在屋上の床に座って話してます

「男子に半殺しに遭うは、女子からは白い眼で見られるは散々なんだ」

「ふーん。へー、ほー」

「貴様っ！欠片も聞く気が無いな！！」  
ぶっちゃけるとどうでもいいですし

「どうする、雄二？」

丸投げしたら怒るかなあ

「どうするもなにも俺たちがコイツを気に掛ける必要が無いだろう？」

流石は雄二君、君ならそう言ってくれと信じていたよ

「坂本まで」

いやあ、そんなにショックを受けられると困るんですが

「まあ、野良犬にでも噛まれたと思って強く生きることじゃな  
秀、心にグサグサきます

「木下まで、Fクラスには外道しかいないのか！  
すいません。」

「和樹、話が進まん。秀吉と向こうに行ってる」  
分かりました

「んで、島田。落ち着いたか？」

「もう、大丈夫よ」

本当ですか

「島田は明の何が良いんだ？」

良い奴だとは思いますが

ただのバカですよ

「そ、それは………それなら東野はどうなの？」  
ん？

「俺？」

「だって、木下と木下さんと付き合っているんでしょっ？」  
まあ、そうですが

「二人共可愛いだろ？」

それで充分でしょう

「それだけ？」

不満ですか

「なら、遅し待て、秀。その関節はそれ以上曲がらギヤアアアアアアッ!?」

酷い

「で、何か弁明はあるかの？」

俺が一体何をした？

「何を言ってるんだ、秀？可愛い物（者）を可愛いと言って何が悪い」

同様に美しい物、遅しい物にも同じことを言えます

「確かに嬉しいのじゃが……後半の遅しいという言葉について聞きたくての」

何を言うんですか

「秀は充分遅しい」

おや？俺の関節が

「ギヤアアアアアアアアアアッ!？」

「全く嬉しくないのじゃ」

確かにそうですね

失言でした

「さて、お前等。俺たちはこれから、Bクラスに対する妨害を行う  
そうですか、ガンガンやって下さい

平賀君が泣きそうですが、皆スル なんですネ

「ふむ。具体的にはどうするのじゃ？」

「……姫路の料理を使う」

最終兵器を？

「瑞希って料理下手なの？」  
下手？

『あれは魔界だ(じゃ)』  
何度川を渡りかけたことが

「えーと、どういうこと？」

「調理中に鍋が融ける」俺

「食った者は三途の川を拝める」雄二

「……………何故か見た目はいい」康太

「そのくせ味は極悪じゃ」秀

「本当に？」

おや？信じられませんか

「この前姫路が作った物を覚えているか？」

「確か、フルーツゼリーだったっけ？」

その通りです

「それを作るのに鍋3つに、ミキサー1つ駄目にした」

「ゴメン」

何か謝られました

「ということとは、その、えーと、瑞希の料理でBクラスの人を殺す  
って、ことよね？」

人聞きが悪いです

「島田、それは違う」

「坂本、どう違うの？」

「一寸、眠って貰うだけだ」

雄二君の黒い笑顔は久しぶりに見た気がしますね

「さて、明久が帰ってきたら行動開始だ」

「うむ。ヤルかの」

「・・・やってやる」

「犠牲者は誰だろうな？」

楽しみです

いつの間にか平賀君が消えていました。

いつ帰ったんでしょう？

47話 俺と雄二と平賀 何やってるんだ？（後書き）

バカテスト

以下の物の名前を答えなさい

『1543年種子島に伝来した兵器』

姫路瑞希の答え

『火縄銃』

教師のコメント

正解です。流石は姫路さん。

土屋康太の答え

『マシンガン』

教師のコメント

7日で天下統一できます。

吉井明久の答え

『反物質銃』

教師のコメント

スタートレックでカーク船長が使っていましたね。

東野和樹の答え

『水冷式重機関銃二百連発』

教師のコメント

葵井巫女子ですね。《素人探偵 浅黄蝉丸、密室首斬り殺人事件を  
即座に解決、ただし犯人現行犯》みたいなのが好きです

**幕間 俺と鉄人と鬼ごっこ 先生っ！疲れました（前書き）**

すいません。原作がエスケープかましたので、幕間です。

時期的には、強化合宿終了直後ですね

取り合えず、和樹君に酷い目に遭って貰おうという感じで

以外に酷い目に遭ってませんね。不満です

幕間で、翔子と雄二の鬼ごっこ編もあります

業務連絡？です。

大明神様より、明 秀の表記はカタカナの方が良いんじゃないかという意見を頂きました

何の不満も無ければ、このままでいきます

幕間 俺と鉄人と鬼ごっこ 先生っ！疲れました

バカテスト

以下の問いに答えなさい

『特徴的な層構造を持ち、脳の記憶や空間学習能力に関わる脳の器  
官』

姫路瑞希の答え

『海馬』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『記憶でお腹は膨れません』

教師のコメント

そうですね。君はそろそろまともな食生活というものを学ぶべきだ  
と思います。

土屋康太の答え

『エロなんて興味ない』

教師のコメント

そんなカミングアウトはいりません

霧島翔子の答え

『私の脳の中には雄二しかいません』

教師のコメント

幸せそうだなによりです。

「東野っ！貴様、また学校の備品を壊したな！」

「え？俺、今日はまだ壊してませんよ」

人を破壊魔のように言わないで下さい

「ほう？では、何故Fクラスの扉が無いか、言ってみろ」

えーと、確か

「両手が塞がっていて、仕方が無く足で開けたら吹っ飛びました」

「そうか」

深々と溜息を吐いて鉄人はこちらに向き直り

「今度という今度は補習を受けさせてやる！」

要りません

「冗談じゃねえ！」

逃げさせて貰います

俺と鉄人の文月学園大鬼ごっこ開幕です

「鉄人！もう若くないんだから、諦めやがれ」

校内マラソン三週目

「ふん。貴様こそ、足が笑っとるぞ。大人しく補習を受けろ」

絶対嫌

「ラッキー。窓開いてる」

手を掛けてそのまま身体を引き挙げ、飛び降りる

「I can fly」

まあ、落ちるだけですが

「くそつ。また、逃げられた。今度見つけたら覚悟しておけ」  
しつこいですねえ

「面倒だねえ。」

雄二やアキが居ないからなあ

「何で、上から降って来たの？」

おや？誰ですか？

side out

side 愛子

いやあ、吃驚したよ。

行き成り、和樹君が上から降ってくるんだもん

「愛子か。何してんだ？」

うん。ボクが君に聞きたい

「和樹君こそ、何してんの？ボクは次の授業の教室に行く途中なんだけど」

次の教室は理科室なんだ

「ほう？俺は鉄人から逃げてきたところだ」

鉄人？確か、西村先生のことだよな

「和樹君、何したの？」

「いやあ、少しな」

本当に何したんだろ？

キーン コーン カーン コーン

「あ、チャーム。鳴っちゃった」

遅刻だよ。高橋先生に怒られる

「面倒だな。サボるか」

いや、授業は出ようよ

「ん？愛子もサボるか？」

………そうしようかな

「何処でサボる気？」

「屋上かな。天気も良いしな」

確かに良い天気だけど

「んで、愛子。どうする？」

こちらに手を差し出してくる和樹君

「そうだね。1回位はサボってもいいよね」

楽しそうだし

「んじゃ、行くか」

えーと、何で、抱きしめるのかな？

「か、和樹君？」

「少し、大人しくしてるよ」

そう言っつて、地面を蹴り校舎に向かって走り出す  
何で!？

「ちょ、ぶつかって!？」

目を瞑り衝撃に備える

「大丈夫だつて」

一瞬の浮遊感

「とーちやく」

はい？

もう屋上？

何で？

「和樹君。説明して欲しいんだけど」

「簡単に言つと、校舎の出っ張りを蹴りながら上がったんだ」  
人間業じゃないね

「さて、寝るか」

そう言つて、横になった和樹君

あれ？もう寝息が聞こえてきたんだけど  
速くない？

うーん。ボクも寝ようかな

お休み

side out

鉄人side

「俺は鉄人じゃないと言っているだろうが！」

「あ、あの。西村先生」

はっ！

「すまない。少し不愉快な気配がしてな」

今は授業中だったな

「続きを始める。先ず、この構文の主である動詞の

」

「先生。和樹が居ないのじゃが」  
ん？

「木下、心配するな。どうせ、サボりだろう」

絶対に補習を受けさせてやる

「珍しいこともあるもんね」

今度は島田か

「そうですね。東野君がサボりなんて  
そうか？」

「まあ、明久や雄二が居らんからのう」  
そういう問題ではないんだが

「あの、西村先生」

誰だ？

「これは、高橋先生。どうしました？」

何か問題でも

「東野君が屋上で工藤さんと寝ていたので連れてきました」  
コイツは何をしているんだ？

「ほう？和樹、詳しく聞かせるのじゃ」

「お、落ち着け。ヒデ、何もやましいことはしていないぞ。ただ、  
寝ていただけギヤアアアアアアア！？」

あー。木下。言い訳位は聞いた方が良いぞ

「ヒデっ！俺の関節はそんなに曲がらないと言ったはずだが？」

ああ、確かに人体には不可能な曲がり方をしているな

「自業自得じゃ」

「取り合えず、東野。後で補修室に來い」

「えー」

「授業を続けるぞ」

大人しくしている

「へーい」

「分かったのじゃ」

「ハイ」

「分かりました」

返事は良いんだ あの問題児共も

「早速だが、東野。この問題を解いてみる」

「えー。？」 3 y 2 z 5

貴様は

「誰が数学をしろ、と言った」

この授業は英語だ

「お？それは失礼しました」

「よし、それでは、答えは」

「私は先日、老人を騙しました」

ほう？

「貴様は何処の極悪人だ？」

「え？ああ。すいません。騙すじゃなくて稼ぐですね」

「だから、何処に書いてあるんだ！」

ちゃんと答えんか！

「東野君。それは騙すじゃなくて、慰めるです」

「分かってる。冗談だ」

「やはり、貴様とは拳で語る必要があるみたいだな」

「謹んで辞退させて頂きます」

逃がさん

キーン コーン カーン コーン

俺と東野の文月学園大鬼ごっこ 二回戦開幕だ

side out

和樹 side

くそっ！今回はあっさり捕まった

「さあ、東野。これから、出す課題をやらせてもらっぞ  
速く帰りたいです

「鉄人」

「西村先生と呼べと言っているだろうが」  
まあ、気にしないで

「疲れました」

あ、コケた

「課題を倍にする」

「ギヤアアアアッ！」

結局、その後また倍にされました。

**幕間 俺と鉄人と鬼ごっこ 先生っ！疲れました（後書き）**

コスプレネタ有難う御座います

しかし、あれですね。

康太君と明久君は女装ネタしか無いですね。

後は、明久君のゼロの衣装（笑）

面白かったのでは、雄二君のウエディングドレス  
アレですか？翔子にタキシード着せると？

48話 俺とアキと新たな犠牲者 犠牲者は誰？（前書き）

アレ？Bクラスが出ないぞ？

まあいいか。根本だし

誰だ！フラグ量産してんの！書くの大変じゃねえか！！

あ、俺ですね。スイマセン。

まあ、島田に興味はないのでいいんでしょう

#### 48話 俺とアキと新たな犠牲者 犠牲者は誰？

バカテスト

『分子で構成された固体や液体の状態にある物体において、分子を結集させている力のことを（ ） 力という』

姫路瑞希の答え

『（ファンデルワールス）力』

教師のコメント

正解です。別名、分子間力ともいいます。ファンデルワールス力は、イオン結合の間に発生するクーロン力と間違え易いので注意して下さい。

土屋康太の答え

『（ワンダーフォーゲル）力』

教師のコメント

なんとなく語感で憶えていたのだということとは伝わってきました。惜しむらくは、その答えが分子の間ではなく登山家の間ではたらく力だったということですね。

東野和樹の答え

『（腕）力 関節を捻じ曲げるのに力が要らないって本当ですか？』

教師のコメント

何故、それを出したのですか。それと、そんなことは知りません

吉井明久の答え

『(努)力』

教師のコメント

先生この解答は嫌いじゃありません。

明久side

「ん？お帰り。アキ」

あれ、和樹が笑顔だ  
嫌な予感しかない

「とりあえず、島田に謝っておけよカス野郎」

僕、泣いても良いかな？

そうだね、美波に謝る方が先だ

「あのさ、美波」

side out

雄side

「さて、姫路」

「はい、何です。坂本君？」

「実は作って欲しい物がある」

「東野君まで、どうしたんですか？」

(和樹、お前が言うか？)

(ん？アキに食わせるように持っていけばいいのか？)

(ああ、頼む)

さて、お手並み拝見といこうか

「実はな、アキが今日も朝飯を食ってきてないみたいなんだ」

「そ、そうなんですか!」

いや、アイツの言葉通りなら水を食べてきたはずだ

「そこで、だ。姫路瑞希」

「はいっ!」

「可哀そうなアキの為に前の手料理を振舞ってもらいたい」

姫路ももう少し普通の料理を勉強してくればいいんだが

俺たちの為にも

「でも、お昼も過ぎてしまいましたし……」

心配するな、姫路

「実は、さっき調理室の鍵を（雄二が）借りてきたんだ」

「材料もあるぞ」

「じゃあ、何を作りますようか?」

うーん。そうだな

「ゼリー何てどうだ?」

ゼリー（材料：不特定多数）

和樹、何て恐ろしい奴だ

「和樹、雄二っ!何てことを言ってるんだ!」

明久か、もう遅い

「良かったな、明久。姫路がゼリーを作ってくれるそうだ」

喜べ

「なんだアキ。そんな潤んだ瞳で俺を見るな。捨てられたチワワみ

たいだぞ」

「捨てないで!捨てないで和樹!」

安心しろ明久

今回、お前が食うことは（多分）無いだろう

「おいおいアキ。どうして俺にしか聞こえなくらいの小さな声で『ギブ、ギブ』なんて連呼してるんだ？」

「本当におかしなヤツだなあ」

明久が泣きそうになったな

まあ、バラしたら安心するだろう 多分

「ゼリーですか。わかりました。頑張ってみます！」  
おお、頑張つてこい

さて、姫路は作りに行ったな

side out

明久side

「……雄二、和樹。どういっつもり？」

返答次第では覚悟してもらおう

「安心しろアキ」

「姫路の料理が必要なだけだ」

「え？姫路さんの料理が？」

何に使うんだろう？

必殺料理人の料理なんて

『まあ、ああまで言った以上、姫路はお前に食べさせようとするだろうがな』

外道が……

僕の命はそんなに軽くないんだよ？

毎日のように死にかけてるけど、僕は長生きしたいんだからね？



アキの馬鹿

また、瑞希の後を追っかけて

「島田」

東野？

「何よ？」

マズイ、声が

「俺に当たるなよ」

うう

「だって、アキが」

悪いんだから

「ふむ。島田も大変じゃのう」

木下もいたんだ

「全くだ。アキに惚れるなんて」

！良いじゃない！

「人の勝手でしょ！」

今、絶対顔赤い

「ああ、勝手だ。お前がアキに惚れてて、隠そうと必死だったり、

女関係？のことで殺そうとしたりするのはお前の勝手だ」

なによ、ウチが悪いように聞こえるわよ

しかも、？って何よ！

「しかし、明久に惚れておいて何故殺そうとするのじゃ？」

だって

「腹立つじゃない。ウチの事は褒めないのに瑞希は褒めたり、木下

の方を大事にしたり」

ウチも女の子なのに

「ふむ。明久にとっては島田は『仲の良い女友達』ではないかの？」

「え？」

そ、それって

「そう考えるとアキが一番近いのは島田か」

「な、何で！そうなるのよ！」

オカシイじゃない！

「良く考えてみる、島田。アキは姫路何ぞよりお前の近くにいるんだぞ？」

そ、そうなの？

「確かにそうなるの。本音を言い合える女友達というのは貴重じゃろっし」

「ああ。そこから、徐々に距離を詰めて行って」

ええ！そ、それって

「最後には！」

「うむ。最後には！」

さ、最後には？

「告白フラグ！」

「いや、普通に告白と言うべきじゃろ。そこは」

こ、告白って

うう、東野と木下が虐める

しかも、東野も木下も笑顔だし

こういうのを悪魔っていうのね

「ただいまー。今帰ったよ」

「今、帰ったぞ」

あ、アキと坂本？

どうして、坂本は死にそうな顔してるの？

「ん？雄二、どうしたんだ？」

「まるで、霧島に無理矢理襲われたような顔をしておるぞ」  
良く分かるわね、アンタ達

「まあ、似たようなもんだ」

「うん。気にしなくていいよ」

ふうん？何が有ったんだろっ？

48話 俺とアキと新たな犠牲者 犠牲者は誰？（後書き）

最近、ろんぱいあ様の書くわんでいシリーズにハマってます。  
誰か、一話から落とせるサイト知りませんか？

特にvol10

49話 俺とアキと美春 アキ君の気持ち（前書き）

美春の書きやすいこと、書きやすいこと

まあ、今回はアキ君の直球編ということだ

青春一直線ですね

さあ、後、一・二話で清水美春編終了

コスプレネタの応募も締め切り間近

#### 49話 俺とアキと美春 アキ君の気持ち

次の熟語の正しい読みを答え、これを用いた例文を作りなさい。

##### 【相殺】

姫路瑞希の答え

『読み・・・・・・・・・・そうさい』

例文・・・・・・・・・・取引の利益で借金を相殺する』

教師のコメント

そうですね。差し引いて帳消しにする、という意味なので貸し借りなどに使われる言葉です。

吉井明久の答え

『読み・・・・・・・・・・そうさつ』

例文・・・・・・・・・・パンチにパンチをぶつけて威力を相殺した』

教師のコメント

惜しいですが間違いです。『そうさつ』という読みも一応ありますが、その場合は『互いに殺し合うこと』というものです。この場合の吉井君の例文では互いに打ち消し合うという意味なので、読みとしては『そうさい』が正解となります。

島田美波の答え

『読み・・・・・・・・・・あいさつ』

例文・・・・・・・・・・のどかな朝。私は友達と相殺した』

教師のコメント

その朝は決してのどかではないでしょう。

東野和樹の答え

『読み・・・・・・・・・・そうさい』

例文・・・・・・・・・・雄二と翔子の関係＋島田とアキの関係』

教師のコメント

相殺しきれません。

「で、暗殺に成功してBクラスの妨害は完了したと」

「そうだな。流石は姫路クオリティと言ったところか」

素晴らしい

・・・・・・・・・・死んでないと思いたいですね

「で、どうするの？」

どうするもなにも

「このまま点数補充だな。Dクラスには宣戦布告されてるし」

「それで、思い出した。どれくらい済んでいる？」

さて

「大体、6割つてところだな。多くて」

最初は『平賀、殺す！』だったのに

回復試験の途中で元に戻ったので、中途半端に終わりました

「6割か。第一陣は防げても、後がきついな」

「まあ、アキの点数が回復したらなんとかなるだろ」

一応、まあ、観察処分者な訳ですし

案外役に立ちますし

「和樹が僕を頼りにするなんて、きっと明日は槍でも降るんだ！そうに決まってる！」

失礼な奴だな

「いや、むしろ血の雨とかじゃないか？」

「……………いつも降ってる」

「……………本当に失礼な奴等だ

あと、康太？その何割かは君の鼻血ですからね？

わかってますか？

『お邪魔しまーす』

おや？誰ですか？

「ん？誰だ？お前」

「えーと。私はDクラスの、待って！殺気立たないで！お願いだからっ！！」

「Dクラス？何の用だろう？」

一人だけってことは交渉かねえ？

もう話すことはないでしょうが

「あの吉井君に用があつて……………」

シユカカカツ！

「畳返し！」

畳と卓袱台が犠牲になりました

カッターナイフを投擲するのは止めましょうよ  
そろそろ

「待つんだ、皆！彼女はまだ何も言っていない！」

ええ、名前だけです

「で、何の用じゃ？」

「あ、えーと。清水さんが吉井君に用があるって」

「へ？何で？」

抹殺とかじゃないですか？

「だそうだ、明久。逝ってこい」

「絶対、字が違う！」

まあ、気にしない方向で

「あ、後、東野君もだって」

「俺も？」

アキだけならともかく、俺も？

何の用でしょう

「どうした、美春？」

空き教室で向き合ってます

「和樹、あの豚野郎は何処です？」

「ああ。俺の後ろについて、いつまで隠れてやがる！」

いい加減、腹を決めなさい

「うう。清水さん。何の用？」

side out

明久side

うう、清水さんは美波や姫路さんと違った恐さがあるよ

「用というのは他でありません。お姉さまのことです」

この子本当に美波が好きなんだなあ

どうして、美波は答えてあげないんだろう

「美波のこと？」

「美春、はつきり言ってやれ。アキは遠まわしに言っても分からんぞ」

失礼な

確かに何が言いたいのかわからないけど

僕に理解力がないなんて

「はあ、お姉さまは何故このような男を」

あれ？また馬鹿にされた？

「アキにもわかるように言おうと」

「お姉さまをどう思っているのか聞きたい」

「という事だ」

えーと、ようは僕が美波をどう思っているか聞きたいってことだな  
それなら簡単だ

「ああ。一つ言っておく」

「何、和樹？」

「フザケタこと抜かすと、美春がキレル」

何だって！

「その通りです。さあ、白状なさい」

「わかったよ。真面目に答える」

何か、ムツときたし

「それで、あなたにとってお姉さまはなんですか？」

「僕にとって美波は」

そう美波は

「ありのままの自分で話ができ、一緒に遊んでいると楽しくて、  
たまに見せるちょっとした仕草が可愛い、とても魅力的な

女の子なんだ」

あれ？言ってるって凄く恥ずかしい！

こんなつもりじゃなかったのに

「だってさ、美春。どうする？」

和樹が凄く嬉しそうだ

きっと僕に不幸が降りかかるに違いない

「良いでしょう、吉井明久。あなたの気持ちは分かりました」

どこか晴れやかな顔をした清水さん

どういふこと？

しかも、僕のこと名前で呼んでくれた

「和樹、どういうこと?」

僕に説明して

「ようは、美春はお前のことライバルと認めたということだ」  
迷惑な

「さて、アキ。帰って戦争の準備だ」

「え、あ、うん。清水さん、またね」

「徹底的に潰して差上げます」

何で僕の周りにはこういう女の子しか居ないんだろう?.

49話 俺とアキと美春 アキ君の気持ち(後書き)

コスプレネタで今まで集まったの発表します

和樹 キャビンアテンダント(女) 猫耳メイド服(男女)

明久 ナース(女) 小学生の制服&ランドセル ウィッグにチャ  
イナ(女) (ギアス)ゼロの衣装 着物(女)

雄二 バレーボール選手(女) 和服(男女) ウェディングドレ  
ス

康太 幼稚園の帽子に赤いランドセル(女) ウィッグにゴスロリ  
(女)

秀吉 花魁(女) ウェディングドレス

久保 エレベーターガール(女) スーツ

翔子 着流し(男) 黒猫装備(猫耳+尻尾)で水着 タキシード  
和服 着物 女王様

愛子 ミリタリースーツ(男) 犬装備で水着

姫路 タキシード(男) ウサギ装備で水着

島田 学生服(ボタンは全部はずし)(男)

美春 ゼルダの伝説のリンク(男)

優子 スーツ（男）

葉月 学生服（ボタンはありだけど、髪を金髪にする）（男）

以上です。

島田と優子が少ないですね

葉月が出るとは、思いませんでした

50話 アキと美春と戦争開始 戦闘描写？何それ？美味しいの？（前書き）

終わらなかった……

まあ、今週中には終わるでしょう

……多分

50話 アキと美春と戦争開始 戦闘描写？何それ？美味しいの？

バカテスト

以下の状況を想像して質問に答えなさい。

『あなたは今、独りで森の中で道に迷っています。明かりもなく暗い森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。これ幸いと中に入るあなた。すると、そこにはイスとベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は？ 頭に浮かんだものを3つ挙げてください』

姫路瑞希の答え

- 『1・楽しい表情
- 2・優しい瞳
- 3・明るい雰囲気』

教師のコメント

これは“あなたの好きな人の特徴”についてわかる心理テストです。暗い森は貴方の不安を現し、そんな時に見つけた小屋の中にある肖像画は“あなたの心を支えてくれる伴侶”を表します。どうやら姫路さんの好きな人は、温和で明るくて楽しい人の様ですね。

清水美春の答え

- 『1・気の強そうな目
- 2・男らしい胸
- 3・ポニーテール』

教師のコメント

最後の1つがおかしい気がします

島田美波の答え

- 『 1 ・折れた指
- 2 ・捻じ曲げられた膝
- 3 ・外された手首』

教師のコメント

全部おかしい気がします

木下優子の答え

- 『 1 ・外れた肩
- 2 ・擦れた指
- 3 ・幼馴染の顔』

木下秀吉の答え

- 『 1 ・外れた肘
- 2 ・擦れた指
- 3 ・幼馴染の顔』

教師のコメント

姉弟で同じような解答ですね。少しは生命健康に気を使っようにして下さい。

霧島翔子の答え

- 『 1 ・手錠に繋がれた雄二
- 2 ・結婚式場
- 3 ・見つめ合う二人』

教師のコメント

霧島さんの解答を見るたびに、坂本君は逃げられないと感じます。

「良いかお前等！前回勝ったからと言って相手を舐めるなよ！この状況の上に相手は俺たちより二つもクラスが上だ！下手に欲をかくと逆に手痛い目を見るハメになるからな！」

さて、戦力差はある程度埋めましたか

「どんなに有利な状況でも決して深追いするな！決められた場所でひたすら防衛に徹しろ！」

戦力差

Fクラス 20000点弱 VS Dクラス 60000点前後

……  
まあ、防衛戦なので時間は稼げそうですか  
雄二は？

564

ちなみに今、点数補充してます

雄二に一教科位はしてこいと言われました

今回、出る気ないのに

「先生、次」

「はい」

「先生」

「はい」

「せん」

「もうありません！」

なんだったって？

「まだ、100枚も書いてませんよ？」  
「点数補充が目的ならもう充分でしょう」  
むう、納得いきませんが  
テスト用紙がないのなら、諦めましょう

「雄二ー。終わったぞー」

教室には、姫路と雄二しか居ませんでした

「ん？どうした、随分早いな？」

「高橋女史が100枚位しか用意して無かった」

普通に哀しい

「充分だ」

酷い

「単科目で10000点近くあれば十分じゃないですか？」

姫路まで

「10000点しかないんだが」

凹む

「良いだろ、別に」

「くっ。翔子呼んでやる」

ヤラレテしまえ

「手前！携帯貸せ！」

取られた

「寝倒れよう」

お休み

「おーおー。そのまま永眠してしまえ」

「翔子ー。雄二が膝枕で寝たいって」

「はあっ!？」

「……雄二、嬉しい」

流石は、翔子

それでは、

「お休み」

「あ、お休みなさい。東野君」

「……雄二、もっと寄って」

「いやいや、翔子？コレ以上寄ったら、当たるからな？落ち着け、な？」

最近、翔子にテレパシーかなんかで通じる気がしてきました。

まあ、雄二関係だけですが

side out

明久side

「あ。明久君、お帰りなさい」

「あ、うん。ただいま」

いいなあ、こういうの

「姫路さんにはどんな指示が出てるの？」

うちの主戦力なのに

和樹もいないし

「はい……。それがよくわからないんですけど、坂本君

には『Fクラスの教室から出ないように』って言われているんです」

「え？それだけ？」

「はい。それだけです」

わからないなあ

「で、雄二はいつまで霧島さんにくっ付いてるの？」

抱き合っているようにしか見えな

やはり、異端審問会にかけてやる

「ほう？お前にはそう見えるのか？」

「……やっぱり吉井は良い人」

「翔子！？いい加減はなれ、背骨が軋む音がああああ！？」  
羨ましくは欠片もないけど、腹は立つ

「霧島さん？雄二に聞きたいことが有るんだけど、いいかな？」

「……構わない」

雄二の背骨が残念な角度になってるけど、離してくれた

「……雄二、また来る」

「もう来るな！！」

雄二も意地っ張りだなあ

「で、明久。何の用だ？」

ああ、忘れるとこだった

「何で姫路さんや和樹を出さないか、教えて欲しいんだ」

「あ、それは私も知りたいです」

「ん？和樹や姫路を出さないのは戦力を拮抗させるためのだ拮抗？」

「そういえば、和樹は何処に行ったんだ？」

和樹なら

「そこで、死んだように眠ってるよ」

「はい。坂本君が霧島さんに迫られた位からずっと寝てます」  
羨ましい

僕ものんびりしたいよ

「さて、説明も面倒だから、単刀直入に言っぞ」

雄二？僕は足元で痙攣してる和樹が気になるんだけど

「……雄二、手前……！」

「ん？どうした、和樹。言いたいことがあるなら、言ってみろ」

「上等だ！クソ野郎、殺して解体して並べて揃えて晒してやる」  
えーと、どっからナイフを出したのかな

と、いうか

「和樹、その発言はヤバい」

何がヤバいって、原作ファンに刺される位ヤバい

「何を言ってるんだ、アキ。男なら一度は言いたい台詞だろう？」  
問題が違う

確かに言いたいけど！

「はっ！やってやろうじゃねえか！」

雄二も落ち着いてよ！

「えーと、どうします。明久君？」

「どうしようもないよ。姫路さん」

『和樹、分身は卑怯だろ！』

『雄二、覚悟しやがれ！』

うん。人間の戦いじゃないね

「・・・・・・・・・・明久」

あれ、ムツツリーニ？

「どうしたの？」

「・・・・・・・・・・清水が呼んでる」

清水さんが？

僕まだ何もして無いんだけど

まあいつか

用が有るっていうんだから、行ってみようか  
殺されたりはしないだろうし、多分だけど

51話 美春とアキと私刑 まあ、取り合えず終了(前書き)

何となーく終わりそうですね

後半の美春と明久君の会話部分は島田が居なかったなので、短いです。

51話 美春とアキと私刑 まあ、取り合えず終了

バカテスト

以下の問いに答えなさい

『南米大陸のアンデス5カ国をスペインから独立に導き、統一した  
コロンビア共和国を打ちたてようとした革命家であり軍人、政治家、  
思想家でもあつた人物』

姫路瑞希の答え

『シモン・ボリバル』

教師のコメント

正解です。ベネズエラのカラカスにアメリカ大陸屈指の名家の男子  
として生まれましたが、早いうちに妻を亡くしたことが直接、間接  
のきつかけとなつてボリバルはその後の生涯をラテンアメリカの解  
放と統一に捧げました。このため、ラテンアメリカでは「解放者」  
(El Libertador) とも呼ばれています。多くの  
武將を配下にして使いこなし、特にアントニオ・ホセ・デ・スクレ  
将軍との親交は有名です。

吉井明久の答え

『初耳です』

教師のコメント

先々週、授業でやりました。

土屋康太の答え

『ナイチンゲール』

教師のコメント

人種、性別、年齢全て違います。

坂本雄二の答え

『シモン・ポリバル』

教師のコメント

坂本君は最近、真面目に答えるようになりましたね。どんな心境の変化ですか？

東野和樹の答え

『眠い』

教師のコメント

少しは真面目に答えようという気持ちになりませんか？

「疲れた」

「そうだな。もう辞めるか」

別に本気でド付き合う必要は無いので

適当に切り上げましょう

「あの、どういうことですか？」

「うん？ああ、明久を清水の所に行かせるためにな」

「？」

「さっさと、決着をつけたいしな」

「えーと、清水さんに明久君を生贄として使ったと？」

その通りです

「ああ、そろそろ良い時間だろ、行くぞ」

「待て、和樹。行く前に化学の点数をこの紙に書け」  
む？

「書いたぞ」

「ああ。……………お前はしつかり4ケタあるじゃねえか！」

「違うぞ、雄二。4ケタしか無いんだ」

この違いはかなり大きいと思います

side out

明久side

「……………」

「……………」

召喚獣にも動きがなく、無言の状態が続く

睨み合いというわけじゃない。清水さんは俯いて召喚獣から目を離している

そうしていたのは、ほんの数秒程度だっただろうか。

「えーと、清水さん？」

「黙りなさい豚野郎。美春は言いたいことがあります」  
何だろうか？

「昨日、言ったことに嘘偽りはありませんね」

「ある訳ないじゃないか！あれは僕の本心だよ」

あんな恥ずかしい台詞冗談で言える程僕は壊れてない

「そうですか、それでは、決着と行きましょう」

武器を掲げた清水さんの召喚獣が突撃の姿勢をみせる  
「望むところだ」

僕も応えて、召喚獣にいつでも飛び出せる構えを取らせる

『『『試獣召喚っ！』『』『』』

「「えっ!?!」」

不意に教室の中に響く召喚の声。目をやると、Fクラスを従えた雄二と和樹の姿があった。

姫路さんの突破力を使ったのか、和樹を使ったのか

「伏兵、ですか……!卑怯な真似を……!」

「雄二、和樹!いくら大事な勝負だからって、そんなやり方は間違ってるよ!」

「明久。悪いが、これは勝負じゃなくて戦争なんだ。俺にはクラスを守る義務がある」

「アキ。本当にスマン。今回はこうするのが、一番良いんだ」

ここで、和樹の点数が表示される

『Fクラス 東野和樹

化学 9672点 』

相変わらず、馬鹿みたいな点数だ

「和樹、邪魔するつもりですか!」

「スマン、美春」

この二人の関係が今一分からない

「や、やめ  
「やれ」

僕の制止が入る間もなく、召喚獣が構えた短剣や刀、槍などの刃物が突き刺さった

僕の召喚獣に

side out

和樹side

「和樹、どういことですか？  
いやあ、美春が怖いですねえ

「痛あああつ！！ねえ何コレ！？今までで一番痛いんですけど！  
？全身が！爪先から頭の天辺までのあらゆる部分に激痛が！  
ああ、うるさい

「明久。静かにしろよ」

「美春。この通り全ての元凶は粛清した。これで水に流してくれないか？」

「ぎゃあああつ！？雄二！今僕の召喚獣を思いっきり踏んだらろ！  
！  
思いっきり殴ったら黙るでしょうか？

「………そうですね。和樹、刀を貸して下さい  
「うん？どつちの？」

真剣ですか？それとも、召喚獣の方ですか？

「召喚獣の方です」

渡したら、美春は躊躇いもなくアキを刺しました

「し、清水さん！？もう決着はついたよね！？どうして更に追い打ちを  
和樹の点数だから、普通より遥かに痛い痛いっ

！」

へえ、武器渡しても点数は変わらないんですね

「切り刻んで、この豚野郎を放課後まで補修室に軟禁すると言っながら休戦を受けましょう」  
それくらいなら

「約束しよう。明久はこれで戦死したから補修室行きだ。あとは放課後になるまでそれぞれの教室で点数補充でもやって時間を過ごせばいい」

「その間、アキは鉄人の餌食だな」

精々、頑張ってもらいましょう

「うんじゃあ、交渉も成立したし教室に戻るぞ」

『『『お つー！』『』』

51話 美春とアキと私刑 まあ、取り合えず終了(後書き)

まあ、頑張ったこの土日だけでも終わらせましょう

52話 清水美春襲撃編終了 アキと告白と盗聴 やっぱり皆で共有するもの

何とか終わりましたあ。最後は微妙です

バカテスト

以下の英文の ( ) に単語を入れて正しい文章を作り、訳しなさい。

『 She ( ) a bus . 』

姫路瑞希の答え

『 She (took) a bus . 』

訳：彼女はバスに乗りました。』

教師のコメント

正解です。他に“bus”に使われる単語としては、“get”などがありませんね。

578

吉井明久の答え

『 She (is) a bus . 』

東野和樹の答え

『 She (was) a bus . 』

教師のコメント

なんて訳すのでしょうか。一見文章として正しく見えそうですが、明らかに間違いです。日本語として訳せないような文章を書くようではまだまだー

土屋康太の答え

『訳：彼女はブスです。』

坂本雄二の答え

『訳：彼女はブスでした。』

教師のコメント

目から鱗が落ちました。

「お？何やってんだ、お前ら？」

「3人とも何やってんの？」

何故か、ヒデ、雄二、康太が教室に残っていました

「ちよつと気になることがあったからな」

「気になること？」

何でしょう？

「うむ。ムツツリーニが面白いものを聞かせてくれるらしいのじゃ  
本当に何でしょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・明久と和樹も聞いていくといい」

「中身は何だ？」

「何、お前らと清水の会話だ」  
凄く簡単に言ってくれますね

「え？そ、それは！不味い！」

ダッ！（アキが康太から小型レコーダーを取り上げようと走り寄る

音)

ガンツ！（雄二に叩き落とされる音）

「……………スタート」

康太も嬉しそうですねえ

レコーダーからは聞き覚えのある声の流れてきました

『アキにもわかるように言おう』

『お姉さまをどう思っているのか聞きたい』

『という事だ』

「あん？ああ、あの時のか」

アキ君が地味に格好よかった時ですね

「ああ、清水が何を聞きたかったか知りたいからな」  
そうですか

「ちょ、ちょっと！早く止め

」

「和樹」

「了解」

アキを後ろから羽交い絞めにします

「離してよ、和樹！後生だから！」

いいじゃないですか、今更恥の1つや2つ増えても

『それで、あなたにとってお姉さまはなんですか？』

『僕にとって美波は

』

佳境に入りました

「わーっ！ わーっ！ 聞くなーっ！ 流すなーっ！！」

そんなに恥ずかしい内容じゃないでしょう

「五月蠅いな。少し黙ってる」

雄二？口だけでいいのに、何故鼻まで塞ぐんですか？

『ありのままの自分で話ができ、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちょっとした仕草が可愛い、とても魅力的な

女の子なんだ』

side out

明久side

こ、呼吸が

僕にとって一番聞かれない会話が聞かれてしまった  
和樹も和樹だよ、妨害位してくれてもいいじゃないか

「「「.....」」」

三人は、少し驚いた表情をしてこちらを見ていた

「.....いや、意外だったな.....」

「う、うむ。もう少し婉曲に言ったものじゃとばかり思っていたが

.....」

「.....直球勝負だった」

「やっぱり、こういう場面で決めなきゃな」

ああ。和樹の笑顔がこんなに腹立つのは久しぶりだ

「明久。お前、意外と言う時は言うんだな」

「な、なぜかワシも鼓動が速くなって凄いのじゃが.....」

「.....男らしい」

この三人の記憶を消してやりたい  
どうしたら、消せるだろう  
ひたすら殴れば忘れてくれるだろうか？

そのあとは和樹だ。絶対記憶を消してやる

side out

和樹side

何か不愉快な気配がします

「……………!!!(ダッ)」

おや？康太、どうしました？

「なんだ！？どうしたムツツリーニ」

「……………油断した」

悔しそうです

「油断したとはどういうことじゃ？」

「まさか、廊下に誰かいたのか？」

「……………今のを立ち聞きされたかもしれない」  
ほほう

「ムツツリーニ！ 相手は誰!？」

「……………多分、張本人」

うん？島田か

「そ、そうか。聞かれちゃったか。すまん明久。まさかこれほどの物だとは思わなかった」

「すまぬ明久」

「……………ごめん」

「まあ、その、すまん」  
今回は俺が悪いですね

「まあ、別にいいよ。張本人が相手なら。それより、悪いと思うん  
なら美波との仲直りに協力してよ。アレ以来ずっと険悪なままなん  
だから」

「いや、それは多分大丈夫じゃろうな」

「そうだな。仲直りどころか……」

「……………うん」

「大進歩じゃないかな？」

素直になればもっと近くに行けるのに

「へ？何で大丈夫なの？」

うーん。前途多難ですね

コスプレネタ発表

東野君にお願いします

「作者に代わって発表します」

先ずは、この俺、東野和樹は猫耳メイド服

次いで、アキは小学生の制服&ランドセル

雄二は、ウエディングドレス

康太は、ウィッグにゴスロリ(女)

ヒデは、花魁(女)

久保は、エレベーターガール(女)

翔子は、タキシード

愛子は、犬装備で水着

姫路は、タキシード(男)

島田は、学生服(ボタンは全部はずし)(男)

美春は、タキシード

優は、スーツ(男)

の以上だ。

こうして見ると、作者の趣味全開だな

幕間 俺とコスプレと見世物 (前篇) という名の準備期間(前書き)

学園長の提案その1です。

幕間に学園長巻き込むの初めてですね。

.....初めて、ですよね？

まあ、お楽しみ下さい

幕間 俺とコスプレと見世物 (前篇) という名の準備期間

バカテスト

以下の質問に答えてください。

『貴方の将来の夢は何ですか?』

姫路瑞樹の答え

『好きな人と結婚して幸せな家庭を築く』

教師のコメント

姫路さんらしい答えですね。出来るだけ応援したいと思います。

吉井明久の答え

『母親と姉のいない空間での生活』

教師のコメント

随分と悲壮な感じがしますが、どうしたんですか?

霧島翔子の答え

『雄二との幸せな結婚生活。首輪で繋がれた雄二』

教師のコメント

その生活は坂本君にとって幸せではないでしょう。

東野和樹の答え

『惑星地球化改造で火星をAQUAにする』  
テラフォーミング

教師のコメント

頑張ってください。

須川良の答え

『モテたい』

教師のコメント

将来の夢関係ありませんよね。

福村幸平の答え

『吉井・坂本・東野を全力で殴りたい』

教師のコメント

また、あの3人が何かしたのでしょうか。そういう話は聞きませんけど

それよりも、最近異端審問会の活動が活発になっているので、職員会議でよく議題に上がります。少しは自重しましょう。

「コスプレ大会？」

朝、学校に着いた瞬間鉄人に拉致られて学園長室に連行されました  
「そうさね。最近、流行ってるんだらう?」  
「そうなんですか？」

「で、俺に何をさせる気だ？」

「アンタ動物耳に興味はないかい？」

「詳しく聞かせる!」

興味がないか、だと?

有るに決まっているでしょう!!

「話が早くて助かるさね。薬を作って欲しいのさ」  
動物耳の？

「構わんが、材料だの何だのはそっち持ちだぞ」

「ふん。それくらいなら構わんさね」

さて、頑張りましょうか

「あ、それと。服はどうするんだ？」

コスプレで動物耳だけなんて有り得ない

「そっちの方はこっちで用意するさね」

まあ、期待せずに待ってましょう

「で、これはどういうことだ？」

何ですか、このカオスな空間は

「何でも学園長が、祭りを開催するという話が出回っての」

あの、クソ妖怪が！

『クソツ！何故情報が回ってこんのだ!!』

『教師側が規制かけてやがる!!』

『ムツツリーニツ!!』

『……………今、やってる!!』

……………帰りたい

「あれ？和樹、何時来たの？」

「さつき」

「ねえねえ？今度、ババアが何考えたか知らない？」

おお、皆ダンボの耳になったな

「知らない……え？何で、俺。縛られてんの！？」

吃驚だよ！畜生！

『これより、異端審問会を開催する』

『『ウオオオオオオオオツ！！』』

「何でだよ！」

理由を説明して欲しい

『貴様から情報を得る』

「いや、俺知らないっていったじゃん」

人の話を聞きましょう

『黙れ。灯油とライターは未だか？』

オカシイ、何故普通に聞くという選択肢が無いのだろう

そして、何故燃やすという選択から入るのだろう

「落ち着くのじゃ、皆」

有難う、ヒデ

「して、和樹よ。本当に知らぬのか？」

何故、俺ばかり疑うんでしょうか？

「知らない……ヒデ？俺の腕はそんなに曲がらなっ！？」

酷いと思いませんか？

何だかんだで学校が終わりました

「ヒデ、優。暫く籠るから」

「は？和樹、今度は何するつもりよ？」

おかしい、警戒された

「新薬を作り、優、ヒデ？俺の間接を逆に擦るのは止めてくれないか？」

一日に二回も三回も受けたくありません

「じゃあ、何を作るか言ってみなさいよ」

何で警戒レベルが上がっているんでしょう

「和樹よ。早く言うのじゃ」

徐々に人の間接を擦る力を増しながら、そんなことを笑顔で言える貴方方が素直に凄いと思います

「あのババアから頼まれた物作るんだよ」

「学園長から？」

「何を頼まれたのじゃ？」

「秘密」

言った瞬間に擦る力がまた上がりました

そろそろ関節から不吉な音が聞こえてきました

「こついうものは最後にバラした方が楽しいと思いたい」  
早く薬を作りたいので、離して下さい

俺の生命健康のためにも

「そう、じゃあ。お休み」

「お休みじゃ、和樹」

「だから！気絶は睡眠じゃねええええっ！？」

side out

優子 side

無駄に体力を使ってしまったわ

和樹を部屋に放り込んでつと

「そついえば、姉上」

「何よ秀吉」

相変わらず無駄に男子に人気のこの弟の間接を逆に振りた

「飯はどうするのじゃ？」

「へ？」

ああ、きつと今間抜けな面を晒してるに違いない  
そついえば、

「……考えてなかったわ」

和樹、気絶させちゃったし

「どつしようかしら？」

「全くじゃな」

二人揃って頭を抱える

この光景を和樹が見たなら、きつと『カメラ、カメラ』と言いなが  
ら走り回るに違いない

「出前でも取るかのう？」

「そつね。一食位いいでしょう」  
簡単だし

「……和樹にバレたらどうしよう？」

出前のもとより、外食も嫌う和樹のことだ

バレたら、どうなるか考えるだけでも恐ろしい  
具体的に言つと、

「……腰が」

「ま、まあ。バレなければ、大丈夫じゃろう。多分」

思わず腰に手をやった私と遠くを見る弟

何なんだろう、この状況は？

side out

和樹side

「ハハハ。材料足りねエ……」

双子の攻撃を受けて、眼が覚めたら夜でした

時間的に言うと、22:00

飯抜きでいいか、別に一食、二食抜いたって死にはしませんし

何より面倒

双子の飯なら喜んで作りますが、自分の食生活は割とどうでもいいんです

………外食は死ぬ程嫌いですけど

で、今薬作ってたんですけど

全然材料が足りませんでした 丸

「まあいいか」

寝ましようか

お休みなさい

「ババア！手前っ！」

「なんだい、クソ餓鬼？」

ああ、殺してやりたい

「コスプレの服が魔女っ子スタイルとナース・医者・忍者だけだと

「フザケテンノカ？」

「三万回死んで下さい」

「何が不満なんだい？」

「ああ？本気で言ってるのか？」

「本気さね」

「少ないって、言ってるんだよ！！」

「最低でも、後十種類は持ってこいって言ってるんです」

「アタシが好きなもの持ってこさせたんだけど。後、何が要るんだい？」

「そうですね」

「最低でも、これだけは持って来い」

「紙に書いて渡します」

「多過ぎないかい？」

「まさか」

「むしろ少ない位だ」

「むう。難しいもんだね」

「勝手に悩んでなさい」

「後、これだけ集めてくれ」

「あん？薬のかね・・・・・・・・何だい、このバカみたいな量は」

「多いかねえ」

「精々、4桁位ですけど」

「しかも、前半ですし」

「ま、頼んだぞ」

「仕方ないさね」

「めっさ溜息つかれました」



幕間 俺とコスプレと見世物 (中編) コスプレ祭前(前書き)

すいません。和樹君で調子に乗ってたら、できませんでした。  
また、来週にでもアップします

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編) コスプレ祭前

バカテスト

以下の問いに答えなさい

『右の頬を殴られたら、に続く言葉を答えなさい』

姫路瑞樹の答え

『左の頬を差し出せ』

教師のコメント

正解です。簡単でしたか？

東野和樹の答え

『左の頬にリバーブロー』

教師のコメント

相手の頬にと書いてあるのに肝臓ですか。

坂本雄二の答え

『左の頬にジャーマンスープレックス』

教師のコメント

君はこの手の答えはこんなものばかりですね。

吉井明久の答え

『左の頬にデンプシーロール』

教師のコメント

足を故障しないように頑張ってください

「ババア。用意できたか？」

「ふん。これで、いいんだろう？」

ああ。これです

「しかし、良く集まったな」

「全くだね。苦労したさ」

「さて、これで作れるんだろう？」

ええ

「任せろ」

さて、頑張って作りましょうか

「まあ、なんというか。その、何？お前ら？」

扉を開けたら、Fクラスの面子が待っていました  
本当に馬鹿ばかりです

「えーと。和樹こそ、学園長と何を話してたの？」

アキ、知りたいならそう言いなさい

「もう少ししたら、分かるから待ってる」

薬もそう時間がかからず出来るでしょうし

「面倒なことじゃないだろうな？」

雄二、

「俺的には非常に楽しいことだな」

「それが不安なんだが……」

どういう意味です  
失礼な

とりあえず、授業でも受けにいけますか

「薬が完成したぞ」

「おや？早かったね」

そうですか？

「これで、準備は完了か？」

「いや、まだだね」

ん？

「何が残ってるんだ？」

「コスプレの衣装が揃わないのさ」  
なんてこった

「まあ。後、三日か四日待つことさね」  
それぐらいなら

「それは構わんが、衣装つてのは何々頼んだんだ？」

「ん。まずは巫女服だろ。次にチャイナ服、ゴスロリ、ウィッグに  
後はコスプレの王道っぽいゲーム何かの服だね」

ほほう

「いい感じに楽しめそうだな」

特にゴスロリ何ぞは誰に着せてもそれなりに笑えますし  
しかし、王道っぽいゲームってなんですか？

「じゃあ。集まったら連絡をくれ」

「分かったさね。あ、あんだ、ついでに開会宣言してくれないか？」  
うわあ、こいつ丸投げだよ

最低の教育者ですね

「開会宣言って、何喋りゃいいんだ？」

面白そうですね

「何それっぽいこと言ってくれればいいさね」

そうですね

それなら

「やってやる。丁度、言いたい台詞もあるしな」

「その言葉を聞いて激しく不安になったさね」

知りませんよ。そんなことは

そこら辺に捨てて下さい

「コスプレをさせるからな、精々羞恥心を捨ててもらおうか」

ああ、楽しみですね

「悪魔だね。………人選間違えてかね」

聞こえてるぞ、妖怪

「んで、準備完了」

「ああ、そうさね。放送宜しく頼むよ」

へーへー

「任されよう。男連中は食い付くぞ」

確実に

「どっちかというと女子勢に食い付いて欲しいんだがね」  
だから、知りませんって

ところ変わって屋上です

『あー、あー。マイクテス。マイクテス』

『和樹っ!?!?』

『『東野ッ!?!?探せ!?!?』』』

精々踊れ

放送室のダミーを見て悔しがつてなさい

『諸君 私はコスプレが好きだ』

諸君 私はコスプレが好きだ

諸君 私はコスプレが好きだ』

あの狂った少佐が大好きです

散り際も格好いいという、最高の悪役ですね

『『『!?!?!?!?』』』』

反応が薄いですねえ

『ゴスロリが好きだ』

制服が好きだ

ウェディングドレスが好きだ

タキシードが好きだ

軍服が好きだ

水着が好きだ

巫女服が好きだ

チャイナ服が好きだ

着物が好きだ』

『街頭で 路上で

喫茶店で 路地裏で

劇で コンサートで

商店街で 自宅で

この地上で行われる ありとあらゆる コスプレ行為が大好きだ』

『店の宣伝で着込んだ衣装を、鼻で笑うのが好きだ  
相手のムツとした表情を見た時など心がおどる』

『街中で出会ったコスプレイヤーと批評しあうのが好きだ  
絶叫を上げて論破された相手を見た時など胸がすくような気持ち  
だった』

『素人が無理をして着込んだ衣装を眺めるのが好きだ  
その顔を羞恥に染め、睨めつけてくる様など感動すら覚える』

『知り合いがコスプレをして吊るし上げられる様などはもったまら  
ない

外道の手によって可愛らしく装飾された人間が指示のもとポーズ

をとる様など最高だ』

『無力な子羊が俺たちの手によって、姿を変えられ拘束を解こうと努力する様など絶頂すら覚える』

『反撃として、コスプレをさせられるのが好きだ  
必死に守るはずだった（男の）尊厳などが失われるのは、とてもとても悲しいものだ』

『一対多の状況で無理矢理剥かれるのが好きだ  
着替えた後、奉仕を要求され無様に働くのは屈辱の極みだ』

『諸君 私はコスプレを 天上の様なコスプレを望んでいる  
諸君 私に付いてくるだろう戦友諸君  
君達は一体 何を望んでいる？』

『更なるコスプレを望むか？  
情け容赦のない糞のようなコスプレを望むか？  
生地布地の限りを尽くし完璧を目指す暴君の様なコスプレを目指  
すか？』

『コスプレ！！コスプレ！！コスプレ！！』  
『よろしい』

ならば コスプレだ』

『我々は服を捨て去り、新たな服に今まさに手をかけようとする最

中だ

だが、この殺伐とした時代を四半世紀生き抜いてきた我々に  
ただのコスプレでは物足りない』

『大コスプレ祭を！！』

一心不乱の大コスプレ祭を！！』

『我らはわずか一個大隊千人に満たぬ愛好者にすぎない  
だが諸君は一騎当千の偏愛者だと私は信仰している  
ならば我らは諸君と私で総兵力100万と1人の偏愛者になる』

『我々が心の奥底へと追いやり眠りこけている性癖を見直そう  
扉を開き引きずり降りし得意分野を思い出させよう』

『連中に興奮の味を思い出させてやる』

連中に我々の魂の音を思い出させてやる』

『天上と地獄のはざまには 奴らの哲学では思いもよらない事がある  
ことを思い出させてやる』

『一千人の偏愛者の情熱で

世界を萌やし尽くしてやる』

『第一次文月学園コスプレ祭 開幕』

征くぞ 諸君』

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編) コスプレ祭前(後書き)

演説で読みにくかったら、連絡下さい

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編2) 夢?希望?傳く散るもの(前書き)

予想外に長くなりました

何で圭一君が微妙に出てきたんだろう？

彼の台詞はまさしく漢ですが、すべてを使うことが出来ませんでした  
その内になにか使ってみましょう

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編2) 夢?希望?傳く散るもの

バカテスト

以下の問題に答えなさい

『枕草子の冒頭 春は〴〵冬はまで答えなさい』

姫路瑞樹の答え

『春はあけぼの 夏は夜 秋は夕暮れ 冬はつとめて』

教師のコメント

正解です。この他にも源氏物語や今昔物語などの冒頭も覚えておく  
といいでしょう。

吉井明久の答え

『春は昼寝 夏は二度寝 秋は午睡 冬は冬眠』

教師のコメント

寝てばっかりですね。

東野和樹の答え

『春は夜桜 夏には星 秋は満月 冬には雪』

教師のコメント

確かに綺麗ですけど違います。

坂本雄二の答え

『春は朝青竜 夏は琴欧州 秋は白鵬 冬は双葉山』

教師のコメント

枕草子はいつから相撲になったんですか？

土屋康太の答え

『春はバカもの』

教師のコメント

そんな枕草子は嫌です。

『あーあー。こちら放送室じゃ』

『先程、学園長から連絡があつての』

『その説明をするわ』

『む？姉上。ワシに一任してくれるのではないのか？』

『何言つてんのよ、秀吉？面白そうなんだから、私も混ぜなさいよ』

『むづ。それでは、コスプレの衣装の置き場所を言ってくれんかの？』

『分かったわ。衣装の置き場所は各階の空き教室よ』

『さらに、和樹が作った薬じゃが……』

『今度は、何を作ったのよ？』

『獣耳が生える薬だ！』

『和樹、胸を張るでない』

『と、いうか。それって、何の役に立つの？』

『想像してみる。愛子に犬耳が生えた姿を！』

「え？ボク？」

『………悪くないわね』

『確かにのう』

『更に、前に俺が作った性転換薬も置いておいた』

『場所じゃが、む？家庭科室じゃな』

『へえ。なら、和樹にも飲ませましょ』

『何が生えるのじゃろうな』

『ハッハッハッ。さらばだ』

『あ。逃げた』

『追っぞ。姉上』

『当然』

「何で、猫耳なんだああああああああ！！」

「男に猫耳って、微妙ね」

「そうじゃの。和子にするかの」

「そうね。後、メイド服着せましょ」

逃げ場がありません

「で、この格好で過ごすのか？」

屈辱ですが

「まあ、いいんじゃない？」

「うむ。似合っておるしの」

そうですか

それでは

「さあ、木下姉妹。覚悟はいいか？」

聞く気はありませんが

「へ？」

「む？」

性転換薬を飲ませてっと

「ふむ。女の体も久しぶりじゃのう」

「私は初めてよ。男の体なんて」

嫌そうですねえ

さて、何を着せましょうか

そうですね

「着物とスーツ。どっちがいい？」

「何でその二択なの？」

「ん。俺が見たいから」

「さて、優がスーツで、ヒデが着物でいいか」

言った瞬間優に逃げられそうになりました。

「何処にいくんだ、優？」

「お願い！私を自由にして!？」

絶対、嫌

「さあ、選べ」

『何を?』

「?自分で着替える ?俺が剥いて、着替えさせる」

『?番!』

なんだつまらん

服を渡して、外に出ます

「ん?東野?何してんだ?」

「おや?東野君?どうしたんだい?」

ん?誰です

side out

久保side

全く学園長もこんな下らない行事で時間を割かないで欲しい  
この時間を使えばどれだけ、予習 復習に使えることか

しかし、この機会に吉井君のコスプレを生で見るとしてもバチは当たらないだろう

「おや？あれは、東野君かな？  
猫耳にメイド服とは随分と可愛らしい格好だね」

「ん？東野？何してんだ？」

「おや？東野君？どうしたんだい？」

「おや？」

「おお、根本君。久しぶりに見たよ」

「彼はいい噂は聞かないなあ」

「根本に久保？珍しい面子だな」

「そうだね。僕もここで根本君に会うとは思わなかった」

「ふん。俺はこんな下らない行事に出る気はないからな」

「驚いたよ、まさか同意見とは」

「確かに下らんが、見てて退屈はしないだろう？」

「確かに退屈はしないがね」

「全く誰だい？ベーター卿の衣装なんて着て歩いてたのは」

「多分、Fクラスの誰かだとは思っけど」

「しかし、久保も根本もノリが悪いな。こういう催しは嫌でも参加するものだろう」

「そういう物かい？」

「ふむ。それなら、何か着ようかな？」

「俺はコスプレに興味なんて………お前らっ！？何時の間に現れたっ！？」

「ふむ。ありのまま今、起こった現象を語るとしよう」

「先ず、根本君が先の発言をした瞬間に、多分Fクラスと思われる人間が集団で根本君を囲んで縛り上げたんだ」

「彼らは、テレポートでも使えるのかな？」

「根本君に追従する訳ではないが、僕もコスプレにそこまで、興味はないね」

「むう。以外に需要がないのか？」

いや、あると思うよ

周りを囲んでいる人たちもいつもの団員服じゃないし

「その意見には、私も賛成ね」

おや？誰だい

「Cクラス代表 小山か。随分と可愛らしい衣装を着てるじゃないか」

確かにね。

あんな意見の後だと、更に強く感じるよ

まあ、着てるのはキャビンアテンダントの制服なんだけどね

「う、五月蠅いわね！！仕方ないじゃない、クラスの連中に押し切られたんだから」

君も苦労してるんだね

「で、三人とも、コスプレ否定派か？」

君はなんと真つ直ぐな眼で僕たちを見るんだい

居心地が悪いじゃないか

「否定つて、程じゃないけど、まあ、興味はないわね」

「俺もそこまで興味はない」

「僕もないね」

それを聞いて、満足そうな顔で頷いて

「お前らはわかっていない！！ わかっていない！！！！！！」

突然、大声を出さないでくれ吃驚するだろう

「何を？」

「コスプレの素晴らしさを教えてやるう。まずは、今からいう三つを思い浮かべる」

「制服、体操服、スクール水着」  
ふむ。

「思い浮かべたか？何、根本？出来ないだと？ 歯を食いしばれ！  
！」

校内暴力は止めたまえ

「いいか。まずは、久保。お前はスク水だ。次に、小山。制服、そして、クズ。お前は体操服だ」

「頭に思い描け、時間は3秒！！描けたか？妄想くらい自在に出来る、気合が足りんやり直せッ！！」

東野君は随分と熱い男なんだね

「よし、思い描いたな。これで、コスプレの良さが分かるとは到底思えんからな」

「萌えの最終形態はないと言っても過言ではないが、一つの例を見せてやるう」

そう言つて、東野君は自分が今まで、背を預けていた扉を開け放った  
そこから、出てきたのは

赤を基調として、蝶をあしらっている人を囲むように配置された枝と花で着飾り、簪まで、差した木下さんだった

しかも、もたれかかっていたらしくて、若干裾が翻っている

これは、可愛いと素直に絶賛できる

「まあ、これが、一つの萌えの極致と言えんでもないが、ヒデ？優は何処に行ったんだ？」

木下さんじゃないのかい？

まさか、ここまで化けるとは

流石は、演劇部か

「姉上は、今そこに隠れておるが」

へえ、木下さんもいるのか

「優、大人しく出てこい」

何かが震えた気配がして、ゆっくりと這い出してくる

木下さん？何で、涙目なんだい？

そして、何故スーツなんだい？

「さて、木下優子と木下秀吉の美人姉妹で、作られた最強と言っても過言ではないコスプレだ。ゆっくり楽しめ」

まあ、目の保養にはとてもいいけど

それより、吉井君は何処にいるんだろう？

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編2) 夢?希望?傳く散るもの(後書き)

おかしい 根本が途中から空気だ

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編3) 雄二 アキ 康太(前書き)

最近、ポイントの上がり方が異常です。

4巻終了時点で800点前後だったのに、コスプレの話を書いていて1000点越えました

コスプレ好きすぎでしょう

まあ、俺も好きですが

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編3) 雄二 アキ 康太

バカテスト

以下の問題に答えなさい

『イエス・キリストの生誕日』

姫路瑞樹の答え

『12月25日』

教師のコメント

正解です。日本では、恋人たちが愛を語らう日になっていますね。

吉井明久の答え

『12月25日』

教師のコメント

流石にこれくらいは答えられますか。

土屋康太の答え

『厚着になるので、この時期はシャッターチャンスが少ない』

教師のコメント

知りません。

東野和樹の答え

『1月6日』

教師のコメント

その日は公現祭ですね。  
知っていますか？イエス・キリストの生誕日を特定する記述はない  
んですよ。  
そして、キリスト教において、クリスマスは降誕（多くの教派で、  
「誕生」ではなく「降誕」の語を用いる）を記念する祭日と見なし  
ており、救世主イエス・キリストの誕生日として見なしている訳で  
は無いのです。

雄二 side

全く、厄介事ばかり増えやがる

空き教室で何とか終わるまで、時間を稼いで

ガラッ

誰だ？今の時間帯にこんなところに来る奴なんて  
振り向いたら翔子がいた

「しよ、翔子？なんでここに？」

こいつは神出鬼没にも程がある

「……………雄二がいるから」

……………俺は、お前と一度でいいから会話したい

「そうか、帰れ」

「……………帰らない」

取りあえず、お前が持っている服はなんだ？

メイド服じゃないだろうな？

「……………雄二はこれを着る」

そう言つて翔子は、二着持っている服の片割れを俺の方に広げて見せてきた  
それは、

ピンク色に染め上げ、フリルをふんだんに使つた、なんとも可愛らしいウエディングドレスだった

ダツ

畜生っ！あんなもん着てたまるか

「・・・・・・・・・・・・・・・・逃がさない」

「何で男がウエディングドレスそんなもの着なくちゃいけないんだ！」

翔子、手前何でこんな時だけ俺より速いんだよ！？

「・・・・・・・・・・・・・・・・和樹に言つたら、作つてくれた」

あの野郎・・・・・・・・・・絶対、いつか殺してやる

「・・・・・・・・・・・・・・・・和樹は笑いながら『絶対、似合つヨ』と言つてくれた」

「オカシイだろ！！」

バチイ

ス、スタンガンだと・・・・・・・・・・

俺は、和樹に復讐を誓いながら、意識を手放した

「・・・・・・・・・・・・・・・・雄二、とても似合つてる」  
なんだと？

「翔子、何故お前はタキシードで俺がウェディングドレスなんだ？」  
男の尊厳をことごとく踏みにじりやがった

「……私がタキシードを着たかったから」  
オカシイだろっ!!

「翔子、良い医者紹介してやるから、俺の制服を寄越せ」

「……雄二、嬉しい」

ダメだ、こいつ

そうだな、昔から翔子と会話になったことなんて無かったもんな

「で、何で俺は引きずられてんだ？」

「……和樹が、雄二の花嫁衣装を見たいって」

「アノヤロウ、イツカクロス」

そして、俺は本日二回目のスタンガンの一撃を受け、意識を闇に放り込んだ

side out

明久side

んー、沢山有って迷うよ

何を着ようかな

和樹に感謝だね。普通、こんな着る機会無いし

「アキちゃ……吉井君っ!!」

今、すっごい不名誉な呼ばれ方をした!

「な、何かな？」

というか、この子誰?

魔女っ子の衣装で、下は制服だけどコスプレなのかな?

「Dクラスの玉野です。実は、アキちゃん(吉井君)に着てもらい

たい服があるの」

OK、落ち着くんだ僕

未だ、彼女は何も持ってない

逃げるなら、いまだ

「逃げたら、和子ちゃんが協力してくれるって、さっきメールがあったんだ」

とても嬉しそうに僕の逃げ道を塞いでくれたね玉野さん

「……………で、何を着せる気なの？」

それによってこちらの対応を考えよう

彼女はその言葉を聞いて、心底嬉しそうに服を持ってきてくれたそれは

小学生の服&ランドセル（赤）+ウィッグ

何、イジメなの、これ？

イジメだよね？

そう言っつて、お願いだから

「あ、ウィッグは付けちゃダメなんだった」

良かった。女装は防げた

「和子ちゃんは、『アキなら、きつと着てくれる。そして、俺の眼を楽しませてくれる』って、言っつたよ」

僕には、この服を着るしか選択肢が無いのか

嫌、振り切つて和樹と戦うという選択肢も

……………止めた、勝てそうに無いや

「分かつたよ、玉野さん。着るよ」

「有難うアキちゃん！！今度、一緒にアキちゃんに似合うアクセサリー買いに行こうね」

絶対、行かないからね

とつか、僕じゃなくてアキちゃんに興味があるんだね……………

その後、僕は嫌々ながらも服に袖を通したら、サイズがピッタリだった

聞いてみると、『アキちゃんのサイズを間違えるはずがないじゃないの』だった

僕の周りには、頭がおかしい知り合いしか居ない気がするなあ

side out

康太side

素晴らしい

流石は、和樹だ。いい仕事をする

コスプレなんて、中々撮れないからな

とても、貴重だ

これは、高く売れる

「ムツツリー二君」

工藤愛子だと……………!

馬鹿な!?何故、この場所がつ!!

「和樹君から、連絡だよ」

和樹からだと……………??

俺は、不審に思いながらも工藤愛子の方に顔を向け

そのまま、鼻血を出して倒れた

眼福だ……………

いつものスパッツではなく、水着

パーカーを羽織り、ポケットに手を突っ込み  
しかも、犬耳だと？  
不意打ちもいいところだ  
更に、こちらを窺う顔に胸

「……………俺の負けだ」

「ムツツリー二君は相変わらずだねえ」

「……………和樹はなんと？」

こんなところで死ぬ訳には、行かないんだよ俺は

「んーとね。『康太はどうせ、屋上か空き教室に居るからみつけたら、この薬と服を渡してくれ』って」

そう言つて、渡してくるが

「……………何の薬だ？」

はつきり言つて、和樹の薬は性質が悪い

「そこまでは、聞いてないなあ」

そういえば、服と言つたな

何の服だ

「あ、聞いてよ。ムツツリー二君。服はね、ゴスロリなんだ」

なんだと

俺に死ねと言うんだな

良いだろう。

その挑戦、受けてたつ

その耳、動くんだな

そういえば、和樹も飲まされたんだな

後で、撮りに行こう

side out

愛子side

ムツツリー二君は、女の子になったら可愛くなるねえ  
さて、ウィッグを被せてっと  
馴染むように整えて

「ボク、この服気に行ったよ」  
ゴスロリ服って、結構細かい作りになってるし  
可愛いしね

黒を基調として、銀糸で装飾を施して、その上にフリルを被せ金糸  
でコーティングをしたゴスロリ衣装  
和樹君曰く『中々に面倒だったが、楽しめた』らしい  
・・・・・・・・自分で作ったんだろうなあ

と、電話だ

『愛子、そっちはどうだ?』

『うん。大丈夫だよ。ムツツリー二君に今から着せるからね』  
楽しみにしててよ

『ほう。後で、康太を連れてAクラスに集合な』

『うん、分かってるよ。それじゃね』

さて、ムツツリー二君の着せかえタイムだ

side out

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編3) 雄二 アキ 康太(後書き)

次は残りの女性陣です

康太 s i d e は俺の力では書ききれません

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編4) 美春 島田 姫路(前書き)

美春の動かしやすさは異常ですね

姫路は、妄想っ子のような気がしてなりません

久保君は、普通に美人っぽいですよ

幕間 俺とコスプレと見世物 (中編4) 美春 島田 姫路

バカテスト

以下の問題に答えなさい。

『曼珠沙華とも呼ばれる多年草の植物』

姫路瑞樹の答え

『彼岸花』

教師のコメント

正解です。赤い花より白い花の方が先生は好きです。

吉井明久の答え

『雑草』

教師のコメント

たしかにそこいらに生えてますが違います。

土屋康太の答え

『草なぞに興味はない』

教師のコメント

後で職員室まで来なさい。

坂本雄二の答え

『毒草』

教師のコメント

確かに毒はありますが、違います。

東野和樹の答え

『死人花』

教師のコメント

正解ですね。他には、剃刀花 捨子花 狐花 地獄花 幽霊花等の  
呼び方があります。

美春 side

ああ、お姉さまの匂いがこちらから

発見しましたわ

「お姉さま!!!」

「げっ!美春!?!」

お姉さまああああああっ!!!!

(現在、暴走中につき強制終了)

side out

島田 side

美春

「あなたの持つてる薬は何?」

「お姉さま。これは美春が和樹に頼んで作って貰った薬です」

何で東野は美春と会話出来るんだろう？

「で、何の薬なの？」

「食べてみれば分かりますわ、お姉さま」

そう言つて、こちらにその危険物を突き出してくる美春

だから、一体なんなのよ！

「お姉さま お姉さまオネエさま」

怖い

半端じゃなく怖い

今なら、お化け屋敷に行つても

・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱりダメ

怖いものは怖いわ

馬鹿なことを考えてたら、追い詰められた！

「ああ、お姉さまっ！ ついについに美春の物になってくれるんですね！！」

誰があんたの物になるか！

「美春、落ち着きましよう」

「美春は落ち着いていますよ、お姉さま  
そうかしら

とてもそうは見えないけど

「美春？ それ以上近づかないで！！」

本当にこの子は

「ウフフフ。お姉さま、美春がお姉さまの初めてを」東野と付き合  
う気は無いの！？」・・・・・・・・チッ

危なかったわ

ウチの貞操とか色々なものが危なかったわ

「確かに和樹は男にしては、分かる男です」

「な、なら！」

「しかし、和樹に抱く感情は友愛の情です」

仲良く話してるから、良いかなと思ったのに

東野とくっ付いてウチに平和を頂戴

「お姉さま。隙有りです」

へ？

「……………ゴクン……………」

の、飲んじゃったじゃないのおおおおおおっ！！

「さあ、お姉さま。美春の物に……………アレ？」

「ど、どうしたの美春？」

「ど、どうしてですの！？美春のお姉さまが男になるなんて！！」

へ？

「ど、どういことよ！説明しなさい！？」

「か、和樹に連絡を取りますから、服を着替えて待っていて下さい」

そう言っつて、携帯を取り出し何処から引っ張ってきたのか服を渡してくる

その服は

学ランだった

「男物じゃないの！！！」

美春、これ以上ウチに恥をかかせてどうするつもりなの

「あ、和樹？あの薬なのですが……」  
「どうやら、東野は捕まったらしい」

「へ？赤い蓋の方でしたっけ？青では無くて？」

「分かりました。それで、解除薬は？」

「家庭科室ですね。分かりました」

「お姉さま。急いで服を着替えてAクラスに行ってください」  
「何でよ」

「和樹が、お茶会をするらしいです」

東野が  
「……また、変な薬とか入ってるの？」  
怪しいなあ

近寄りたくないなあ

「その点は安心して下さい。和樹は純粹にお茶会をしたらしいので」

「で、何でウチが着替えないといけないの？」

「それは、美春に着替えさせて欲しいと「分かった！着替えるわ！……お姉さまの意地悪」

ウチの身体よ

美春のじゃないわ

ずっと疑問だったんだけど

「何で美春はタキシード着てるの？」

「それは、お姉さまにウエディングドレスを着せて「分かったわ。もう喋らないで」……………美春の話を最後まで聞いて下さい！」

美春、分かってるわ

これ以上あなたに話させてら十八禁になるってことをよく分かってるわ

「美春、じつと見られたら、恥かしいんだけど」

「お姉さま、気にすることは有りませんわ」

気にするわよ

暫く説得して、ウチは学ランに着替えた

……………東野に会ったら、眼突をした後に背骨に蹴りを入れて粉碎してやるわ

追伸 ボタンを全部留めてたら凄いい剣幕で知らない女子に怒られて、ボタンを外された

悔しいので、東野の腰骨も八つ当たりで砕くことにした 丸

side out

姫路side

わぁー

可愛い服が沢山あります

「どれにしましょうか？」  
どれも素敵ですけど

そういえば

「性転換薬って、家庭科室でしたよね」

前から、興味があつたんです

私が、男になって明久君に……………

(以下、色々と言バインので削除)

「家庭科室です」  
薬はどれでしょうか

「これでしょうか？」

青い蓋で、性転換薬と書かれた紙が張って有りました。

「では、いただきます」

す、凄いです!!

私のコンプレックスの胸が

引っ込みました!!

流星は、東野君ですね

どうやって、作つたんでしょうか？

「服は何を着ましよう？」

「タキシードって、安直ですけど萌えませんか？」

「嫌、すまないが、分からない」

あれ、久保君

「どうしたんですか？」

「僕も、一度は性転換というのを体験したくてね（女なら堂々と吉井君に近付くことが）」

何か、不穏な気配がします

「まあいいですけど、久保君は何を着るんですか？」

「これだよ」

そう言っつて、取りだしたのは

エレベーターガールの衣装でした

なんとというか、普通に173度位のぶっ飛んだ考えですね  
珍しいですけど

「ふむ。これが、女性になった僕か（これで、吉井君に）」  
久保君が、性転換薬を飲んだ姿は

普通にスレンダー美人でした

くっ！なんですか！！

美形は女になっても、美人ですか！？  
そうなんですな！！

これは、思わぬライバル出現ですね！  
私も、目一杯アピールしますかね  
負けませんから

s  
i  
d  
e  
o  
u  
t

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編) お茶会開幕(前書き)

すみませんでした。

大学が予想外に忙しいです。  
授業なんて無くなってしまえ！

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編) お茶会開幕

バカテスト

以下の問題に答えなさい

『中国春秋時代の武将・軍事思想家。字は長卿。彼の記した兵法書は?』

姫路瑞樹の答え

『孫子』

教師のコメント

正解です。「孫子」は尊称で、孫武が名前になります。

吉井明久の答え

『孔子』

教師のコメント

君にしては近い答えですね。もう一捻りして下さい。

坂本雄二の答え

『孫子』

教師のコメント

正解です。最近、珍回答が目立たなくなりましたね。

東野和樹の答え

『武経七書の一つ 孫子』

教師のコメント

君が真面目に答える問題が先生には分かりません。

因みに、東野君が書いた武経七書とは、『孫子』『呉子』『尉繚子』『六韜』『三略』『司馬法』『李衛公問对』の七つです。

土屋康太の答え

『もっとシャッターチャンスを!』

教師のコメント

君はそろそろ留年の危機だということに気付いて下さい。

「和樹、お茶」

「はいはい」

現在、Aクラスにてお茶の真っ最中です  
まあ、まだ相手は優とヒデだけです

流石は、Aクラスですね  
茶葉も色々ありますし

「和樹、お茶じゃ」

「はいはい」

因みに優は紅茶で、ヒデは日本茶です

「東野、俺にもくれ」

「はい。日本茶・紅茶?それとも?」

「ふんっ!」

痛え 超痛え

普通にグ パンされた  
顔面が凹むかと思いました

「何するんですか、鉄人」

「貴様が下らんことをするからだ」

それはすみませんでした

それよりも

「アンタ何で軍服なんだよ!？」

しかも、特戦仕様

マニアックなんだよ!

「この服を見ると何故か着たくなつたな」  
ダンボールでも被つてなさい

「で、鉄人。紅茶か日本茶か？」

「日本茶をもらおう」

「はい」

トポトポトポ

「旨いな」

「光栄ですなつと」

この人、普通に感想言ってくれるから好感が持てます

「東野おおおおおおおつ!?!」

島田?

「どうしたあああああ!?!」

危な!

なんか、眼突き食らいそうになりました  
緊急回避です

と、いうか

「今、なんか静電気が走らなかつたか？」

この娘、本当に人間か？

「気のせいよ」

「島田よ。どうしたのじゃ？」

「なんかムシャクシャしたから眼突きして背骨と腰骨を砕こうとしたわ。後悔も反省もしないし、する気も無いわ」

なんなの、この娘？

無駄に格好いいんだけど

そんなんだから、女子に人気なんだよ！

「何か言つた、東野？」

「Nein, nechts」(いいえ、なにも)

「Stinkenden, Luge」(嘘くさいわ)

島田は知らないでしょうが、女子の大半はアキちゃん派と島田派に分かれるんですよ

男子はヒデ派が8割を超えます

「島田、お茶でもどうじゃ？」

「そうね。腰骨を砕いた後に貰うわ」

恐っ！

ヤンデレですか？

俺が死んだ後にデレるんですね

デレ期が無いだと………？

嬉しく無い 全く欠片も嬉しく無いですよ!!

「島田さん。埃が舞うから外でやって」

マジ外道！  
優子さん、マジで外道！！

「東野、あなたの全てを否定してやるわ」

そう言いつつ、身体を半身に構え両拳を口元に構える島田

ビ ビーカブースタイルだっ！？

「お前本当に無駄に格好いいな！！教科選択終了  
開戦！！！」

このまま補修室送りでどうでしょうか

ガチ戦闘で欠片も勝てる気がしません

「殺すわ」

中指を立てて殺気をぶち当ててくる島田さんに恐怖を感じます

『試験召喚』

「そこまでだ、馬鹿共」

鉄人、召喚フィールドを消さないで下さいっ！！

「貴様、俺が死んでもいいというのか！？」

「先ず眼球を抉り出して、肘を叩き折るわ」

「お前恐ええよっ！？」

明確な殺人方法の提示なんて要らんわ！！

「島田、俺が出て行った後にしろ。今は茶を楽しめ」

「貴様、直接的に殺したら問題が出るから、島田に殺らせる気だな

！？」

「先生が言うのなら、今、この場では殺りません」

今だけっ！？

今日が俺の命日！？

「和子ちゃん！！」

あん？

「和樹、猫耳って最高だよね!!」

「先ずは会話をしようか、アキ」

訳分からん

「で、アキは島田に対して何か言うことは無いか?」

そう言いつつアキの後ろに隠れて、即席の盾にします

「美波に?」

じつと島田に眼をやるアキ

「アキ。ど、どうかな?」

さあ、アキ!

俺を助けて下さい!!

「うん、美波。とても良く似合ってるよ」

お、良い感じ?

「とても女には見えな、眼がああああああ!?!僕の眼がああああああ!?!?」

流石は、アキ

スケープゴートとしては最高ですね

side out

島田 side

さあ、アキは片付けたわ

「島田、気が済んだか?」

いいえ、未だよ

「東野、覚悟しなさいよ」

「もう、止めねえ?」

何で?

「島田さん!!」

誰よ?

「和子ちゃんの猫耳メイド服姿を攻撃するなんて、信じられないわ!?」

えーと

誰?この子?

「Dクラスの玉野だ。アキちゃんと和子のファンだなへえ?」

「で、東野は何処に行くつもり?」

「逃げるに決まってるだろう?」

「アンタ、頭オカシイんじゃないの?」

「逃げられると思ってるの?」

ウチハゼツタイニガサナイ

「俺を誰だと思ってる?」

東野和樹だぞ?」

ダッ(窓に向かう東野)

ドガッ!!(それを止める西村先生の拳)

ダンッ(吹き飛ばされる勢いを殺さずに壁に足から着地する東野)

「やっってくるな、鉄人」

何で無傷なの?

「ふん。殴られる瞬間に飛び退き威力を殺すとは漫画みたいな奴だに、人間?」

「島田も落ち着け。玉野、吉井にウィッグを被せるな」

た、玉野さん

「ウチもやる！」

どうせなら、小学生のスカートも穿かせるわ

side out

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編) お茶会開幕(後書き)

さあ、次は雄二、翔子コンビだ

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編2) さあ、披露宴の準備だ！ (前書き)

遅れてすみませんでした。

決してゴッドイーターバーストを体験版からやっていた訳では、ありません

ありませんったら、ありません

..... すいません。嘘です、ずっとやってました

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編2) さあ、披露宴の準備だ！

以下の質問に答えて下さい。

『貴方にとって、友達とはどのような存在ですか？』

東野和樹の答え

『モルモットであり、打倒すべき敵である存在』

教師のコメント

その関係はきつと友達ではありません。

姫路瑞樹の答え

『競争相手であり、恋敵であり、一緒にいて楽しめる存在』

教師のコメント

姫路さんの答えはいつも先生の心を癒してくれます。

吉井明久の答え

『時に悪友であり、時に裏切ったり、裏切られたり、異端審問する関係』

坂本雄二の答え

『悪友であったり、裏切ったり、盾にしたり、見捨てたりする関係』

教師のコメント

君たちが友達をどう思っているか良く分かりました。

土屋康太の答え

『被写体であり、得意先であり、抹殺対象である関係』

教師のコメント

君の言いたいことが分かってきた先生はどうしたらいいんでしょう。

アキ side

神様、僕は何か悪いことをしたでしょうか？

美波が殺気をガンガン当ててくるんだけど  
僕が一体何をしたらって言うんだ？

「アキ。紅茶と日本茶どっちがいい？」

和樹はすっかりメイドだね

今のところは眼にも優しいし

「紅茶で」

「分かった」

ティーポットとティーカップを取り出してその場で紅茶を注いでくれる和樹

「島田は？」

「ウチのことは放っておいて」

変な美波

「分かった。紅茶だな」

え？

「東野？ウチは要らないって言ってるの」  
「馬鹿な！？」

殺気が増しただと!?

「島田、俺は今メイドなんだ」

「それがなによ」

「メイドにはな、お客様を楽しませる義務がある。大人しく楽しめ」

「ウチがそれで、楽しめないなら?」

紅茶を、美波の目の前に置いて

「別のアプローチをするだけさ」

と、不敵な笑みを浮かべる和樹

無駄に男らしいメイドだね

「さて、玉野は………お前はなあ」

「な、何!和子ちゃんっ!?!」

えーと

玉野さん、未だ諦めてなかったんだ

僕の女装

ウィッグを速く片付けてくれないかなあ

side out

玉野 side

和子ちゃん、私は

「アキちゃんが見たいの!」

「後にしろ。今日のアキは小学生だ」

そ、そんな………

折角、ウィッグだけじゃなくて色々用意したのに

「はあ。で、紅茶か日本茶か？」

「あ、日本茶でお願い」

日本茶美味しいよね

御茶請けが欲しいなあ

「少し待て、美春はどっちがいいんだ？」  
清水さん？

side out

和樹side

下手な隠れ方ですねえ

いや、隠れる気がないのかもしれない

「和樹、薬がありませんでした」  
そうですか

「今回のコンセプトは『出来る限り性別反転しよう』だから、いいんだよ」

アキちゃんは除く

「よくわかりません」

わからない方がいいんです

「で、日本茶か紅茶か？」

「あ、紅茶でお願いします」  
はいはいと

「で、茶菓子だな」

一人じゃ少し大変ですねえ

「アキ、手伝え」

「へ、あ。うん」

さあ、何を作りましょうか？

「和樹、何作るの？」

「あー、そうだな。お前は紅茶用の菓子を作ってくれ」

「分かったよ。和樹は和菓子でも作るの？」

「そうするか」

さて、生地からいきましようか

side out

ヒデside

随分、人数が増えたのお

「後は誰が来るのじゃろうな？」

「ん？愛子と康太、姫路と久保、翔子と雄二だ」  
む？

「和樹、何時から二人が増えたの？」

「薬って便利だよなあ」

何時の間にか和樹が横に立っておったのじゃ

それはもう薬ではないと思うのじゃが

「披露宴の準備もしなくちゃな」

披露宴？

「誰のじゃ？」

「翔子と雄二」

ほほう、ついに

「目出度いわね」

「そうじゃの」

ついに、雄二も諦めたのじゃな

これは友として祝福せねばなるまい

『ねえ、和樹？こんな感じでいいの？』

『いいんじゃない？旨そうだし』

『適当だなあ』

『気にするな。アキ、皿出してくれ』

『うん。これでいい？』

『おう』

何を作っておるんじゃない？

「茶菓子出来たぞ」

「大量にね」

確かに少し多過ぎんかのう

羊羹なぞこの短時間にどうやって作ったのじゃ？

明久の方にしても、見たこともない洋菓子を作っておるし

「む？」

「あん？」

ワシの傍らに居った和樹の胸元から音楽が聞こえてきた

「あー、愛子か。どうした？」

携帯の着信音がユイのほうき星とはのう

『ゴメンね、和樹君。ムツツリー二君に逃げられちゃった』

「む？何処で逃げられた？」

『屋上だよ』

「最初っからかあ」

ムツツリー二に逃げられたじゃと？

どうするつもりじゃ、和樹？

「（優、ノ パソ取って）仕方ないな、愛子。お前だけでも来い」  
『うん。ゴメンね』

「さて、康太？俺から逃げられると思うなよ？」

不敵な笑みを浮かべ、骨を鳴らす和樹

和樹、何を調べるつもりじゃ？

「どうするつもり？和樹？」

「んー。まあ、見てろって」

「では、俺は料理を頑張ろうか」

「んじゃあ、任せたぞ。俺は康太を捕まえる」

「分かった。頑張れよ」

むう。微妙な光景じゃのう

和樹が二人とは

「さて、お？お、面白くなってきたな」

何を見つけたのじゃ？

「鉄人。このケーブルをスクリーンに繋いでくれ」

「西村先生と呼べと言っているだろうが」

「気にしない、気にしない」

随分と太いケーブルじゃな

「さて、康太。次はどうする？」

「土屋、お前は本当に……」

ムツツリーニよ、お主は本当に自分に嘘がつけぬ男じゃのう

逃げ込んだ先が、女子更衣室とはの

まあ、鼻血を出して倒れておるが

「どうするもこうするも、気絶してんだけど」

「拾いに行くのか、東野？」

「捨ててきなさいよ。焼却炉にでも」

島田よ、その扱いは酷いと思うぞ

「さてさて、雄二に翔子ももうすぐ来るだろうからな。カメラマンを拾いに行こうか」

「手伝いましょうか、和樹？」

「美春、レッドカーペット敷いてくれ」

テキパキと指示を出し、外に向かう和樹  
ふむ、儂も手伝うとするかの

side out

和樹side

同じ階層の女子更衣室で、助かりました  
康太を引きずってAクラスを目指します

「康太、起きたか？」

「……………和樹、何故背負ってくれない？  
だって

「背中が血で汚れるから」

「……………俺を舐めるな。汚すはずがない」

無駄に格好いいな

ダメですけど

「康太には、カメラマンとして働いてもらっぞ」

「……………誰を撮るんだ？」

「翔子に雄二」

「……………そういえば、花嫁がどうのと聞いた気がするな」  
多分、その話で合ってると思いますよ

「……………いいだろう。俺は、俺の全力を尽くすだけだ」  
本当に無駄に男らしいゴスロリっ子ですね  
自分に忠実すぎるのも問題ですねえ

……………そういえば、姫路や久保は何処でしょうか？

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編2) さあ、披露宴の準備だ！ (後書き)

弟との馬鹿話

作 「雄二と翔子って、結婚するなら、どっちがウエディングドレス着ると思う？」

弟 「え？両方じゃねえの？」 (即答)

作 「……………その可能性は浮かばなかった」

弟 「ちゅーか、翔子は白無垢が見たい」

この後、一時間位ウエディングドレスと白無垢談義をしました

幕間 俺とコスプレと見世物

(後編3)

雄二と翔子と大縁談!?

(前書き)

やっと書けました

えらい時間かかりましたね

幕間 俺とコスプレと見世物 (後編3) 雄二と翔子と大縁談!?

以下の質問に答えなさい

『貴方の座右の銘を答えて下さい』

姫路瑞樹の答え

『あの人に美味しい料理を』

教師のコメント

あの人が誰か気になりますが、平和的でいいですね。

東野和樹

『平和の為に禍根は根こそぎ断て』

教師のコメント

それは誰が望んだどんな形態の平和ですかっ!?

坂本雄二の答え

『翔子から人生の最後まで逃げる。いや、逃げ切ってみせる!!--』

教師のコメント

不可能だと思いますが、頑張ってください。

霧島翔子の答え

『雄二との幸せな結婚生活』

教師のコメント

少しは坂本君を労りましょう。

吉井明久の答え

『僕にカロリーを!』

教師のコメント

東野君にでも頼んで下さい。

異端審問会の答え

『彼女持ちを処刑』

教師のコメント

頑張ってください。

雄二side

翔子

「いい加減離せ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・雄二が逃げるから、離さない」

何のことかな

俺はただ単に自由が欲しいだけだぞ

逃げるなんて人聞きの悪い

せめて、戦略的撤退と言ってもらおうか

「しかし、Aクラスってこんなに遠かったか？」

一時間以上歩かされている気がするんだが

「・・・・・・・・・・・・・・・・まだ、雄二を愛で足りないから」

分からない

翔子が何を言いたいのか

全く分からない

「はあ、俺は一度でいいからお前とマトモな会話をしてみたいよ」

「………大丈夫。愛さえあれば」

あー、そうかい

俺がバカだったよ

自分で歩くために、視線を前にやると

姫路と久保が何か言い争っていた

珍しい組み合わせだな

「………何をやっているの？」

「分からん」

「久保と姫路は何をやっているんだ？」

「あ、坂本君？」

疑問形で返すな

「坂本君かい、随分と可愛い衣装だねえ」

ほっとけ、学年次席

手前も、随分とアレな格好じゃねえか

それよりも

「何を言い争ってたんだ？」

「あつ！聞いて下さい、坂本君。久保君と吉井君の可愛さを議論していたんです！！」

明久の可愛さあ？

憎々しさしか、俺には無いんだが

「ふっ。それでは、姫路さん。続きといこうか」

「望むところですよ、久保君!!」

馬鹿ばっかりだ

やっぱり、Aクラスも同レベルか

「……………雄二」

「何だ、翔子」

全く聞きたくないが

「……………私は雄二の可愛さについて、語りたい」

「黙れ、翔子。壁にでも話してる」

コイツとは、一度きつちりと話し合ってみたいんだが

無理だろうか？

俺はそのまま、翔子を置いてAクラスに向けて歩きだし……………  
歩きだし？

オカシイ、足が進まない

むしろコケタ

足元を見ると、そこには何とも無骨な手錠が嵌められていた  
スカートを着いているから、非常に見にくいだが、

……………やはり、和樹は殺すべきだな

主に俺の精神的平安の為に

……………この近所に良い医者には居ないか？

産婦人科ではなく、精神科の医者だ

いいか、間違えるなよ？

俺が欲しいのは、精神科の腕が良い医者だ

side out

翔子side

現在、壁に向かって雄二の可愛さ？について語り中

「翔子、さつさとAクラスに行くぞ」

雄二、

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった。姫路と久保も一緒に行く」

「構わん。さつさで行って、和樹をシバきたいんだ」

そんなことさせない

和樹には、色々お世話になってるから

その恩は雄二との結婚で、返す

「あん？雄二に翔子は分かるが、何故久保と姫路が居るんだ？」

和樹、丁度良かった

雄二のこの衣装の感想を聞きたい

「・・・・・・・・・・・・・・・・和樹、雄二の格好どう思う？」

「翔子。俺が考えて、俺が作ったんだぞ。似合ってるに決まってるだろう」

有難う、和樹

「雄二、どうした。そんなに殺気だつて？」

「その話は後だ。何故。ムツリーニがお前の背中で寝ているのかを聞きたい」

確かに和樹の背中に土屋が寝ている

ぐったりと

「雄二、俺の今の格好と康太の性癖を考えたら分かるだろう？」  
成程、土屋は和樹のメイド姿を見て鼻血を出して倒れたと  
土屋らしい

「あん？ああ、そういうことか」

「じゃあ、久保と姫路を連れてAクラスに行くぞ」  
分かった

side out

和樹side

雄二が恐いです  
もう一度言います、雄二が恐いです  
で、康太

「しっかりと雄二の花嫁姿を撮っておけよ、後でからかうから」  
「・・・・・・・・・・任せておけ」  
グツと親指を突き出してくる

流石は康太

「・・・・・・・・・・手前等、五体満足で帰れると思うなよ」  
いや、そんな

地獄の底から出てきたような声で脅されても

「で、翔子はいつまで雄二を担いでく気だ？」  
「・・・・・・・・・・鍵を出すのが面倒だから、Aクラスに着い  
てから外す」

雄二って、結構重いはずなんですけどね  
何で肩に担ぎ上げて運べるんでしょう？

さて、何だかんだでAクラスですよ

息を大きく吸い込み、

「新郎、新婦 入場」

「オイッ!？」

聞こえません

扉を開け放つ

結婚行進曲が高らかに鳴り響き

レッドカーペットが扉から一直線に敷かれ

真っ直ぐにこちらを見つめる視線に

祭壇の前に居るのは、アキ 島田

「アイツラが神父の代わりか？」

「さあ、翔子」

「……嬉しい」

「はあっ!？翔子、降ろせ!今直ぐだ!結婚何てしてたまるか!」

当然、翔子は聞く耳持たず

ズンズン進み

ドサツと雄二を落として、祭壇前で停まる

アキは嬉しそうな顔をしながら、聖書をめくり

「神の定めに従って、いのちの限り、かたく節操を守れることを誓いますか」

キリスト式の誓いの言葉ですね

確かこの後

両者が『誓います』と言ったら、成立ですね

「……………誓います」

流石は、翔子

一切の迷いも無いとは

「誓いませギヤアアアアアアアッ!？」

おお、久方ぶりののアイアンクロ

「誓ったと見做します」

いや、まあ誰からも文句何て出ませんがね

「それでは、誓いのキスを」

まあ、そうなりますね

「……………雄二」

「待て待て待て!!! 落ち着け! 翔子!？」

翔子が停まるでしょうか？

全力で逃げようとする雄二

そうはいきませんよ

「優、ヒデ」

「任せなさい」

「了解じゃ」

雄二の両脇から手を伸ばし、両者の腕が雄二の胸の前で交差させる

まあ、知っての通り逮捕術です

「秀吉! 離せ!」

「却下じゃ」

流石はヒデ

「さあ、翔子」

「・・・・・・・・・・・・・・・・雄二」

雄二に近付いていく翔子

ゆっくりと頬に手を這わせて、唇を近付け

・・・・・・・・・・・・・・・・雄二、脅え過ぎでしょう

今にも死ぬんじゃないかっていう位真つ青ですよ

「・・・・・・・・・・・・・・・・雄二、私は今幸せ」

恍惚とした表情の翔子

もう距離も有りませんね

さあ、どうなることやら？

以下の問題に答えなさい

『奈良県奈良市の東大寺大仏殿の北西に位置する、高床の大規模な校倉造倉庫、聖武天皇・光明皇后ゆかりの品をはじめとする、天平時代を中心とした多数の美術工芸品を収蔵していた施設』

姫路瑞樹の答え

『正倉院』

教師のコメント

正解です。ユネスコの世界遺産にも登録されています。

土屋康太の答え

『暗室』

教師のコメント

君の天国の話はしていません。

東野和樹の答え

『実験室』

教師のコメント

君の実験室は東大寺にあるんですか？

吉井明久の答え

『倉庫の名前何て興味がありません』

教師のコメント

誰がそんなことを聞きましたか。

幕間 俺とコスプレと見世物 (完結編1) 突撃 FFF団(前書き)

はい、久しぶりの投稿ですね

最近、とある魔術の禁書目録というのを友人の勧めで読み始めました  
.....面白いですね

カミジヨ さん不幸ですね

アニメ版だとおっさんですね

白井黒子？

美春がいるすげえと思いつながら読みました

幕間 俺とコスプレと見世物 (完結編1) 突撃 FFF団

以下の問題に答えなさい

『マシュー・ペリーが黒船を率いて来航した港は何処でしょう?』

姫路瑞樹の答え

『浦賀』

教師のコメント

正解です。時々、長崎の出島だと勘違いしている人がいますので気をつけましょう。

吉井明久の答え

『江戸城』

教師のコメント

先生は言葉を失いました。

東野和樹の答え

『出島』

教師のコメント

君は何故ここまで堂々と書けるのですか？

島田美波の答え

『東京湾』

教師のコメント

日本には慣れましたか？この答えを見る限りは大丈夫だと言いたい  
のですが

土屋康太の答え

『女子更衣室』

教師のコメント

頼みますから、マトモな回答をして下さい。

「落ち着け、馬鹿共」

鉄人

「つまらん」

「て、鉄人！速く助けてくれ！？」  
本当につまらない

「で、料理は出来たか？」

「完璧だ」

そうかい

「んじやな」

「また、いつかな」

ハイタッチを交わし、本体と身体を合わせ消える

side out

島田side

西村先生

「人の恋路を邪魔する奴は馬に喰われて死んじまえて、言葉がありませんよね」

確か

「島田。それを言うなら、馬に蹴られてだ」

アレ？違うの？

「流石は美波。そういう所がFクラスの証め、腕が？げるように痛い痛い痛い！？」

仕方無いでしょ

未だ、日本語に慣れてないんだから

「大丈夫ですよ、美波ちゃん。これから、頑張っていけば良いんですから」

瑞樹は優しいわね

「そういう馬鹿っぱいお姉さまも美春は「ウチ、頑張って日本語勉強するわ」・・・最後まで、言わせて下さい！」

絶対、嫌よ

「さて、東野くんの用意も出来たようだし、移動しないか？」

久保、アンタも来てたの？

「さて、皆席に着いたか？」

坂本が霧島さんに捕まっただけだ

誰も突っ込まないの？

「和樹君の作った物食べるの久しぶりだね」

工藤さん、どうして水着なの？

ウチにそんな根性はないわ

ま、まさか、工藤さんまでアキを！？  
思わぬライバル出現ね  
ウチは負けないから！

(ゾクツ)

あら、アキが震えてるわ

「時間的にはアフタヌーンティーだね」

「良く分かったな、アキ」

嬉しそうに笑う東野

それにつられて動く猫耳

・・・・・・・・ヤバイ、あの耳欲しい

「和樹、速く食べましょうよ」

「・・・・・・・・・・楽しみ」

土屋、後でアキの写真を買うわ  
ダース単位で

「んじゃあ、頂きます」

『『『頂きます』『』』

side out

?????side

『諸君、満願成就の朝が来た』

『もう昼だぞ』

『感覚的にいえば夜だな』

『朝寝てるもんな、俺たち』

『えーい！少しは話を聞け！！』

『俺たちの目的は何だ！？』

『『『『リア充殺す！！！』』』』

『そつだ！』

『殺ってやろつじゃねえか』

『先ずは吉井・坂本・東野だ』

『（ゴホン）それでは、我らは己らに問う、汝ら何ぞや！！』

『『『『我らは異端審問会 異端審問会の処刑人なり！！』』』』

『ならば異端審問会よ 汝らに問う 汝らの右手に持つ物は何ぞや』

『！！』

『『『『灯油とライターなり』』』』

『ならば異端審問会よ 汝らに問う 汝らの左手に持つ物はなんぞや！！』』

『『『『『鈍器と秀吉の写真なり』』』』』

『ならば異端審問会よ 汝ら何ぞや!!』

『我ら狂人にして狂人にあらず! 暴徒にして暴徒にあらず! 罪人にして罪人にあらず! 罪人』

我ら加害者なり 加害者の群れなり

ただ伏して鉄人の許しを請い ただ伏して我らの敵を打ち倒す者なり

闇夜で灯油をバラ撒き 即座にライターで火を点ける者なり

我ら鬼畜なり 外道の処刑人なり!!

時至らば 我ら鈍器をリア充に投げ込み

秀吉の写真をもって 己の素っ首 吊り下げるなり

さらば我ら 徒党を組んで 地獄へと下り 隊伍を組み

布陣を布き 七百四十万 五千九百二十六の 地獄の悪鬼と

闇討ち所望する なり

美男子を全殺しするまで

side out

高橋side

また、騒ぎが起きましたね

「……………コレを止めるんですか？」

正直、気が進みませんが

「アハハ。流石はFクラスつてとこかな？」

笑い事では有りませんよ、布施先生

血に飢えた暴徒

いえ、二年Fクラスの男子数十名の突撃行為自殺

「さて、ここで食い留めますよ」

「了解です」

『試験召喚』

『布施センに高橋女史……………だど？』  
驚愕したように呟くのは

……………鳥？

「お、チヨ ボだ」

チヨコ？

何です、それは？

「少しは伏字の意味を理解して下さいよ」  
良く意味が分かりません

「ここから先に行きたければ私たちを突破して下さい」  
学園長の命令でしてね

Aクラスには近付けさせる訳にはいかないんです

『邪魔はさせねえ、俺たちは絶対理想郷エデンに行くんだ！！！！』  
『そうだ。その為ならアンタ達を殺してでも通ってやる！』  
へえ？

『『『『試験召喚サモン』』』』』

「随分と面白いことを言ってくれますね」  
「ここで彼我の点数差が表示される」

『学年主任 高橋洋子 VS Fクラス 男子  
総合科目 77913点 VS 40231点』

「さて、どうする君たち？」

「このまま補修室に行きますか？」

『布施センを突破するぞ』

『おうよ。あんなチートに付き合ってもらえるか』

『一、二、三で突っ込むぞ』  
雑な作戦会議ですね

『一……二……三……』

『『『『二』』』』』

「私も一応教師ですからねえ」

布施先生の召喚獣が一つ動いたたびに、一つ、また一つと減っていく  
Fクラスの召喚獣  
さて、残党狩りでもしますか

「補修室か」

「ああ、鉄人の根城だ」

「俺たち生きて帰れるかな？」

「分からねえ」

「せめて、一目だけでも秀吉のコスプレが見たかった」

「俺は和子が」

「俺は優子さんのが見たかったな」

「戦死者は補修！！！」

「チツクツシヨ」

「  
「  
「  
「  
「

Fクラス男子45名 鉄人により補修室に監禁

**幕間 俺とコスプレと見世物 (完結編1) 突撃 FFF団(後書き)**

次、もしくは次の次くらいに終わらせませす

幕間 俺とコスプレと見世物 (完結編2) 学園長だと……? (前書

これにて、コスプレ編終了

次の問いに答えなさい

『以下の四字熟語の？読み方と？意味を書きなさい』  
『妻妾同衾』

姫路瑞樹の答え

『？さいしょうどうきん ？妻と妾が同じ家で暮らすこと』

教師のコメント

正解です。これはちゃんとした諺ではなく造語ですが、良く読めましたね。

土屋康太の答え

『？ハーレム ？男の夢と希望だ』

教師のコメント

プリントが破れる程力を込めないで下さい。

東野和樹の答え

『？エロゲの主人公 ？干乾びて死ぬ』

教師のコメント

そついう直接的な表現は避けましょう。

吉井明久の答え

『？上条さん ？シスターズが一人欲しい』

教師のコメント  
先生も欲しいです。

坂本翔子の答え

『?雄二の浮気現場 ? O S I O K I 』

教師のコメント

霧島さん名字が違いますよ。そして、貴女の答えから何か禍々しいものを感じます。

さて、そろそろ行くとするさね

全くアタシを呼ばない何てあのクソジャリは

え?何を着るのか、だって?

秘密に決まってるさね

楽しみは最後までとって置くものさ

s i d e o u t

明久 s i d e

どうしよう

僕、今凄く幸せなんだけど

だって、僕の眼の前に秀吉がいるんだよ!  
しかも、着物姿で!!

これに萌えず、何に萌えるというんだ！！

「アキ、木下から視線を外しなさい」

美波、そんなに腕を圧迫されると色が変わって、僕の腕が大変なことになると思うんだ

「明久君。木下君をいやらしい眼で見ちゃダメです！」

姫路さん、君まで僕の腕を壊そうというんだね

姫路さんの幸福物質が消えて、美波のように大草原のような感触  
..... 何て不幸何だ

「と、いうか。何で久保君は僕の写真を撮ってるの？」

少しでも話題を変えて、僕の腕の安全を図らないと

「吉井君の素晴らしさを全世界に発信しようと思ってるね」

..... 冗談だよな？

嘘だよな 嘘だと言ってお願いだから！！

そういえば、カメラで思い出した

「ムツツリーニは？」

「ムツツリーニなら、そこじゃ」

そう言っつて秀吉が指さした先に眼を向けて見る

『アキちゃんには、こっちのブレスレッドの方が似合っつて言ってるでしょうっ！！』

『..... 違っつ。こっちのチョーカーを付けてドレスアップさせる』

『そんなんっ！？私がここまで言っつても分からない何て！？』

『..... 玉野はまだ甘い。俺なら女装した明久を、いやアキちゃんを完璧なものにすることが出来る』

『いいえ！私よ！！私がアキちゃんの素晴らしさを全世界に発信するんだから！』

『・・・・・・・・・・・・・・・・いいだろう。かかってこい』

『絶対、負けないんだからね！！！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・よし、僕は何も聞かなかった

「で、和樹は？」

「和樹なら、あそこじゃ」

と、どこか不機嫌そうな秀吉  
指さした先をみってみると

『だっかつらっ！！私にはスーツ以外の選択肢は無いの、って聞いているの！？』

『はっはっは。優、客のリクエストに答えるのがプロってもんだろ  
っ』

『違う！！私はプロじゃない！それと客って誰よ！？私の前に出てきなさい！全間接逆に扱ってやるわ！』

『落ち着け、優。似合ってるからいいじゃないか』

『さっきも聞いたけど、本当にそう思ってるの？』

『当たり前だろう』

何か

「中途半端な馬鹿ツプルって感じかな？」

「先ほどからずっと続けておるわ」  
うっすら殺意が湧いてきた

「さて、次は雄二かな？」

「雄二なら霧島と遊んでおるわ」  
へえ

やっぱり雄二は異端者なんだ  
次はどんな罰を与えてやろうか？

「清水さんは？」

「美春なら、あっちだ」

「和樹、もう終わったの？」

「アキ、そんなに噛み付くな。んで、美春には餌を与えて大人しくさせた」

「餌？」

「そう」

和樹が指さした先には

『お姉さま、お姉さまはずっと美春のものです。誰にも渡しません！アア、オネエサマ オネエサマオネエサマ コノ大海原トミマゴウバストモ、同姓スラ魅了スル眼モ美春ノモノデス！！』

恐いなあ、美波人形を抱き抱えて恍惚とした清水さん  
絶対、近寄りたくない

美波？そんなに力を込めなくても、良いからね？  
それ以上力を込めたら、僕の腕が壊れるだけだからね？  
分かってる？絶対、分かってないでしょ！？

「明久よ。工藤は何処じゃ？」

「へ？工藤さんなら、さつきまでムツツリー二と遊んでたけど」  
そういえば、何処行っただろう？

『えーと、学園長？何してるんです？』  
『ふん。あのクソジャリが私を呼ばないから、自分の来たのさ』  
『和樹君、呼ばなかったんですか？』  
『その通りさね』

何故、ババアの声が？

「いらっしやい、妖怪」

「アンタ、アタシを敬うつもりないんだね？」

「ハッ。ぬらりひよんになって出直してこい」

ババアと和樹の会話は置いていて

「ババア。その格好は何だ？」

雄二、戻ってきたんだ

てつきり、霧島さんに逝かされたかと思ってたよ

「ふん。アタシもコスプレを試してみたのさ」

「コスプレえ？何着たんだ？」

あ、因みに今ババアはコートを羽織ってるので中身が見えません

「ああ、見るがいいさ」

バサアと、コートを翻しその姿を見せる学園妖怪

そして、その下には

『『『グアアアアッ！？』』』

ババアのビキニなんて

誰得だよっ!?!?

良いのか?こんな終わりで、本当に?  
その内足すかもしれない

バカテスト

以下の問いに答えなさい

『アマゾン川を逆流する潮流の名称を答えなさい』

姫路瑞樹の答え

『ポロロツカ』

教師のコメント

正解です。その調子で頑張ってください。

東野和樹の答え

『波乗り』

教師のコメント

珍しく普通の答えですね。因みに、この現象を使った波乗り大会が各地で行われています。

吉井明久の答え

『大海嘯!』

教師のコメント

最終的幻想の海蛇ではありません。

土屋康太の答え

『酔い止めを寄越せ』

教師のコメント

知りません。

53話 肝試し編開幕 俺と補習と鉄人 軽く死ねるぞ、この気温は（前書き）

最近、東方にハマった作者が通りますよ

まあ、紅魔郷編ステージ3をイージで突破出来ない程へボですが

.....取り合えず、門番までは行きたい

53話 肝試し編開幕 俺と補習と鉄人 軽く死ねるぞ、この気温は

第一問

次の単語を英訳しなさい。

『スペイン語』

姫路瑞希の答え

『Spanish』

教師のコメント

基礎英単語の一つですね。たまに頭文字のSが大文字になるのを忘れてしまう人がいます。そのようなケアレスマスには十分に注意しましょう。

土屋康太の答え

『Spainesii』

教師のコメント

“Japanese”と同じような形で“Spainese”とでも書きたかったのでしょうか。残念ながら間違いです。

吉井明久の答え

『Spagetti』

教師のコメント

どう解釈してもスパゲティと書こうとしたようにしか見えません。

須川良の答え

『日本人に英語なんて必要ないんだよ!』

教師のコメント

後で、職員室に来なさい。

東野和樹の答え

『スペイン兄さんよりもドイツに会いたい』

教師のコメント

微妙にネタが古いですよ。

「和樹、今日のお昼はって、居ない？……………あ、そっかFクラスは補修かぁ」

「確か、夏休みの半分は補修で潰れるって、言ってなかったっけ？」

「……………明日、私も行こうかしら」

「取りあえず、和樹が作ってくれたお昼ご飯でも食べよう」

熱い

補習なんてクソくれえだ

だから

（逃げるぞ明久。この地獄から）

（オーケー雄二。僕もそう思っていたところさ）

鉄人の補習から逃げ出すことを決意した

(さて、作戦だが)

(どうするの雄二？捕まってるらビドイよ)

さて、どうするかな

俺と明久だけだと少しキツイか？

(おい、俺たちも一枚噛ませろ)

(絶対に逃げ出すぞ)

(家に早く帰ってゲームしたいんだ)

お前等、流石だな

さて、駒は揃ったな

(雄二、この人数で突っ切るのは？)

(人海戦術か。良いだろう)

全員に合図を送り、機を窺う

今だ！

全員腰を浮かし、明日の栄光をつか

『全員動くなっ！』

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

バカな！？悟られただと・・・・・・・・・・？

「貴様ら…………。脱走とは良い度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

くっ！まさか、気配でも読んだつてののか？  
そろそろ人間の力テゴリから出るべきだぜ、鉄人

「……そうか。お前らがそこまで退屈しているとは気がつかなかった。これはつまらない授業をってしまった俺の落ち度だな」  
？俺は夢でも見ているのか？

鉄人が鉄拳を振るわれないなんて、そんなことがあるはずがない

そうか、これが白昼夢という奴か

「詫びと言ってはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてやろう。

……姫路、島田、木下、東野は耳を塞げ」

和樹だと……？

アイツが参加していない？そんな馬鹿なことがあるわけ……

和樹の方に視線を向けると、死んだ眼で虚空を見上げる和樹がいた  
……余りの暑さに脳が死んだか？

俺はその後のことは意識がない  
ただ、地獄の様に紅い世界が見えた

side out

アキside

えーと

和樹は大丈夫かな？

「和樹、しっかりするのじゃ」

「……答えは得た。大丈夫だヒデ。オレも、これから頑張っていくから」

「……………末期じゃ」  
うん。もう駄目だと思っ

「あの、明久君。何があつたんですか？ 皆さんとても苦しそうですねですけど……………」

「えーっと、なんていうか、言葉の体罰というか、精神攻撃を受けたというか……………」  
聞かないで

僕はあの話を脳内から抹消する予定だから

「まったく、どうせまたくだらないことですよ。脱走なんて考えたんだから、先生だって怒って当然じゃない」  
いや、美波。そうは言ってもね

「そうは言うがな、島田。俺と明久の席は脱走を考えても仕方がないくらい酷いもんだぞ。全身から水分が全てなくなっちまいそうなくらいだ」

雄二の言つとおりだよ

「そうなの？ ウチの席はそこまで暑くないからよくわからないけど」

「私も風が入ってきてくれるので結構大丈夫です」  
羨ましいな

でも、二人は女の子なわけだし

『和樹、いい加減に起きるのじゃ！』

『……………えっ？ そっちの世界は涼しいって？』

『幻聴じゃっ！！和樹、速く帰って来るのじゃ』

『あっはっは。マーボーを抱いて溺死しろ』

大丈夫？  
もう駄目だろうか

突如、轟音が響いた

そちらに眼を向けると和樹が頭を抱えて蹲っていた

一体何が？

『……………ヒデ、どうした？生理痛か？』

『……………良いじゃろう。最近、ストレスも溜まっておったし』

『俺に勝てるんでも？』

『何を言うのじゃ？ワシが勝つに決まっておる』

『本気で言ってるのか？』

『当然じゃろうが？』

『ハッ。教育してやる、本物の中二病の闘いを！！』  
誰だよ、本当に？

最近、秀吉も壊れてきたなあ

「酷いって、どれくらい酷いんですか」

「明久の成績くらいだ」

「人間の耐えられるレベルじゃないわね」

なんてことを言うんだ

「でも、確かにこの席は雄二の性格ぐらい酷いんだよ。さっきだつてペンのアルミ部分に触ったら軽く火傷しちゃったし」  
決して僕がドジだからじゃない

S U B E T  
『教科選択終了』  
サモン

O P P E N  
『開戦』

『試験召喚』

「止めんか、馬鹿共」

「鉄人、邪魔をするな！今日こそ、ヒデに眼に物見せてやる」  
「そうじゃ、西村先生。和樹を極刑に処す邪魔をしないで頂きたい」  
両者睨みあいつつ、間合いを図り  
秀吉の声に呼応して、召喚フィールドに召喚獣が現れる

「何か何時もと違うぞ？」

「あれって猫娘？」

「いや、猫又だろう」

「……………明久、いくらで買った」

「一枚五百円」

「……………売った」

「鉄人？」

「あー、何だ授業を続けるぞ」

「ゴラアツ！こっち向け！！」

「そうじゃ、説明して頂きたい」

鉄人に詰め寄る和樹と秀吉

でも、猫又かあ

秀吉にはびつたりだよな

可愛いし

「どういうことだ？」

「お前らも知つての通り、試験召喚システムは科学技術だけで成り立っているわけではない。幾ばくの偶然やオカルト的な要素も含まれているんだ」

「???? つまり、どういうこと？」

「あ……………。要するに、だな」

「調整に失敗した、と」

「坂本、東野。身も蓋も無い言い方をするな」

「オカルト部分が強く出たようだな」

和樹、秀吉ならもうムツツリーニが写真に収めてくれてるよだから、そんなに凝視しなくても

「そのようだな」

「しかし、何故猫又なのじゃ？」

「秀吉が可愛いから、足の骨が砕けるように痛いいいいいいいいい  
っ!?!?」

「学園長先生の話聞く限りだと、どうやら召喚者の特徴や本質から喚び出される妖怪が決定するようだ」

「やっぱりヒデの特徴は『可愛い』ってことか？」

「っ、ついにワシは召喚システムにまでそんな扱いを……」  
気にしないで秀吉

「面白そうだな」

「ああ。ようは何か化け物が出るってことだ」

「うんじゃあ、僕から」

『試験召喚』  
サモン

僕の呼び声に答え、召喚獣が現れる  
それは

「甲冑姿だと？」

「そんな妖怪いたかな？」

「明久の分際で生意気な」

僕の扱いが段々酷くなってる気がするよ  
雄二が近付き、軽く僕の召喚獣を小突く  
それだけで、僕の召喚獣から首が取れた

……は？

「へ？」 僕

「は？」 雄二

「………？」

ムツリニ

「もう？」 秀吉

「これは面白い」 和樹

53話 肝試し編開幕 俺と補習と鉄人 軽く死ねるぞ、この気温は（後書き）

微妙にネタに走る方が書いてて楽しい今日このごろ

更新は、今月中は無理

来月もきつと無理

だって、実習中ですから

5巻を書かない理由は、玲さんが苦手だから

54話 俺とお化けと脱走 ええゝ またコイツかよ(前書き)

やっと書けた

シルキ が分からないようなら、ググって下さい  
それが、エミヤみたいなものだと思って下さい

54話 俺とお化けと脱走 ええ〜 またコイツかよ

バカテスト

以下の問題に答えなさい

『カール・マリア・フォン・ウェーバーが作曲した全3幕のオペラで、原題は、ドイツの民間伝説に登場する、意のままに命中する弾(Freikugel)を所持する射撃手(Sch?tz)の意である。このオペラのタイトルは?』

姫路瑞希の答え

『魔弾の射手』

教師のコメント

正解です。

東野和樹の答え

『リップヴァーン・ウィンクル中尉』

教師のコメント

君は本当に好きなんですネ。

土屋康太の答え

『5巻のやられ方はもう』

教師のコメント

先生はアニメ版の方が好きです。

坂本雄二の答え

『翔子にも出来そうだった』

教師のコメント

確かに出来そうですね。

吉井明久の答え

『高町 なのは』

教師のコメント

某白い悪魔ではありません。

和樹side

「キヤアアア

ッ!？」

悲鳴は酷いと思う

確かに首が取れたけど

しかし、デュラハンかあ

特徴を表すつてことは

やっぱり、あれですかね

「ん？ ああ、すまん。そんなに強く叩いたつもりはなかったんだが、まさか外れちまうとはな……。待ってる。今ホチキスを持ってくる」

「何言つてんだ雄二？要るのは、はんだごてだろ？」

「二人とも何的外れなこと言ってるの!?せめて接着剤にしてよ!

!はんだごてなんて無茶苦茶熱いじゃないか!？」

なんだかなあ

「ま、明久らしいっちゃあらしい理由だな」

確かに、それでこそアキって感じで

「……流石は明久といったところ」  
見ただけで分かりますからねえ

「え？僕が鎧が似合う良い男だって？」  
誰も言ってますん

「確かに明久君は格好良いです」

勝手に夢見てなさい、姫路

「え？それって、どういうこと姫路さん？」  
さて、あっちは放っておきますか

「和樹の召喚獣はなんだ？」

「……興味深い」

ハイ。康太、カメラを構えない

きつと、本の虫とかそういうものが出るはず

「んじゃま、試験<sup>サモン</sup>召喚」

呼び声に答え、現れたのは

……メイド姿の和子だった

「……俺の特徴って、なんだろうな。雄二？」

「『世話好き』とかじゃないか？」

「……………『甲斐甲斐しい』とか？」

「しかし、なんの妖怪じゃ？メイドの妖怪なぞ、居ったかのう？」

「妖精メイドなら、紅魔館だな」

「……………普通に考えて、ブラウニーの類」

「コリガン・グナナ・シルキー。ぱっと思いつくのはこんなもんか  
どれでも良いんですけどね

「まあ、女性形態なんだから、シルキーかね」

「そうじゃな」

康太、後でカメラ没収な

「で、僕の特徴は『男らしい』ってことで良い？」

「何を言ってるんだ、明久？」

「……………寝言は寝てから言つもの」

「ヒデ、現実を教えてやれ」

「明久の特徴は『頭がない』バカ』じゃな」

「言つたあー！ 僕が必死に目を逸らしていた事実を秀吉が包み隠  
さず言つたあー！」

いいじゃん。別に今更って感じで

「さて、他の面子の召喚獣も見てみようか？」

「さつきからなんか面白そうなことやってるな」

「これ召喚獣か？ 特徴や本質がどうか言つてなかったか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか」

いや、ぶつちゃけると君達のもそう変わらないと思っぞ

「まあ、呼んでみるよ」

「ふっ。東野、俺たちが吉井より酷いものを呼ぶはずがないだろう？」

そうかなあ？

「ああ、何と言っても吉井はバカの日本一だからな」

「ちよつと待とうか、皆」

「俺の本質はなんといつてもジエントルマンだからな。酷い召喚獣なんかが出てくるわけがない。いいか、見てるよー」

「」「試獣召喚っ！！」「」

……ズズズズズ      ゾンビ登場

……ズズズズズ      ゾンビ登場

……ズズズズズ      ゾンビ登場

……何というカオスだろう  
まあ、性根が腐っていると

そつだよなあ、腐ってるよなあ

「で、次は康太か？」

「……………試験サモン召喚」

康太の召喚獣は、顔色の悪いタキシード姿の少年だった  
これって

「吸血鬼か？」

「成程、ムツツリーニらしいな」

いつも血が足りなくて、女の子が好き

「島田か姫路も呼んでみるよ」

「あ、じゃあ。私が呼んでみます」

姫路の召喚獣かあ

どんなのだろっな？

「試験サモン召喚」

サキユバス？

「また、変わったものを」

「姫路の特徴はなんじゃ？」

「……………明久……………っ！ 倒れている場合か……………っ！」

「無駄な根性は見せんでいい」

「ムツツリーニ、僕はレンズが血まみれで写らないと思うんだ」

「……………無駄なことなんて無いっ！！」

そうですか

まあ、アホやっている間に姫路が召喚フィールドから出たんで消えましたが

「さて、姫路の特徴はなんだと思う？」

「胸がデカいってことだろ？」

「うわあああんっ！」

雄二、もう少しオブラートに包みましょうよ

可哀そうですね、彼女が気にしていることなんですから

「外見の特徴はおいておくとして、あと他に考えられる特徴としては『大胆』ってところか？ なにせサキユバスだからな」

「大胆、ですか？」

「そう言えば以前、学園祭の打ち上げでも明久を押し倒しておったな」

「ち、違いますっ。あ、あれはその、思いあまってというか、勢いというか、とにかくその……」

さて、姫路に幸有らんこと祈りましょうか

「んじゃあ、島田。行ってみよう」

わー、ぽきぽき

………何の音？

アキ、何言っただの？

「うちなら何の心配もないから大丈夫よ。きっとそういうエッチなのじゃなくて、妖精とか女神とか戦乙女とか、そういった可愛いのが出てくるはずだから見てなさいー試獣<sup>サモシ</sup>召喚っ！」

ゴゴゴゴゴ…… むりかべ登場

わあい、この空気どうしよう

「……ねえ、アキ」

「な、なになかな美波」

「この召喚獣、ウチに何を言いたいのかしらね？」

「な、なんだろうね？」

アキが仲間になりたそうに此方を見ている

仲間になりますか？

はい

いいえ

「ガンガンいこうぜ、で」

「ねえっ！？助けてよ、お願いだから！！」

「アキ、ちよつといらっしゃい」

ゲームオーバー？

「最後は雄二の召喚獣か」

「ワシらと違って雄二の性格は攻撃的じゃからな。戦闘向きの妖怪

が出るやもしれんのう」

「……鬼かなにか？」

康太が雄二をどう思っているか分かりました

「そんじゃいくぞ。……試サモン獣召喚っ！」

現れた雄二の召喚獣は、なんと上半身は裸で、下にズボンを穿いているだけだった

「お前の召喚獣はなんだ？」

「分からん」

「雄二の特徴はなんなんじゃろうな？」

「……面白くない」

「これは最近日本で確認された新種の妖怪『坂本雄二』に決まっているじゃないか。醜い容姿と汚い性格で美人の幼馴染を騙すって話のアキ、折角復活したのになんてことをいうんだ

「明久、召喚獣の頭を寄越せ」

「ん？別にいいけど」

「目指せワールドカップ！（ガコッ）」

「ストライク」

見事、ゴミ箱に蹴り込まれました

「で、狼男か」

「特徴が『たてがみ』か」

「……売れる？」

翔子あたりに売ってきなさい  
特徴ねえ？

「で、鉄人？いつ直るんだ？」

妖怪大戦争も面白そうですけどね

「召喚システムの調整については俺もよくわからん。学園長なら何か知っているかもしれないがな」

「確かにその辺は鉄人よりもババアに聞いた方が良さそうだな」

「なんだって召喚システムの設計者で開発者様だしな」

「そうだね。学園長に聞いてみようか」

雄二と明久と三人で立ち上がり、学園長室を目指して歩き出す

面白そうなんだけどなあ

優は何が出るんだろ？

『キサマらっ！ ドサクサに紛れて脱走か！』

「ちっ！勘の良い！」

「どうする雄二？」

「走れ二人とも！ 学園長室に逃げ込めばこっちのもんだ！」

「了解っ！」「」

学園長室を襲撃しよう

・・・・・・・・・・・・・・・・8回目くらい？

54話 俺とお化けと脱走 ええゝ またコイツかよ(後書き)

さあ、実習逝ってみよう

55話 俺とババアと肝試し さあて、新しい祭りの始まりだ(前書き)

実習終わった!

でも、追試になった

55話 俺とババアと肝試し さあて、新しい祭りの始まりだ

バカテスト

以下の問題に答えなさい

『日本三名園を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『兼六園、後楽園、偕楽園』

教師のコメント

正解です。それぞれ金沢市 岡山市 水戸市にあります。

吉井明久の答え

『魏、呉、蜀』

教師のコメント

数が合ったと喜ぶべきか、答えが見当はずれで悲しむべきか、悩みどころです。

土屋康太の答え

『後楽園は覚えている』

教師のコメント

一つでも覚えていたことに喜ぶとします。

東野和樹の答え

『ゴドリック・グリフィンドール ヘルガ・ハツフルパフ ロウエ  
ナ・レイブンクロー サラザール・スリザリン』

教師のコメント

誰が、某魔法使いの物語の創設者を答えなさいと言いました。

「んで、どうなんだ学えーババア」

「教えて下さい、学えーババア」

「答えろ、学えーババア」

「……どうしてアンタたちはアタシを素直に学園長と呼べないのかねえ……」

現在俺たちはババアに真相を聞くべく、学園長室までやってきます

久しぶりに来たら、また物が増えてますねえ  
ゴミばかりですが

「すみません。学園長」

「はンツ。今更言い直しても教えてやるもんかい。このクソガキどもが」

「そんな！？ 酷いですよババア長！」

「その呼び方は今までで一番酷いさね！？」  
「そうかねえ」

「おい明久。巷で若いと評判の学園長（笑）にあまり失礼な発言をするな」

「そうだぞ、肌の水気が欠片も無い薪の様な学園長に失礼だ」

「アンタたちも充分失礼だよクソジャリども  
あれ、何か間違えましたか？」

「んで、ババア。正直なところどうなんだ。きちんと復旧するのか？」

「はあ？ 復旧？ 何を言っているんだいボウズども。それだとまるで召喚システムに欠陥があるみたいじゃないか」  
「可哀そうにもうボケたか  
年だもんなあ」

「アレが欠陥じゃないなら、一体何なんですか？」

「アレはちょっとした遊び心さ」

「遊び心？」

「一体どういふことですか？」

「今は夏だからねえ。肝試しにはもってこいの季節だろう？」  
成程ねえ

まあ、直す気がないなら楽しめるように持っていきましょつか

「さて、雄二？これは楽しめそうだな」

「ああ。折角、学園長が面白そうなことをやってくれたんだ。精々、楽しませてもらおうか」

「どういうこと？」

アキ、分からないんですね

「つまり、試験的なシステムとして運営している以上、学園側は召喚システムの調整を失敗したとは言いたくないってことだ。隠し切れるならそれで良かったんだが、生徒にバレた以上はそうもいかない」

「だから肝試しをやることで『元から計画していた出来事』にするってわけだ」

「ああ、なるほど。そういうことが」

アキも納得した様です

「じゃあ、そういうことで残り二日の補習期間は肝試しってことでいいんだよね？」

雄二、まさかそれを狙って来たわけじゃありませんよね？

まあ、雄二の考える遊びは楽しいんですけど

「いや、ただの肝試しなら却下さね。あくまでも召喚獣は学習意欲向上の為のツールだからね。見た目だけで楽しむのは授業の一環とは認めないよ」

そこは譲って下さい

さて、肝試しするならおどかす方に行きたいですねえ

「それならチェックポイントでも作って、そこで勝負でもさせるか。」

それなら文句はないだろ？」

「そうさねえ……。ルール次第だけど、それなら認めてもいいかも  
しれないね」

「よし。決まりだな」

相手は、誰になるかな

A・B・Cクラス辺りとD・E・Fクラスでやっても面白そうです  
けど

3年生は嫌だなあ、何かまたかよって感じで  
後で雄二と相談しましょう

55話 俺とババアと肝試し さあて、新しい祭りの始まりだ（後書き）

チーム分けどうしょ

A・D・F vs B・C・Eかなあ

戦力差があり過ぎるなあ

ま、いつか

原作通り進めても面白そう？

最近、友人に感想聞いたんですよ

それとなくですけど

そしたら『あー、バカテストは面白いよ』って

………ダメージでけえ

56話 俺と補習と襲撃 久しぶり、そしてさようなら(前書き)

今日は、お知らせがあります

先ず、紅魔郷のイージークリアしました  
PAD長で、コンテしまくったけど

で、弟にノーマルクリアされました

.....俺、本当にSTG向いてないなあ

56話 俺と補習と襲撃 久しぶり、そしてさようなら

バカテスト

以下の問題に答えなさい

『富士五湖を全て答えなさい』

姫路瑞希の答え

『本栖湖 精進湖 西湖 河口湖 山中湖』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『琵琶湖』

教師のコメント

それは滋賀県の湖です。知っていますか、琵琶湖は滋賀県の総面積の10分の1しかないんですよ。

土屋康太の答え

『洞爺湖』

教師のコメント

取り合えず、5つ出して下さい。

坂本雄二の答え

『5つも出る訳無いだろ』

教師のコメント

後で、職員室まで来なさい。

東野和樹の答え

『富士五湖って、地味じゃね?』

教師のコメント

問題に答えようという意思を見せて下さい。

「雄二、ルールとしてはこんなもんか?」

「ああ。後は各教科だが、これはいつでも決められるからいいだろ」  
さて、皆頑張って準備中です  
サボってませんからね

雄二と暇潰しにルール決めただけですから

しかし、

「Aクラスも暇なんだな?」

翔子がいつのまにか雄二の隣にいる

「……………雄二と一緒に居たいだけ」

おおっと、惚気が入りましたよ

「よし、翔子。お前が手に持っているものをゆっくりと離せ」  
警戒してもしたりない  
むしろ、全然足りない

彼女は、本当に雄二が好きなんだなあ

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫、何もしない」

「本当だろうか？」

ジリジリと後退していく雄二とそれを追う翔子

まあ、あつちは放っておくとして

「美春とゾンビとサッカーと」

「何そのカオス？」

お、優か

「今の状況説明を一言で」

「嫉妬と怨嗟と欲望と」

上手いのかねえ

まあいいや

久保は本当にダメだなあ

最初のカリスマを何処へやった

「さて、あの騒ぎを誰が止めるんだ？」

ゾンビサッカーっていうゲームがあったような、なかったような

「え？和樹じゃないの？」

そんな無駄なことはしたくない

多分、止まらないから

『少しは真面目にやれよ、お前等！？』

「おや？」

「根本、珍しいな」

「根本君、生きてたのね？」

「酷っ!？」

side out

アキside

「えーっと、根本君？居たの？」

「居たよ！割と最初から！」

「ゴメン。本当に気付かなかった」

「お前は自分の担当分を終わらせたのか？  
そっういえばそっうだね」

「確かBクラスの担当分は、材料調達と書くクラスへの配達だったよ  
うな？」

「ハッ。僕がそんな面倒なことやる筈がないだろ」

「コイツ、本当に駄目だな」

「で、何か用か根本？」

「雄二、今止めるできなのは僕の隣で殺気を撒き散らしている清水さ  
んだと思っんだ」

「美春もこのブタ野郎は気に入りません！」

「……………僕、本当に嫌われてるなあ」

「おお、話が分かるじゃないか。清水さん」

「美春に話かけないで下さい女装マニア！変態が移りますっ!」  
清水さんも充分変態だと思っけど」

そういえば、和樹が根本君の女装写真集第二段『本当の俺を見る！』を作ってたなあ  
売れるんだらうか？

「お前等、少し落ち着け」

手を叩きながら、注目を集めるように前に出る和樹

「和樹、お前から言ってくれ」

「何を？」

首を傾げながら、雄二の方に顔を向ける和樹

「文句があるなら、この肝試しで決着をつけろと」

どうということ雄二

「成程、確かにまだチーム分けをしていなかったな」

軽く頷き、根本君の方に向き直る和樹

「今回の補習期間の残り二日を肝試しに使うのは話したな」

「ああ、確かに聞いたな」

頷く根本君

僕も聞いたけど、どういうこと？

「さて、肝試しには大きく分けて二つのグループが存在する。美春、根本。分かるか？」

二つのグループ？

「普通に考えれば、驚かす側と驚かされる側ですか？」

少し考えながら、和樹に確認をとる清水さん

「正解だ、美春」

嬉しそうに笑う和樹

「さて、根本。お前はどちらがいい？」

「それなら、俺は驚かす側がいいな」

うん。僕も驚かす側がいい

「奇遇だな。俺もそっちがいい」

何で聞いたの？

「もう、面倒だからじゃんけんにしなないか？」

「恨みつこなしだな」

『じゃんけん……ポン！』

和樹………グー

根本君………パー

「………負けた」

「よし。和樹、こつちこい」

凹んでいる和樹と満面の笑みをたたえた雄二

雄二の眼が笑ってないのは、気にしない方向でいこう  
恐いから

「ああ、それと負けた方が、この祭りの後始末をするからな」

「分かった。それじゃあ、俺はそろそろクラスに帰らせてもらおうよ」

根本君が嬉しそうに去っていく

『東野を殴るなら、混ぜろ!』

『待て、俺も殴る!』

「で、清水さんはどっちに入る？」

「当然、お姉さまがいる方ですわ」

まあ、そうだろうね

後は、霧島さんや各クラスの代表に聞かないといけないなあ

「フツ。明久、その心配は無用だ」

「あ、雄二。和樹の処刑は終わったの？」

「ああ、俺の分はな」

俺の分？

『東野、木下とイチヤイチャしやがってっ!』

いや、別に今日はしてないと思うけど

どっちかというと清水さんとじゃないかなあ？

「で、坂本君？私達はどっちにつけばいいの？」

あれ、木下さん

「Aクラスには、B・Eクラスと合同で行ってもらいたい」

「……分かった」

霧島さん、何となく楽しそう？

「残ったC・Dクラスは俺達Fクラスと行く」

「分かりました」

「楽しくなるといいなあ」

そういえば、Dクラスの代表って平賀君だったね

「代表に伝えてきます」

多分、Cクラスの人だろう

教室を後にしながら、言ってきた

「よし。野郎共、あいつらに眼に物見せるぞ！」

『『『オオオオオオツ』』』

『!』』』』

戦力差が凄い気がするけど

雄二のことだから、勝つために何か考えてるんだろうなあ

56話 俺と補習と襲撃 久しぶり、そしてさようなら（後書き）

原作、9巻買ったよ

後、遅れましたが、このCDF VS ABE のアイデアは我鬼  
さんからのアイデアです。  
有難う御座います

57話 俺とお化けと最初の犠牲者 くそつたれが、どう書けばいいか、わか

最近、ディシディアの新作買いました。

57話 俺とお化けと最初の犠牲者 くそつたれが、どう書けばいいか、わか

バカテスト

以下の問題に答えなさい

次の( ) に正しい単語を入れなさい。  
ロシアの作家ドストエフスキーは著者『(?)の兄弟』や『(?)と罰』の中で、信仰心を失った近代人の虚無主義的な姿を描いた。

姫路瑞希の答え

『? (カラマーゾフ)の兄弟  
? (罪)と罰』

教師のコメント

正解です。この二作品と『白痴』、『悪霊』、『未成年』はドストエフスキー五大長編と呼ばれる名作ですので、興味があればそちらを読んでみるのも良いでしょう。

土屋康太の答え

『? (マーゾ)の兄弟』

教師のコメント

なんてところをピンポイントで覚えているんですか。

吉井明久の答え

『? (ムチ)と罰』

教師のコメント  
マーズの兄弟大喜び。

東野和樹の答え

『？白痴は読んだ

？（アメ）と罰（×）鞭』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒の解答を見てきましたが、答えを書き換えた生徒は君が初めてです。

霧島翔子の答え

『？（私は雄二との子どもは最低でも5人）の男兄弟が欲しい

？（雄二）と罰』

教師のコメント

今度は何をしたんですか？後、問題文に付け加えて書かないで下さい。

「うわぁ・・・・・・・・・・。なんか、無駄な出費・・・・・・・・。」

「学園側の努力を一言で切り捨ておつたな!？」

翌日、文月学園新校舎の2Fは、完全にお化け屋敷と化していた

「ああ。それだけ、Bクラスも本気ってことだろ」

おや、雄二

「それに補講をサボるんだ。本気でやってもらわないと、こっちも楽しめないしな」

雄二君が非常に楽しそうです

「全く、根本君も霧島さんも真面目だよな」

それだけ怨みがあるんでしょうね、根本は売り上げの5分は渡してるのに何の不満があるんでしょう？

まあ、翔子は雄二と組めなかった腹いせってところですか

Eクラス代表は、初顔合わせになりますか  
どんな人なのか興味がありますね

「集合は旧校舎、Fクラスと隣の空き教室」

「C・Dクラスもいるからな。入りきらん」

「余り恐くないといいんですが……………」

「う、ウチはアキを盾にするから、少しくらい……………」  
もう少し素直になれたら、落ちるかも？  
落ちないかなあ

「さて。そろそろ突入順とかも決めなきゃならんし、くっちやべってないで集合場所に急ぐぞ」

ゾロゾロと教室に入るCDFクラスの面々

教室に入って、先ず眼に飛び込んできたのは

……………Aクラスのディスプレイ

「Aクラスのディスプレイをどうやって持ち込んだ？」

「……………俺は妥協しない！」

何て無駄な男らしさ

「まあ、夏の風物詩を楽しもうぜ」

罰ゲームが軽いから？

「雄二が負けた場合、翔子と結婚するんだな」

分かります

「ああ、成程。応援してるよ霧島さん」

「頑張つて下さい、霧島さん！」

「ウチ等は霧島さんの味方だからね！！」

さっきまで泣きそうだったのにねえ

「……………撮影は任せろ」

カメラって、懐に隠せるサイズじゃないと思うんです

「……………本気で行くぞ！」

適当に手を抜きましようよ

肝試しの始まり 始まり

《ね、ねえ……………あの角、怪しくない？》

《そ、そうだな……………。何か出てきそうだよな……………》

最初に向かうのは、Eクラス、次はBクラスんで、最後はAクラス

え、進みにくい？

作者の都合です

《そ、それじゃ、俺が先に行くから》

《うん……》

何というか

こう

「イライラする？」

「分かる。他人にイチャイチャされると殺したくなるな」

「……………制裁」

『呼んだか！！』

呼んでない 呼んでない

「み、美波ちゃん……。あの陰、何かいるように見えませんか？」

「きき気のせいよ瑞希。何も映ってないわ」

二人は画面に釘付けです

恐いなら見なけりゃいいのに

《行くぞ……っ！》

《うん……っ！》

そーいや、ペア決めてない  
まあ、いいか  
適当で

カメラが曲がり角の向こう側を映し出す。そこには何かいるのか・  
・・・?

予想される恐怖に身構えながら見ていると、カメラはその先に続く  
ただの道を映り出しただけだった

・・・・・・・・詰まらん

《ぎゃあああーっ!?!?!?》

「ぎゃあああーっ!?!?!」

カメラの向こうから大きな悲鳴が響き、それを聞いた姫路と島田が  
同時に悲鳴を上げていた

「……………失格」

康太、良くこんなものまで用意したな  
結構高そうなんだが

姫路や島田が悲鳴を上げ、男子のテンションが鰻登りです

「なあ、雄二？」

「どうした和樹？」

「何で最初にC・Dクラスの奴を使うんだ？一応、あいつ等の方が点数は上だろ？」

普通、Fクラスからだと思うんです

「そりゃ、男女ペアの方が華があるからだ」

成程

そりゃあ、Fクラスには無理だわ

「まあ、そうも言ってもらえそうにないな。最初の曲がり角で4組も脱落されちゃ話にもなりやしねえ」

まあ、分かったのは首が出てくる位ですし

「んじゃ、こつちも手を打つか。皆！ 順番変更だ！ Fクラスの須川&福村ペアと、同じくFクラスの朝倉&有働ペアを先行させてくれ！」

さて、どうなりますかね？

雄二がその場に座ったまま声をあげる。しばらくするとカメラのモニター二つにそれぞれFクラスの見慣れた顔が映った

《行ってくるぜー》

《カメラは俺が持つぞ》

まずは須川と福村が歩を進めていく。度胸があるのか、何も考えていないのか……

《お、あそこだったか？ 何かが出るって場所》

《だな》

先発隊がことごとく全滅した曲がり角を曲がり、何気なく横の壁を映すと、

「「きゃあああああーっ！」「」

そこには血みどろの生首が浮いていた

さらにその横には口裂け女がいた

……女ばっかだなあ

「「きゃあああああっ！ きゃあああああーっ！」「」

姫路や島田だけでなく、他の人たちも悲鳴をあげている。けど、

《おっ。この人、少し口は大きいけど美人じゃないか？》

《いやいや。こっちの方が美人だろ。首から下が無いからスタイルはわからないけど、血を洗い流したら綺麗なはずだ》

当の本人たちはどこ吹く風といった感じでした

流石はFクラス

これくらいでは、失格になりませんか

「な、なんでアイツらあんなに平気そうなのよ!? アキたちも！怖くないの!? あんなにリアルなお化けなのよ!?」

そんなことを言われましても……

「別に命の危険があるわけじゃないからね」

「グロいものはFクラスで散々見ているしな」

「……………あの程度、殺されかけている明久に比べれば大したことはない」

「優の関節技に比べれば可愛いもんだろうに」

「ワシも同感じゃ」

島田も姫路もスプラッタは大丈夫なんでしょうか？

スプラッタが大丈夫なら、ホラーもいける気がするんですが違うんでしょうねえ

まあ、今更流血程度で驚くような俺たちではありませんし

《それにしても暗いな……。何かに躓いて転びそうだ》

《ああ。それなら丁度良い。あそこにある明かりを借りて行こうぜ》

二人は装飾品として飾られている提灯を借りようとそれに近づいた

ーボンッ

「きゃああああっ！」

突然提灯に小さな手足と鬼のような顔が現れた。あれは提灯お化けか。セツトの中に召喚獣を紛れ込ませるとは、うまい演出です

誰が考えたんでしょうねえ？

根本なら、もっとネチネチした感じだと思ったんですが

《お？ これ掴めないぞ？》

《召喚獣ならつかめるだろ。試獣召喚っ》

うまい演出もむなしく、福村君は喚びだしたゾンビに提灯お化けを持たせて更に進み始めた

何か、シユール？

「何か普通にチェックポイントまで、行きそうだな」

「ああ。頼むから馬鹿なことで失格にならないでくれよ」  
フラグですね。分かりますよ

《あー、畜生。なんでこの俺が須川なんかと……！》

《お前がモテないから悪いんだろ》  
人のこと言えないねえ

コイツラ、本当にモテナイもんなあ  
まあ、他人の恋路の邪魔ばかりしてんだから、当然ちゃあ当然なん  
ですが

《何だと須川……？　そういえばお前、最近女子に声をかけてない  
な。まさか彼女でもできたのか？》

《ち、違う！　まだそんな関係じゃない！》

《キサマ！　女性と知り合ったことを認めたな！　後で異端審問会  
にかけてやる！》  
流石はFクラス

「……………失格」

「アイツらは何をやってるんだ……………」

失格になる理由がビビったとかじゃないのが、本当にそれっばい

「けど、須川君たちのおかげで相手の仕掛けがわかったね」

「だな。朝倉たちもいることだし、チェックポイントまで行くのも時間の問題だろ」

まあ、尊い犠牲？

おい、チェックポイント到着

《《《——試獣召喚っ》》》

布施先生の許可の下、それぞれの召喚獣が喚び出されて、その点数が表示された

さてさて、EクラスはFと大して点数差は無い筈だが、どうなるかねえ？

『Fクラス 朝倉正弘 & Fクラス 有働住吉

化学

59点 & 111点』

《《《びやああああっ！》》》

弱っ！

「相手Eクラスじゃないのか？」

「どつやら、そのようだな」

相手の点数が分からないなあ

「さて、次は誰が行く？」

雄二の発言に対し、皆視線を明後日の方に流してしまう  
うーむ

「俺と、ヒデで行くとか？」

「アホ。お前が行ったら、Aクラス攻略出来ねえじゃねあか」

「それじゃ、どうするの雄二？」

「少し早いが仕方ない。平賀を使う」

「俺ッ！？」

ええ。俺も驚きましたよ

「何でだよ、坂本！？」

「良いから、誰でも一人見繕って行ってこい」

まあ、Dクラス代表なら、点数の削りくらい出来るかも？

「やっぱりFクラスとは相性悪いのかなあ？」

寂しそうに平賀君は呟き、男子生徒を一人捕まえて去って行きました

57話 俺とお化けと最初の犠牲者 くそつたれが、どう書けばいいか、わか

タイトルが段々、暴露話みたいになってきた

今回は、本当に分からない

一応、ラストは考えているんでそこには持って行きたい

58話 平賀と俺と肝試し 平賀君、頑張る(前書き)

平賀君は頑張った

書いてたのを読み直したら、平賀君が余りにも壊れてたので修正  
具体的にいうと平賀無双

まあ、熱いつちやあ熱いかな

58話 平賀と俺と肝試し 平賀君、頑張る

バカテスト

以下の熟語の読み方を答えなさい

『自惚れ』

姫路瑞樹の答え

『うぬぼれ』

教師のコメント

正解です。今回は少し簡単でしたか？

坂本雄二の答え

『ナルシスト』

教師のコメント

まあ、言いたいことは分かります。

土屋康太の答え

『某最終的幻想第七作目のストーリーカー』

教師のコメント

彼は中二病でストーリーカーです。

東野和樹の答え

『トキ聖闘士星矢の蜥蜴座』

教師のコメント

危うく丸しそうになりました。

- - - - -

平賀 源一 side

「なんで俺がこんな目に」

今回の騒動の原因は、FとBじゃないか  
俺たちは無関係だぞ

「まあ、そういうなよ。代表」  
しかしなあ

「面白いじゃないか。肝試しなんてよ」  
俺は苦手だ

「と、ここがチェックポイントか」  
何事もなく到着したな

もっと何か妨害的なものがあると思ったんだが

まあ確かに何かがあるか画面で知ってるのは大きいよな  
それだけ、身構える時間があるわけだし

「ああ。俺たちを倒せば、Eクラスは突破だ。気張れよ」  
こいつらは確かBクラスの  
少し、いやかなり厳しいか

『試験召喚』  
相手が召喚獣を呼ぶ

ああ、もう東野か坂本が出ればいいんだ

こんなのは  
『試験召喚』

こちらに出てきたのは、一般に幽霊と呼ばれる者と着流しを着て狸の耳が生えた召喚獣だった  
全く萌えねえ

「幽霊？代表の特徴って、『存在感が薄い』とかか？」

「俺が知るかよ。それよりお前の召喚獣はなんだ？」

「さあ？着流し着てんだから、日本の妖怪だろ」

「さあ、かかって来いよ。Dクラス」

あっちのは、ミイラ男に一つ目の鬼

何か強そうだな

「さて、代表はどっちの相手をしたい？」  
なんでお前はそんなにやる気なんだよ！？

「ミイラ男かな」

鬼とか普通に怖いし

「よっしゃ！鬼さんこちらだな」

「ハッ！ボコボコにしてやるぜ」

真っ直ぐ突っ込んで来るミイラ男

それに対して、俺の幽霊（なんか嫌だ）が迎え撃つ

「死ねやあ！」

ミイラ男のパンチを屈んで躲し、胴体に頭突きを食らわせる  
頭突きを食らい、吹っ飛ぶミイラ男

彼の特徴は『怪我が多い』とかか？

「お、代表やるな」

声が出たので、そちらを見ると

………鬼をボコボコにする狸が見えた

本当に何の妖怪なんだ？

「まあな。吉井と東野程では無いが」

一応、何度か戦闘しているからな

「おい、こいつら意外にヤルぞ？」

「大丈夫だ。こっちの方が点数は高いんだ。一撃当たれば、勝てる」  
分かりやすいが

「当てれるかな？」

「Bクラスの面子があるからな、最低でも、Fクラスの主要メンバ  
ーの一人くらいは潰さないとな」

東野か姫路が来たら秒殺だろうに

「こっちにもDクラス代表っていう面子があるんだ。いかに存在感  
が薄かるうと突破させてもら……う……」

泣くものか  
泣いてたまるか！

「代表、自分で言っただメージ受けるなよな」

「う、煩い！」

side out

東野 和樹 side

「康太、今の声はセーフか？」

「……………セーフ」

折角いい勝負なんだから、下らないことで終わらないで下さいよ

「和樹、あの狸は何の妖怪かな？」

「多分、風狸ふうりじゃないか？」

「ふうり？」

「夜、飛び回って、叩くと死んでしまうという良く分からん妖怪でな。風が吹くと復活するという」

「……………頭が砕けると本当に死んでしまうという伝承がある」

俺も俺だけど、康太も良くこんな地味な妖怪知ってましたね

side out

平賀 源一 side

「さっさと終わらせるぞ」

「ああ」

鬼とミイラ男が、突撃してきた

「それはこっちの台詞だ」

狸耳が足払いをかけて、俺の幽霊が首を絞める

「………なんか夢に出そうだな」

「代表、考えないようにしてんだから言つなよ」  
「だつてなあ」

「DクラスはDクラスらしくコソコソしてな！」  
鬼に吹き飛ばされる幽霊

「BクラスはBクラスらしくネチネチやってな」

「違うぞ！ネチネチやってんのは、根本だけだ！」  
根本、本当に人望ないなあ  
人のこと言えないか

「Bクラスだろうが、Aクラスだろうが関係ない。俺はここを突破して先に進む」

そして

「俺の存在を少しでも濃くしてやる!」

『平賀、アウト』

へ？

「代表、やってくれたな」

「……嘘……だろ？」

嘘だと言ってくれ!

『平賀、すまないがルールだ。ここは後の者に任せて引いてくれ』

『平賀、お前のお蔭でかなり点数を削れた。お前は十分役にたった、今はもう休め』

「くそ……くそ……俺は、なんで……」

「<sup>おろく</sup>地面に頽れ、涙を流す

side out

坂本雄二side

「なんか、平賀のキャラ違くない？」

「誰にでも意地になる時があるってことだろ」

「まあ、いつか。次誰が行く？」

清水が猛烈な勢いで手を挙げた

おお、和樹が欠片も視線を向けない

「えー。誰か、この際Fクラスでも構わんぞ」

その言葉を聞いても誰も手を挙げず、清水は和樹の周りを跳ね始めた

「和樹！美春に、美春にその役目をお姉さまと一緒に是非！」

あ、和樹が耳塞ぎやがった

「あー、本当に美春以外いないのか？」

「美春がいるでしょう！さあ、和樹。美春にBクラスの生ゴミ共の処理を任せて下さい」

「誰が抹殺指令を出すか！」

清水に向き直り、チョップをかます和樹

さあ、和樹。そろそろ気付け、Fクラスがお前を狙っていることを

「うー。では、木下と一緒に行ってきます。それなら、構わないでしょう？」

秀吉の腕を取り、立ち上がらせて出口に向かう清水

まあ、あの二人ならいいか

「構うわ！姫路か島田捕まえて行ってこい。………物理攻撃は禁止だからな？」

秀吉を後ろから確保した和樹が島田を見詰める

「ちよっと！ウチはアキと行くの！」

………段々、面倒になってきたな

「秀吉、清水と行ってこい。それと、和樹とムツツリ 一二で組め」

「分かったのじゃ。それでは、行くとしようかの。清水よ」

「ええ。B・Eクラス如き殲滅して差し上げます」  
ルールは守れ  
一応、あるんだから

58話 平賀と俺と肝試し 平賀君、頑張る(後書き)

最近、やったこと

通販でゆっくり霊夢を購入

それを友人宅(社宅)に送る

もうそろそろ届くはず

59話 美春とヒデと肝試し Bクラス、可愛そう(前書き)

さて、ほぼ一か月振りの投稿ですね  
次の投稿は6月ですよ

実習行ってきますんで

最近やったこと

紅魔卿のノーマル咲夜をボム連打で倒したこと

ニコニコ動画を見れるように設定したこと

実習日誌メンドイ

59話 美春とヒデと肝試し Bクラス、可愛そう

バカテスト

以下の問題に答えなさい。

『生物学用語では種内捕食全般を指す。、人間が人間の肉を食べる行動、あるいは宗教儀礼としてのそのような習慣をいう。この言葉は？』

東野和樹の答え

『カニバリズム』

教師のコメント

正解です。実際にはしないで下さいね。

坂本雄二の答え

『共食い』

教師のコメント

こちらにも正解です。

吉井明久の答え

『姫路さんとか、霧島さんがやりそう』

教師のコメント

否定しきれないのが、先生は悲しいです。

霧島翔子の答え

『雄二のためなら、いくらでも』

教師のコメント

君は本当に色々行き過ぎていると感じます。

姫路瑞樹の答え

『確かに好きな人には自分を味わって欲しいです』

教師のコメント

先生には分かりかねます。

島田美波の答え

『内臓の一部くらいなら』

教師のコメント

病んでますねえ。

須川 亮の答え

『俺は薔薇は嫌いだ』

教師のコメント

成程、そうきましたか。

「なあ、雄二？」

美春とヒデは無言で進む

どっちか喋りましょうよ

見ている方には非常に優しいんですから

「なんだ？」

「EクラスにはBクラス生徒を配置して、Bクラスには当然Aクラスから何人かで、Aクラスには翔子だの優だの久保だのを置くだろ？」

「まあ、普通はそうするな。俺たちに突破させる気があるなら別だが」

「ああ、そういう可能性もあるのか」

「で、Eクラス代表と根本は何処に置く？」

「俺ならEクラス代表の中林と根本を妨害に使う。いくら代表って言ってもAクラスの生徒よりは点数が低いからな」

「妨害かあ」

「面倒ですねえ」

「……………あちらの動きを把握してくる」

「任せますよ康太」

「まあ、ムツツリー二に任せれば、何か掴んでくるだろ。俺たちは俺たちで根本を落とすための作戦を立てるか」

side out

木下秀吉 side

「清水よ、セットを蹴るでない」

「美春の邪魔をするのが悪いのです」

お主は

「しかし、良くワシと来る気になったのう。おぬしなら、和樹じゃ

と思っておったんじゃが」

「和樹と一緒にでは和樹が強すぎて面白くありませんからね。点数的にも容姿的にも木下秀吉が丁度良かったんです」

「何故、クラスの女子と行かんのじゃ？」

「美春にはDクラスの人間より、Fクラスの人間の方が好感が持てるんです」

ほほう、それは嬉しいことじゃな

「嬉しそうな顔をしないで下さい。クラスの男子よりはマシと言っただけです」

「お主は素直じゃないのう」

「美春は素直ですよ。お姉さまに対する態度なんか特にそのようじゃ

頼むからクラスの備品を壊すのは止めてくれんかのう？

と、ここがチェックポイントじゃな

「Dクラスの清水美春とFクラスの木下秀吉か。点数が減ったとはいえ、お前らに負けるBクラスじゃないぞ」

「どこからその自信が出るのか知らぬが、覚悟することじゃな」  
かなり、前の二人が減らしてくれたのじゃ

勝たないと申し訳が立つまい

「そうです。さっさとやられて美春の前からその薄汚い面を消しなさい」

side out

東野和樹 side

結果から言おう

「瞬殺だった」  
と

「秀吉もそうだが、清水が異常に強いな」

「まあ、その方が楽なんだが」

さて、これでEクラスは突破ですか

二人が次に向かうのは、Bクラス

画面に視線を向け、二人を眺める

《なんか、辛気臭いところですね》

《まあ、一応肝試しじゃからのう》

《何者です！》

美春が後ろに振り返り様にカッターナイフを投擲した

かあ  
……だから物理攻撃ダメって、言ったじゃないです

「あいつらは何処に隠しているんだ？」  
雄二、聞いてはいけないことが世界にはあるのですよ

《清水よ。これはなんじゃ？》

《これは、蛇ですかね？細切れになっていてよく分かりませんが君の所為です

「成程な。視覚から触覚に切り替えたのか」

「ああ。流石にただの馬鹿じゃないらしい」  
まあ、全く効果はありませんが

「……ものの見事に驚かないね」  
ええ

「意外だな。美春はこういうの苦手だと思ってたが」  
なんとなくですけど

「秀吉も平気そうだな。これはイケるか？」  
さて、次は何を出しますか？

《随分と広いところに出ましたね》

《そうじゃのう》  
なんかのんびりしてますねえ

二人の動きに合わせてカメラも暗闇の奥を映す

そして、もう少しで空間の中央というところで、バン、と荒々しく照明のスイッチが入る音が響き渡る

暗闇から一転して光がさす画面の中央には、根本の姿が現れる

・・・・・・・・・・・・・・・・女性用の下着姿で無駄気処理をして、ポ  
ー  
ジ  
ン  
グ  
ま  
で  
決  
め  
て

『ぎゃあああああつ！』  
画面の内外問わず、そこら中から悲鳴が聞こえてくる

あー

「なんか、根本吹っ切れたな」

「和樹！そんなこと言ってる場合じゃないよ！？」  
「そうですねえ？」

「気になると言えば、美春が根本をリンチにしていることくらいか？」

「えっ なにそれ 怖い」

《ガフツ！ゴツ！？は、速く止め……………ギヤ》  
返事が無いただの根本しかばねのようだ

「あー、美春？」

《コロシマス 完殺シマス ミニクイモノハイキテイルカチガアリ  
マセン》  
ブチ切れモードです

「だー！！島田！美春を止める！！このままじゃ根本が死ぬ！」

「え？別によくない？」

「鬼畜！？Bクラス若しくはAクラスの生徒に告ぐ。今から召喚許可を出すから美春を止める。いいか、絶対止めるよ？絶対だぞ！！」  
俺の放送が効いたのか、はたまた流石に寝覚めが悪いためかバラバラと美春を囲むように現れるBクラスの面々

『さてと、SET UP教科選択終了

OPEN開戦 いいか。逃がすなよ』

《ええい！お前からこうなりややけだ！！根本は殺してもいいが清水は止めるぞ試験召喚》  
根本、本当に人望が欠片も無いなあ

《ゴメンな、有樹。今日、帰れそうにないんだ》  
誰だフラグ建てたの？

『殺す！！』  
馬鹿ばかりですねえ

「あー、早くも終了の予感がビンビンきたが、どうするよ？」

「そこで振るな。清水は後で縄で縛っておくか」

『・・・・・・・・・・・・・・・・縄で縛るなんて、雄二はいやらしい』  
おや？

「翔子？何故に外線から翔子の声が？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・雄二の近くに居たいから」

わーい  
瞬間移動だね。凄いよ翔ちゃん

「はあ、人のことは言えんが、ルールは守れ翔子」

「・・・・・・・・・・和樹、優子も来てる」

「え？」

何故に？

「だ、代表！？なんでバラすのよ！！」  
お前らは

「あーゲームが成り立たねえ」

折角クラス単位で分けたのに

「霧島さんと木下さんはどうする？」

さて、どうしますかねえ？

《げ、撃破》

《Bクラスの半分は取られたぞ》

《良かった。役に立たん根本を早々に殺して良かった》

《と、いうかあの娘本当にDクラス？点数は大したことなかったけど、動きがあり得なかったんだけど》

《まあ、いいじゃん。止まったし》

《だな。東野、坂本。ゲームを続けてくれ》

「なんか、普通に良い奴らだな」

「……………ああ、翔子。それ以上近づいたら、俺は自殺したくなるからな」

「……………大丈夫。愛さえあれば」

ダメだ こいつら 早くなんとかしよう

「翔子も優も早く戻れよ。どうせ、もう少ししたらゲーム上で会っ  
んだし」

「それもそうね。代表帰りましょ」

優に声をかけられ、雄二に迫っていた翔子は渋々立ち上がり  
こちらに顔を向ける

何故にそんなに嬉しそうなんですかねえ？

「……………じゃあ、雄二。あっちで待ってるから」

「お、おお。い、行ってこい」

ぐびり過ぎでしょう

「さて、優も翔子も帰ったし、美春とヒデも失格になった。康太は  
まだ帰ってきてない。次は誰だ？」

「あ、なら僕が行くよ。そろそろ退屈してたところだし」  
ほほう

「誰と組むんだ明久？」

「んー。和樹か雄二なら、美波？僕、何か悪いこと言ったかな？」

「別に……。……。……。フン、アキの馬鹿」  
怖いもの嫌いなのにねえ

「雄二、誰と行かせる？」

「さて、戦力的には明久では厳しいかもしれんが、姫路は使えんし、ムツツリー二はいない。俺と和樹は動けないときたら、一人だろ？」  
成程

「アキ、島田と行ってこい」  
島田、顔を引き攣らせながらのガッツポーズとは中々どうして器用ですなえ

島田がアキを拘束しながら去っていきました

「美春。ちよつと表出る」  
どさくさに紛れてちゃっかり帰ってきた美春に声をかけ、ジェスチャーで要件を伝える

「……。分かりました。確かにルールを破った美春が悪いんで

す。大人しく罰を受けましょう」  
うむ。素直な良い子だ

59話 美春とヒデと肝試し Bクラス、可愛そう(後書き)

さて、皆さんの予想は当たりましたか？

次は当然、アノ人です

なんかニコニコ動画のおススメありませんか？

登録はしたけど、全く見てないんですわ

60話 アキと島田と肝試し 悲鳴と久保エ（前書き）

バカテストを考えて、本文考えて

これで大体1か月

・・・・・・・・・・・・・・・・遅いなー

60話 アキと島田と肝試し 悲鳴と久保エ

次の問いに答えなさい。

『天王星の衛星の名前を5つ挙げなさい』

姫路瑞樹の答え

『アリエル、ウンブリエル、チタニア、オベロン、ミランダ』

教師のコメント

正解です。この5つを天王星の5大衛星と呼ぶことがあります。

霧島翔子の答え

『しょうゆ、しょうた、じしょう、こゆづじ、つじじ』

教師のコメント

何の名前でしようか。そして、どのような字を当ててるのでしょうか。

土屋浩太の答え

『オフエーリア、ビアンカ、ミランダ、ジュリエット、マーガレット』

教師のコメント

正解です。それにしても見事に女性の名前だけで覚ええましたね。

吉井明久の答え

『秀吉 美波 姫路さん 霧島さん 木下さん』

教師のコメント

どのような基準で選んだでしょうか。

次の問いに答えなさい。

『家計の消費支出に占める飲食費をパーセントで現したもの』

姫路瑞樹の答え

『エンゲル係数』

教師のコメント

正解です。一般にエンゲル係数の値が高いほど生活水準は低いとされています。

吉井明久の答え

『先月は一桁でした』

教師のコメント

先生は深い悲しみに包まれました。

土屋浩太の答え

『基本的に嘸んでも音の出ない物を食べる』

教師のコメント

そうですね。

アキside

「えーつと、美波。お願いだからもう少し離れてくれる?」

骨が当たって痛いとかじゃなくて、後ろ（具体的に言うとFクラス）から刃物を砥ぐ音がするんだ

「えっ!? アキはウチにこんな怖いところで一人で居ろって言うの……?」

畜生! 可愛いな もう

いつもの恐い美波じゃないだけで普通の女の子に見えるぞ!!!

「そういうわけじゃないんだけど。ほら、何かあった時に動けないじゃないか?」

「何かあって何よお」

……困ったなあ

僕はこういうの得意じゃないんだけどなあ

雄二か和樹がいれば上手い言い訳の一つや二つは

『美春! テメエ何処行く気だ!』

『離しなさい、和樹!』美春は 美春のお姉さまを救いに行くんです!!--!』

『アホー!-- 離せるか!--!』

『クツ! なら、指を啜えて見ていると言つんですか!?! お姉さま! 速くそのケダモノから離れて下さい!--!』

『東野の野郎、ベタベタしやがって……!』

僕には何も聞こえない

さて、美波をどうにかしないと

side out

東野 和樹 side

「美春、落ち着いたか？」

「いいえ！美春はあのクズ野郎を抹殺してきます！」

「落ち着け！」

全く落ち着いてないですね

「む？小山がおらぬのう」

「ん？そういえば、そうだな。ムツツリーニが帰って来るか連絡があつたら探してもらつたか」

「そうするかのう」

あの一、こつち手伝ってくれませんか？

え？お前がやれ？そうですか

side out

アキside

「えーつと、こっちは二口女で……これはなんだろう？」

「アキ？ウチにお化けを見せるってことはシニタイってことよね？」  
あれえ？僕はこの空気を何とかしたかっただけなんだけど  
どうして僕の腕が死にかけてるんだろう？

「す、少しでも日本のお化けに慣れて欲しいと思ったんだ！！」

『明久、あまり大きな声を出すな。失格になるぞ』  
そうだった

でも、それって僕に悲鳴を上げるなってことだよな？

『その通りだ』  
だよねえ！

「っひ！？」

ん？腕にかかっていた力が消えた？

美波の方を見ると腰が抜けたのか、その場へたり込んでいた

「何があつたの、美波？」

震えながら教室の壁を指差す美波  
そちらを見るが何も見えない

？



久保君は居ない  
居るはずがない

だって、久保君がこんな大切な勉強時間を潰す茶番に出るはずがない！！！！

「おや、久しぶりだね。吉井君」

「………本物だったよ

まさか久保君が

僕の最後の良心が

「………マトモだと思ってたのに

「うん。久保君も久しぶりだね。こんなところにいるってことは僕たちを驚かす役？」

「うーん、そうなるのかな？僕はここで僕の本心を語るように言われただけなんだけど」

久保君の本心？

なんだろ？

「アキ、久保と話しちゃダメ。嫌な予感がするわ」

うん？

美波、どういうこと？

美波の顔を見詰めるが美波は久保君を睨んでいて僕の視線に気づかない

うーん？

「吉井君。僕はここで君に伝えたいことがあるんだ。聞いてくれるかい？」

何故だろう、急に寒気がしてきた

「ウチは絶対にアキを渡さない！」

「フツ。島田さん、それは吉井君が決めることさ」

「吉井君」

「な、何かな。久保君？」

「僕は君のことが」

「あつ！アキ、あつちで東野が木下に抱き付いてるわよ！」

「なんだつて!？」

早速、裁判にかけないと

side out

和樹side

『言い残すことはないか、東野?』

「沢山ありすぎて言い残せえよ」

拘束まで3秒

相変わらず無駄なポテンシャルを誇ってますね  
さて、

「どつっすかなー」

「ん？ムツツリーニからか。和樹に変われ？分かった」  
?

ついに康太も携帯買ったんですかね

「和樹、速く縄解けよ」

「いや、誰が縛ったのか知らんが、解けないんだ」

「ふーん」

雄二が耳元まで携帯を持ってきてくれました

『……………和樹』

なんか久しぶりに聞いた気がしますねえ

「どうした、康太？」

『……………根本の計画は、霧島の手によって潰されていた』  
ふむ？

首を傾げたら携帯がズレた

……………雄二に叩かれた

「ということは今回はただ単純に楽しんでいるだけということか？」

『……………それは分からないが、現段階ではあまり警戒しないでもいい』

それならいいんですけどねえ

さて、どうしましょうか

「雄二、何か頼みたいことはあるか？」

「うん？ああ、そうだな。小山の動向を探ってくれ、さっきから姿が見えないんだ」

小山、居ないんですか？

ふーん？何処行ったんですかね？

「小山の動向を探ってきてくれ」

『・・・・・・・・分かった』  
プツ

ふむ

「さて、どうなるかねえ」

「楽しくなってきたかな？」  
問題は多い方がいいと？

60話 アキと島田と肝試し 悲鳴と久保エ（後書き）

さて、次回は久保が頑張る話

61話 俺と康太と久保 うん。もう帰れ（前書き）

お久しぶりですねー

最近、花塚と妖々夢買いました

ノーマルのゆゆ様に会いました

ノーマルのあややに勝てません

そして、いまだにお嬢様に会えません  
難しくないですか？

61話 俺と康太と久保 うん。もう帰れ

バカテスト 次の問いに答えなさい

『1077年ローマ皇帝ハインリヒ4世が教皇グレゴリウス7世に破門され、それを解いてもらうために教皇に屈服した事件を何と言いますか?』

姫路瑞樹の答え

『カノツサの屈辱』

教師のコメント

正解です。因みにカノツサとはグレゴリウス7世が当時居た場所である北アメリカの地名です。

土屋康太の答え

『シスター』

教師のコメント

欠片もカスってません。

吉井明久の答え

『アネツサの健康』

教師のコメント

何となく覚えていたのは伝わりました。

東野和樹の答え

『土下座日和』

教師のコメント

そういえば、リアル土下座って引くくらいしか対応が無いんですね。

「吉井君。僕は諦めないよ！何度でも僕の思いの丈を君にぶつける

！」

えー

久保君も大分壊れてきたなー

と、というか久保君の思いつて何？

さつきから美波が久保君を殺しそうな勢いで睨んでるけど

「あー、美波？」

「あによ？」

「ちよつと久保君に話させてあげて  
僕まで睨まないで欲しい」

さあ、久保君。

「君の思いの丈を僕にぶつけてきてくれ」

「ああ！吉井君、僕は 僕は 君のことが好きなんだ！  
！  
はいい？」

side out

坂本 雄二 side

「ついにこの時が来たか」

「ああ。友の最後だ。看取ってやらねばなるまい」

「アイツは良き友であり、ライバルだった」

「アイツは良き理解者であり、敵対者だった」

『Amen』

side out

霧島 翔子 side

「・・・・・・・・・・・・・・・・計画は順調ね、優子」

「そうね。代表の筋書き通りに進んでるわ  
でも、和樹と土屋が問題」

「和樹の方は私が止めるけど、大丈夫なの？代表」

「・・・・・・・・・・・・・・・・正直に言うと、土屋がどんな情報を雄二に与えるのかが心配」

「土屋君の方は、中林さんと愛子の担当ね。どうなったのかしら？」  
それに、根本の（元）彼女もこっちにつけたから  
戦力は十分だと思う

後は、和樹を封じることが出来れば、勝てる！

side out

明久side

神様。僕は何か悪いことをしたでしょうか？

父さん。僕は今、魔界に居ます

貴方も毎日この様な生活だったんですか？

今度からもう少し、貴方に優しくしたいと思います

『島田？もう少し声を落とさんと、失格じゃぞ？』

ああ、秀吉。止めて欲しいけど、そういうんじゃないんだ

「そ、そう？なら、もう少し小さな声で……」

美波が何か言おうと口を開いたときに

『……久保、貴方の思いの丈を全力でぶつけなさい』  
と、霧島さんの声が静かに響く

「いいのかい？霧島さん？」

それに不敵な笑顔で答える久保君

おかしい、さつきから足が動かない

呼吸も苦しくなってきた

まるで、カエルに睨まれた蛇の様だ

『……さあ、久保。ここでその二人を失格になさい』

『おーい。翔子？俺等も人のこと言えないけど、指示出しは違つと思つんだ』

和樹の声も久しぶりに聞いたなー

『・・・・・・・・大丈夫、問題ないわ』

『・・・・・・・・それって、負けフラグじゃね？』

「さあ、吉井くん！僕の思いの丈を全て受け止めてくれ！！」  
あ、久保君のこと忘れてた

『告白は任せるー（バリバリ）的な？』

『・・・・・・・・もつとヤツテ』

外野煩い

『なあ、どつちが倒れるか賭けね？』

『ん、久保と吉井だろ？』

『違つ違つ。島田と吉井の二人だ』

『ああ、成程。なら、俺は吉井が気絶する方にこの腐ったパンを賭ける』

『なら、俺は島田が気絶する方に新しい俺を見てを賭ける』

『そんなんでいいなら、俺は吉井に坂本の？写真集を賭ける』

『オイ、そのクズ!』

『クラスメイトをクズ呼ばわりする恥知らずな代表がいた!?!』

・・・・・・・・・・もういや、疲れたし

「和樹ー、僕等ってまだ失格じゃないのー?」

『ん?ああ。島田がいい感じになってるが、まだだな』  
速く帰りたいなー

そつだ、久保君の話を聞かないと

・・・・・・・・・・僕は久保君の方に意識を向けたことを後悔  
した

そこは果てしなく暗い世界だった

side out

土屋康太side

「・・・・・・・・・・こんなところ、か?」

今一霧島翔子の計画が掴めんが

まあ、俺にとって害のある話ではあるまい  
むしろ、商売的には特か?

いや、しかし

負けて後片付けを押し付けられるのも

雄二や和樹がいるから大丈夫だとは思うが

雄二は霧島が絡むとダメになる可能性があるからな

和樹は、悲鳴か？断末魔か？

「土屋君だっかかな？」

！???！

慌てて後を振り向き距離を取る

「……………工藤愛子に中林か。何の用……………かは聞く必要も無いな」

霧島も本気で雄二を手に入れたらしいな

『うーん。ボクとしてはゲームに参加したムッツリー二君を倒したかったんだけどねえ』

代表に頼まれちゃあねえと、呟きながら

ゆっくりとこちらに近づく工藤愛子

『まあ、情報が渡る前に潰せたんだし。喜ぶべきでしょ、ここは』  
ふん。俺をそう簡単に潰せると思うなよ

二人を睨みながら、徐々に窓の方へ身体を逃がす

……………窓が開いていないのが残念だ

また割らないといけないのだから

いや、ここは

「……………工藤愛子」

楽しそうにしているとこゝろ悪いが

『んー？何かな、ムッツリー二君？逃がすわけには行かないよ』

ふん。そんなことは百も承知だ

『工藤さん。気を付けた方がいいんじゃない？』

『大丈夫だって。もう心配症なっ！？』

ガシャーン！！

ふん。甘いな

隙がなければ作ればいい

女子の隙を作るのは得意なんだよ

さて、この情報を速く雄二に渡さないとな

61話 俺と康太と久保 うん。もー帰れ（後書き）

もーそろそろ和樹君と雄二を出さないとキツイですね

62話 俺と雄二と肝試し マズった、男二人とか（前書き）

遅いわ！

62話 俺と雄二と肝試し マズった、男二人とか

バカテスト 次の問いに答えなさい

『河川が山地から平野に出る場所に形成される土砂などが堆積された地形のことをなんといい』

姫路瑞樹の答え

『扇状地』

先生のコメント

正解です。特に言うことはありません。

吉井明久の答え

『三角州』

教師のコメント

惜しいと答えておきます。

土屋康太の答え

『シークレットゾーン』

教師のコメント

君は本当にブレませんね。

東野和樹の答え

『君は答えてもいいし、答えなくてもいい』

教師のコメント

是非答えて下さい。

和樹 side

「そろそろ、俺等も行くか」

雄二に声をかける

「ん、もう少し待てば、ムッツリーニから情報が来るだろ。それまで待っておこう」

おや、康太待ちですか

「……………雄二、和樹。帰ったぞ」

噂をすれば、ですねえ

「お疲れだ、ムッツリーニ。さて、報告を聞こうか」

「……………霧島翔子の今回の狙いだが」

雄二、逃げるのはちよーつと速いですよ

「離せ、和樹！俺には嫌な予感しかしねえんだ！」

「大丈夫だつて、きっと翔子が「ヤーン」したり「コリブリ」したりするだけだつて」

きつと、多分

そうだといいなあ

「……………羨ましい」

はい、まだ倒れないで下さいね  
報告を終えてから倒れて下さい

「で、翔子はなんだって？」

やっと諦めましたか

「……………雄二と和樹の動きを封じると」  
「ふむ？今回は勝ちに徹すると？」

「で、雄二？どうする？」

「俺とムツツリー二で組んで行く。和樹は、……………玉野と  
行け」

玉野？

雄二が向けた視線の先には  
今まで大人しくしていた反動か

「和子ちゃん！」

眼をギラギラ（キラキラではない、念のため）させながら、「こちら  
に詰め寄る玉野

「よし、落ち着け。今から喧嘩売りに行くんだからな」  
逆に距離を詰めながら、動きを封じる

「え？私のこの情熱と衝動を押さえると？」

あー、どうやって止めよう

「あ、あの坂本君！」  
んー？

「どうした姫路？」

「私も行かせて下さい！私も役に立ちたいんです…！」  
おやまあ

「さて、どうする雄二？」

戦力的には非常に美味しいですよ？

「どうするもこうするもあるか。使わない手は無いぞ。姫路、玉野・  
．．．．．は不安だから、和樹と行ってくれ」  
いや、そんなあからさまにがっかりされても

「そ、それなら！土屋君と私が組んで！」

『駄目だ、却下だ。諦める』

「むー、康美ちゃんとかいいのに」

おー、康太が震えてますねー

「まあ、俺としてはムツツリー二の方がいいからな。玉野、諦めて  
くれ」

まあ、康太の方が使いやすいですけどね

「んじゃあ、そろそろアキを回収するか」

「ん、明久？まだ帰ってなかったのか」  
ええ

「康太。状況．．．．．は？」  
うーん

「．．．．．やはりアウト」  
ですよー

『．．．．．島田、アウト』

『ちよっと！もう少しで久保を言い負かせそうなんだから、邪魔し  
ないで！』

ちよつとなに言ってるか分かんないですね

さて、最後ですし

残った戦力も突入させますか

「雄二、残った全戦力をぶつけたいと思うが」

「ん、少し待て和樹」

了解ですよ

『島田。速く帰って来い』

『もうちよつとだけでいいから!』

わがままですねえ

『美春、行って来い』

『うー、帰るわよ』

『アキを忘れるなよ』

ちなみにアキ君は部屋の隅で震えています

「雄二」

「なんだ和樹、真面目な顔して。腹でも減ったか」

「正解。飯食いに行ってくる」

「んー。なら一度休憩にするか。秀吉、放送を頼む」

「了解じゃ」

機械に近付き、スイッチを入れる

『二年生全体に告ぐのじゃ。今から、昼休憩に入るからの。暫くは自由に飯でも食ってくつろいでおくのじゃ』

んじゃあ、休憩しますか

「和樹、何処で飯食う？」

「んー、いつも通りに屋上かな？」

まあ、アキを待ちますか

「・・・・・・・・・・ただいま」

おや、意外に速く帰ってきましたね

で、俺たちの元に無言で近付くのは止めて下さい  
無駄に恐いですから

「・・・・・・・・・・雄二、和樹。聞いてよ。久保君が・・・・・・・・・・」

言いたくないなら話さないで下さい

「まあ、明久にとっては災難だが・・・・・・・・・・」  
かける言葉が見つかりません

「・・・・・・・・・・大丈夫だ。明久、きちんと録音してある」

「そのどこに安心できるんだよー!？」

康太、慰めるとかしましょうよ

「まあ、明久よ。落ち着くのじゃ。これから、屋上で昼食をとるの  
で、お主も来んかの？」

「有難う、秀吉。でも僕には、水飲み場で水分を補給するという使  
命が」

「……………相変わらずですねえ」

「安心するのじゃ、明久よ。何と和樹が明久に弁当を作ってくれた  
のじゃ」

えらく嬉しそうに報告しますね、ヒデ

「……………本当に作ったのか、和樹？」

康太、そんなに信じられませんか

「ああ、3人分作るのも4人分作るのもそんなに変わらんからな」

「確かにそうだが、珍しいな。明久に餌を与えるなんて」

餌って雄二

「いや、今日はアキの出番多いだろうなーと思って、作っただけな  
んだが」

「んじゃ、飯食いに行くか」

62話 俺と雄二と肝試し マズった、男二人とか（後書き）

後半グダグダやなあ

この後屋上に行って翔子に襲撃受れたり、姫路の手料理を食べたり  
します

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2584k/>

---

バカと天才？と召喚獣

2011年9月16日18時20分発行